

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第574集

や ぎ さわ こま ごめ
八木沢駒込 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

2011

国土交通省東北地方整備局
三陸国道事務所
(財)岩手県文化振興事業団

八木沢駒込 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に関連して、平成19～21年度に発掘調査された宮古市八木沢駒込Ⅰ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八木沢駒込Ⅰ遺跡では、縄文時代の竪穴状遺構・土坑・陥し穴状遺構、中世の墓墳などが検出され、貴重な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成23年2月

財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-2ほかに所在する八木沢駒込I遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 本遺跡の調査は、三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所との協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡台帳に登録される八木沢駒込I遺跡の遺跡番号と遺跡略号は、次のとおりである。
遺跡番号 LG43-1206 遺跡略号 YGKI-07・08・09
- 4 発掘調査の期間・調査面積・担当者は、次のとおりである。
平成19年度 平成19年8月20日～10月31日 5,900㎡ 阿部勝則・八重畑ちか子
平成20年度 平成20年9月16日～10月29日 1,600㎡ 丸山直美・鈴木博之
平成21年度 平成21年4月8日～6月30日、8月3日～8月12日 2,300㎡
杉沢昭太郎・菅野 梢
- 5 室内整理の期間・担当者は、次のとおりである。
平成19年度 平成19年11月1日～平成20年3月31日 阿部勝則・八重畑ちか子
平成20年度 平成20年11月1日～平成21年3月31日 丸山直美・鈴木博之
平成21年度 平成21年11月10日～平成22年1月15日 杉沢昭太郎・菅野 梢
- 6 野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては、次の機関に委託した。
基準点測量：釜石測量設計株式会社、空中写真撮影：東邦航空株式会社
- 7 遺物の分析・鑑定にあたっては、次の機関に委託した。
石材鑑定：花崗岩研究会（代表矢内桂三）、炭化材樹種鑑定：岩手県木炭協会、放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所、漆の塗膜の分析調査：パリノ・サーヴェイ株式会社、人骨の鑑定：パリノ・サーヴェイ株式会社、炭化種実の同定：パリノ・サーヴェイ株式会社、銅銭の成分分析：JFEテクノロジー株式会社
- 8 発掘・整理・報告にあたっては、次の方々に御指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。
斉藤邦雄・佐藤嘉広・菅 常久 櫻井友梓（岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課）、竹下将男・高橋憲太郎・鎌田祐二・加納由美・安原 誠・長谷川真・阿部 豊（宮古市教育委員会）、安達尊伸（田野畑村教育委員会）、川向聖子（山田町教育委員会）、井上雅孝（滝沢村教育委員会）、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所、宮古市教育委員会、宮古地区行政組合、宮古地方森林組合、三好建設株式会社
- 9 本報告書の執筆は、I章調査に至る経過は、国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所に原稿を依頼した。II章は丸山・鈴木、III章～VI章は阿部、V章は丸山・鈴木、VI章は杉沢が執筆した。報告書の編集と校正は阿部・杉沢・丸山が行った。
- 10 本遺跡の調査成果は、先に『現地公開資料』（平成19年10月29日）、『平成19年度発掘調査報告書』（岩文振第524集）、『平成20年度発掘調査報告書』（岩文振第546集）、『平成21年度発掘調査報告書』（岩文振第571集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
- 11 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

凡 例

1 掲載図版等について

(1) 掲載図版の構成

図版構成は、遺構・遺物に分けている。遺構図版は、竪穴住居跡・陥し穴状遺構・土坑・焼土遺構・掘立柱建物跡・炭窯跡・遺物包含層の順で種類毎に掲載した。遺物図版は土器・石器・石製品・自然遺物の順に出土遺物の種類毎に図版を作成し、出土地点・層位（上→下）を基準に掲載した。別に出土地点別の遺物集成図も作成している。遺物の掲載番号は、掲載順に連番とし、図版・写真図版とも同一番号とした。掲載遺物にはすべて観察表を付した。観察表内の（ ）内の数値は残存値である。

(2) 掲載図版の縮尺

掲載図版の縮尺は以下を原則としたが、一部変更したところもあり、各図にスケール・縮尺を付した。

a 遺構図版

住居跡の平・断面図：1/50、炉跡の平・断面図：1/50、陥し穴状遺構・土坑の平・断面図：1/40、焼土遺構・土器埋設遺構：1/30、炭窯跡の平・断面図：1/60。

b 遺物図版

土器：1/3、土製品1/2、剥片石器：1/2、礫石器：1/3、石製品：1/2、陶磁器：1/3、鉄製品：1/2・1/3、銭貨1/1。

c 写真図版

遺構の写真図版の縮尺は不定である。遺物の写真図版の縮尺は、概ね図版と同一縮尺になることを基本として編集したが、一部変更したところもあり、各図に縮尺を付した。

(3) 図版の凡例

図中に使用した記号と網かけの凡例は以下のとおりである。それ以外については、個々の図版毎に凡例を示している。



目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	3
1	遺跡の位置と立地	3
2	歴史的環境	3
3	基本層序	5
III	調査・整理の方法	9
1	野外調査	9
2	室内整理	12
IV	平成19年度調査の成果	14
1	検出遺構	14
(1)	検出遺構の概要	14
(2)	竪穴状遺構	14
(3)	土坑	15
(4)	陥し穴状遺構	25
(5)	墓壙	26
(6)	焼土遺構	27
(7)	その他	28
2	出土遺物	50
(1)	出土遺物の概要	50
(2)	土器	50
(3)	土製品	50
(4)	石器	50
(5)	陶磁器	51
(6)	銭貨	51
(7)	鉄滓類	51
(8)	漆塗膜	51
(9)	植物遺体	51
(10)	その他	51
3	まとめ	52
(1)	遺構	52
(2)	遺物	53
(3)	おわりに	53
V	平成20年度調査の成果	63
1	概要	63

2	基本層序	63
3	検出遺構	68
	(1) 陥し穴状遺構	68
	(2) 土坑	68
	(3) 焼土遺構	71
	(4) 道路状遺構	71
	(5) 畑関連遺構	71
4	出土遺物	79
	(1) 縄文土器	79
	(2) 陶磁器	79
	(3) 土製品	79
	(4) 石器	79
	(5) 鉄製品・金属製品	79
	(6) 鉄滓	79
5	まとめ	81
	(1) 立地	81
	(2) 遺構・遺物	81
	(3) おわりに	81
VI	平成21年度調査の成果	82
1	検出遺構	82
	(1) 竪穴住居跡・竪穴建物跡	82
	(2) 掘立柱建物跡	84
	(3) 土坑	85
	(4) 墓壇	86
	(5) 陥し穴状遺構	87
	(6) 炭窯跡	87
	(7) 焼土遺構	88
	(8) その他の遺構	89
2	遺構外出土遺物	111
	(1) 縄文時代の土器	111
	(2) 石器	112
	(3) 陶磁器	113
	(4) その他の遺物	113
3	まとめ	117
VII	分析・鑑定	130
1	人骨鑑定（平成19年度調査）	130
2	銅銭の成分分析（平成19年度調査）	134
3	漆の塗膜の成分分析（平成19年度調査）	144
4	植物遺体の同定（平成19年度調査）	147

5	放射性炭素年代測定（平成19年度調査）	148
6	人骨鑑定（平成21年度調査）	151
7	花粉分析（平成21年度調査）	163
	報告書抄録	221

表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧	6	<平成20年度調査>		
	<平成19年度調査>		第20表	畑関連遺構の計測値一覧	73
第2表	竪穴状遺構観察表	29	第21表	縄文土器観察表	80
第3表	土坑観察表	29	第22表	石器・石製品観察表	80
第4表	陥し穴状遺構観察表	30	第23表	鉄製品観察表	80
第5表	墓壙観察表	30	第24表	その他観察表	80
第6表	焼土遺構観察表	30	第25表	鉄滓類観察表	80
第7表	出土地点別土器重量表	54	第26表	陶磁器観察表	80
第8表	遺構別出土遺物一覧表	54		<平成21年度調査>	
第9表	土器観察表	55	第27表	土坑類観察表	86
第10表	土製品観察表	56	第28表	陥し穴状遺構観察表	87
第11表	石器観察表	56	第29表	炭窯跡観察表	87
第12表	石材略号一覧表	56	第30表	焼土遺構観察表	88
第13表	産地等略号一覧表	56	第31表	石器・石製品分類表	112
第14表	陶磁器観察表	56	第32表	土器類観察表	113
第15表	銭貨観察表	56	第33表	陶磁器観察表	115
第16表	鉄滓類観察表	57	第34表	鉄滓観察表	115
第17表	漆塗膜観察表	57	第35表	銭貨・金属製品観察表	115
第18表	植物遺体観察表	57	第36表	石器観察表	116
第19表	炭化材観察表	57			

図 版 目 次

第1図	岩手県全図	1	第13図	SK08～12土坑	38
第2図	地形分類図	2	第14図	SK13～15土坑	39
第3図	周辺の遺跡分布図	4	第15図	SK17・18・20土坑	40
第4図	調査区位置図	7	第16図	SK21～24・27土坑	41
第5図	調査区位置図・グリッド配置図	8	第17図	SK26・28～30土坑	42
	<平成19年度調査>		第18図	SK32～34土坑	43
第6図	遺構配置図（1）：全体図	31	第19図	SK35～37土坑	44
第7図	遺構配置図（2）：部分図（1）	32	第20図	SK01・16陥し穴状遺構	45
第8図	遺構配置図（3）：部分図（2）	33	第21図	SK25・31陥し穴状遺構	46
第9図	遺構配置図（4）：部分図（3）	34	第22図	SK06墓壙、SK19土坑	47
第10図	SKI01・02竪穴状遺構	35	第23図	SN01～03焼土遺構	48
第11図	SK02・03土坑	36	第24図	SX01落ち込み	49
第12図	SK04・05・07土坑	37	第25図	土器（1）	58

第26図	土器(2)、土製品	59	第48図	掘立柱建物跡(1)	96
第27図	石器、陶磁器、銭貨	60	第49図	掘立柱建物跡(2)	97
第28図	中世墓関連資料	61	第50図	掘立柱建物跡(3)	98
第29図	墓壇・石碑の位置と地籍図	62	第51図	土坑(1)	99
<平成20年度調査>					
第30図	グリッド・基準点・トレンチ配置図	64	第52図	土坑(2)	100
第31図	メインベルトセクション(1)(基本層序)	65	第53図	土坑(3)	101
第32図	メインベルトセクション(2) (基本層序・畑関連遺構)	66	第54図	墓壇(1)	102
第33図	遺構配置図	67	第55図	墓壇(2)	103
第34図	1号陥し穴状遺構	69	第56図	陥し穴状遺構(1)	104
第35図	1号土坑、1号焼土遺構	70	第57図	陥し穴状遺構(2)	105
第36図	1号道路状遺構	72	第58図	焼土遺構(1)	106
第37図	1号畑跡	74	第59図	焼土遺構(2)	107
第38図	2号畑跡	75	第60図	焼土遺構(3)	108
第39図	1号粗起痕	76	第61図	炭窯、集石	109
第40図	1・2号畑跡、1号粗起痕断面	77	第62図	調査区土層断面図	110
第41図	出土遺物	78	第63図	土器(1)	120
<平成21年度調査>					
第42図	グリッド配置図	90	第64図	土器(2)	121
第43図	遺構配置図(1)	91	第65図	土器(3)、陶磁器	122
第44図	遺構配置図(2)	92	第66図	石器(1)	123
第45図	竪穴建物跡(1)	93	第67図	石器(2)	124
第46図	竪穴住居跡(2)	94	第68図	石器(3)	125
第47図	竪穴住居跡(3)	95	第69図	石器(4)、金属製品(1)	126
			第70図	金属製品(2)	127
			第71図	金属製品(3)	128
			第72図	墓石	129

写真図版目次

<平成19年度調査>		
写真図版1	調査区全景(1)	169
写真図版2	調査区全景(2)、石碑	170
写真図版3	調査区の様子1区・2区	171
写真図版4	調査区の様子3区、基本土層	172
写真図版5	SKI01・02竪穴状遺構、その他SX01	173
写真図版6	SK03~05・07土坑	174
写真図版7	SK08~11土坑	175
写真図版8	SK12~14(1)・15(1)土坑	176
写真図版9	SK14(2)・15(2)・17・18土坑	177
写真図版10	SK19~21・35土坑	178
写真図版11	SK22~24土坑	179
写真図版12	SK26~28土坑	180
写真図版13	SK29・30・32・33土坑	181
写真図版14	SK34・36・37土坑	182
写真図版15	SK02土坑、SK01陥し穴状遺構	183
写真図版16	SK16・25・31陥し穴状遺構	184
写真図版17	SK06墓壇	185
写真図版18	SN01~03焼土遺構	186
写真図版19	土器、土製品、石器(1)	187
写真図版20	石器(2)、陶磁器、鉄滓類、銭貨、 漆の塗膜、植物遺体	188
<平成20年度調査>		
写真図版21	調査前現況、試掘、1号陥し穴状遺構	189
写真図版22	1号土坑、1号焼土遺構、1号道路状 遺構、1号畑跡	190
写真図版23	2号畑跡、1号粗起痕	191
写真図版24	1号粗起痕	192
写真図版25	東側調査区際断面、調査区全景	193
写真図版26	出土遺物	194
<平成21年度調査>		
写真図版27	遺跡遠景	195

写真図版28	遺跡近景	196	写真図版41	陥し穴状遺構 (1)	209
写真図版29	1号竪穴建物跡	197	写真図版42	陥し穴状遺構 (2)、焼土遺構 (1)	210
写真図版30	2号竪穴住居跡 (1)	198			
写真図版31	2号竪穴住居跡 (2)、3号竪穴建物跡	199	写真図版43	焼土遺構 (2)	211
			写真図版44	焼土遺構 (3)	212
写真図版32	4号竪穴住居跡ほか	200	写真図版45	溝跡	213
写真図版33	掘立柱建物跡 (1)	201	写真図版46	1号炭窯跡、沢跡ほか	214
写真図版34	掘立柱建物跡 (2)、土坑 (1)	202	写真図版47	土器 (1)	215
写真図版35	土坑 (2)	203	写真図版48	土器 (2)	216
写真図版36	土坑 (3)	204	写真図版49	土器 (3)、陶磁器、金属製品、銭貨 (1)	217
写真図版37	土坑 (4)	205			
写真図版38	土坑 (5)	206	写真図版50	銭貨 (2)、石器 (1)	218
写真図版39	土坑 (6)、墓壙 (1)	207	写真図版51	石器 (2)	219
写真図版40	墓壙 (2)	208	写真図版52	石器 (3)	220

I 調査に至る経過

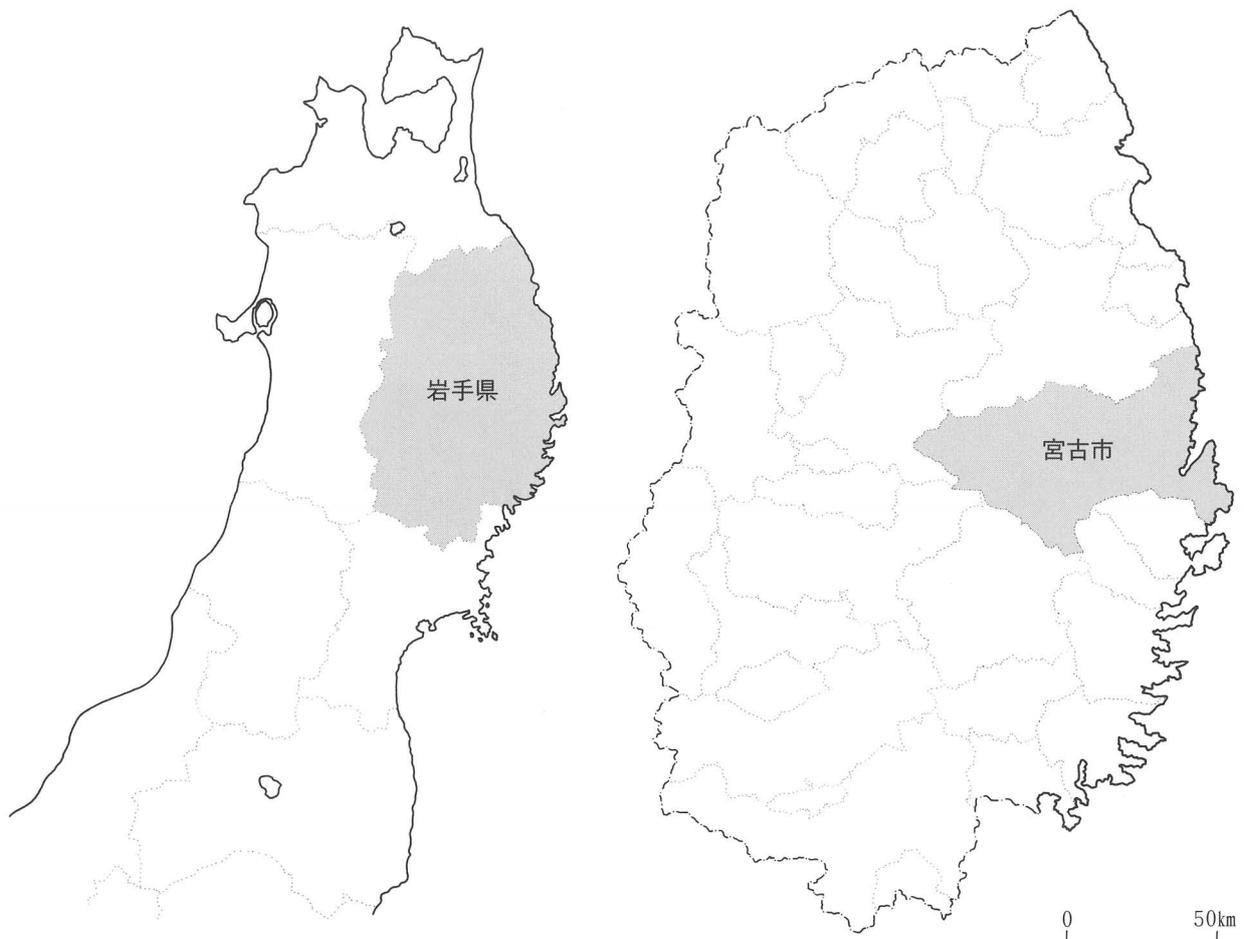
八木沢駒込Ⅰ遺跡は、一般国道45号宮古道路の工事区域内に位置しているため、当該事業の施工に伴い、発掘調査を実施することとなったものである。

宮古道路事業は、宮古市内の国道45号線の線形不良及び隘路個所を解消し、増大する交通需要に対応するとともに、三陸沿岸地域への高速交通サービスの充実を図り、地域経済の発展、連携・交流の促進のために、平成15年度から事業化している。

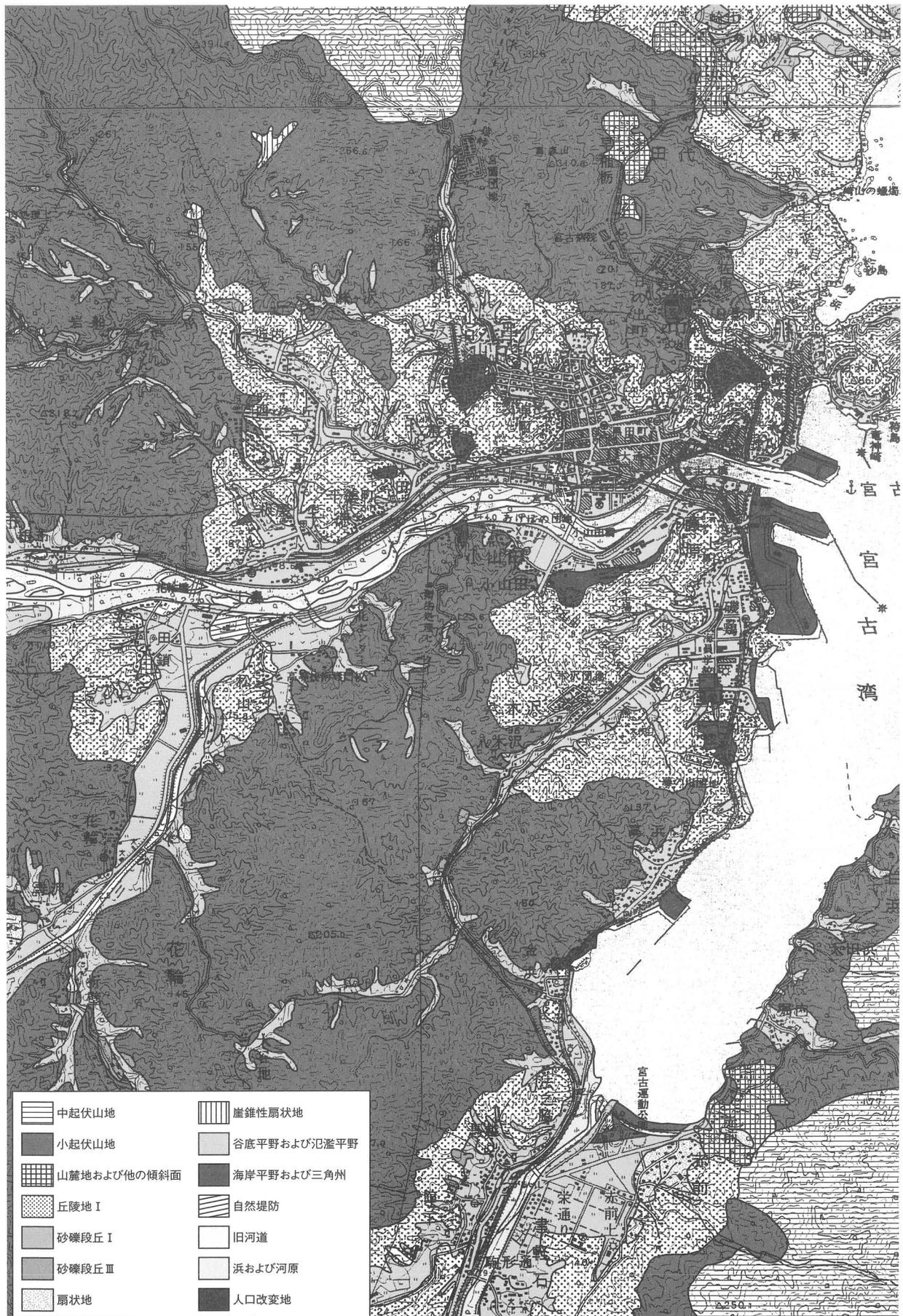
これに係わる埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、三陸国道事務所長から岩手県教育委員会生涯学習文化課長に、埋蔵文化財包蔵地の確認依頼を行い、平成18年4月11日～11月21日にわたり試掘調査を行い、平成18年12月20日付「教生第1284号」により、宮古道路建設事業に関連する包蔵地として回答がなされたものである。

その結果、本発掘調査が必要となったことから、岩手県教育委員会と三陸国道事務所が協議を行い、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターに発掘調査を委託することとなったものである。

(国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所)



第1図 岩手県全図



第2図 地形分類図

Ⅱ 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

八木沢駒込Ⅰ遺跡は宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-2ほかに所在し、JR東日本山田線磯鶏駅の南西約3.2m付近に位置する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部にかかる1,600㎡である。標高は27~33mを測る。調査前は山林および畑地である。遺跡の中央部は北緯39度36分31秒、東経141度55分55秒付近にある。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側縁辺部の一端をなしている。平成17年6月6日に行われた新設合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、宮古市と合併し、これによって宮古市は、北西を下閉伊郡岩泉町、西を盛岡市、南方を下閉伊郡山田町と境界を接することとなった。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだりアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ100mを超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市の境界にあたる区界峠付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川、本遺跡の南東側を流れる八木沢川がそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダメロ岩やデイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向が見られる。標高100m以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的小さい標高300m以下の中起伏山地あるいは標高200m以下の小起伏山地である。

2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、菅ノ沢遺跡、小沢貝塚などが確認されている。縄文時代早期の土器が確認されている遺跡や散布地はその他にも存在するが、現段階では総じて詳細な様相が把握できる状況にはない。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶏蝦夷森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～



第3図 周辺の遺跡分布図

中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隠里Ⅷ遺跡では、後期の土器が出土している。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、蕨手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。八木沢駒込Ⅰ遺跡の北東2kmに位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隠里Ⅲ遺跡では平安時代の竪穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち竪穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では出土事例の稀な灰釉陶器片が出土している。

中世・近世

中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防御的施設を有し、おもに閉伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。遺跡の周辺域では、松山館、千徳城、田鎖館、花輪館、鱒沢館が確認されている。また、前代から引き続き、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は、城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鋳物師関連も確認されている。

地域的・歴史的特性

以上のように、八木沢駒込Ⅰ遺跡周辺には、縄文時代～中近世に至るまでの遺跡が数多く確認、調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地的特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残像状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

3 基本層序

各年度ごとに調査区内において最良の場所で記録をとった。概ね以下のように分けられるが、詳細についてはⅣ～Ⅵ章に記載した。

- | | |
|---------------|-----------------|
| I 黒褐色シルト 表土 | II 暗褐色土シルト |
| III 黄褐色粘土（地山） | IV 黄褐色風化花崗岩（地山） |

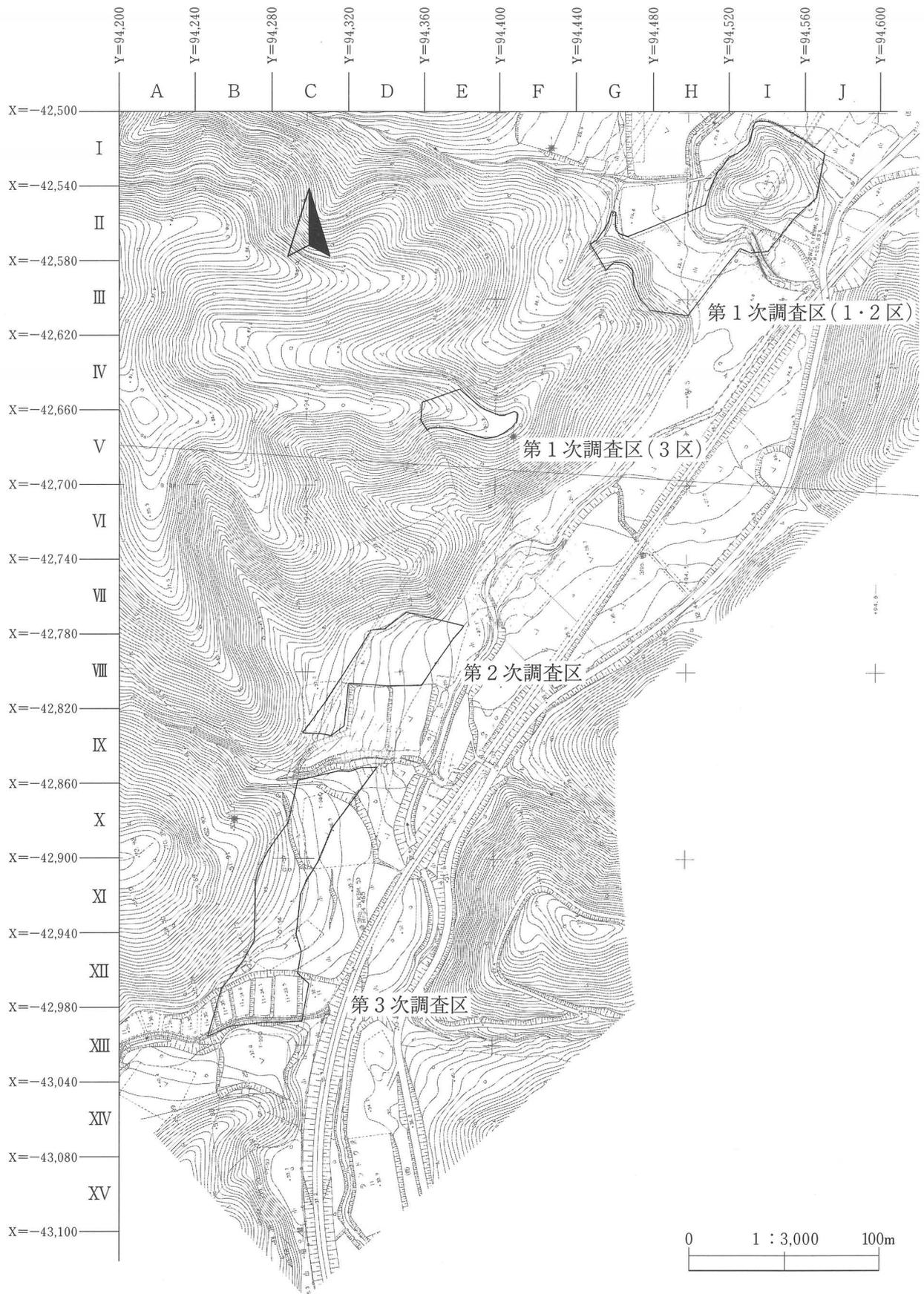
第1表 周辺遺跡一覧

No	遺跡名	時代	種別
1	鳥田Ⅱ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
2	鳥田Ⅰ	平安	集落跡
3	磯鶏中谷地	縄文・古代	集落跡
4	八木沢古館	中世	城館跡
5	磯鶏館山	縄文～近世	集落跡・城館跡・生産遺跡
6	高根	縄文	土墳墓郡
7	寒風	縄文	集落跡
8	菅ノ沢	縄文・古代	集落跡
9	近内中村	縄文・弥生・古代	集落跡
10	蜂ヶ沢Ⅰ	縄文・古代	集落跡
11	近内白石Ⅰ	古代以降	製鉄遺跡
12	近内大館	中世	城館跡
13	赤畑	縄文・近世	集落跡
14	山口駒込Ⅰ	縄文・奈良	集落跡
15	山口駒込Ⅱ	古代以降	集落跡
16	狐崎	縄文・奈良・平安	集落跡
17	山口館	縄文・古代・中世	城館跡・集落跡
18	拝殿峠	縄文	集落跡
19	黒森町Ⅰ	近世	屋敷跡・鉄鋳物製作跡
20	小沢貝塚	縄文	貝塚
21	佐原	縄文	集落跡
22	平松Ⅰ	縄文	集落跡
23	熊野町	中世	番屋敷
24	鉾ヶ崎館山貝塚	縄文～中世	貝塚・集落跡・城館跡
25	井戸ヶ洞	縄文	集落跡
26	田鎖館	中世	城館跡
27	黒田館	中世	城館跡
28	下大谷地Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
29	千徳城	奈良・平安・中世	城館跡・製鉄跡
30	青猿Ⅰ	縄文・平安	集落跡・製鉄跡
31	青猿Ⅱ	弥生・平安	集落跡
32	長根Ⅰ	弥生～中世	郡集墳
33	泉町狐崎Ⅱ	縄文・奈良・平安	集落跡
34	鴨崎Ⅰ	古代	集落跡
35	笠間館	中世	城館跡
36	横山	古代	集落跡・貝塚
37	木戸井内Ⅱ	古代以降	生産遺跡
38	木戸井内Ⅲ	弥生・古代以降	生産遺跡
39	木戸井内Ⅳ	縄文・古代・近世	集落跡・生産遺跡
40	小山田館	中世	城館跡・製鉄関連遺跡
41	松山館	古代・中世	城館跡

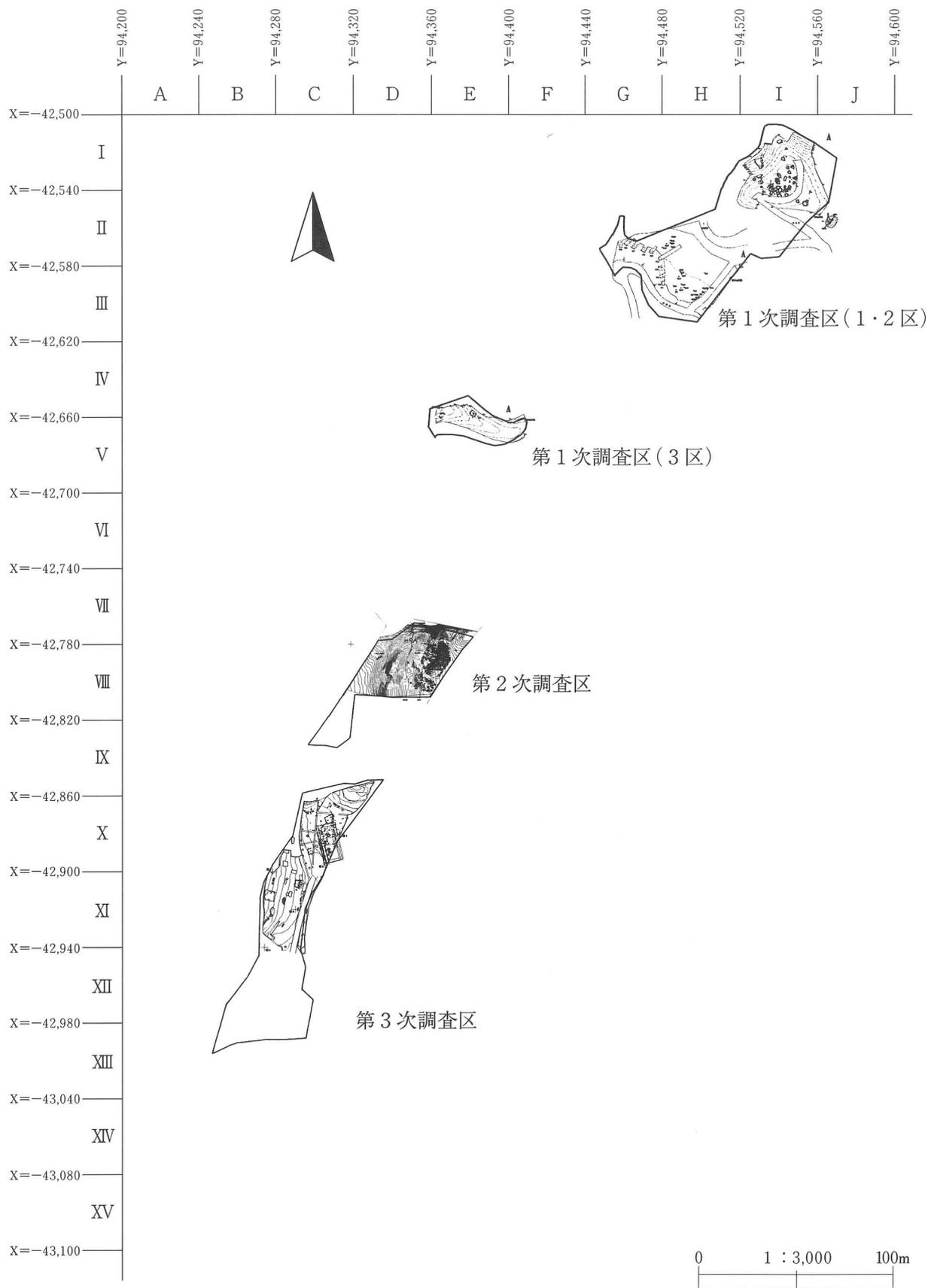
No	遺跡名	時代	種別
42	松山大地田沢	古代	集落跡
43	隠里Ⅰ	縄文・古代	集落跡
44	隠里Ⅱ	縄文・古代	集落跡
45	隠里Ⅲ	縄文・古代	集落跡
46	隠里Ⅷ	縄文・弥生・古代	集落跡
47	磯鶏竹洞Ⅰ	平安	集落跡
48	藤原上町Ⅱ	奈良	集落跡
49	光岸地	縄文	集落跡・貝塚
50	小沢田	縄文・古代	貝塚
51	早坂	縄文・弥生・古代	貝塚
52	上村貝塚	縄文～平安	集落跡・貝塚
53	磯鶏蝦夷森貝塚	縄文・古代	貝塚
54	仏沢Ⅱ	縄文・平安	集落跡
56	花輪館	中世	城館跡
56	下折壁Ⅰ	中世	城館跡
57	八木沢Ⅱ	縄文・古代・中世	集落跡
58	八木沢Ⅲ	古代以降	生産遺跡
59	八木沢新館	中世・近世	城館跡
60	鱒沢館	中世	城館跡
61	八木沢駒込Ⅰ	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
62	金浜館	中世	城館跡
63	金浜Ⅰ	縄文	散布地
64	金浜Ⅱ	古代	集落跡
65	金浜Ⅲ	縄文・古代	散布地
66	金浜Ⅳ	縄文	散布地
67	金浜Ⅴ	縄文	散布地
68	金浜堤ヶ沢	古代以降	製鉄跡
69	馬越Ⅱ	古代	集落跡
70	山崎館	中世	城館跡
71	沼里	縄文・奈良	集落跡
72	沼里館	中世	城館跡
73	小堀内Ⅰ	縄文・弥生・奈良	集落跡
74	赤前Ⅲ	縄文・平安	集落跡
75	赤前Ⅳ・八枚田	縄文・平安	集落跡
76	赤前館	中世	城館跡
77	崎山貝塚	縄文	集落跡・貝塚
78	八木沢駒込Ⅱ	縄文・古代	集落跡
79	野来	縄文・古代	集落跡・生産遺跡
80	賽の神	弥生・古代	生産遺跡
81	賽の神Ⅰ	縄文・古代	生産遺跡
82	賽の神Ⅱ	縄文・古代	生産遺跡

引用・参考文献

- 岩手県企画開発室 1974 『土地分類基本調査 一宮古・鮎ヶ崎一』
 宮古市教育委員会 1983 『宮古市遺跡分布調査報告書1』宮古市埋蔵文化財調査報告書3
 宮古市教育委員会 1984 『宮古市遺跡分布調査報告書2』宮古市埋蔵文化財調査報告書4
 宮古市教育委員会 1985 『宮古市遺跡分布調査報告書3』宮古市埋蔵文化財調査報告書6



第4図 調査区位置図



第5図 調査区位置図・グリッド位置図

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにして、最終的な調査区全体にメッシュがかかるようにグリッドを設定した。設定した基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

① 平成19年度調査

基準点1	X = -42640.000	Y = 94532.000	H = 34.339m
基準点2	X = -42640.000	Y = 94556.000	H = 32.095m
補点1	X = -42680.000	Y = 94480.000	H = 25.130m
補点2	X = -42680.000	Y = 94520.000	H = 23.453m
補点3	X = -42760.000	Y = 94384.000	H = 62.568m
補点4	X = -42760.000	Y = 94364.000	H = 66.458m

② 平成20年度調査

基準点1	X = -42868.000	Y = 94348.000	H = 34.542m
基準点2	X = -42900.000	Y = 94368.000	H = 28.983m
補点1	X = -42884.000	Y = 94336.000	H = 32.278m
補点2	X = -42884.000	Y = 94360.000	H = 29.021m
補点3	X = -42884.000	Y = 94348.000	H = 30.477m
補点4	X = -42900.000	Y = 94336.000	H = 32.032m

③ 平成21年度調査

基準点1	X = -42980.000	Y = 94315.000	H = 36.443m
基準点2	X = -43000.000	Y = 94280.000	H = 46.410m
補点1	X = -42968.000	Y = 94300.000	H = 36.960m
補点2	X = -42996.000	Y = 94308.000	H = 37.150m
補点3	X = -43020.000	Y = 94292.000	H = 40.756m
補点4	X = -43040.000	Y = 94276.000	H = 40.993m

この基準点と補点を基準としてグリッドを設定した。原点（X = -42500.000、Y = 94200.000）を北西側隅にして40m四方の大グリッドを設定し、さらに4m四方の小グリッドを設定した。グリッド名は、大グリッドは北から南に向かってⅠ・Ⅱ・Ⅲ（ローマ数字）…、西から東に向かってA・B・C（アルファベット大文字）…とし、小グリッドは北から南に向かって1・2・3（アラビア数字）…、西から東に向かってa・b・c（アルファベット小文字）…とした。それぞれの組み合わせでⅠA1a・ⅠB1bグリッドの区画名を付し、区画左上の杭で、その区画のグリッド名称を表した。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化し、検出順にそれぞれ番号

を付けて、SI01・SK02のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。本調査で使用した遺構略号と遺構名は以下に記したとおりである。

SI：竪穴住居跡、SKI：竪穴状遺構、SK：陥し穴状遺構・土坑、SN：焼土遺構、SZ：土器埋設遺構、SD：溝跡、SW：炭窯跡

報告にあたっては、現場で命名した遺構名をそのまま使用しているため一部欠番を生じている。

検出された遺構種別・検出数・遺構名は以下に記したとおりである。

① 平成19年度調査

遺構種別：検出数：遺構名

竪穴状遺構 2 棟：SKI01・02

土坑 32 基：SK02・03・04・05・07・08・09・10・11・12・13・14・15・17・18・19・20・21・
22・23・24・26・27・28・29・30・32・33・34・35・36・37

陥し穴状遺構 4 基：SK01・16・25・31

墓壇 1 基：SK06

焼土遺構 3 基：SN01・02・03

その他 1 か所：SX01

② 平成20年度調査

陥し穴状遺構 1 基：1 号陥し穴状遺構

土坑 1 基：1 号土坑

焼土遺構 1 基：1 号焼土遺構

道路状遺構 1 条：1 号道路状遺構

畑関連遺構 3 か所：1～3 号畑跡

③ 平成21年度調査

竪穴住居跡・竪穴建物跡各 2 棟：1～4 号竪穴住居跡（竪穴建物跡）

掘立柱建物跡 4 棟：1～4 号掘立柱建物跡

土坑 22 基：1～25 号土坑（21・24 号は欠番）

墓壇 6 基：1～6 号墓壇

陥し穴状遺構 6 基：1～6 号陥し穴状遺構

炭窯 1 基：1 号炭窯

焼土遺構 23 基：1～23 号焼土

集石 1 基：1 号集石

溝跡 2 条：1～2 号溝跡

（3）試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅 1～2 m、長さ 5～10 m のトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。試掘溝の設定にあたっては、平成18年度の試掘調査の成果を考慮しながら、試掘を行った。試掘の結果、急斜面地で遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断された区域は、試掘調査のみで調査を終えている。それ以外の区域においては、試掘にもとづいて表土掘削を行った。調査区全体の表土の厚さは 20～30 cm 程あり、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、尾根上ではⅢ層黄褐色土層（一次検出）または、

Ⅳ層マサ土層（二次検出）で行い、谷部ではⅡ層黒褐色土層（一次検出）またはⅢ層黄褐色土層（二次検出）で行った。

（４）精 査

検出された遺構は、原則として住居跡や炭窯跡など大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。陥し穴の底面で確認された副穴は、径が小さく深いことから、トレンチを設定して断面観察による記録を優先して作成している。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則としてグリッドごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Cardを使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

（５）実測・写真撮影

平面実測はグリッドごとに合わせた1mメッシュを基準として行った。平面図・断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類・炭窯跡は1/20を基本として、マイラー用紙に記録した。レベルは、基準高をもとに絶対高で測った。なお、トレンチ位置図・個々の遺構平面図については、グリッド杭・水系によって設けられた基準から計測する簡易遺り方測量ではなく、電子平板を用いて図化作業を行った。断面実測については、任意の高さを基に設定した水系を基準として計測を行った。

写真撮影は、35mmモノクロームとカラーリバーサル各1台、モノクローム6×9cm判1台、補助用としてデジタルカメラ1台を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行っている。

（６）土 層 注 記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）をもとに行っているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の5段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内覆土をアラビア数字（1・2・3）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、Ia・Ib・1c・・・などと表わした。

（７）土 壤 水 洗

縄文時代の住居跡・炉跡では、動物遺存体が存在する可能性、古代の住居跡や炉跡では、製鉄関連の遺構である可能性を考慮し、住居跡の覆土下位（床上3cm）の覆土、住居跡の炉跡の覆土及び焼土・カマドの覆土及び焼土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩（5mm・3mm・1mm）による仕分け、磁着作業を行った。この工程を経て得られた遺物には、土器・石器の細片や鉄滓類や砂鉄などがある。

（８）調 査 の 経 過

① 平成19年度調査

調査期間は平成19年8月20日～10月31日、述べて、作業実働日数は42日であった。作業員の登録人数は、当初31人で始まり、一日の平均稼働作業員数は27人ほどで作業を行った。以下に調査経過を簡略に記す。

8月20日(月) 調査開始、9月4日(火) 基準点測量(釜石測量設計株式会社)、10月17日(水) 墓壙出土の人骨供養(常安寺)、10月23日(火) 墓壙出土の人骨の調査・採取(パリノ・サーヴェイ)、24日(水)まで、10月24日(水) 航空写真撮影(東邦航空株式会社)、10月25日(木) 終了確認、10月29日(月) 現地公開、参加者50人、10月31日(水) 調査終了。

具体的な調査の進行状況を記す。調査対象区域は、平成18年度に試掘調査が行われた31,000㎡より、本調査対象範囲とされた11,500㎡である。第1次調査は北側5,900㎡を対象として行なわれた。

調査区は2か所に分かれる。地形からは3か所に分かれるため、北から1区・2区・3区と仮称した。1区は、八木沢川の東側に立つ独立丘陵、2区は八木沢川の旧河道、3区は東側の山地から連続する尾根部である。1・2区は隣接し、3区は離れている。

1・3区は、試掘後に全面的表土を掘削し、遺構検出を行った。2区は、試掘後に全面的表土を掘削した後、砂礫層を段階的に掘り下げて、遺構・遺物の確認を行った。

② 平成20年度調査

調査期間は平成20年9月16日～10月28日である。以下に調査経過を簡略に記す。

平成20年9月16(火) 調査開始、9月18日(木) 重機稼働・表土除去(30日まで)、9月29日(月) 基準点打設、精査開始、10月21日(火) 終了確認、10月28日(火) 調査終了。

③ 平成21年度調査

以下に調査経過を簡単に記す。平成21年4月8日(水) 調査を開始、4月20日(月) 基準点測量、6月19(金) 終了確認1、6月28日(水) 一旦調査終了、8月3日(月) 調査再開、8月10日(月) 終了確認2、8月12日(水) 調査終了。

2 室内整理

平成19年度調査の室内整理の期間は、平成19年11月1日～平成20年3月31日、述べ日数99日で、整理に従事した作業員は1名である。期間内で、得られた遺物・実測図・写真などの整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

(1) 遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、第二原図を作成してトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で入手した情報をそのまま保存することとし、打ち出したデータは、手実測で記録したその他の実測図と合わせて、マイラー用紙に第2原図を作成している。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラースライドフィルムはスライドファイルに撮影順に収納した。

(2) 遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺物Noを全破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺

物はグリッドごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師1名が行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針を進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。以下に選別基準を明示する。また、資料化は図化・写真が全てではない。不掲載資料についても可能な限り数的処理を行い、出土資料全体の傾向を把握するためのデータとした。

a 土器

はじめに出土地点別に重量計測を行った。土器の接合と並行して、遺物の選別を進めた。接合した土器については、原則としては計測値（器高・口径・底径）1箇所以上計測可能なもの（器形が把握できるもの）を立体土器として登録し、図化した。破片資料は、優先的に口縁部破片を選択したが、一部胴部破片も選んでいる。そして、該当する土器の時期・型式名を記録して数的処理を行った。

b 土製品

土製品は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、登録したすべてに図・写真・観察表を掲載した。

c 石器

石器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、登録したすべての資料について、観察表・図・写真を掲載した。

d 陶磁器

陶磁器は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、さらに一部資料について図化を行った。図化の基準は、遺構内出土遺物及び19世紀代の資料である。

e 銭貨

銭貨は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点の観察表・図・写真を掲載した。成分分析・保存処理を外部の専門機関に委託した。

f 鉄滓類

鉄滓類は、出土したすべてを対象として、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行い、全点について観察表・写真を掲載した。

g 漆の塗膜

漆の塗膜は破片の状態出土した。漆器の木地が失われたものと判断された。仕分け・登録作業・計測を行い、観察表・写真掲載とした。成分分析を外部の専門機関に委託している。

h 植物遺体

炭化種実と炭化材がある。炭化種実・炭化材とも、個々に仕分け・登録作業・計測・分類を行った。炭化種実は、観察表・写真掲載とし、炭化材は、観察表のみの掲載とし、樹種名を掲載するに留めた。炭化種実については、外部の専門機関に鑑定を委託した。

i 人骨

墓壇から出土した一体分の人骨がある。人骨は現地で出土状態の記録を作成した後、外部の専門機関に委託して採取を行い、鑑定報告書を作成していただいた。なお、分析終了後の人骨は、地権者に覚えがなかったことから、宮古墓苑に納骨した。

Ⅳ 平成19年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 検出遺構の概要

平成19年度調査で検出された遺構は、竪穴状遺構2棟、陥し穴状遺構4基、土坑32基、墓壙1基、焼土遺構3基、落ち込み1か所である。出土遺物が少なく、時期の詳細は不明なものが多い。

調査区は地形から3箇所に分かれる。北側から1区・2区・3区と仮称した。1区は八木沢川に周囲を取り巻かれる独立丘陵上で、竪穴状遺構2基、陥し穴状遺構3基、土坑31基、中世の墓壙1基が検出された。2区は八木沢川の氾濫源であり、旧河道が確認できた他に遺構は確認できなかった。3区は八木沢川に向かって張り出す山地の尾根上で、陥し穴状遺構1基と土坑1基が検出された。

(2) 竪穴状遺構

竪穴状遺構は2棟確認された。尾根上から検出された2棟は、ともに円形基調で、床面より柱穴・炉跡は検出されていない。2棟は立地が異なるため、時期は異なる可能性がある。

SKI01竪穴状遺構

遺構（第10図、写真図版5）

[位置・検出状況] II2iグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] 北側でSK17土坑と重複する。平面形を確認した時点でSKI01竪穴状遺構がSK17土坑を切っていると判断し、SKI01竪穴状遺構の調査を先行して進めた。

[規模・平面形] 294×261cmで円形を呈する。

[壁・床面] 壁・床は、Ⅲ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾して立ち上がり、壁高は99.8cmである。床は緩く湾曲する。

[柱穴・配置] なし。

[炉] なし。

遺物（第17図、写真図版19）

[出土状況] 覆土から土器（32.1g）が出土している。

[土器] 縄文土器（1・2）。

時期 出土遺物から縄文時代の可能性があるが、詳細は不明である。

SKI02竪穴状遺構

遺構（第10図、写真図版5）

[位置・検出状況] II4e～4fグリッド。Ⅲ～Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 西側が斜面下になるため壁・床は消失している。竪穴の東側約半分程度を検出した状態である。そのため正確な規模・形状は不明だが、残存している部分は270×（196）cmで、平面形は、円形基調と推測される。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・にぶい黄褐色土で構成される。自然堆積と考えられる。

[壁・床面] 壁・床は、Ⅳ層を掘り込んでつくられている。残存している東壁は外傾して立ち上がる。壁高は37.6cmである。床はほぼ平坦である。

[柱穴・配置] なし。

[炉] なし。

遺物 (第19図、写真図版20)

[出土状況] 覆土から石器が出土している。

[石器] 台石 (77)。

時期 時期を判断できる出土遺物は無く、詳細は不明である。

(3) 土 坑

土坑は、1区から31基、3区から1基の計32基が確認された。用途や時期は不明なものが多い。個々の土坑の特徴は、第3表を参照されたい。

SK02土坑

遺構 (第11図、写真図版15)

[位置・検出状況] VI E10fグリッド。Ⅳ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径334×(275)cm、底部径255×(249)cm、平面形は方形を呈する。深さは、195.4cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・黄褐色土・明黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅣ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK03土坑

遺構 (第11図、写真図版6)

[位置・検出状況] II I 2 hグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径192×136cm、底部径103×98cm、平面形は楕円形を呈する。深さは105cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK04土坑

遺構 (第12図、写真図版6)

[位置・検出状況] II I 1 d～1 eグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] SK05土坑と重複し、SK04土坑はSK05土坑を切っている。

1 検出遺構

[規模・平面形] 規模は開口部径125 ? cm、底部径145 ? cm、平面形は楕円形を呈する。深さは54cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。覆土下位に径30cm程の垂角礫が含まれていた。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面は平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。形状より貯蔵穴の可能性が考えられる。

SK05土坑

遺構 (第12図、写真図版6)

[位置・検出状況] I I10e～II I1eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] SK04土坑と重複し、SK05土坑がSK04土坑に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径(134)×102cm、底部径116×82cm、平面形は楕円形を呈する。深さは79.1cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・黄褐色土・明黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面は平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器(23.9g)が出土している。

[土器] 縄文土器(3)。

時期 出土遺物から縄文時代の可能性がある。

SK07土坑

遺構 (第12図、写真図版6)

[位置・検出状況] I I9fグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径240×109cm、底部径214×87cm、平面形は長方形を呈する。深さは64cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK08土坑

遺構 (第13図、写真図版7)

[位置・検出状況] I I10cグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径116×85cm、底部径110×64cm、平面形は溝状を呈する。深さは57cm

である。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK09土坑

遺構 (第13図、写真図版7)

[位置・検出状況] I I 8 gグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径169×149cm、底部径133×122cm、平面形は円形を呈する。深さは71cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK10土坑

遺構 (第13図、写真図版7)

[位置・検出状況] I I 9 gグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径96×93cm、底部径67×66cm、平面形は溝状を呈する。深さは61cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・黒褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾する。底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (5.9g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (7)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK11土坑

遺構 (第13図、写真図版7)

[位置・検出状況] I I 10dグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] SK23土坑と重複し、SK23土坑を切っている。

[規模・平面形] 規模は開口部径172×133cm、底部径137×105cm、平面形は円形を呈する。深さは52cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

1 検出遺構

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (14.5g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (8)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK12土坑

遺構 (第13図、写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡI1e～1fグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] SK20土坑と重複し、SK20土坑を切っている。

[規模・平面形] 規模は開口部径182×(142)cm、底部径147×123cm、平面形は円形基調である。深さは41.2cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土からなる。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (3.5g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (9)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK13土坑

遺構 (第14図、写真図版8)

[位置・検出状況] ⅡI1f～1gグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして検出した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径179×148cm、底部径147×144cm、平面形は円形である。深さは111cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (214.5g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (10～13)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。2層出土の炭化材について放射性炭素年代測定を行った (148頁)。

SK14土坑

遺構 (第14図、写真図版8・9)

[位置・検出状況] I I10eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK05・18土坑と重複する。SK14土坑がSK05・18土坑を切る。

[規模・平面形] 規模は開口部径174×136cm、底部径146×118cm、平面形は楕円形である。深さは84cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (11.6g) が出土している。底面中央付近から径20cm程の亜角礫が出土した。

[土器] 縄文土器 (14)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK15土坑

遺構 (第14図、写真図版8・9)

[位置・検出状況] I I 8 e～9 fグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径274×156cm、底部径84×29cm、平面形は楕円形である。深さは111cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (102.9g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (15～18)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK17土坑

遺構 (第15図、写真図版9)

[位置・検出状況] II I 2 iグリッド。Ⅲ層で黒色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SKI01竪穴状遺構と重複し、SKI01竪穴状遺構に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径122×(68)cm、底部径94×(55)cm、平面形は円形と推定される。深さは42cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・暗赤褐色土・炭化物を多く含む黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK18土坑

遺構 (第15図、写真図版9)

[位置・検出状況] I I 10 e～10 fグリッド。Ⅲ層で黒色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK14・28土坑と重複し、SK18土坑がSK14・28土坑を切っている。

1 検出遺構

[規模・平面形] 規模は開口部径190×174cm、底部径154×140cm、平面形は長方形である。深さは30cmである。

[覆土・堆積状況] 黒色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (71.3g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (19～21)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK19土坑

遺構 (第22図、写真図版10)

[位置・検出状況] I I10gグリッド。Ⅲ層で黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK06土坑と重複している。新旧関係は不明である。

[規模・平面形] 規模は開口部径 (180) ×80cm、底部径150×75cm、平面形は長方形である。深さは45cmである。

[覆土・堆積状況] 黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (14.3g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (22・23)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK20土坑

遺構 (第15図、写真図版10)

[位置・検出状況] II I1eグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK12土坑と重複し、SK12土坑に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径 (141) ×124cm、底部径113×97cm、平面形は円形である。深さは75cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黒褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 覆土から土器 (18.0g) が出土している。小片のため不掲載である。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK21土坑

遺構 (第16図、写真図版10)

[位置・検出状況] I I10f～II I1gグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK35土坑と重複し、SK21土坑がSK35土坑を切っている。

[規模・平面形] 規模は開口部径190×88cm、底部径171×64cm、平面形は円形である。深さは11cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (30.2g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (24～26)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK22土坑

遺構 (第16図、写真図版11)

[位置・検出状況] I I 9 eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK29土坑と重複し、SK22土坑がSK29土坑を切っている。

[規模・平面形] 規模は開口部径130×113cm、底部径103×96cm、平面形は円形である。深さは49cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (55.6g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (27～29)。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK23土坑

遺構 (第16図、写真図版11)

[位置・検出状況] I 110d～10eグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK11・26と重複し、SK23土坑がSK11・26土坑に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径187×123cm、底部径169×109cm、平面形は楕円形である。深さは30cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (212.2g) が出土している。30は正位で出土した土器である。

[土器] 縄文土器 (30・31) が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代晩期と推測される。墓壙の可能性があるかもしれない。

SK24土坑

遺構 (第16図、写真図版11)

1 検出遺構

[位置・検出状況] I I 9 g～9 hグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径122×96cm、底部径75×65cm、平面形は円形である。深さは62cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK26土坑

遺構 (第17図、写真図版12)

[位置・検出状況] I I 10 d～10 eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径224×118cm、底部径215×118cm、平面形は楕円形である。深さは34cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 覆土から土器(7.9g)が出土している。小片のため不掲載である。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK27土坑

遺構 (第16図、写真図版12)

[位置・検出状況] I I 5 fグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径94×72cm、底部径44×33cm、平面形は楕円形である。深さは51cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK28土坑

遺構 (第17図、写真図版12)

[位置・検出状況] I I 10 d～II I 10 eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径217×174cm、底部径199×167cm、平面形は不整な楕円形である。深さは29cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK29土坑

遺構 (第17図、写真図版13)

[位置・検出状況] II9eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK22土坑に切られ、SK30土坑を切っている。

[規模・平面形] 規模は開口部径140×(66)cm、底部径75×(34)cm、平面形は円形と推定される。深さは70cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK30土坑

遺構 (第17図、写真図版13)

[位置・検出状況] II9eグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK29土坑に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径157×141cm、底部径135×116cm、平面形は円形である。深さは66cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK32土坑

遺構 (第18図、写真図版13)

[位置・検出状況] II9cグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SN03焼土遺構の下位から検出された。SK32土坑はSN03焼土遺構より古い。

[規模・平面形] 規模は開口部径228×(172)cm、底部径200×136cm、平面形は楕円形である。深さは82cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (写真図版20)

1 検出遺構

[出土状況] 覆土から植物遺体が出土している。

[植物遺体] 炭化種実 (131)。分析の結果、コナラ属子葉との鑑定結果を得ている (147頁)。

時期 時期を判断できる出土遺物がなく、詳細は不明である。

SK33土坑

遺構 (第18図、写真図版13)

[位置・検出状況] I I 9 bグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径155×150cm、底部径131×(74) cm、平面形は不整形である。深さは103cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 覆土から土器 (4.8g) が出土している。小片のため不掲載である。

時期 詳細は不明である。

SK34土坑

遺構 (第18図、写真図版14)

[位置・検出状況] I I 6 fグリッド。Ⅲ層で黄褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径176×170cm、底部径134×124cm、平面形は円形である。深さは105cmである。

[覆土・堆積状況] 黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK35土坑

遺構 (第19図、写真図版10)

[位置・検出状況] I I 10fグリッド。Ⅲ層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK21土坑に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径(166)×56cm、底部径(166)×37cm、平面形は溝状を呈するようである。深さは37cmである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 (第25図、写真図版19)

[出土状況] 覆土から土器 (4.8g) が出土している。

[土器] 縄文土器 (32) が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK36土坑

遺構（第19図、写真図版14）

[位置・検出状況] I I10f・II I11fグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] SK28に切られている。

[規模・平面形] 規模は開口部径129×93cm、底部径120×84cm、平面形は長方形を呈する。深さは20cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物（第25図、写真図版19）

[出土状況] 覆土から土器（7.0g）が出土している。

[土器] 縄文土器（33）。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

SK37土坑

遺構（第19図、写真図版14）

[位置・検出状況] I I8c～9cグリッド。Ⅲ層で褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径247×（115）cm、底部径229×（107）cm、平面形は方形を呈するようである。深さは108cmである。

[覆土・堆積状況] 褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

[その他の付属施設] なし。

遺物 なし。

時期 詳細は不明である。

（4）陥し穴状遺構

陥し穴状遺構は、1区から楕円形3基、3区から溝状1基、異なる形態の陥し穴状遺構4基が確認された。陥し穴状遺構の特徴は、第4表を参照されたい。

SK01陥し穴状遺構

遺構（第20図、写真図版15）

[位置・検出状況] IV E10bグリッド。IV層で明黄褐色土の広がりとして検出された。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径210×63cm、底部径159×19cm、平面形は溝状を呈する。深さは82cmである。

[覆土・堆積状況] 明黄褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はIV層を掘り込んでいる。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。底面の長軸に沿って副穴2基が設けられている。

1 検出遺構

遺物 なし。

時期 出土遺物がなく、詳細は不明である。ベルト2層中の炭化材について放射性炭素年代測定を行った(148頁)。

SK16陥し穴状遺構

遺構 (第20図、写真図版16)

[位置・検出状況] II7gグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径181×99cm、底部径91×48cm、平面形は楕円形である。深さは142cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK25陥し穴状遺構

遺構 (第21図、写真図版16)

[位置・検出状況] II9g～9hグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径176×114cm、底部径108×38cm、平面形は楕円形である。深さは157cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

SK31陥し穴状遺構

遺構 (第21図、写真図版16)

[位置・検出状況] II7f～8gグリッド。Ⅲ層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部径162×130cm、底部径111×48cm、平面形は楕円形である。深さは115cmである。

[覆土・堆積状況] 暗褐色土・褐色土・黄褐色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

遺物 なし。

時期 出土遺物はなく、詳細は不明である。

(5) 墓 壙

1区の丘陵上で墓壙1基が確認された。出土遺物から中世後期と推測される墓壙である。

SK06墓壇

遺構（第22図、写真図版17）

〔位置・検出状況〕 I I10gグリッド。Ⅲ層で黒色土・暗褐色土の広がりとして検出された。検出後にベルトを設定して覆土を精査中に骨片を確認した。以後、墓壇の可能性を想定して精査を進めた。

埋葬された人骨・副葬品を確認し、墓壇であることが確定した段階で、常安寺に依頼して現地で供養を行い、人骨採取は、株式会社バリノ・サーヴェイに委託して現地で行った。

〔重複関係〕 南側でSK19土坑と重複する。新旧関係は不明である。

〔規模・平面形〕 規模は開口部径（115）×115cm、底部径（104）×104cm、平面形は楕円形を呈するものと推測される。深さは45cmである。遺構の重複と精査の不手際から墓壇の南側の形状を明確に記録することができなかったが、南北方向に長軸を持つ楕円形の墓壇と推測される。

〔覆土・堆積状況〕 黒色土・暗褐色土・黄褐色土で構成される。

〔壁・底面〕 壁・底面はⅢ層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面はほぼ平坦である。

〔その他の付属施設〕 なし。

遺物（第25・27図、写真図版20）

〔出土状況〕 人骨・銭貨・漆の塗膜が出土している。人骨は被葬者で、銭貨・漆の塗膜は副葬品である。人骨は、墓壇中央に北側に頭部を置き、南に向くように膝を折り曲げた状態での葬られたものと推測される。頭骨は1次精査中に取り上げており、位置は実測していない。確認できた人骨の状態から、すでに腐食した部分も多いと推測される。副葬品は、人骨の周囲から銭3枚、南東側で漆の塗膜が出土している。漆の塗膜は、漆器の木質部が腐食し、漆の塗膜部分のみが遺されたものと推測され、上面に赤漆、下面が黒漆であったため、漆器の内面が赤漆・外面が黒漆であったと推測される。ほかに混入したものと推測される縄文土器（16.5g）も出土している。

〔人骨〕 脳頭蓋、胸椎の一部、左右鎖骨・大腿骨などが確認された。分析の結果、性別・年齢は60歳代の女性であるとの鑑定結果を得ている（130頁）。

〔銭貨〕 宋通元寶（初鑄年960年）（91）・洪武通寶（初鑄年1368年）（92）・永樂通寶（初鑄年1408年）（93）。3点について成分分析を行っている（134頁）。

〔その他〕 漆の塗膜（121）。分析の結果、漆であるとの鑑定結果を得ている（144頁）。

〔土器〕 縄文土器（4・5・6）。

時期 出土遺物から、中世後期（15・16世紀）の墓壇と推測される。

（6）焼土遺構

焼土遺構は3基確認された。すべて地床炉で、形状も明瞭ではなく、長期間の使用の痕跡ではないと考えられる。また、占地は斜面部に寄っており、周辺で柱穴など関連する施設も確認されていないことから、住居跡の炉跡の可能性は低いと考えられる。出土遺物はなく、時期の詳細は不明である。

SN01焼土遺構

遺構（第23図、写真図版18）

〔位置・検出状況〕 I I9gグリッド。Ⅲ層で焼土粒のまとまりを確認した。

〔重複関係〕 なし。

〔規模・平面形〕 検出された範囲は、径76×59cmの円形である。焼土の厚さは14cmである。

〔被熱土〕 褐色土に焼土粒が含まれる。

〔所属施設〕 なし。

1 検出遺構

遺物 なし。

時期 詳細は不明である。

SN02焼土遺構

遺構（第23図、写真図版18）

[位置・検出状況] II6fグリッド。II層黒褐色土層で赤褐色土のまとまりを確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 検出された範囲は、径17×16cmの円形である。焼土の厚さは16cmである。

[被熱土] 赤褐色土である。

[所属施設] なし。

遺物 なし。

時期 詳細は不明である。

SN03焼土遺構

遺構（第23図、写真図版18）

[位置・検出状況] II9cグリッド。II層で焼土粒のまとまりを確認した。

[重複関係] SK32土坑と重複する。SK32土坑より新しい。

[規模・平面形] 検出された範囲は、26×14cmの範囲の不整形である。焼土の厚さは15cmである。

[被熱土] 暗褐色土に焼土粒が含まれる。

[所属施設] なし。

遺物（第25図、写真図版19）

[出土状況] 焼土を覆う黒色土から土器（46.0g）が出土している。

[土器] 縄文土器（34～36）。

時期 出土遺物から、縄文時代の可能性がある。

（7）その他

SX01

遺構（第24図、写真図版5）

[位置・検出状況] II6c～7cグリッド。1区北斜面のIII層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複関係] なし。

[規模・平面形] 規模は開口部の径は長軸6×短軸4m、底部径4.4×2.4m、平面形は不整形で斜面下方に向かって広がっている。斜面下方は失われている。深さは1mほどである。

[覆土・堆積状況] 黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土・黒色土で構成される。

[壁・底面] 壁・底面はIII～IV層を掘り込んでつくられている。壁は外傾し、底面は緩い凹凸をもつ。

（第26図、写真図版19）

[出土状況] 覆土から土器（324.8g）が出土している。

[土器] 縄文土器（37～41）が出土している。

時期 出土遺物から、縄文時代以降と推測される。

第2表 竪穴状遺構観察表

図版 No	写図 No	遺構名	位置	検出面	床面	平面形	規模 (m)	壁高 (cm)	柱穴・ 柱配置	覆土の堆積状況 (上位→下位)	付属施設	重複関係 (旧→新)	遺物 (掲載No)	時期
13	5	SK101	II 2 i	III	III	円形	294×261	99.8	なし	黒褐色土、褐色土、暗褐色土	なし	SK17→SK101	1・2	縄文?
13	5	SK102	II 4 e~4 f	III?	IV	円形?	270×(196)	37.6	なし	黒褐色土、にぶい黄褐色土	なし	なし	77	不明

(数値)：残存値

第3表 土坑観察表

図版 No	写図 No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模 (cm)			底面のレベル (m)	覆土の堆積状況 (上位→下位)	重複関係 (旧→新)	性格	付属施設	時期
						開口部	底部	深さ						
14	15	SK02	IV E10f	IV	方形	334×(275)	255×(249)	195.4	61.436	黒褐色土、黄褐色土、明黄褐色土	なし	なし	なし	不明
14	6	SK03	II 2 h	III	楕円形	192×136	103×98	105.0	31.540	褐色土、暗褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	不明
15	6	SK04	II 1 d, 1 e	III	楕円形	径125?	径145?	54.4	33.800	暗褐色土、褐色土、黄褐色土	SK05→SK04	貯?	なし	不明
15	6	SK05	I II0e, II 1 e	III	楕円形	(134)×102	116×82	79.1	33.529	黒褐色土、黄褐色土、明黄褐色土	SK05→SK04	なし	なし	縄文
15	6	SK07	I 1 f	III	長方形	240×109	214×87	64.6	32.958	褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	不明
16	7	SK08	I II0c	III	楕円形	116×85	110×64	57.4	33.354	暗褐色土、褐色土	なし	なし	なし	不明
16	7	SK09	I 1 g	III	円形	169×149	133×122	71.4	32.116	暗褐色土、褐色土、黒褐色土	なし	なし	なし	不明
16	7	SK11	I II0d	III	楕円形	96×93	67×66	61.0	32.538	暗褐色土、黒褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	縄文?
16	8	SK12	II 1 e, 1 f	III	円形	182×(142)	147×(123)	52.4	33.810	黒褐色土、褐色土、黄褐色土	SK23→SK11	なし	なし	縄文?
17	8	SK13	II 1 f, 1 g	III	円形	179×148	147×144	111.4	33.760	黒褐色土	SK20→SK12	なし	なし	縄文?
17	8・9	SK14	I II0e	III	楕円形	174×136	146×118	84.8	33.430	黒褐色土、暗褐色土、褐色土	SK05・SK18→SK14	なし	なし	縄文?
17	8・9	SK15	I 1 e, 9f	III	楕円形	274×156	84×29	111.5	32.213	黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	縄文?
18	9	SK17	II 2 i	III	円形?	122×(68)	94×(55)	42.6	31.624	黒色土、暗赤褐色土、黒褐色土	SK17→SK101	なし	なし	不明
18	9	SK18	I II0e, 10f	III	楕円形?	190×174	154×140	30.0	33.840	黒色土、暗褐色土、黄褐色土	SK14・SK28→SK18	なし	なし	縄文?
25	10	SK19	I II0g	III	長方形	(180)×80	150×75	45.0	33.500	黄褐色土、暗褐色土、黄褐色土	SK06と重複	なし	なし	縄文?
18	10	SK20	II 1 e	III	円形	141×124	113×97	75.2	33.520	暗褐色土、褐色土、黒褐色土	SK20→SK12	なし	なし	縄文?
19	10	SK21	I II0f, II 1 g	III	不整形	190×88	171×64	11.0	33.802	暗褐色土、褐色土	SK35→SK21	なし	なし	縄文?
19	11	SK22	I 1 e	III	円形	130×113	103×96	49.0	33.530	黒褐色土、暗褐色土	SK29→SK22	なし	なし	縄文?
19	11	SK23	I II0d, 10e	III	楕円形	187×123	169×109	30.0	33.920	暗褐色土、黄褐色土	SK23→SK11・SK26	なし	なし	縄文
19	11	SK24	I 1 g, 9h	III	円形	122×96	75×65	62.0	32.674	黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	不明
20	12	SK26	I II0d, 10e	III	楕円形	224×138	215×118	34.2	33.748	黒褐色土、褐色土、黄褐色土	SK23→SK26	なし	なし	縄文?
19	12	SK27	I 1 f	III	楕円形	94×72	44×33	51.0	29.618	黒褐色土、暗褐色土、褐色土	なし	なし	なし	不明
20	12	SK28	I II0e, II 1 f	III	不整形	217×174	199×167	29.2	33.948	黒褐色土、暗褐色土、褐色土	SK18・SK36→SK28	なし	なし	不明
20	13	SK29	I 1 e	III	円形?	140×(60)	75×(34)	70.0	32.860	黒褐色土、褐色土、黄褐色土	SK30→SK29・SK22	なし	なし	不明
20	13	SK30	I 1 e	III	円形	157×141	135×116	66.0	32.216	暗褐色土、褐色土、黄褐色土	SK30→SK29	なし	なし	不明
21	13	SK32	I 1 e	III	楕円形	228×(172)	200×136	82.0	32.066	褐色土、黄褐色土	SK32→SN03	なし	なし	不明
21	13	SK33	I 1 b	III	不整形	155×150	131×(74)	103.6	30.496	黒褐色土、褐色土、にぶい黄褐色土	なし	なし	なし	不明
21	14	SK34	I 1 f	III	円形	176×170	134×124	105.0	30.480	黒褐色土、褐色土	なし	なし	なし	縄文?
22	10	SK35	I II0f	III	溝状?	(166)×56	(166)×37	37.8	33.778	黒褐色土、暗褐色土	SK35→SK21	なし	なし	縄文?
22	14	SK36	I II0f, II 1 f	III	長方形	129×93	120×84	20.4	33.862	暗褐色土、褐色土	SK36→SK28	なし	なし	不明
22	14	SK37	I 1 c, 9c	III	方形?	247×(115)	229×(107)	108.6	29.654	褐色土、黄褐色土	なし	なし	なし	不明

(数値)：残存値

第4表 陥し穴状遺構観察表

図版 No	写図 No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模 (cm)			底面のレベル (m)	覆土の堆積状況 (上位→下位)	重複関係 (旧→新)	性格	付属施設	時期
						開口部	底部	深さ						
23	15	SK01	IVE10b	IV	溝状	210×63	159×19	82.8	66.000	明黄褐土、黄褐土	なし	陥	副穴2個	縄文?
23	16	SK16	I I 7 g	III	楕円形?	181×99	91×48	142.6	30.946	暗褐土、褐色土、黄褐土	なし	陥?	なし	縄文?
24	16	SK25	I I 9 g, 9h	III	楕円形	176×114	108×38	157.2	31.344	暗褐土、褐色土、黄褐土	なし	陥?	なし	縄文?
24	16	SK31	I I 7 f, 8g	III	楕円形	162×130	111×48	115.6	31.230	暗褐土、褐色土、黄褐土	なし	陥?	なし	縄文?

(数値)：残存値

第5表 墓壇観察表

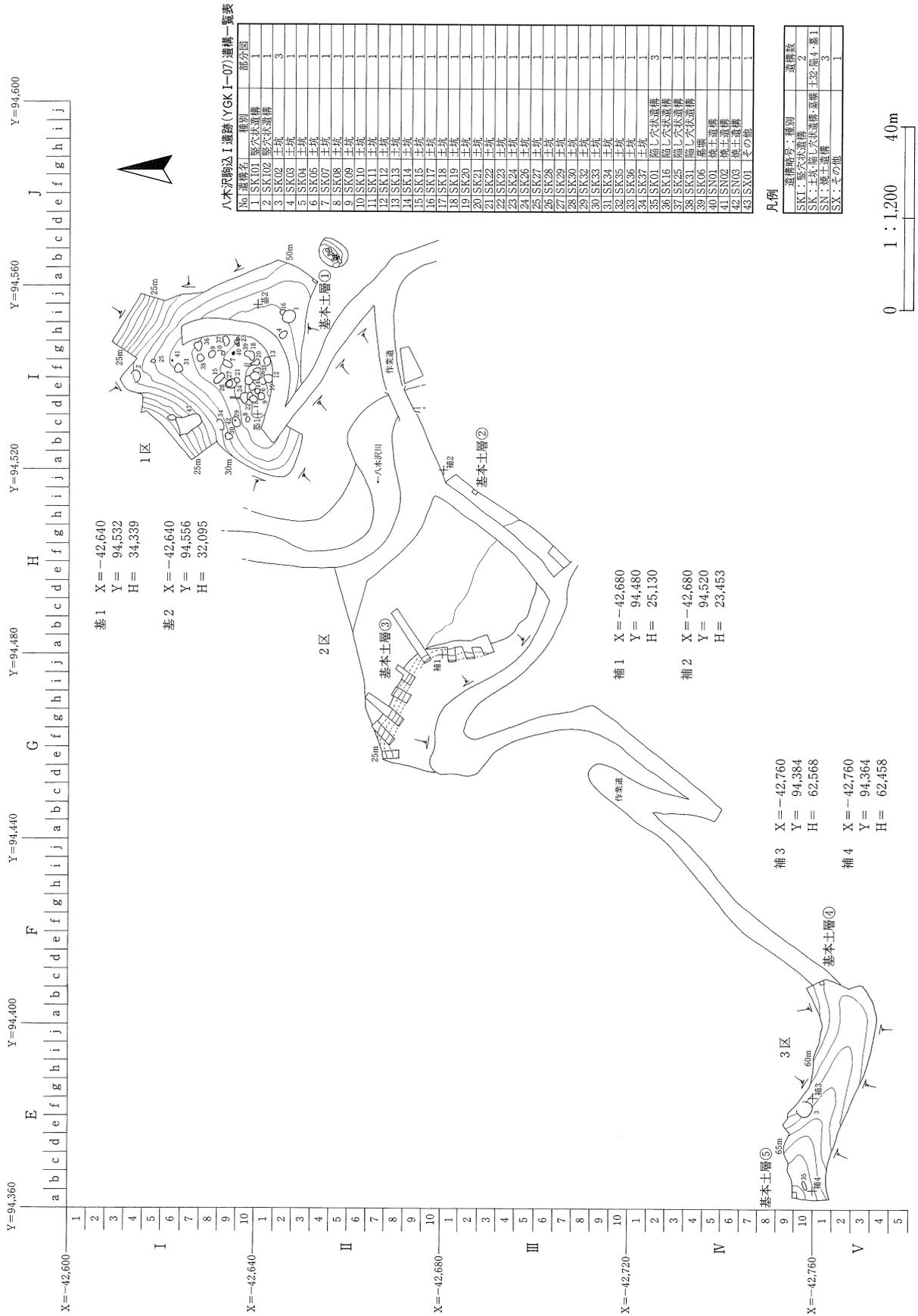
図版 No	写図 No	遺構名	位置	検出面	平面形	規模 (cm)			底面のレベル (m)	覆土の堆積状況 (上位→下位)	重複関係 (旧→新)	性格	付属施設	備考	時期
						開口部	底部	深さ							
25	17	SK06	I I 10g	III	楕円形?	(115) × 115	(104) × 104	45.0	33.620	黒色土、暗褐色土、黄褐土	SK19と重複	墓	なし	分析有り	中世

(数値)：残存値

第6表 焼土遺構観察表

図版 No	写図 No	遺構名	位置	焼成面	平面形	規模 (cm)		状況	出土遺物	時期
						平面	厚さ			
26	18	SN01	I I 9 g	III	円形	76×59	14	焼土粒を含む	なし	不明
26	18	SN02	I I 6 f	II	円形	17×16	16	赤褐色の焼土	なし	不明
26	18	SN03	I I 9 c	II	不整形	26×14	15	赤褐色の焼土ブロックが散在する	なし	縄文?

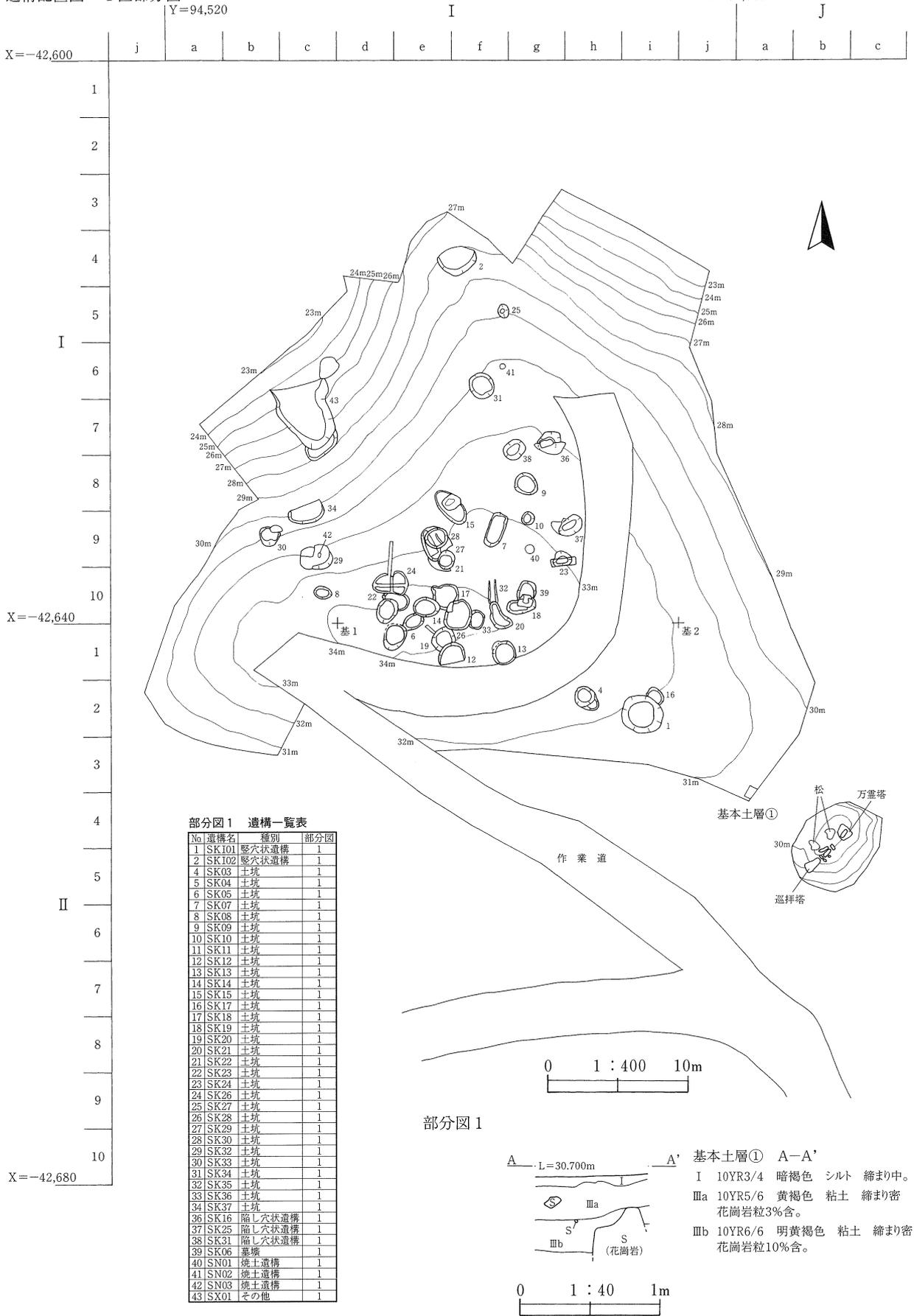
(数値)：残存値



第6図 遺構配置図(1):全体図

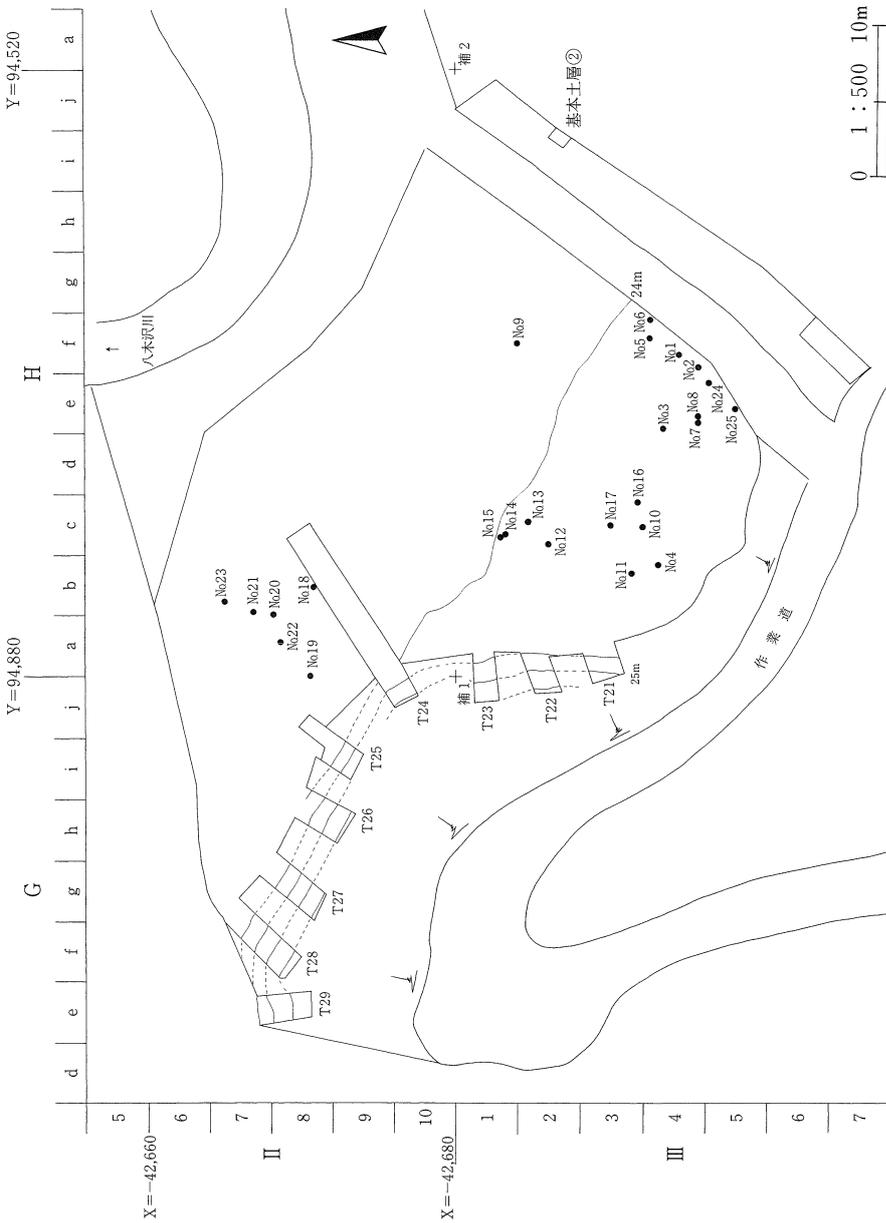
1 検出遺構

遺構配置図 1区部分図

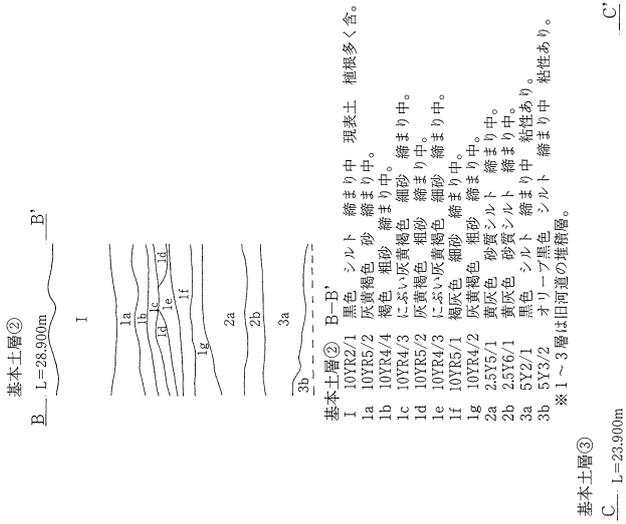


第7図 遺構配置図(2):部分図1

遺構配置図 2区部分図

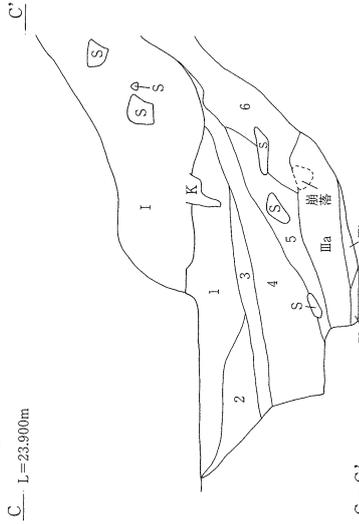


部分図 2



基本土層② B-B' 現表土 植根多く含。
 I 10YR2/1 黒色 シルト 締まり中 締まり中。
 Ia 10YR5/2 灰黄褐色 砂 締まり中。
 Ib 10YR4/4 褐色 粗砂 締まり中。
 Ic 10YR4/3 にぶい灰黄褐色 細砂 締まり中。
 Id 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂 締まり中。
 Ie 10YR4/3 にぶい灰黄褐色 細砂 締まり中。
 If 10YR5/1 褐色 粗砂 締まり中。
 Ig 10YR4/2 灰黄褐色 粗砂 締まり中。
 2a 2.5Y5/1 黄灰色 砂質シルト 締まり中。
 2b 2.5Y6/1 黄灰色 シルト 締まり中 粘性あり。
 3a 5Y2/1 黄色 シルト 締まり中 粘性あり。
 3b 5Y3/2 オリーブ黒色 シルト 締まり中。
 ※ 1～3層は旧河道の堆積層。

基本土層③ C L=23,900mm



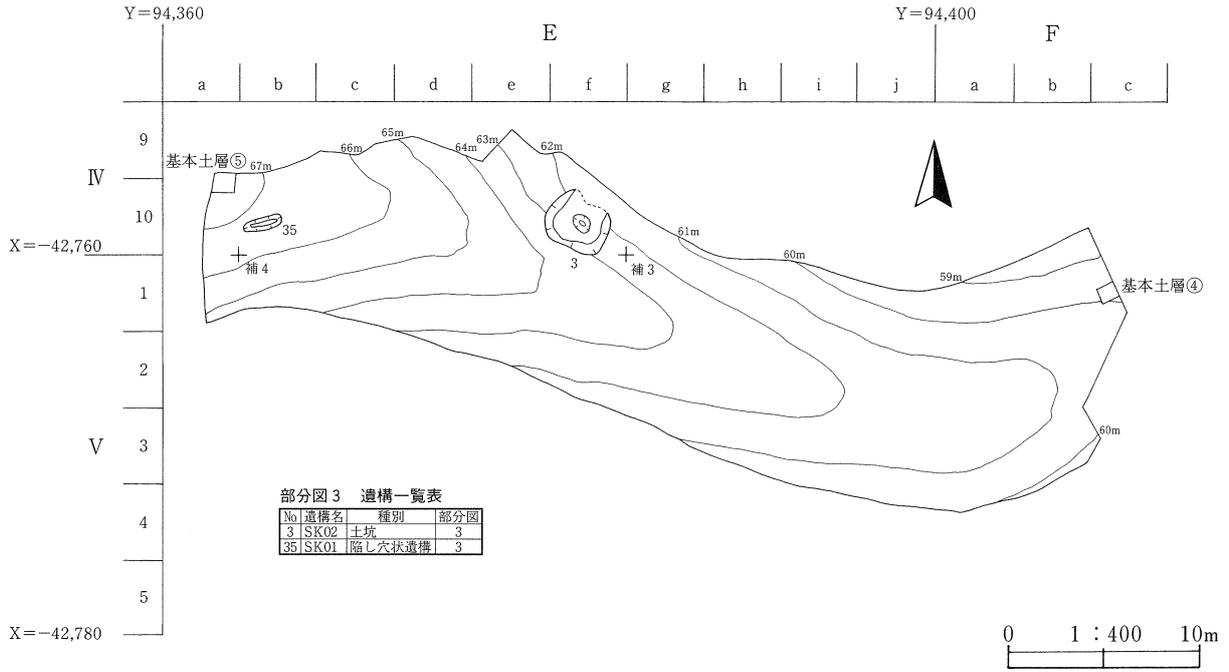
基本土層③ C-C' 未満の砂層の五層。
 I 表土 10YR2/1 黒色 締まり疎 面角礫 (径20cm) 含。
 II 10YR7/4 にぶい黄褐色 粗砂 締まり密 径3mm次の砂層と1
 III 10YR6/4 にぶい黄褐色 粗砂 締まり密 未満の砂層の五層。
 IV 10YR5/3 にぶい黄褐色 粗砂 締まり密 黒褐色土下部に混ざる30%。
 V 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり密 粘性あり 褐鉄プロック含。
 VI 10YR3/4 暗褐色 小礫 (径5～10mm) 締まり密 面角礫 (径10～20cm) 含。
 VII 10YR4/4 褐色 小礫 (径5mm) 締まり密 面角礫 (径10～20cm) 含。
 ※ 1～6層は旧河道の堆積層。細砂 締まり密 下層7b層の粒子が細かい。
 IIIa 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂 締まり密 褐鉄層が入る。
 IIIb 10YR4/2 灰黄褐色 砂 締まり密 褐鉄層が入る。
 IV 礫層 10YR8/2 灰白色 締まり密 岩盤で礫 (径50cm以上) が露出している箇所あり。



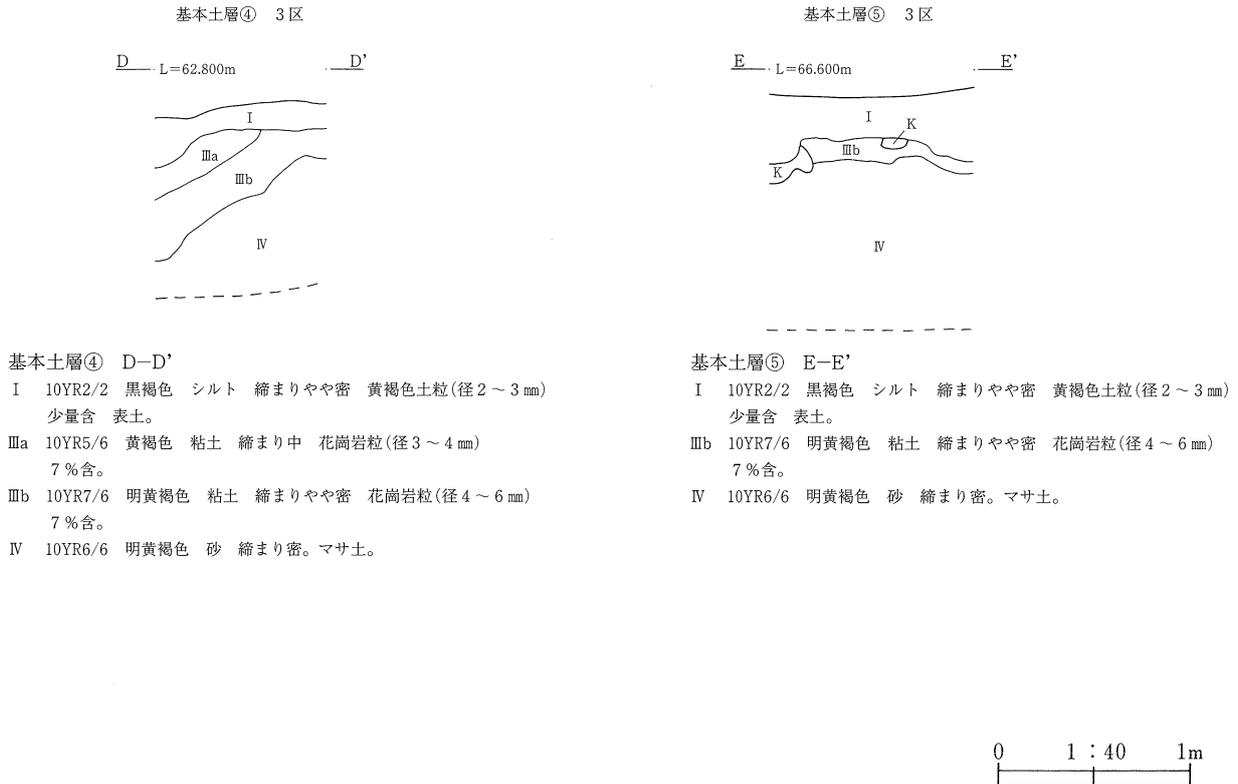
第8図 遺構配置図 (3) : 部分図 2

1 検出遺構

遺構配置図 3区部分図



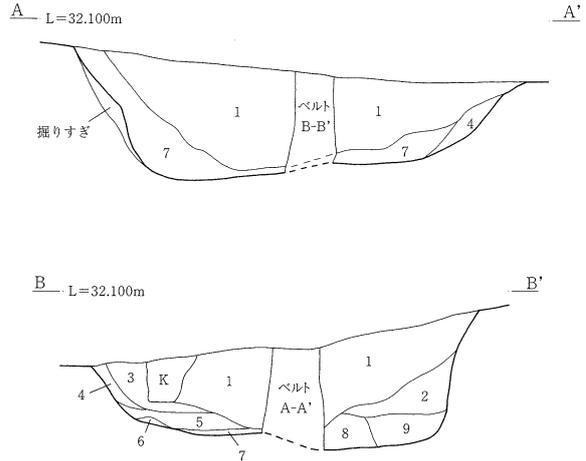
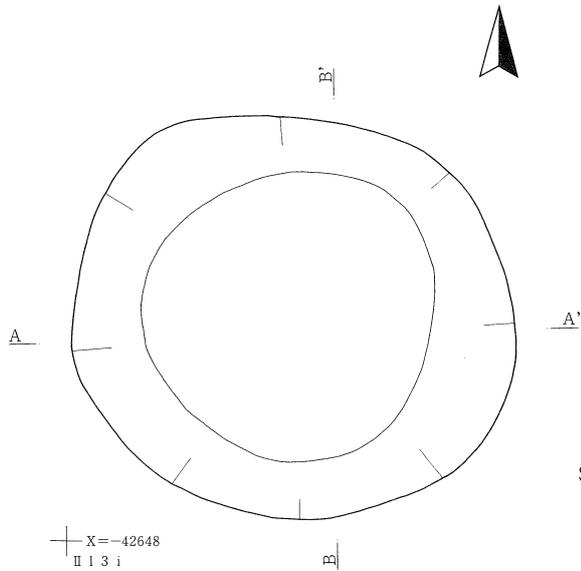
部分図3



第9図 遺構配置図(4):部分図3

SKI01

Y=94552
X=-42644
II 12 i

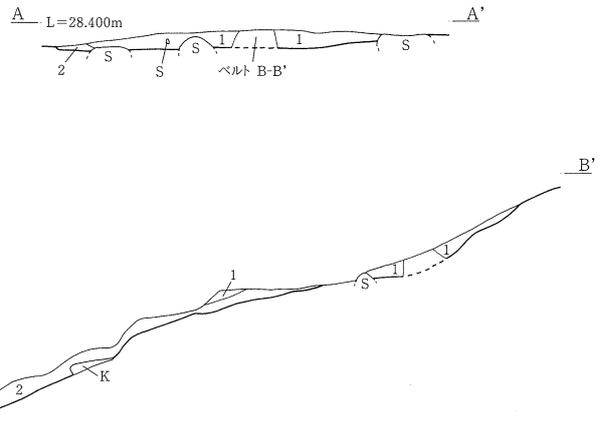
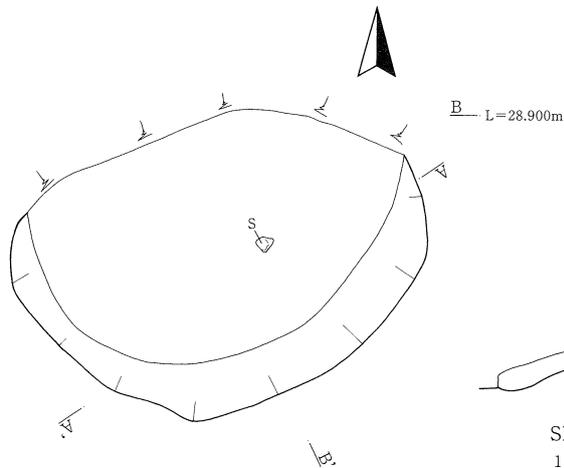


SKI01 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まりやや疎。
- 2 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり疎 黒褐色土ブロック(径3~4cm)7%含。
- 3 10YR3/4 褐色 粘土 締まり中。
- 4 10YR4/4 褐色 粘土 締まり中 暗褐色土ブロック(径3cm)3%含。
- 5 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まりやや疎 暗褐色土ブロック(径5cm)1%含。
- 6 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり疎。
- 7 10YR4/4 褐色 粘土 締まり疎 黒褐色土ブロック(径3cm)含。
- 8 10YR2/3 暗褐色 粘土質シルト 褐色土粒(径5~9mm)3%含。
- 9 10YR4/6 褐色 粘土 締まり疎 黒褐色土ブロック(径3cm)1%含。

SKI02

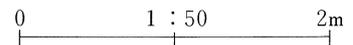
I 14 e 4m
I 14 f X=-42612



SKI02 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/2 黒褐色 砂質シルト 締まり中 植根・径5mmの小礫含。
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂 締まり中 マサ土起源の土。

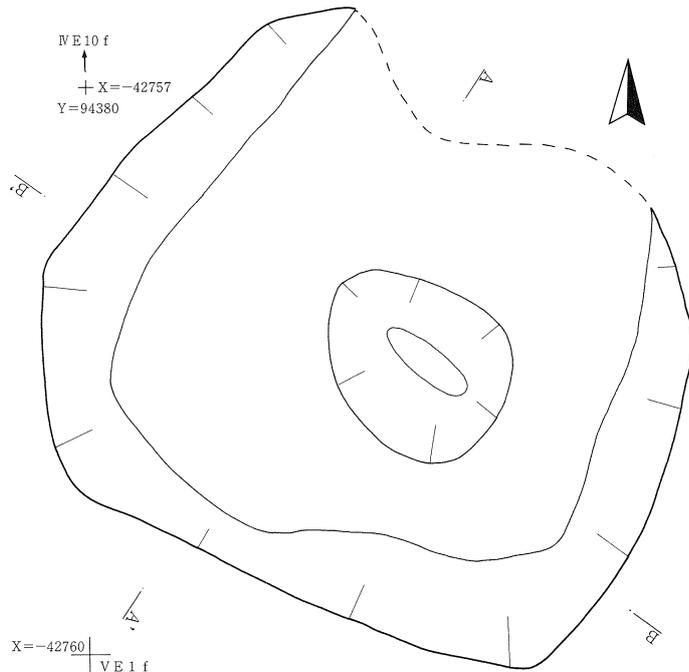
Y=94540
X=-42616
I 15 f



第10図 SKI01・02竪穴状遺構

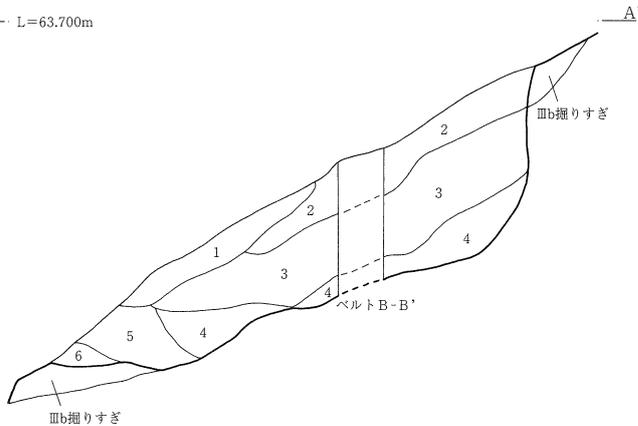
1 検出遺構

SK02



A— L=63.700m

B— L=63.100m

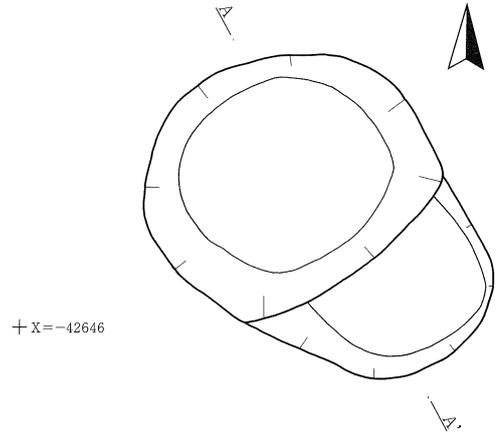


SK02 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 花崗岩粒 (径3mm) 3%含。
- 2 10YR4/4 褐色 粘土 締まりやや密 花崗岩粒 (径3mm) 3%含。
- 3 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密 花崗岩粒 (径3mm~5mm) 7%含。
- 4 10YR6/6 明褐色 砂 締まり中 くずれたマサ土。
- 5 4層に類似するが、やや赤化する点で異なる。
- 6 10YR6/6 明褐色 粘土 締まり疎 黒色土ブロック (径1cm) 1%含。

SK03

X=-42644
Y=94548

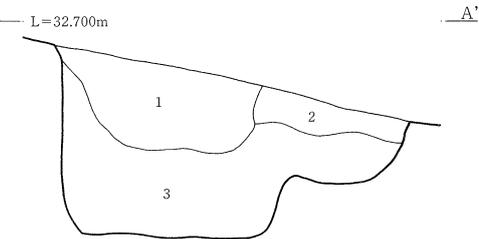


+ X=-42646

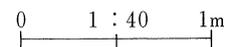
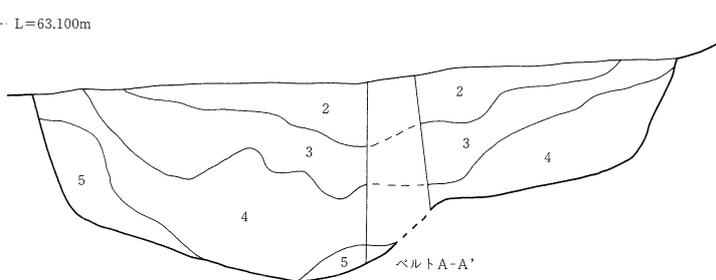
A— L=32.700m

SK03 A-A'

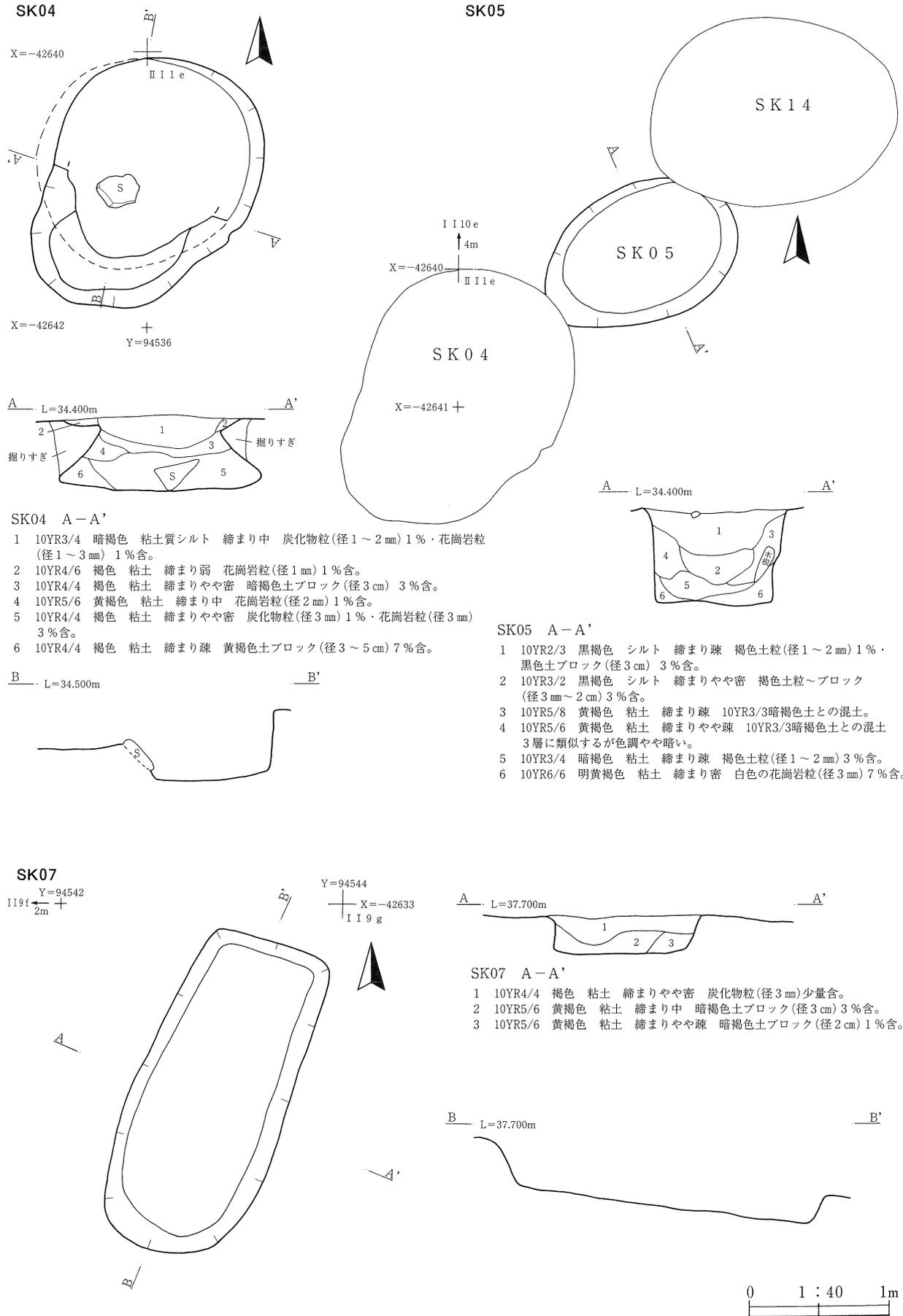
- 1 10YR4/4 褐色 粘土 締まりやや密 炭化物粒 (径2mm) わずか 花崗岩粒 (径5mm) 1%含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まりやや疎 褐色土ブロック (径7~10cm) 7%含。
- 3 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密 花崗岩粒 (径2~3mm) 3%含・黒色土ブロック (径5cm) 1%含。



B—



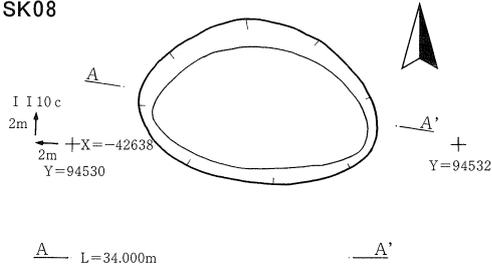
第11図 SK02・03土坑



第12図 SK04・05・07土坑

1 検出遺構

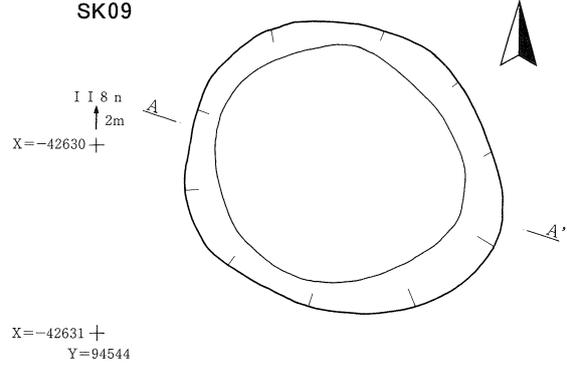
SK08



SK08 A-A'

- 1 10YR4/3 暗褐色 粘土質シルト 締めりやや密 花崗岩粒(径1mm)1%含。
- 2 10YR4/4 褐色 粘土 締めり中 黒褐色土ブロック(径3cm)3%含。

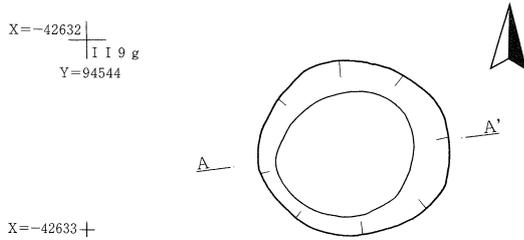
SK09



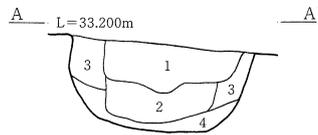
SK09 A-A'

- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト質粘土 締めり中 炭化物粒(径7~1cm)1%・褐色土粒(径5mm)3%含。
- 2 1層に類似するが、締めりやや欠ける。
- 3 10YR4/4 褐色 粘土 締めりやや疎。
- 4 10YR3/3 暗褐色 シルト質粘土 締めり中 炭化物粒(径2mm)1%含。
- 4' 4層に類似するが、締めりやや欠ける。
- 5 10YR5/6 黄褐色 粘土 締めり中 暗褐色土ブロック(径3~5cm)5%含。
- 6 10YR2/2 黒褐色 シルト 締めり中 褐色土ブロック(径2cm)わずか含。

SK10



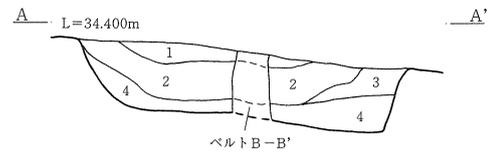
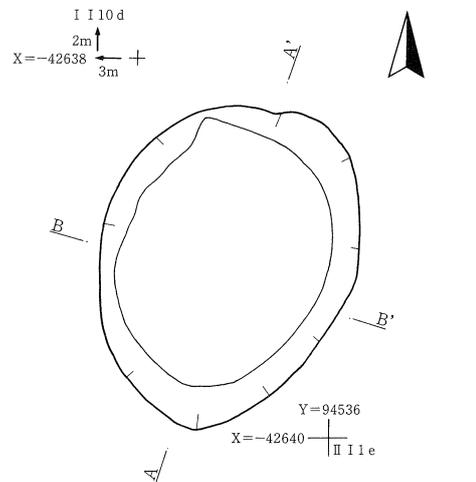
X=-42633+



SK10 A-A'

- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト質粘土 締めり中 ローム粒(径7mm)1%含 炭化物粒(径1mm)わずか含。
- 2 10YR2/3 黒褐色 シルト 締めりやや密 ロームブロック(径3~4cm)3%含。
- 3 10YR4/6 褐色 粘土 締めり中 暗褐色土ブロック(径7~8cm)7%含。
- 4 10YR5/8 黄褐色 粘土 締めり疎 黒褐色土ブロック(径1cm)1%含。

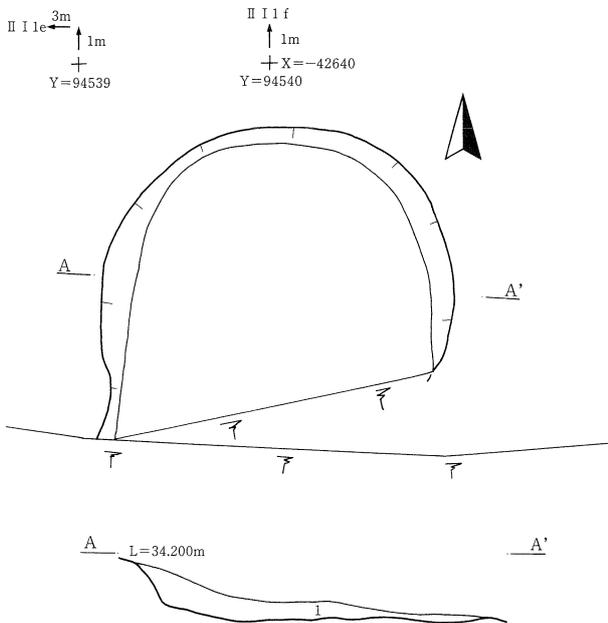
SK11



SK11 A-A'・B-B'

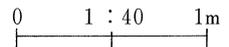
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締めりやや密 褐色土ブロック(径3cm)7%含。
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 締めり中 黒褐色土ブロック(径1cm)3%含。
- 3 10YR2/3 黒褐色 シルト 締めりやや密 褐色土ブロック(径3cm)3%含。
- 4 10YR5/6 黄褐色 粘土 締めりやや疎 花崗岩粒(径2~3mm)1%・黒褐色土ブロック(径1cm)含。

SK12



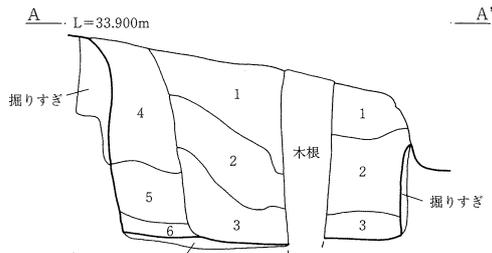
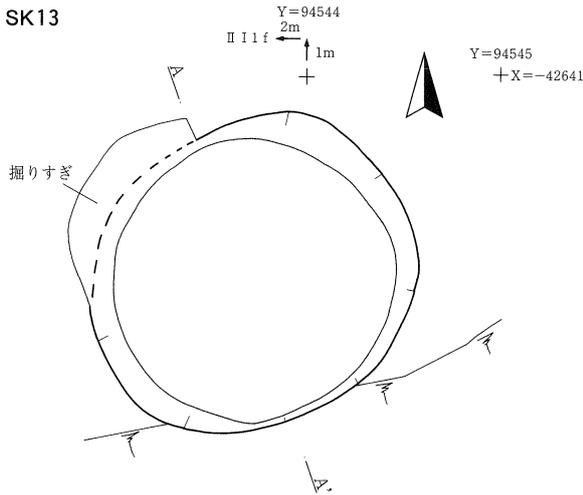
SK12 A-A'

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締めりやや疎 褐色土ブロック(径3cm)3%含。



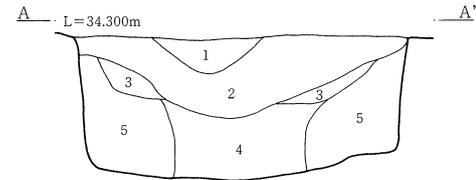
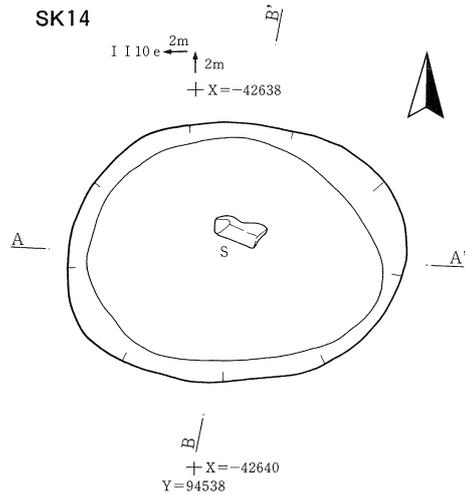
第13図 SK08~12土坑

SK13



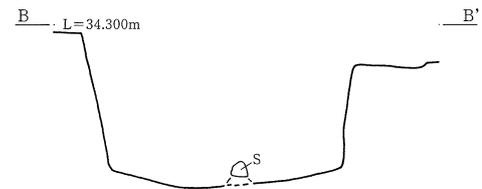
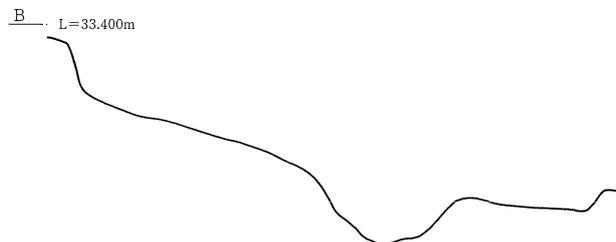
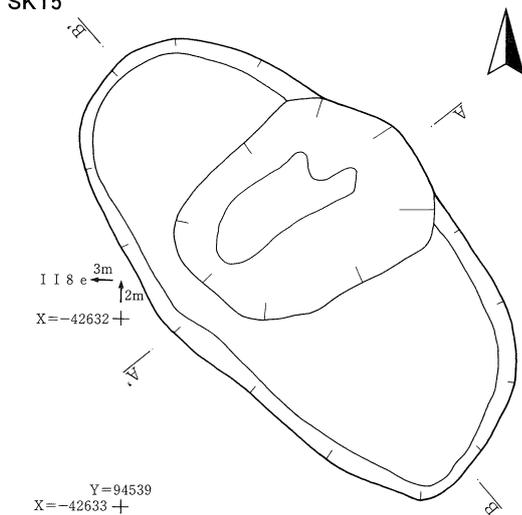
- SK13 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 炭化物1%含。
 - 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 炭化物1%・黄色土ブロック3%含。
 - 3 10YR3/4 褐色土 粘土質シルト 締まり中 炭化物1%・黄色土ブロック5%含。
 - 4 10YR4/6 褐色 粘土 締まり中。
 - 5 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり中。
 - 6 10YR4/4 褐色 粘土 締まり中。

SK14

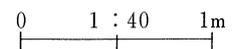


- SK14 A-A'
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり疎 炭化物粒(径2~3mm)3%・褐色土粒(径2mm)5%含。
 - 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まりやや疎 炭化物ブロック(径1cm)1%・褐色土ブロック(径2~3cm)3%含。
 - 3 10YR4/6 褐色 粘土 締まり疎。
 - 4 10YR4/4 褐色 粘土 締まり疎 炭化物ブロック(径1~2cm)3%・Ⅲ層(ローム)ブロック(径1cm)1%含。
 - 5 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり中。

SK15

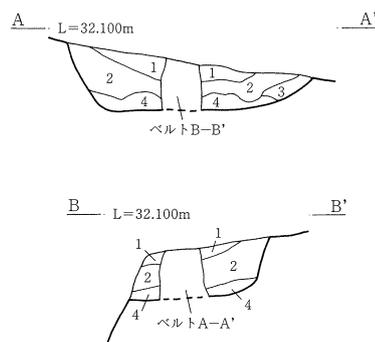
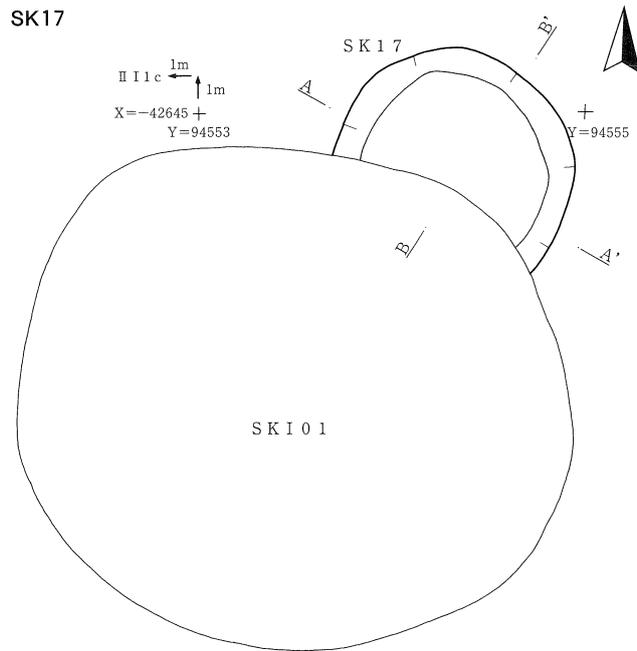


- SK15 A-A'
- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まりやや疎 炭化物粒(径1~2mm)3%含。
 - 2 10YR3/4 暗褐色 シルト質粘土 締まり中 炭化物粒(径3~10mm)3%・ロームブロック(径3cm)含。
 - 3 10YR4/4 褐色 粘土 締まりやや疎 黒褐色土ブロック(径3cm)1%含。
 - 4 10YR4/6 褐色 粘土 締まりやや密 黒褐色土ブロック(径2cm)1%含。
 - 5 10YR3/4 暗褐色 シルト質粘土 締まり中 褐色土(ローム)ブロック(径2~10cm)7%含。
 - 6 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まりやや疎 ロームブロック(径5~7cm)7%含。
 - 7 10YR4/6 褐色 粘土 締まりやや密 黒褐色土ブロック(径2cm)1%含。
 - 8 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや疎 暗褐色土ブロック(径5cm)7%含。
 - 9 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり中 黒褐色土ブロック(径1cm)1%含。



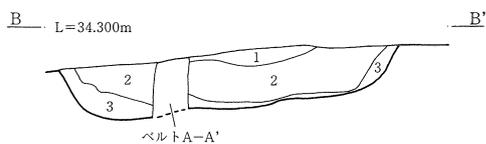
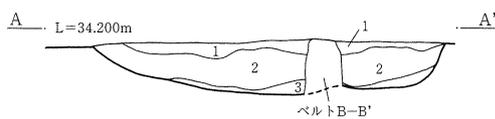
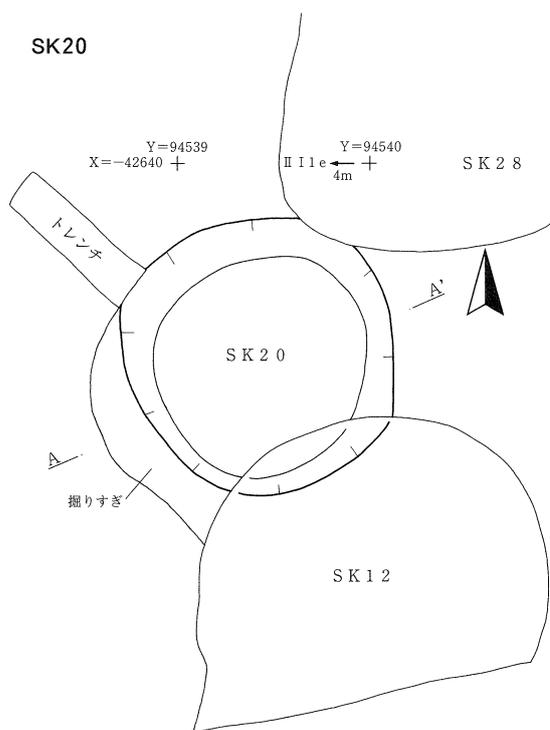
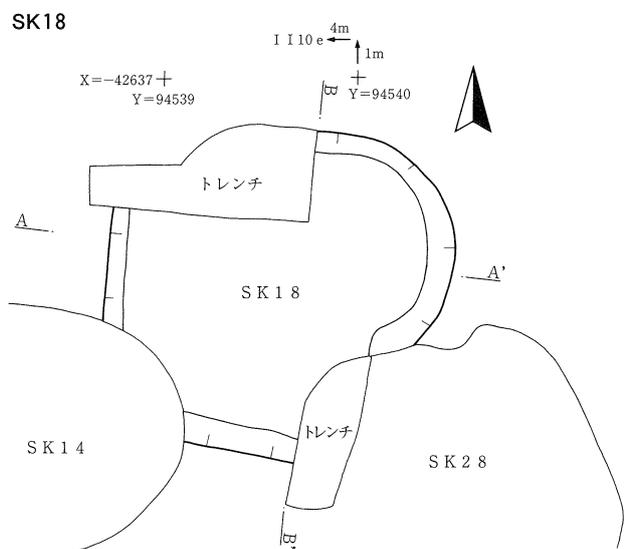
第14図 SK13~15土坑

1 検出遺構



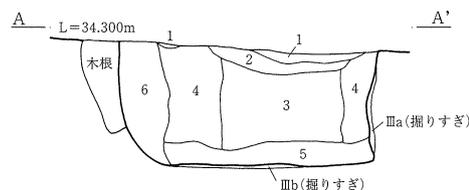
SK17 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒色 シルト 締まりやや密 炭化物3%・焼土粒1%含。
- 2 10YR2/3 暗褐色 粘土質シルト 締まり密 黒褐色土10%・炭化物3%含。
- 3 5YR3/6 暗赤褐色 焼土 締まりやや密。
- 4 10YR3/1 黒褐色 シルト 締まり密 炭化物20%含。



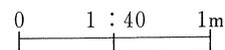
SK18 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/1 黒色 シルト 締まり密 植根入る。
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり密 炭化物1%含。
- 3 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まりやや密。



SK20 A-A'

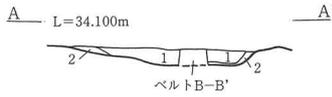
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 締まり密。
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中。
- 3 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 炭化物1%含。
- 4 10YR4/6 褐色 シルト 締まり中 黄褐色ブロック1%含。
- 5 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中。
- 6 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり中。



SK21

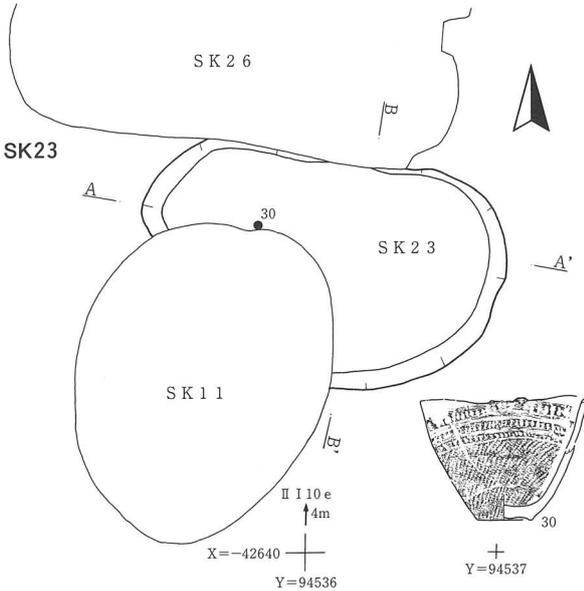
I 110 f 2m
X=-42639
Y=94542

X=-42640



SK21 A-A'・B-B'

- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 縮まり中 植根多量に含。
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 縮まり中。



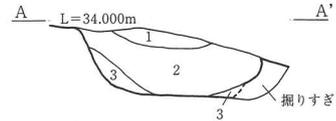
SK23 A-A'・B-B'

- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 縮まり中 炭化物1%含。
- 2 10YR5/6 黄褐色 粘土質シルト 縮まり中 10YR4/4褐色土30%・炭化物1%含。
- 3 10YR5/8 黄褐色 粘土 縮まり密。

SK22

I 19 c 2m
X=-42635
Y=94539

X=-42636



SK22 A-A'

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 縮まり密。
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 縮まり中 炭化物1%含・植根含。
- 3 10YR3/3 暗褐色 粘土 縮まりやや疎。

SK24

I 19 g 3m
Y=94547



X=-42635
Y=94549

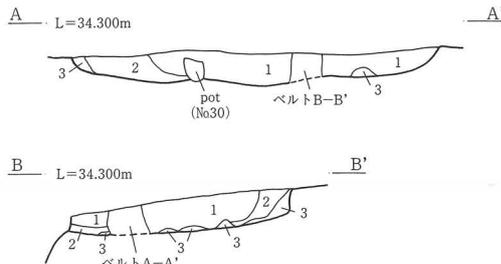


SK24 A-A'

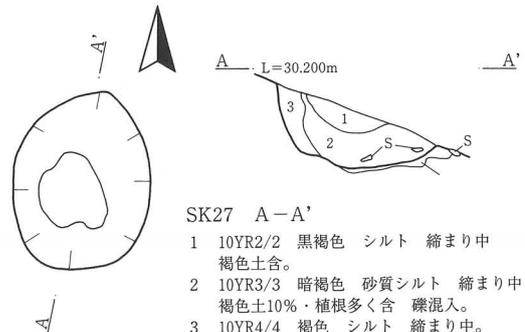
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 縮まり密 炭化物(径3cm、長さ5cm)5%含。
- 2 10YR3/3 暗褐色 シルト 縮まり密 炭化物1%・黄褐色土10%含。
- 3 10YR3/4 暗褐色 シルト 縮まり密。
- 4 10YR4/6 褐色 粘土 縮まり密 炭化物1%含。
- 5 10YR5/6 黄褐色 粘土 縮まり密。

SK27

Y=94543
X=-42617

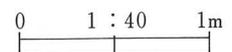


I 15 f 3m
X=-42618



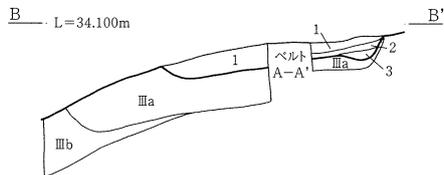
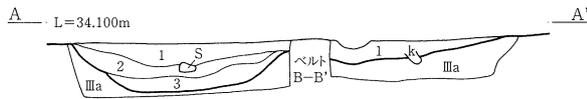
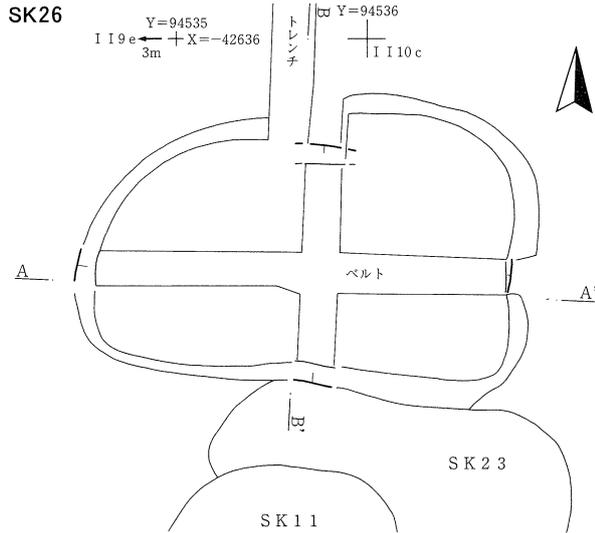
SK27 A-A'

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 縮まり中 褐色土含。
- 2 10YR3/3 暗褐色 砂質シルト 縮まり中 褐色土10%・植根多く含 礫混入。
- 3 10YR4/4 褐色 シルト 縮まり中。



第16図 SK21~24・27土坑

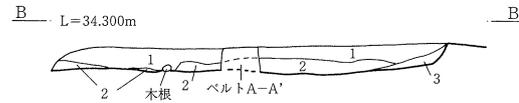
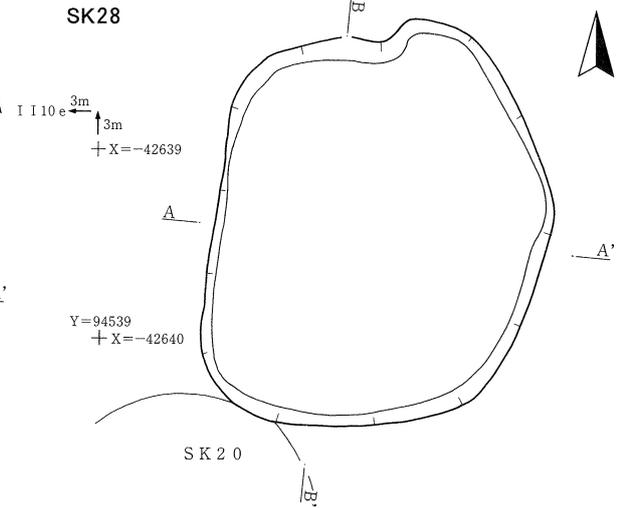
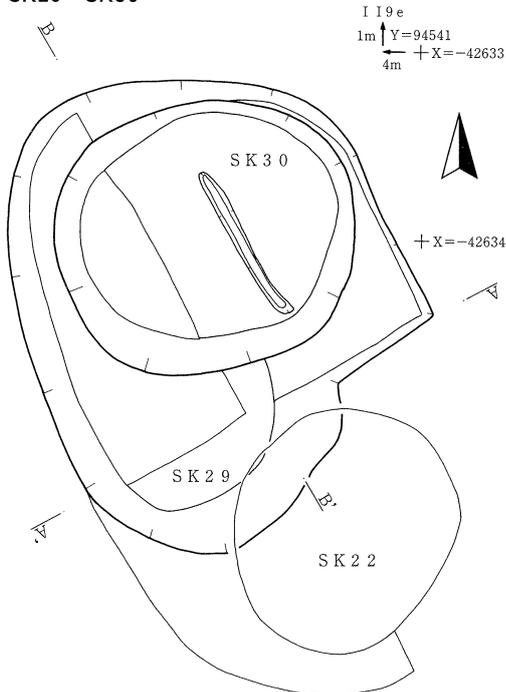
1 検出遺構



SK26 A-A'・B-B'

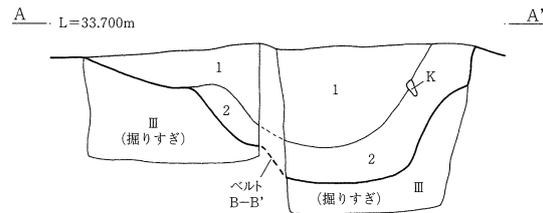
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締めりやや密 炭化物1%・木根含。
- 2 10YR2/1 黒色 シルト 締めり中 黄色土5%層の上層に礫含。
- 3 10YR4/6 褐色 粘土 締めり中 黒褐色土10%含。

SK29・SK30



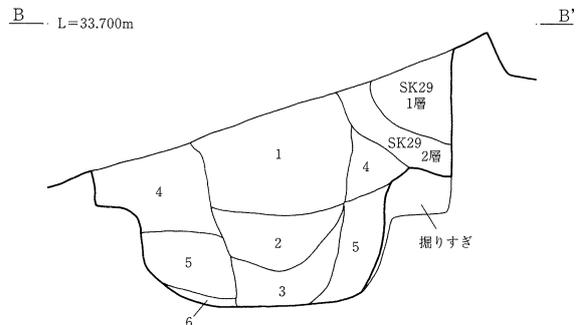
SK28 A-A'・B-B'

- 1 10YR3/2 黒褐色 シルト 締めり中 黄色土粒1%含 中心部に攪乱が入る。トレンチ跡?
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土 締めり密 黄褐色土ブロック3%含。
- 3 10YR4/4 褐色 粘土 締めり密。



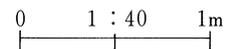
SK29 A-A'

- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締めりやや密 褐色土ブロック10%・炭化物1%含。
- 2 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 締めり中。



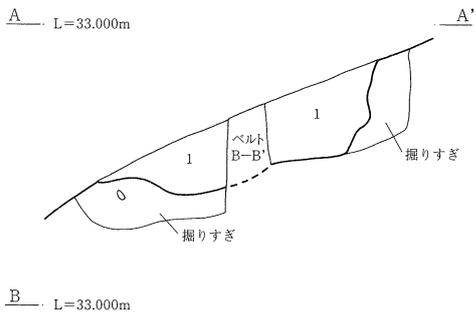
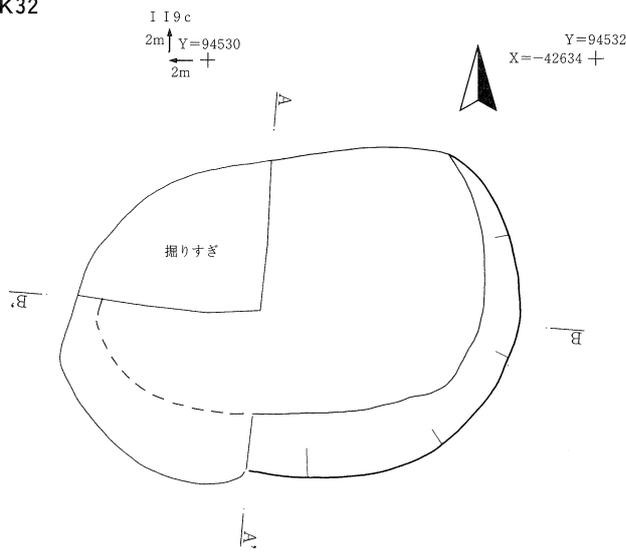
SK30 B-B'

- 1 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 締めり中 炭化物1%・黄色土ブロック含 黒色土3%含(層の上位に)。
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土 締めり中 炭化物1%含。
- 3 10YR4/4 褐色 粘土 締めり中。
- 4 10YR4/6 褐色 粘土 締めり中 黄色土ブロック5%含。
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 締めり中。
- 6 10YR5/6 黄褐色 粘土 締めり中。



第17図 SK26・28~30土坑

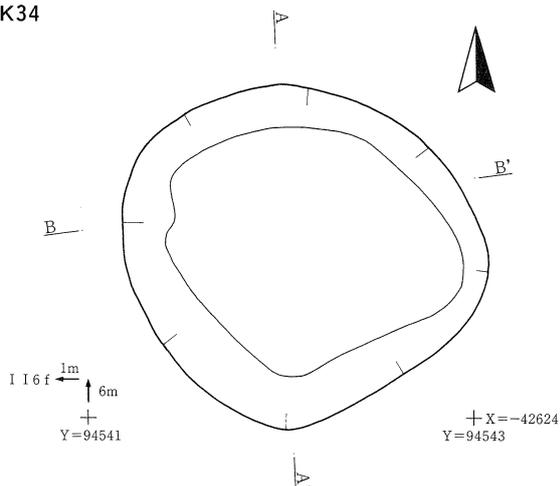
SK32



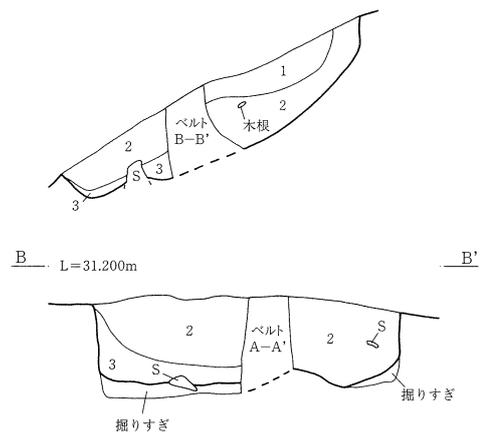
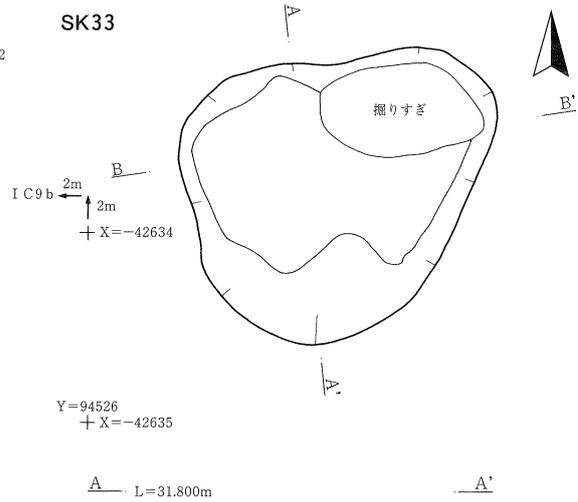
SK32 A-A'・B-B'

- 1 10YR4/4 褐色 粘土質シルト 締まり中 黒褐色土3%含。
- 2 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり密 花崗岩粒含。

SK34

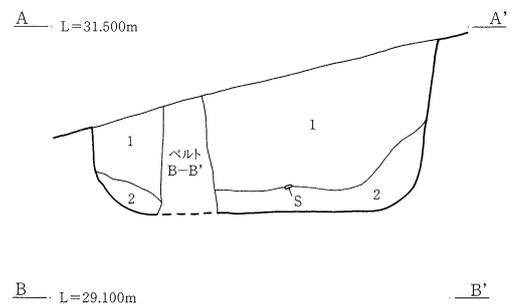


SK33



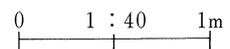
SK33 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 暗褐色土10%含。
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 締まり中 植根・礫含。
- 3 10YR5/4 におい黄褐色 砂質粘土 締まり密。



SK34 A-A'・B-B'

- 1 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密 炭化物1%・10YR4/4褐色土10%含。
- 2 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり密。

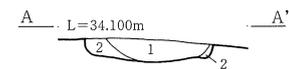
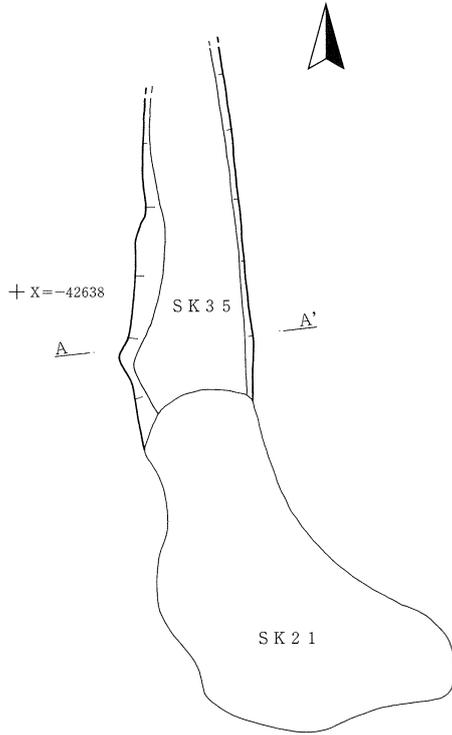


第18図 SK32~34土坑

1 検出遺構

SK35

I I 10 f ← + X = -42636
Y = 94542

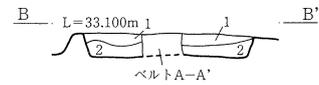
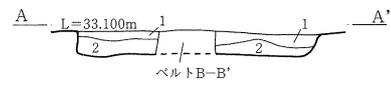
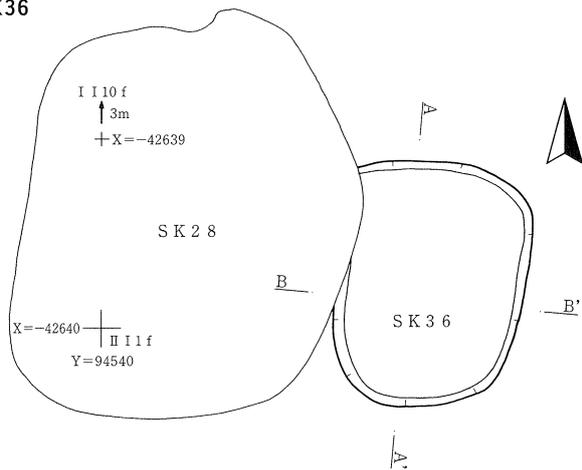


SK35 A-A'

- 1 10YR 2/3 黒褐色 シルト 締まり中 暗褐色土10%含。
- 2 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 褐色土10%含。

SK36

I I 10 f
↑ 3m
+ X = -42639

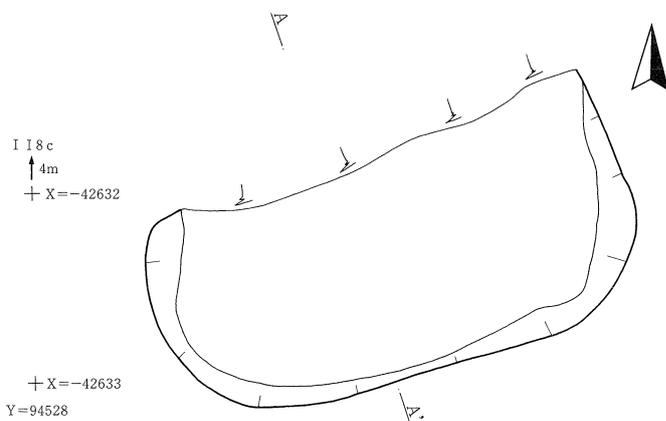


SK36 A-A' · B-B'

- 1 10YR 3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 褐色土ブロック10%含 植根含。
- 2 10YR 4/6 褐色 粘土 締まり中。

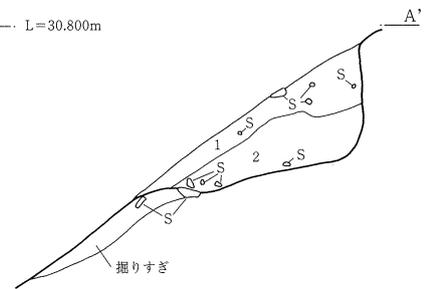
SK37

I I 8 c
↑ 4m
+ X = -42632



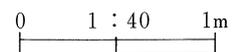
+ X = -42633
Y = 94528

A A' L = 30.800m



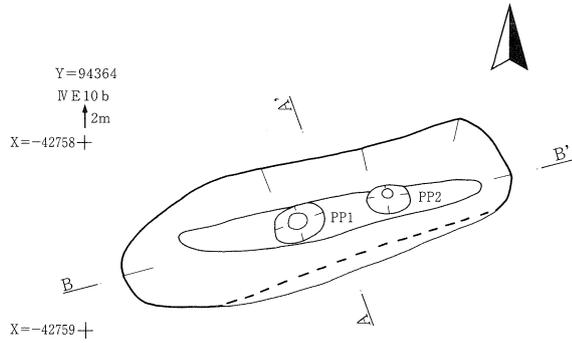
SK37 A-A'

- 1 10YR 4/6 褐色 粘土 締まり密 径10cm大の礫含。
- 2 10YR 5/6 黄褐色 粘土 締まり密。



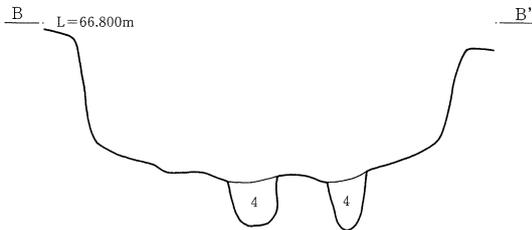
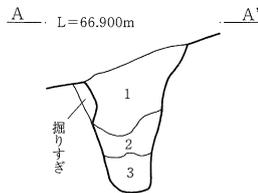
第19図 SK35~37土坑

SK01



SK01 副穴観察表 (数値): 残存値

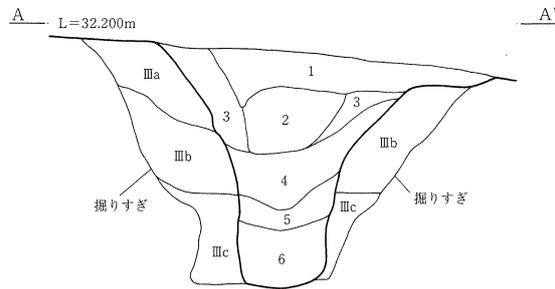
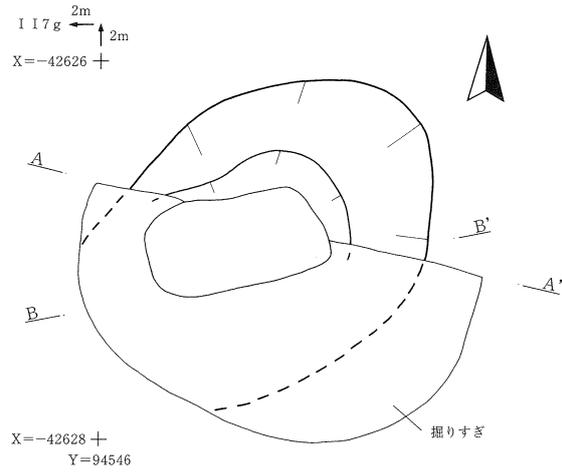
No	遺構名	規模 (cm)		底面レベル (m)	備考
		開口部径	深さ		
1	SK01-PP1	37×18	26.0	65.705	
2	SK01-PP2	23×15	32.0	65.701	



SK01 A-A'・B-B'

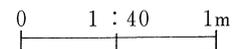
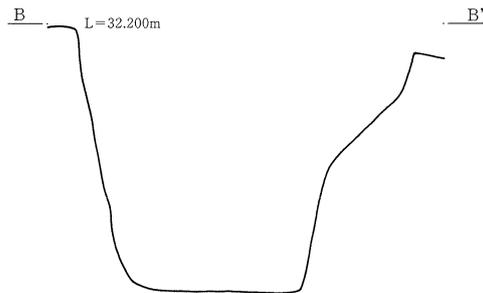
- 1 10YR6/6 明黄褐色 粘土 締まりやや疎 マサ土ブロック(径2cm)3%含。
- 2 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密 炭化物粒(径5~7mm)1%含。
- 3 10YR5/6 黄褐色 砂 締まり中 マサ土(径2mm)1%含。
- 4 10YR6/6 明黄褐色 粘土 締まり疎 黒褐色土粒1%含。(逆茂木痕)

SK16



SK16 A-A'

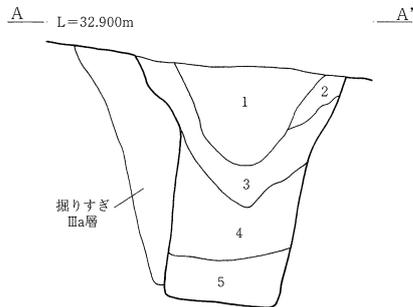
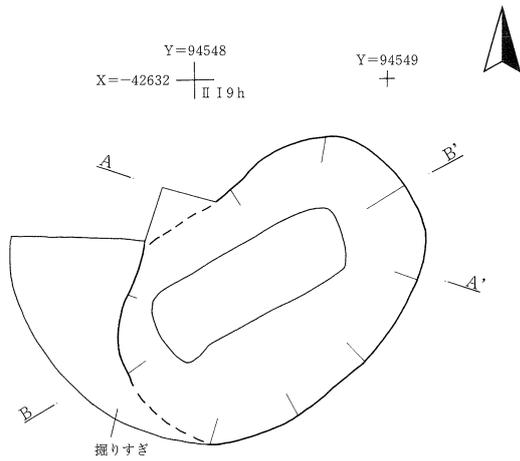
- 1 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 締まりやや疎 ローム粒~ブロック(径2mm~3cm)3%含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 炭化物ブロック(径1cm)1%・ロームブロック(径2cm)1%含。
- 3 10YR4/6 褐色 粘土 締まりやや疎 暗褐色土ブロック(径2cm)7%含。
- 4 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり中 炭化物ブロック(径3cm)1%含。
- 5 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり疎 暗褐色土ブロック(径3cm)含。
- 6 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密 ローム粒(径7mm)1%・炭化物粒(径3mm)1%含。



第20図 SK01・16陥し穴状遺構

1 検出遺構

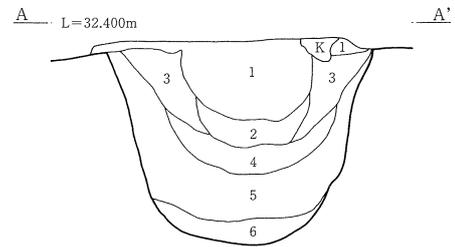
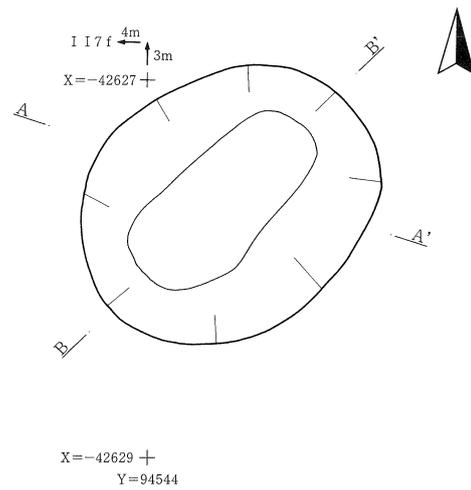
SK25



SK25 A-A'

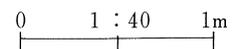
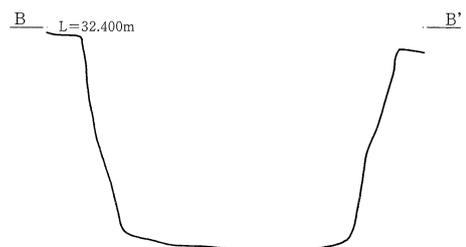
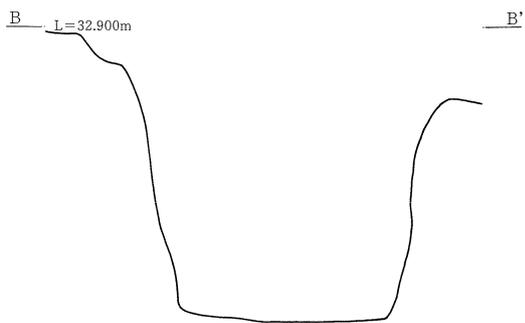
- 1 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり密 炭化物1%・黒褐色土5%含。
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 締まり密 炭化物1%。
- 3 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり密。
- 4 10YR4/4 褐色 粘土 締まり密 炭化物1%含。
- 5 10YR4/6 黄褐色 粘土 締まりやや疎 下半の層が、黒味を帯びている。

SK31



SK31 A-A'

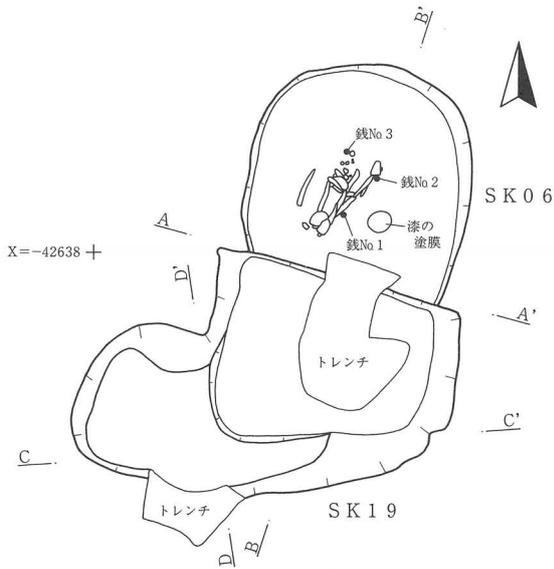
- 1 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり密 褐色土20%・炭化物1%含・植根多く含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 炭化物3%・炭化物(径1cm)含。
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色 粘土 締まり中 暗褐色土30%含。
- 4 10YR4/4 褐色 粘土 締まり密 炭化物1%含。
- 5 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まりやや密。
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色 粘土 締まり疎。化物粒(径3mm)1%含。



第21図 SK25・31陥し穴状遺構

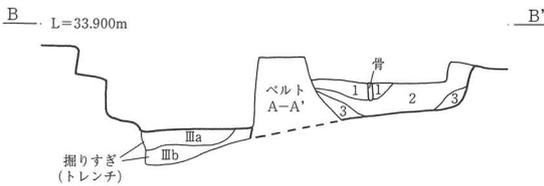
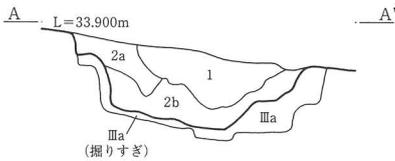
SK06・SK19

X=-42636
I I 10g



X=-42638 +

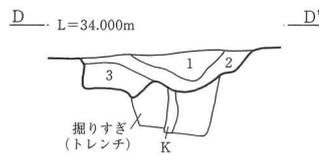
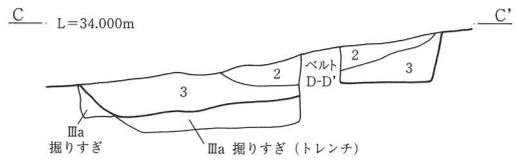
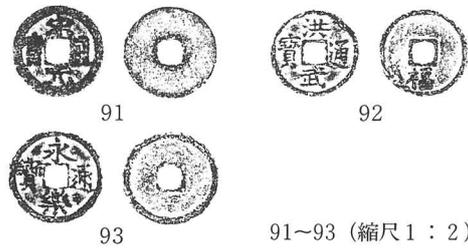
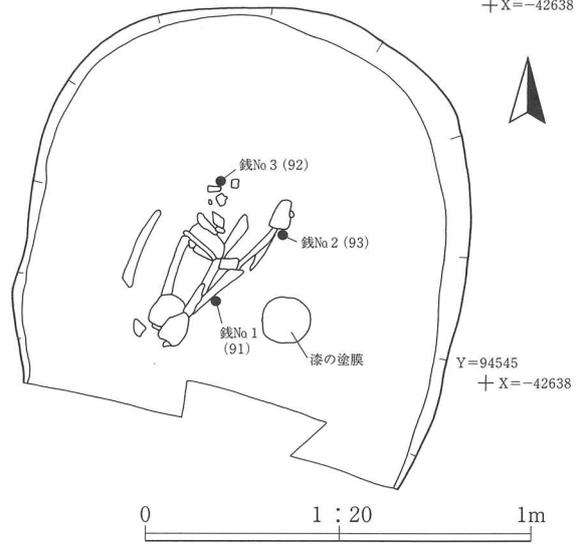
X=-42640
II I 1g
Y=94543



SK06 A-A'・B-B'

- 1 10YR1.7/1 黒色 シルト 締まり疎 10YR3/4暗褐色土3%含。骨が含まれる。
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土 締まり中 褐色土ブロック5%・黒色土ブロック5%含。2a層は黒色土ブロックを含まない。2b層は黒色土ブロックを含む。
- 3 10YR4/6 褐色 粘土 締まりやや密。

+X=-42638



SK19 C-C'・D-D'

- 1 10YR5/8 黄褐色 粘土 締まり密 炭化物1%含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり密。
- 3 10YR5/6 黄褐色 粘土 締まり密 黒褐色土3%含。

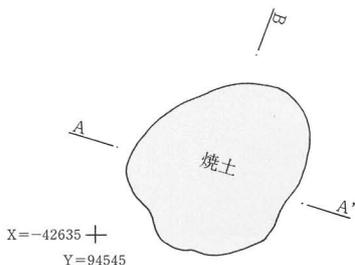
0 1 : 40 1m

第22図 SK06墓墳、SK19土坑

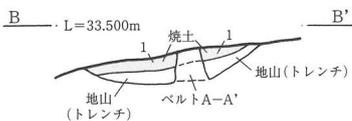
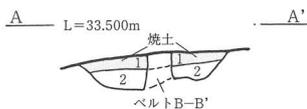
1 検出遺構

SN01

I 19 g
 1m
 2m
 X=-42634



X=-42635
 Y=94545

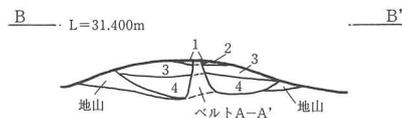
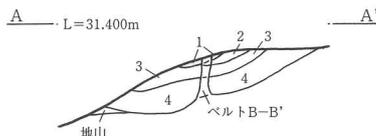
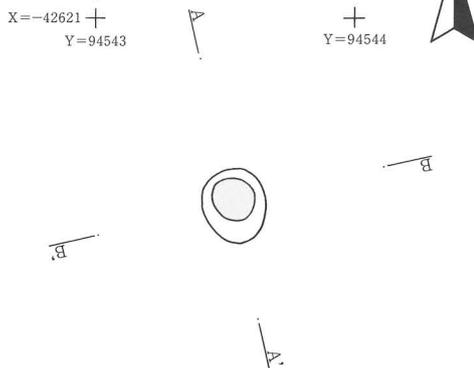


SN01 A-A'・B-B'

- 1 10YR4/4 褐色 粘土 締まり密 炭化物粒(径1~2mm) 3%・焼土粒(径2mm) 5%含。
- 2 10YR4/6 褐色 粘土 締まり密 炭化物粒(径1mm) わずか含。

SN02

I 16 f
 3m
 1m
 X=-42621
 Y=94543

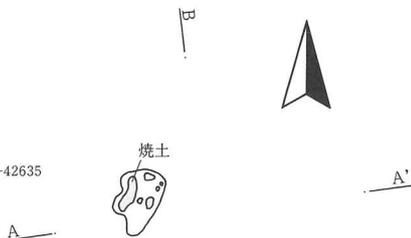


SN02 A-A'・B-B'

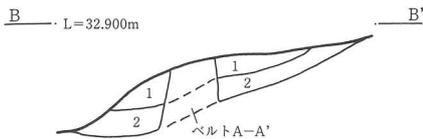
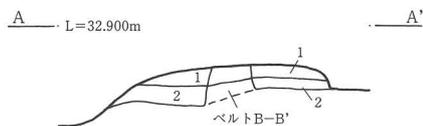
- 1 5YR4/8 赤褐色 焼土 締まり中。
- 2 5YR2/1 黒褐色 シルト 締まり疎 焼土に伴う黒褐色土。
- 3 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中。
- 4 10YR3/3 暗褐色 粘土質シルト 締まり中。

SN03

I 19 c
 2m
 3m
 X=-42635

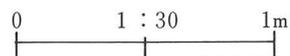


X=-42636
 Y=94529



SN03 A-A'・B-B'

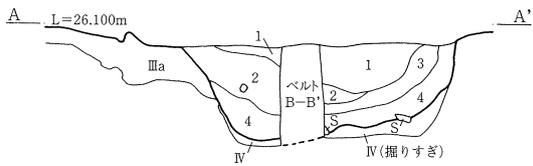
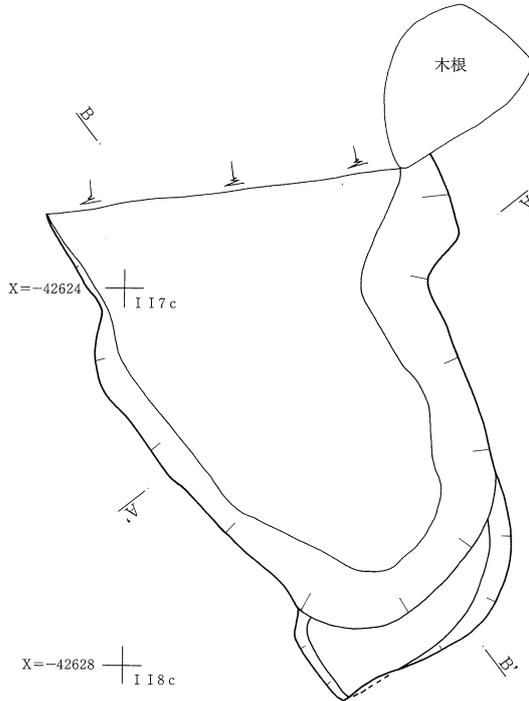
- 1 10YR2/3 黒褐色 シルト 締まり中 炭化物1%含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 粘土質シルト 締まり中 炭化物1%含。



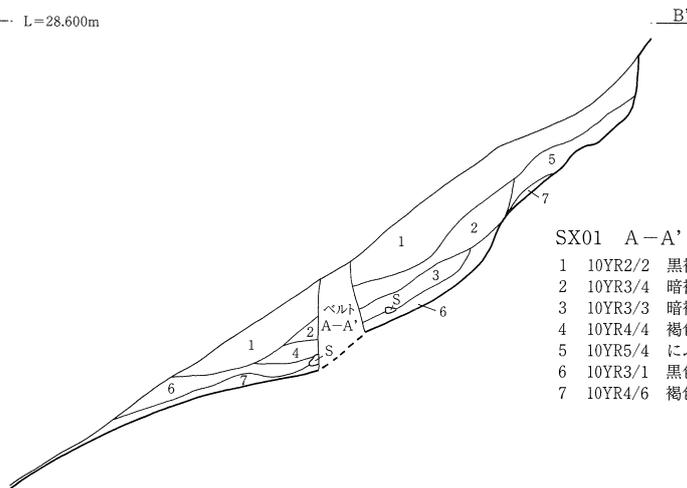
第23図 SN01~03焼土遺構

SX01

Y=94528
X=-42620
I 16c

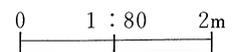


B L=28.600m



SX01 A-A'・B-B'

- 1 10YR2/2 黒褐色 シルト 締まり中 炭化物1%含 植根多く含。
- 2 10YR3/4 暗褐色 シルト 締まり中 植根多く含。
- 3 10YR3/3 暗褐色 シルト 締まり中 植根多く含。
- 4 10YR4/4 褐色 シルト 締まり中 暗褐色土30%・礫(径10~15cm)30%含。
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色 砂 締まり中 マサ土の崩落土。
- 6 10YR3/1 黒色 シルト 締まり中 炭化物1%含。
- 7 10YR4/6 褐色 砂 締まり中。



第24図 SX01落ち込み

2 出土遺物

(1) 出土遺物の概要

今回の調査では、中コンテナ（30×40×30cm）3箱の遺物が出土した。内訳は、縄文土器・土製品・石器・陶磁器・銭貨・鉄滓類・漆塗膜片・植物遺体・人骨などである。以下、遺物ごとに概要を述べる。個々の遺物の計測値や特徴などについては観察表を参照されたい。

(2) 土 器

中コンテナ1箱（総量3432.4g）が出土した。掲載したのは57点である（第25・26図、写真図版19）。破片資料で磨滅しているものが多く、詳細が不明なものがある。出土地点の傾向を見ると、土坑出土（24%）と1区出土（39%）の占める割合が高く、遺構の分布と出土地点の多寡の範囲は一致している。時期的な傾向を見ると、前期・中期と思われる土器片も少量あるが、全体として後・晩期に属する土器片が多いようである。弥生土器の可能性を持つ土器片も含まれている。

竪穴状遺構から出土した土器は32.1g（1%未満）である。掲載したのは2点（1・2）である。1は後期の土器か。沈線により文様が描かれている。

土坑から出土した土器は819.4g（24%）である。掲載したのは30点（3～33）である。SK05・06・10・11・12・13・14・15・18・19・21・22・23・35・36土坑から出土している。SK13・23土坑からの出土量が多い。11は、底面に網代の痕跡を残している。16の土器片には補修孔がある。17・18は間隔の空く撚糸文が施される土器片である。弥生時代の土器片の可能性はある。30の土器は小型の深鉢で、内外面に煤が付着している。土坑内から正位の状態で出土したものである。

焼土遺構から出土した土器は46g（1%）である。掲載したのは3点（34～36）である。晩期の土器片である。

その他の遺構から出土した土器は324.8g（10%）である。掲載したのは5点（37～41）である。40・41は間隔の空く撚糸文が施される土器片である。弥生時代の土器片の可能性はある。

遺構外から出土した土器は2210.1g（65%）である。掲載したのは16点（42～57）である。1区と2区から多く出土しており、Iグリッド・1区からの出土量が多い。1区出土の土器は晩期に属するものが多く、同区の遺構内出土の土器の時期と同じ傾向を示している。

(3) 土 製 品

2点出土した（第26図、写真図版19）。いずれも鞆の羽口で溶着部が残る破損品である。62の推定される内径は4～5cm前後であろうか。いずれも2区の八木沢川の旧河道における砂層からの出土であり、出土した鉄滓類とともに周辺の山間または上流部において製鉄関連の遺構が存在することが推測される。

(4) 石 器

石器は7点（1787.1g）出土した（第27図、写真図版19・20）。剥片石器と礫石器がある。内訳は石匙1点、両極石器1点、RFフレイク2点、擦石1点、台石1点である。71の石匙は縦型である。75の擦石は断面三角形の垂角礫の一側縁を使用しており、一辺が平坦になっている。76の凹石は片面の長軸上に2か所の凹みが形成されている。77は片面に受熱した痕跡が残る。石材は、剥片石器は北上山地産の頁岩、擦石が北上山地産の斑岩、凹石が北上山地産の流紋岩、台石は北上山地産の砂岩を使用

している。

(5) 陶 磁 器

8点出土した(第27図、写真図版20)。すべて破片資料で2区からの出土である。陶器と磁器がある。器種は碗皿類で、産地をみると、肥前産・瀬戸産・相馬産のものがある。調査区内では近世の建物跡など居住域の痕跡を確認できていことから、調査区の周辺部や上流域から流れ込んだものと判断される。

(6) 銭 貨

銭貨3点が出土した(第27図、写真図版20)。SK06墓壙からの出土で副葬品と推測される。内訳は、91は宋通元寶(初鑄年960年)、92は洪武通寶(初鑄年1368年)、93は永樂通寶(初鑄年1408年)である。91は磨滅しており、銭銘がかすんでいる。92は不鮮明ながら裏に「福」の文字が確認できる。巢穴も確認できる。概観の観察から3点とも模鑄銭と判断される。3点について成分分析を行った(134頁)。

(7) 鉄 滓 類

14点(829.5g)出土した。写真のみの掲載である(写真図版20)。出土状況をみると、大半が2区の本木沢川の旧河道域の砂礫層からの出土である。磁着する鉄滓と磁着しない鉄滓がある。概観の様相から鍛冶滓と推測される。2区の周辺部である南西側の山間部や上流域での製鉄関連の遺構の存在が推測される。

(8) 漆 塗 膜

漆の塗膜1点が出土した。写真のみの掲載である(写真図版20)。SK06墓壙からの出土で漆器碗の塗膜と推定される。碗の口縁部から内外両面にかけての漆の塗膜が残っており、内面が赤色を呈する。裏面には碗の木質部と思われる痕跡も残されている。試料を鑑定した結果、漆塗膜であるとの結果を得ている(144頁)。

(9) 植 物 遺 体

種子が1点(0.2g)出土した。写真のみの掲載である(写真図版20)。縦に半分に分かれた状態である。SK32土坑より出土した。分析の結果、コナラ属子葉との鑑定結果を得ている(147頁)。

その他、炭化材(490.5g)が出土している。表のみの掲載である。肉眼鑑定により判定された樹種は、ナラ・アカマツ・クリ・ケヤキ・ホホノキなどがあり、ナラ・クリが多いようである。出土した炭化材のうち、2点について放射性炭素年代測定を実施した(148頁)。

(10) そ の 他

SK06墓壙出土の人骨がある。鑑定の結果、60歳代の老齢の女性であるとの結果を得ている(130頁)。人骨については、鑑定を行い、整理した後に宮古墓苑に納骨している。

参考文献

岩手県立博物館1982『岩手の土器』

3 ま と め

(1) 遺 構

a 遺構の占地

今回の調査区は3か所に分かれる。1区の丘陵地、2区の低地部、3区の尾根部である。1区では、土坑・焼土遺構・陥し穴状遺構などが確認され、小規模ながら晩期の集落の存在が確認された。2区は八木沢川の旧河道域で、砂礫層が厚く堆積しており、遺構は確認できなかった。鉄滓類や韃の羽口などが散在して出土したが、周辺部からの流れ込みと判断される。周辺の山間に製鉄関連の遺構が存在する可能性がある。3区では陥し穴状遺構が確認された。出土遺物が無いため詳細は不明である。

また、1区では中世後期の墓壙が1基確認された。以下、この墓壙を手掛かりとして、当地域の歴史の変遷について若干の考察を行う。

b 中世墓について

墓壙の特徴

墓壙が検出された地点は標高33m台の丘陵上である。丘陵上の最も高い位置よりやや東寄りで見出された。墓壙の規模・形状は別の土坑と重複しているため不明な部分もあるが、長軸1.5m前後の楕円形と推定される。覆土は、褐色土と黒褐色土が混在した埋め戻された土である。墓壙の深さは45cmだが、周辺の状況から、墓壙の上部は削平されたと推測される。墓壙内から人骨と副葬品が確認された。人骨は60歳代の老年の女性と鑑定され、副葬品には銭3枚と漆の塗膜片が確認された。銭3枚は、宋通元寶（初鑄年960年）・洪武通寶（初鑄年1368年）・永樂通寶（初鑄年1408年）である。銭の形状から模鑄銭と判断される。漆膜片は、漆器碗の木地が腐食したものと推測される。赤色部分を上した状態で見つかっており、漆器碗は内面を上にした正立の状態で見出されたと推測される。埋葬方法は不明だが、墓壙内に棺が在った痕跡は確認できなかった。人骨の出土状況は、南向きに膝を折り曲げた状態で、頭部と脊椎が墓壙の北側から確認されている。北側を背にして南側を向いた座位屈葬と推測される。時期は、出土した遺物から中世後期（15・16世紀）の墓壙と推測される。

石碑

現在この丘陵の東側の調査区域外には石碑2基が建っている。巡拝塔（「奉納西国三十三番巡禮（礼）」）と万霊塔（「〇有無縁万霊」）である（第28図、写真図版2）。大きさは、巡拝塔が274×70×24cm、万霊塔が212×65×23cmである（註1）。これらの石碑は東向きに立っている。現在の金浜―八木沢を結ぶ道筋（ラントノ沢踏切より八木沢集落沿いに通る道）が、江戸時代においても金浜地区と八木沢地区を結ぶ旧道で、旧道から仰ぎ見るように丘陵上に建てられた石碑であると推測される。いずれの石碑も八木沢村で建てたものである。年号は記されておらず、詳細な建立年代は不明だが、宮古地区の他の類例から江戸時代（18世紀後半から19世紀前半）の石碑と推測される（註2）。また、万霊塔は、墓所に立てられることがある石塔であるといわれている（註3）。

地名

調査地の字名は「ラントノ沢」である。「ラントノ」の意味は不明だが、もとは「ラントウ」であったとする伝承がある。「ラントウ」には、いくつかの意味があるが、そのひとつである「卵塔」は、石塔の造塔形式のひとつで、起源は中国にあり、禅宗とともに日本に伝えられたとされている。後に転じて広く墓石や墓地を示す呼称としても用いられたという（註4）。

地籍図

作成年月日不詳の地籍図「巖手縣陸中國東閉伊郡八木澤村第八地割字駒込繪圖」がある（第29図）。「東

閉伊郡八木澤村」とあることから、1886～1888年のおよそ19世紀末頃の地籍図と推測される（註5）。19世紀末頃の当該個所の地割は現在と大きく変わっていない。また、当該個所が墓地として利用された形跡はない。およそ19世紀後半には、現在と同じ土地利用状況であったと推察される。

土地利用の変遷

今回の調査地の土地利用の変遷を知る手がかりとして、調査で確認された墓壇、その他に石碑・地名・地籍図がある。これらの資料を時間軸で辿ってみると次のようになる。中世後期に設けられた墓壇（墓所）に起因して、または卵塔が設けられたことに由来して、当地は「ラントウ」と呼ばれるようになった。江戸時代になると、当地の改変などに伴い、または墓所の言い伝えなどに起因して、万霊塔の石碑が建てられた。その後、「ラントウ」の地名は「ラントノ」に転訛した。つまり「らんとうば（墓場）」から「ラントノ」へ転化したという仮説が考えられる。地元では、「ラントノ沢は、昔金浜で飢饉が起きたとき、作物が豊富に獲れた隣の八木沢を集団で襲い、乱闘が起こった場所」とする言い伝えがある。「ラントノ」の地名の由来は、より広い視野で検討していく余地があろう。

宮古地域の中世墓

宮古地域において調査されている中世墓について概観する。これまで宮古地域では、3基の中世墓が確認されている。長根Ⅰ遺跡墓壇、加村遺跡第3号墓壇、山口館跡SK106墓壇などである（第29図）。これらの中世墓の特徴を比較してみる。墓壇はいずれも単独墓の可能性があり、副葬品として銭貨が出土し、交通の要衝（旧道）に位置する丘陵上に立地していることが窺える。これらの特徴は、八木沢駒込Ⅰ遺跡SK06墓壇とも共通するものである。これらの中世墓は時間差も想定されるため、安易な比較は避けなければならないが、このような共通する条件が当地域における中世墓の特徴として抽出できるかどうか、さらなる資料の蓄積と検証が必要である。

（2）遺物

縄文時代・中世・近世の遺物が出土している。縄文時代の遺物の土器・石器は遺構とともに集落の営みを示すものである。中世の遺物は墓壇出土の副葬品である。近世の遺物は陶磁器類で、中世後半以降、人々の生活が継続して営まれてきた可能性を示唆している。

（3）おわりに

今回の調査では、縄文時代晩期の集落や、中世の墓壇について良好な資料を得ることができた。周辺地域での調査資料に留意し、当地域の歴史の変遷について検討していくことが、今後の課題である。

註

- (1) 『宮古市の石碑』P85。この時点（1984年）で、巡拝塔は、現在確認できるように上下二つ折れている。
- (2) 『宮古市史（民俗編）』P655。
- (3) 『日本石仏事典』
- (4) 『日本国語大辞典』「卵塔」「蘭塔」「卵塔場」「蘭塔場」の項参照。
- (5) 『岩手県の地名』「行政区画変遷・石高一覧」参照。

参考文献

- 宮古市教育委員会1984『宮古市の石碑』
 宮古市教育委員会1994『宮古市史（民俗編）』
 庚申懇話会1975『日本石仏事典』雄山閣出版株式会社
 （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2005『山口館跡発掘調査報告書』岩文振第485集
 有限会社 平凡社地図資料センター 『岩手県の地名』日本歴史地名大系第三巻、1990
 （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1990『長根Ⅰ遺跡』岩文振第146集
 宮古市教育委員会1995『笹沢Ⅰ遺跡・加村遺跡・仲組Ⅲ遺跡・堺ノ神遺跡』宮古市埋蔵文化財調査報告書45

第7表 出土地点別土器重量表
竪穴状遺構

No	出土地点	層位	重量(g)
1	SKI01	北西覆土上層	32.1
小計			32.1

土坑

No	出土地点	層位	重量(g)
2	SK05	北半覆土1層	10.5
3	SK05	北半覆土2層	8.8
4	SK05	北半最下層	4.6
小計			23.9
5	SK06	南半覆土	4.4
6	SK06	北半覆土中位	2.8
7	SK06	ベルトA-A'褐色土	4.5
8	SK06	ベルトB-B'1層	4.8
小計			16.5
9	SK10	南半覆土	5.9
小計			5.9
10	SK11	覆土上位	14.5
小計			14.5
11	SK12	南半覆土 黒色土	3.5
小計			3.5
12	SK13	南半覆土	80.0
13	SK13	南半覆土上位	11.1
14	SK13	南半覆土下位	2.3
15	SK13	北半覆土1層	92.3
16	SK13	北半覆土4層	21.2
17	SK13	北半覆土下位	7.6
小計			214.5
18	SK14	南半覆土上位	3.7
19	SK14	北半覆土1層	7.9
小計			11.6
20	SK15	覆土	47.1
21	SK15	2層中	30.7
22	SK15	北半覆土5層	24.4
23	SK15	北半覆土5層	0.7
小計			102.9
24	SK18	北東1/4覆土	4.1
25	SK18	南東1/4覆土	53.7
26	SK18	南東覆土1層	4.7
27	SK18	南東覆土暗褐色土	6.5
28	SK18	南西1/4覆土	2.3
小計			71.3
29	SK19	西半覆土	7.3
30	SK19	北半覆土2層黒褐色土	7.0
小計			14.3
31	SK20	北半覆土中位	5.7
32	SK20	南東1/4覆土	12.3
小計			18.0
33	SK21	北西覆土	5.5
34	SK21	北西覆土下位褐色土層	4.6
35	SK21	北東1/4覆土下位褐色土層	3.7
36	SK21	南西覆土	9.9
37	SK21	ベルトA-A'1層	6.5
小計			30.2
38	SK22	北半覆土	16.7
39	SK22	南半覆土	14.2
40	SK22	ベルト1層	24.7
小計			55.6
41	SK23	ベルトA-A'覆土1層	2.1
42	SK23	覆土1層 Pot.1	199.5
43	SK23	南東覆土1層	10.6
小計			212.2
44	SK26	北西覆土	7.9
小計			7.9
45	SK33	南東覆土下	4.8
小計			4.8
46	SK35	北半覆土下位	4.8
小計			4.8
47	SK36	ベルトA-A'1層	7.0
小計			7.0
合計			819.4

焼土遺構

No	出土地点	層位	重量(g)
48	SN03	焼土上の黒褐色土	29.2
49	SN03	覆土2層	16.8
合計			46.0

その他

No	出土地点	層位	重量(g)
50	SKI03	北東覆土	88.9
51	SKI03	南西覆土	184.5
52	SKI03	南東覆土	4.7
53	SKI03	北西覆土	12.4
54	SKI03	ベルトA-A'2層	11.2
55	SKI03	ベルトB-B'1層	20.0
56	SKI03	ベルトB-B'2層	3.1
合計			324.8

I グリッド

No	出土地点	層位	重量(g)
57	I I 1 p西側	攪乱	2.0
58	I I 5 g	Ⅲa層	3.5
59	I I 9 cSN03の斜面下	Ⅲa層	37.9
60	I I 9 e	I層下検出中	12.1
61	I I 9 e	Ⅲa層	97.8
62	I I 9 f	I層下黒色土層中	81.3
63	I I 9 f	ローム面掘り下げ中	1.3
64	I I 10e	I層下黒色土層中	83.9
65	I I 10e	Ⅱb層	8.3
66	I I 10e旧トレンチ	覆土	2.2
67	I I 10f	表土	20.1
69	I J 10f	Ⅲa層	7.3
合計			357.7

II グリッド

No	出土地点	層位	重量(g)
70	II G 9 j	2回目検出中	9.9
71	II I 1 b	Ⅲa層	30.8
72	II I 1 c	攪乱	5.0
73	II I 1 d	Ⅲa層	15.5
74	II I 1 f	Ⅲa層	13.2
75	II I 3 j	Ⅲa層中の黒褐色土	24.7
76	II I 4 j	Ⅲa層中の黒褐色土	2.1
合計			101.2

III グリッド

No	出土地点	層位	重量(g)
77	III H 2 f	不明	8.7
78	III H 3 d	表土下 検出面	7.9
合計			16.6

第8表 遺構別出土遺物一覧表（掲載No.）

No	遺構名	土器	土製品	石器	陶磁器	銭貨	鉄滓	漆膜	炭化種実	土器(g)
1	SKI01	1・2	—	—	—	—	—	—	—	32.1
2	SKI02	—	—	77	—	—	—	—	—	—
3	SK05	3	—	—	—	—	—	—	—	23.9
4	SK06	4～6	—	—	—	91～93	—	121	—	16.5
5	SK10	7	—	—	—	—	—	—	—	5.9
6	SK11	8	—	—	—	—	—	—	—	14.5
7	SK12	9	—	—	—	—	—	—	—	3.5
8	SK13	10～13	—	—	—	—	—	—	—	214.5
9	SK14	14	—	—	—	—	—	—	—	11.6
10	SK15	15～18	—	—	—	—	—	—	—	102.9
11	SK18	19～21	—	—	—	—	—	—	—	71.3
12	SK19	22・23	—	—	—	—	—	—	—	14.3
13	SK20	—	—	—	—	—	—	—	—	18.0
14	SK21	24～26	—	—	—	—	—	—	—	30.2
15	SK22	27～29	—	—	—	—	—	—	—	55.6
16	SK23	30・31	—	—	—	—	—	—	—	212.2
17	SK26	—	—	—	—	—	—	—	—	7.9
18	SK32	—	—	—	—	—	—	—	131	—
19	SK33	—	—	—	—	—	—	—	—	4.8
20	SK35	32	—	—	—	—	—	—	—	4.8
21	SK36	36	—	—	—	—	—	—	—	7.0
22	SN03	34～36	—	—	—	—	—	—	—	46.0
23	SX01	37～41	—	—	—	—	—	—	—	324.8

1 区

No	出土地点	層位	重量(g)
79	1区	I層	647.5
80	1区 T16	I層	293.4
81	1区 T17	I層	7.1
82	1区 頂部	Ⅲa層	45.0
83	1区 頂上	表採	68.7
84	1区 旧トレンチ	覆土	6.5
85	1区 南斜面	表採	12.1
86	1区 西斜面	表採	19.1
87	1区YK-1 杭北側	Ⅲa層	199.2
88	1区YK-1 西側斜面	I層	20.2
合計			1318.8

2 区

No	出土地点	層位	重量(g)
89	2区	遺物No6	43.0
90	2区	遺物No7	33.0
91	2区	遺物No9	5.8
92	2区	遺物No10	4.9
93	2区	遺物No11	11.6
94	2区	遺物No13	11.7
95	2区	遺物No14	13.6
96	2区	遺物No24	8.6
98	2区	表土下検出中	14.6
99	2区T11	I層下黒色砂層中	1.3
100	2区T21	I層	31.5
101	2区T21	砂層	15.6
102	2区	排土	18.9
合計			214.1

不明

No	出土地点	層位	重量(g)
103	不明	排土	201.7
合計			201.7

出土地点別重量表

No	出土地点	重量(g)	比率(%)
1	竪穴状遺構	32.1	1.0未満
2	土坑	819.4	24.0
3	焼土遺構	46.0	1.0
4	その他	324.8	9.0
5	I	357.7	10.0
6	II	101.2	3.0
7	III	16.6	1.0
8	1区	1318.8	39.0
9	2区	214.1	6.0
10	不明	201.7	6.0
合計		3432.4	100.0

第9表 土器観察表

(数値)：残存値

図版 No	写図 No	掲載 No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm)			文様(原体)の特徴	煤の付着	内面調整	胎土	時期
						器高	口径	底径					
25	19	1	SKI01	北西覆土上層	深鉢?	-	-	-	胴：沈線、RL横縦	×	N	2	後期・晩期?
25	19	2	SKI01	北西覆土上層	深鉢	-	-	-	胴：LR横、織維	×	N	2	前期
25	19	3	SK05	北半覆土1層	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	2	不明
25	19	4	SK06	南半覆土	深鉢	-	-	-	胴：縄文	×	N	1	晩期?
25	19	5	SK06	覆土中位	深鉢	-	-	-	胴：縄文? 4と同一個体	×	N	1	晩期?
25	19	6	SK06	ベルトB-B' 1層	深鉢	-	-	-	胴：RL横	×	M	1	晩期
25	19	7	SK10	南半覆土	深鉢	-	-	-	胴：単軸絡帯1(R)縦	×	N	4	前期
25	19	8	SK11	覆土上位	深鉢	-	-	-	胴：RL縦	×	N	4	中期?
25	19	9	SK12	南半覆土黒褐土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	2	中期?
25	19	10	SK13	北半覆土1層	深鉢	-	-	-	胴：RL縦	○	N	3	中期?
25	19	11	SK13	北半覆土1層	深鉢	(2.8)	-	-	胴：縄文?、底：網代痕(1本潜り・1本越え)	×	N?	3	縄文
25	19	12	SK13	北半覆土4層	深鉢	-	-	-	胴：LR横、織維、2と同一個体	×	N	2	前期
25	19	13	SK13	北半覆土下位	深鉢	-	-	-	胴：RL縦	●	N	2	中期?
25	19	14	SK14	北半覆土1層	深鉢	-	-	-	口～：LR縦、原側圧(LR)横位	×	N	2	不明
25	19	15	SK15	覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR横	×	N	4	中期
25	19	16	SK15	北半覆土2層中、5層	深鉢	-	-	-	口～：刺突、沈線、剥落、補直孔、織維	×	N	4	前期
25	19	17	SK15	北半覆土5層	深鉢	-	-	-	口～：RL横斜	×	N	2	弥生?
25	19	18	SK15	2層中	深鉢	-	-	-	口～：RL横斜	●	N	2	弥生?
25	19	19	SK18	南東1/4覆土	深鉢	-	-	-	胴：LL縦	●	N	3	中期?
25	19	20	SK18	南東1/4覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	3	縄文
25	19	21	SK18	南東1/4覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦、原側圧(LR)横位	×	N	3	縄文
25	19	22	SK19	北半覆土2層黒褐土	深鉢	-	-	-	胴：単軸絡1(R)縦	●	N	3	前期
25	19	23	SK19	西半覆土	深鉢	-	-	-	口：単軸絡1(R)縦	×	N	4	前期?
25	19	24	SK21	南西覆土	深鉢?	-	-	-	口～：玉拍三又文	×	M	1	晩期
25	19	25	SK21 SK28を切る	北西覆土攪乱層	深鉢?	-	-	-	胴：沈線、LR?	×	M	1	晩期
25	19	26	SK21 SK28を切る	ベルトA-A' 1層、 攪乱層	深鉢	-	-	-	胴：RL横	×	M	1	晩期
25	19	27	SK22	南半覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	2	不明
25	19	28	SK22	北半覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	4	中期
25	19	29	SK22	ベルト1層	深鉢	-	-	-	胴：縄文?	×	N	4	不明
25	19	30	SK23	覆土1層 Pot 1	深鉢	9.8	(13.2)	4.4	口唇：突起、口：沈線、刻目、胴：LR横	◎	N?	3	晩期
25	19	31	SK23	南東覆土1層	深鉢	-	-	-	胴：、文様不明	×	N	4	不明
25	19	32	SK35	北半覆土下層	深鉢	-	-	-	胴：RL横	×	M	1	晩期
25	19	33	SK36	ベルトA-A' 1層	深鉢	-	-	-	胴：L横?	×	N	4	中期?
25	19	34	SN03	2層	深鉢	-	-	-	胴：文様不明、無文?	×	N	2	不明
25	19	35	SN03	焼土黒褐土	深鉢	-	-	-	胴：沈線	×	N	2	晩期?
25	19	36	SN03	焼土黒褐土	深鉢	-	-	-	胴：文様不明、無文?	○	N	2	不明
26	19	37	SX01	南西覆土	深鉢	(4.7)	-	(8.6)	胴：LR斜、底：網代痕(2本潜り・2本越え、1本送り)	×	N	3	縄文
26	19	38	SX01	南西覆土	深鉢	-	-	-	胴：無文?、LR縦	×	N	3	後期・晩期?
26	19	39	SX01	北西覆土	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	4	前期
26	19	40	SX01	北西覆土	深鉢	-	-	-	口～：RL横斜、18と同一個体?	×	N	2	弥生?
26	19	41	SX01	南西覆土	深鉢	-	-	-	胴：RL横斜	●	N	1	弥生?
26	19	42	I I 9 e	Ⅲa層	深鉢	-	-	-	胴：LR縦、48と同一	×	N	3	中期?
26	19	43	I I 9 f	I層下 黒色土層中	深鉢	-	-	-	口：LR横、胴：LR横	×	N	1	前期
26	19	44	II I 1 e	攪乱	深鉢	-	-	-	胴：沈線	○	M	1	晩期
26	19	45	III H 3 d	表土下 検出面	深鉢	-	-	-	胴：無文?磨減著しい。	×	N	3	不明
26	19	46	YK-1 杭 北側	Ⅲa層	深鉢	-	-	-	口：RL縦、隆帯?	×	N	4	中期?
26	19	47	YK-1 杭 北側	Ⅲa層	深鉢?	-	-	-	胴：RL横、沈線(磨消)	×	M	1	晩期
26	19	48	YK-1 杭 北側	Ⅲa層	深鉢	-	-	-	胴：LR縦	×	N	3	中期?
26	19	49	1区	I層	深鉢	-	-	-	胴：沈線、RL横	×	N	1	晩期
26	19	50	1区	I層	深鉢	-	-	-	口唇：突起、口：RL横+沈線	×	M	1	晩期
26	19	51	1区	I層	深鉢	-	-	-	口～：LR横	×	N	2	前期
26	19	52	1区	I層	深鉢	-	-	-	胴：R縦	×	N	2	不明
26	19	53	1区	I層	深鉢	-	-	-	胴：単軸絡1(R)縦	×	N	3	前期
26	19	54	1区	I層	深鉢	-	-	-	胴：LL縦	○	N	3	前期
26	19	55	2区	遺物No14	深鉢	-	-	-	胴：RL横斜?	×	N	4	不明
26	19	56	2区	遺物No11	深鉢	-	-	-	胴：縄文?磨減著しい。	×	N	4	不明
26	19	57	2区 落ち込み	上位、遺物No 6	深鉢	-	-	-	胴：文様不明	×	N	4	不明

凡例
 部位の名称、口唇：口唇部、口：口縁部、頸：頸部、胴：胴部、底：底部。
 文様、原体側圧：原体側面圧痕、絡糸体圧：絡糸体圧痕、単軸絡：単軸絡糸体、多軸絡：多軸絡糸体、半竹：半竹管、結束1：結束第1種、結束2：結束第2種、結節：結節縄文。
 煤の付着、◎内外面付着、○：内面付着、●：外面付着、-：付着なし。
 内面調整、M：ミガキ、N：ナデ、-：なし。
 胎土、1：緻密である。
 2：細礫を含まず、砂粒を含む。
 3：細礫・砂粒を僅かに含む。
 4：細礫・砂粒を含む。

第10表 土製品観察表

(数値)：残存値

図版 No	写図 No	掲載 No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	胎土	特徴	時期
						長さ	幅	厚さ				
26	19	61	2区 遺物	遺物No22、砂層中	鞆の羽口	(3.0)	(6.6)	(2.9)	(53.7)		溶着部	古代?
26	19	62	2区	遺物No5、砂層中	鞆の羽口	(17.4)	(7.8)	(3.0)	(352.0)		溶着部	古代?

第11表 石器観察表

(数値)：残存値

図版 No	写図 No	掲載 No	出土地点	層位	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	備考	石材	産地等
						長さ	幅	厚さ				
27	19	71	2区 トレンチ12	2層直上	石匙	8.8	2.2	1.2	18.1	縦型：片面加工	A	3
27	19	72	2区	砂層	両極石器?	2.0	3.1	0.6	3.9	2片一対の剥離	A	3
27	19	73	II I 1 h	III a層	RF剥片	2.4	1.7	0.4	1.3	刃部：片面一側縁加工、背面	A	3
27	19	74	III H 3 e	表土下 検出面	RF剥片	3.3	2.5	0.5	4.2	刃部：片面周縁加工、背面	A	3
27	20	75	I I I 0 d	III a層	擦石	(8.4)	7.2	6.8	(689.7)	断面三角形、二側縁擦面	D	2
27	20	76	1区 頂上	表採	凹石	(12.2)	7.1	2.5	(271.7)	片面に凹み、一端を欠損	B	1
27	20	77	SK I 0 2	覆土	台石	(11.4)	(9.5)	6.1	(798.2)	片面に受熱痕	C	3

※石材略号一覧表参照
※産地等略号一覧表参照

第12表 石材略号一覧表

略号	石材
A	頁岩
B	流紋岩
C	砂岩
D	斑岩

第13表 産地等略号一覧表

略号	産地等
1	北上山地 新生代古第三紀
2	北上山地 中生代白亜紀
3	北上山地 三畳～ジュラ紀

第14表 陶磁器観察表

(数値)：残存値

図版 No	写図 No	掲載 No	出土地点	層位	種別	器種	計測値 (cm)			重量 (g)	釉薬	産地	時期	備考
							器高	口径	底径					
27	20	81	2区	遺物No18	陶器	碗	(2.1)	—	—	(3.3)	鉄釉	瀬戸	近世	遺物No18
27	20	82	2区	遺物No20	陶器	碗	(1.4)	—	—	(3.6)	灰釉	相馬	18c	遺物No20
27	20	83	2区	遺物No23	陶器	皿?	(1.8)	—	—	(7.8)	灰釉	不明	19c以降	遺物No23
27	20	84	2区	砂層	磁器	皿	(1.9)	—	—	(10.6)	染付	肥前	18c	
27	20	85	2区	排土	陶器	碗	(2.8)	—	—	(3.1)	灰釉	瀬戸	18c	
27	20	86	2区	トレンチ13 I層	磁器	皿	(1.6)	—	—	(3.1)	灰釉	不明	19c以降	
27	20	87	2区	トレンチ14 I層	磁器	碗	—	—	—	(4.5)	染付	肥前	18c後半	
27	20	88	2区	トレンチ14 I層	陶器	碗	(1.0)	—	—	(8.8)	灰釉	不明	近世?	

第15表 銭貨観察表

(数値)：残存値

図版 No	写図 No	掲載 No	出土地点	層位	計測値 (cm)			重量 (g)	材質	銭銘	初鑄年	表		裏		備考
					直径	穿径	厚さ					内	外	内	外	
27	20	91	SK06	覆土下位No1	2.45×2.45	0.60×0.60	0.1	2.50	銅銭	宋通元寶	960	○	○	×	×	磨滅しているか、銭銘不鮮明、かすむ 分析試料601
27	20	92	SK06	覆土下位No3	2.36×2.32	0.55×0.58	0.1	2.10	銅銭	洪武通寶	1368	○	○	○	○	裏福、外縁の中が狭くなっている、福 の字不鮮明、菓穴あり 分析試料603
27	20	93	SK06	覆土下位No2	2.46×2.47	0.60×0.60	0.1	2.40	銅銭	永樂通寶	1408	○	○	△	△	分析試料602

郭の様子

- 郭が明瞭
- △ 郭がやや不明瞭
- × 郭が不明瞭

第16表 鉄滓類観察表

写図 No	掲載 No	出土地点	層位	重量(g)	備考	磁着	MC反応		
							小	中	大
20	101	II G 9 j 2区 2回目検出中	2回目検出	2.5		無	—	—	—
20	102	1区西(斜面下)	表採	93.9		有	—	93.9	—
20	103	2区	砂層	84.8	遺物No1 (Fe)	無	—	—	—
20	104	2区	砂層	82.2	遺物No2 (Fe)	有無	12.2	—	—
20	105	2区	砂層	99.1	遺物No4 (Fe)	無	—	—	—
20	106	2区 落ち込み(周辺)	覆土上位	26.2	遺物No6	無	—	—	—
20	107	2区	砂層	44.4	遺物No12	無	—	—	—
20	108	2区	砂層	50.2	遺物No16 (Fe)	無	—	—	—
20	109	2区	砂層	21.8	遺物No17 (Fe)	無	—	—	—
20	110	2区	砂層	30.1	遺物No19	無	—	—	—
20	111	2区	砂層	125.2	遺物No25	有	125.2	—	—
20	112	2区	砂層	88.5		無	—	—	—
20	113	トレンチ21	粗砂の上	37.5		有	37.5	—	—
20	114	2区 トレンチ21東側の平坦面	砂層	43.1		無	—	—	—
合計				829.5					

第17表 漆塗膜観察表

(数値): 残存値

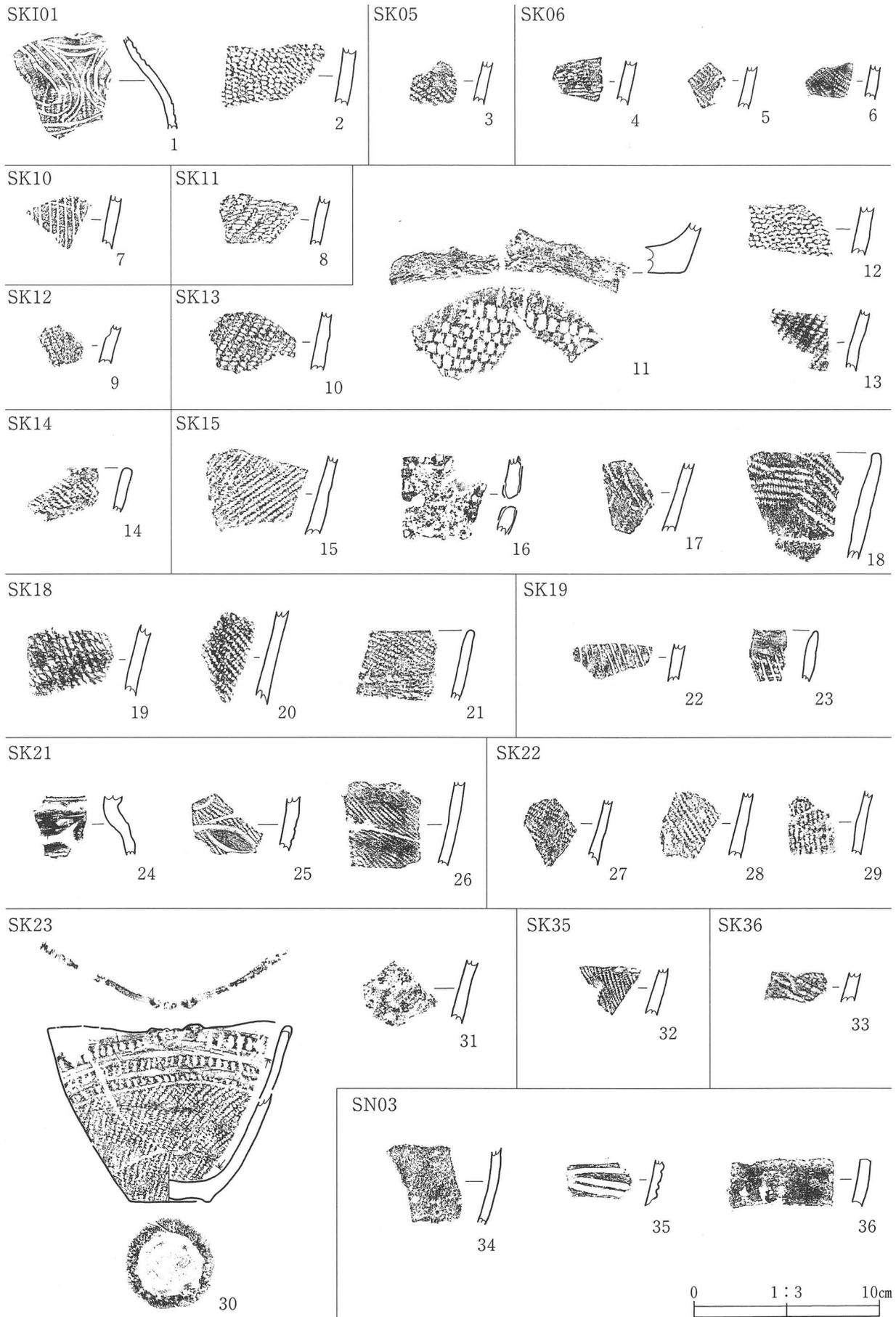
写図 No	掲載 No	出土地点	層位	種別	計測値 (cm)			重量(g)	特徴
					長さ	幅	厚さ		
20	121	SK06	覆土下位	漆皮膜	—	—	0.01	0.3	内朱色、外裏木質部の跡が残る、口唇部の返しの部分が残る

第18表 植物遺体観察表

写図 No	掲載 No	出土地点	層位	種別	重量(g)	大きさ	特徴・備考
20	131	SK32	東ベルト 北西覆土下位	コナラ属子葉	0.2	1.6×0.8×0.5	縦に半割、分析試料843

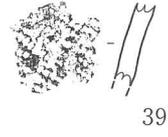
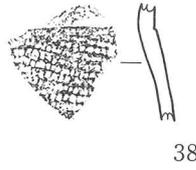
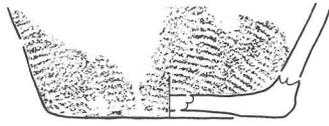
第19表 炭化材観察表

No	整理 No	出土地点	層位	樹種名	重量(g)	備考	No	整理 No	出土地点	層位	樹種名	重量(g)	備考
1	801	SK01	炭No2	ナラ	3.0		27	827	SK24	北半覆土1層	ナラ	42.4	
2	802	SK01	ベルト2層 炭化物サンプル	ナラ	0.2	C14分析試料	28	828	SK24	北半覆土2層	ナラ	3.8	
3	803	SK01	西半	ナラ	19.8		29	829	SK24	北半覆土3層	ナラ	2.3	
4	804	SK09	1層 炭サンプル	アカマツ	11.4		30	830	SK24	北半覆土3層	クリ	0.8	
5	805	SK13	南半覆土下層	アカマツ	2.2		31	831	SK24	北半覆土5層	ナラ	0.5	
6	806	SK13	北半覆土1層	ナラ	2.0		32	832	SK24	北半覆土5層	ナラ	3.1	
7	807	SK14	北半覆土2層	ナラ	7.3	C14分析試料	33	833	SK24	南半覆土中位	ナラ	189.1	
8	808	SK14	北半覆土3層	アカマツ	4.0		34	834	SK25	覆土上位	クリ	3.3	
9	809	SK15	2層中	アカマツ	0.2		35	835	SK29	右A' 1層	クリ	0.1	
10	810	SK15	北半覆土5層	ヤマブキ クリ	2.4		36	836	SK29	右A' 2層	クリ	0.3	
11	811	SK15	北半覆土5層 焼土サンプル	ナラ	0.1		37	837	SK30	1層	ナラ	0.1	
12	812	SK17	北半覆土	クリ	21.5		38	838	SK30	3層	ナラ	0.1	
13	813	SK17	南西覆土	クリ	8.2		39	839	SK31	北半覆土1層	クリ	0.3	
14	814	SK17	南東覆土	クリ	19.3		40	840	SK31	北半覆土2層	クリ	0.1	
15	815	SK17	ベルトA-A' 1層	ナラ	12.5		41	841	SK31	北半覆土3層	ケヤキ	0.2	
16	816	SK17	ベルトA-A' 2層	クリ	36.3		42	842	SK32	東ベルト	ケヤキ	1.0	
17	817	SK17	ベルトB-B' 1層	クリ	7.4		44	844	SK34	ベルトB-B' 1層	クリ	0.2	
18	818	SK17	ベルトB-B' 2層	クリ	13.6		45	845	SK36	ベルトA-A' 1層	ホホノキ	0.2	
19	819	SK17	ベルトA-A' 3層	クリ	15.0		46	846	SK36	ベルトB-B' 1層	ウルシ アカマツ	1.2	
20	820	SK17	ベルトB-B' 3層	クリ	24.8		47	847	SK103	南東覆土	アカマツ	0.5	
21	821	SK20	南東覆土	クリ	0.8		48	848	SK103	南西覆土	ナラ	4.4	
22	822	SK20	南西覆土	クリ	1.9		49	849	SN03	焼土上の黒褐土	ナラ	8.6	
23	823	SK20	北半覆土上位	クリ	1.2		50	850	T12	表土-100cm	アカマツ	2.9	
24	824	SK20	北半覆土下位	クリ	9.2		51	851	II 9 f	I層下 黒色土層中	ヤマザクラ	0.1	
25	825	SK22	ベルト1層	クリ	0.1		52	852	SK06	覆土下位 漆膜の土の中に入った物	不明	0.1	
26	826	SK23	ベルトB-B' 1層	ケヤキ	0.2		合計 490.5						

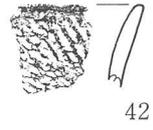


第25図 土器 (1)

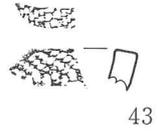
SX01



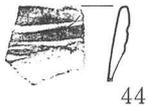
II9e



II9f



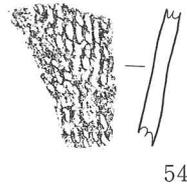
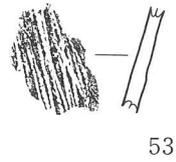
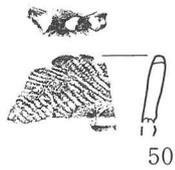
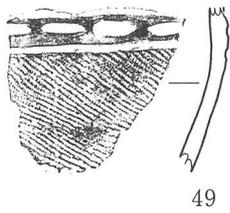
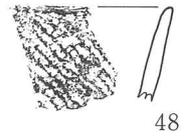
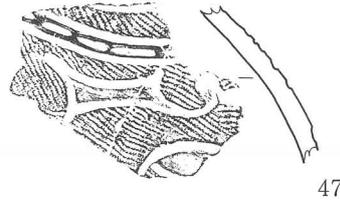
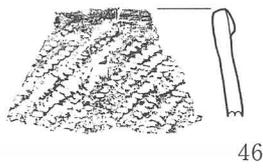
III1e



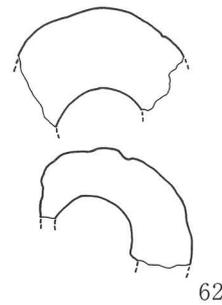
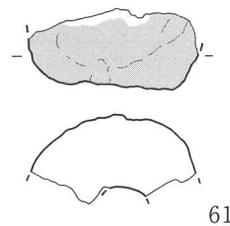
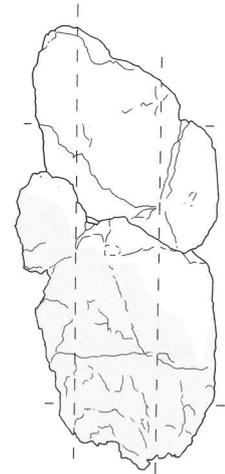
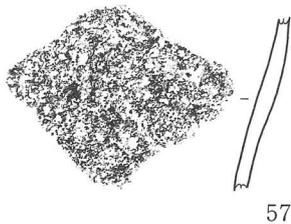
IIIH3d



1区



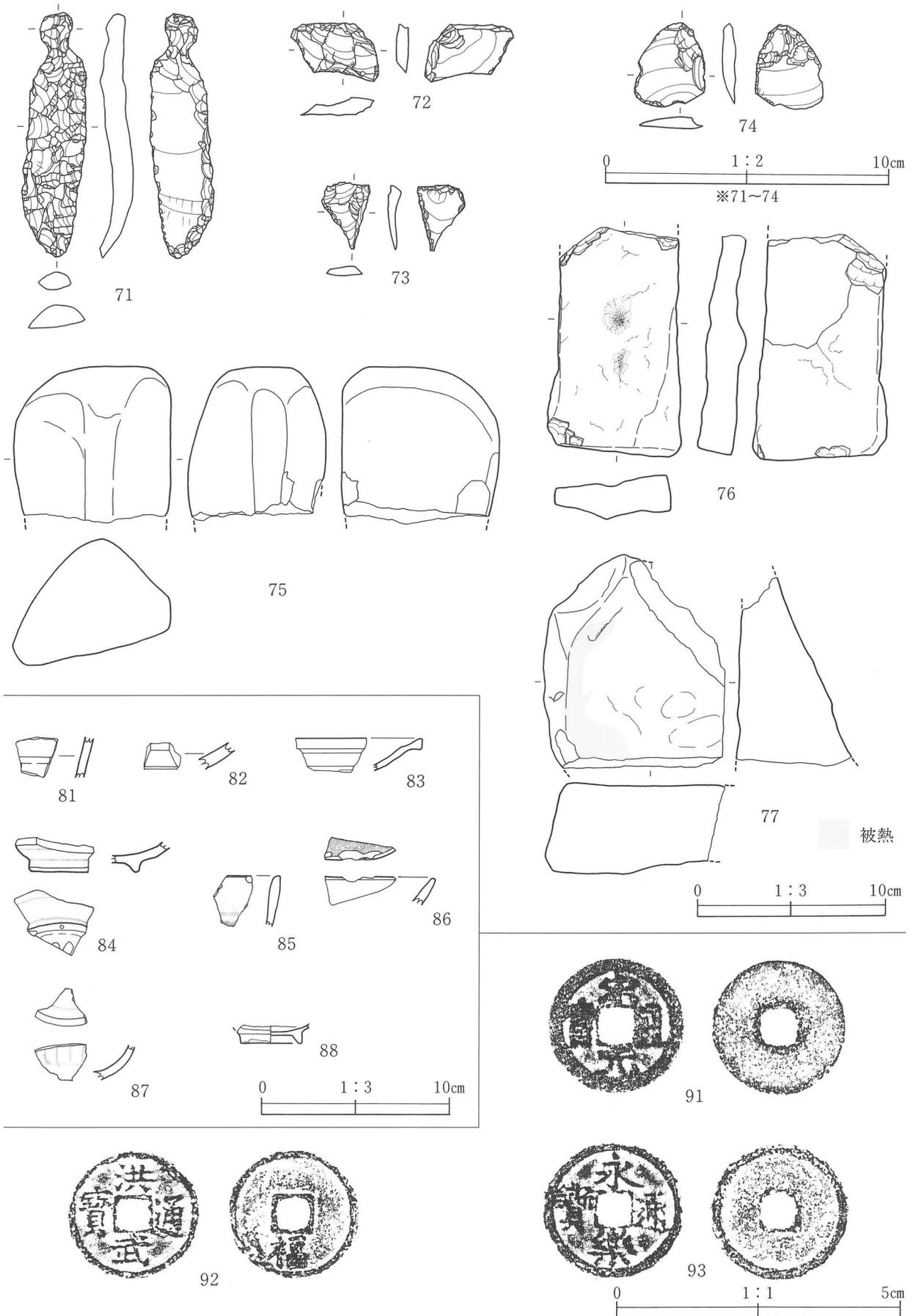
2区



0 1:3 10cm

0 1:3 10cm

第26図 土器(2)、土製品



第27図 石器、陶磁器、銭貨

墓壙と石碑の位置図



石碑拓図

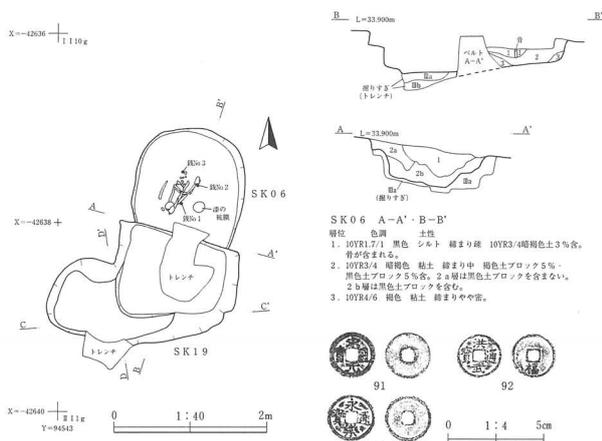


巡拝塔 (縮尺1:12)

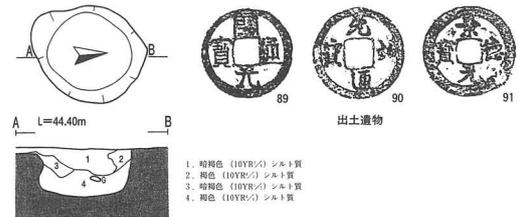
万霊塔 (縮尺1:12)

巡拝塔:「奉納西國三十三番順禮(巡礼) 八木沢村中 供養等(塔)」、274×70×24cm
 万霊塔:「〇有無縁萬霊 八木沢村中供養等(塔)」、212×65×23cm

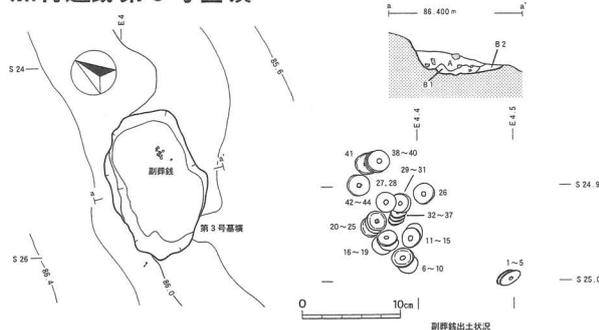
宮古市域の墓壙集成図
 八木沢駒込 I 遺跡・SK06墓壙



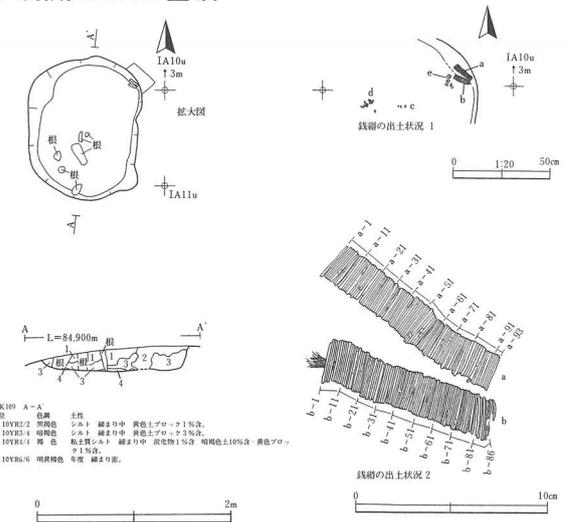
長根 I 遺跡墓壙



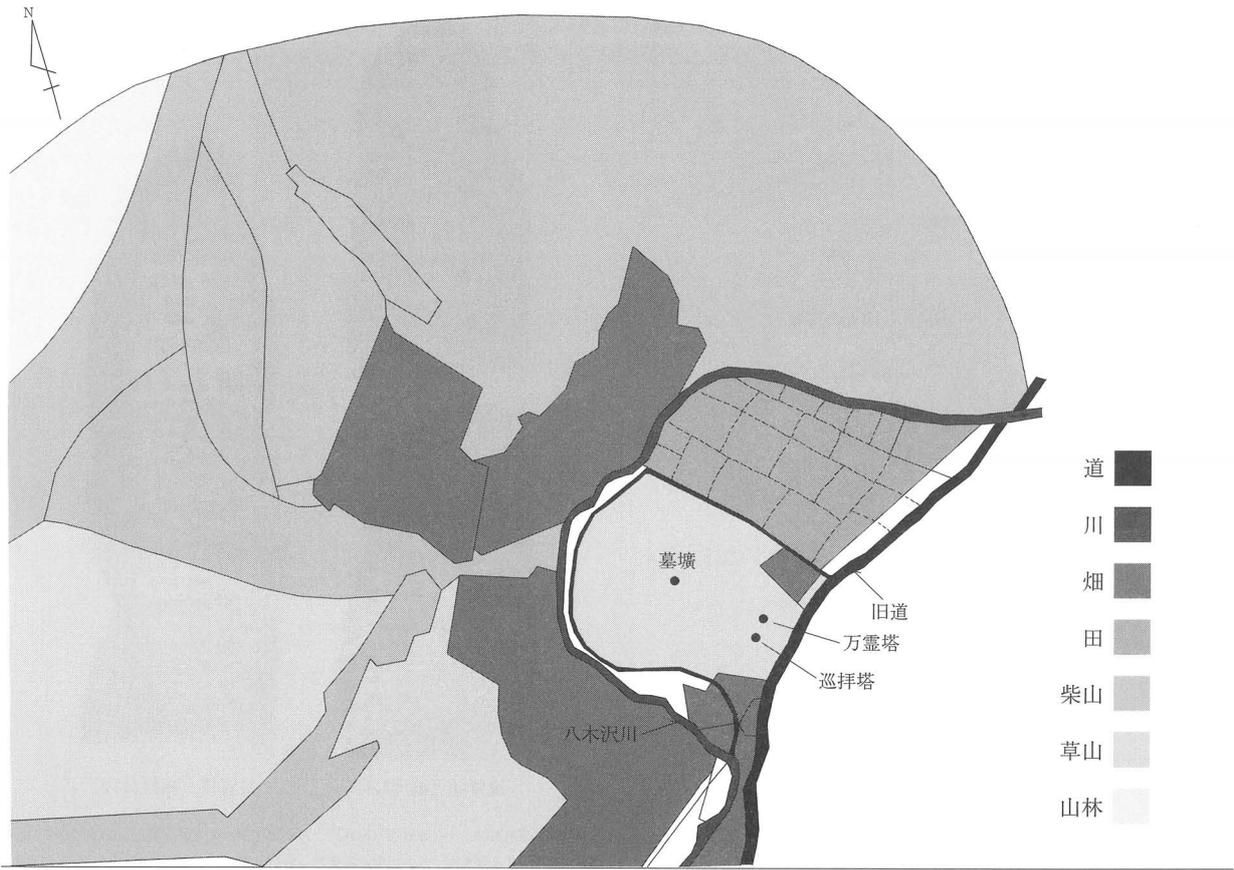
加村遺跡第3号墓壙



山口館跡SK109墓壙



巖手縣陸中國東閉伊郡八木澤村第八地割字駒込繪圖（19c末）



岩手県宮古市地籍図 宮P³ 33・43
1998測図(1:2,000)



第29図 墓塚・石碑の位置と地籍図

V 平成20年度調査の成果

1 概 要

本遺跡はJR山田線磯鷄駅の南西約3.2kmに位置し、閉伊川南岸の小起伏山地に立地する。調査区はこのうち東西方向へ樹枝状に延びる山地の尾根部とその間の谷部にかかる1,600㎡である。標高は27～33mを測る。調査前は山林および畑地である。

今回の調査で検出された遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構1基、近世以降とみられる土坑1基、焼土遺構1基、道路状遺構1条、畑関連遺構3か所（畑跡2・粗起痕1）である。

2 基本層序

層序決定に際しては調査区を東－西、南－北にそれぞれ横断、縦断するようなメインベルトを設定し、その断面により基本層序の確認を行っている。

I a 10YR 2/1 黒色シルト 粘やや弱・しまり中（表土）。

I b 7.5YR 1.7/1 黒色シルト 粘やや弱・しまり中。

I c 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト 粘やや弱・しまり中。

I d 10YR 4/4 褐色シルト 粘やや弱・しまり中。

I e 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘やや弱・しまり中 10YR 4/2 灰黄褐色細砂のレンズ状堆積（畝間堆積土）複数見られる。（複数回の畑耕作土相当）水成堆積の様相。

I f 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘やや弱・しまり中 10YR 4/2 灰黄褐色細砂のレンズ状堆積（畝間堆積土）複数見られる。（複数回の畑耕作土相当）水成堆積の様相。

I g 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂 粘弱・しまりやや弱（畑の畝間堆積土相当）水成堆積の様相。

I h 10YR 2/3 黒褐色シルト 粘やや弱・しまり中 粒度の異なる複数の層からなる（畑耕作土相当）。水成堆積の様相。

I i 10YR 5/3 にぶい黄褐色砂 粘弱・しまりやや弱（畑の畝と畝間を覆う：水成堆積の様相）部分的に4層に類似した黒色粘質シルト大ブロック状に含む。（ ϕ 10～15cm）礫（ ϕ 5～10cm）3%。

II 10YR 3/2 黒褐色シルト 粘中・しまりやや強 10YR 5/4 にぶい黄褐色テフラ（To-Cu）局所的にモヤ～ブロック状に混入（ ϕ 5～10mm）5%。

III 10YR 3/1 黒褐色シルト 粘弱・しまり中 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）10% 風化花崗岩ブロック（ ϕ 5cm）局所的に含む1%。

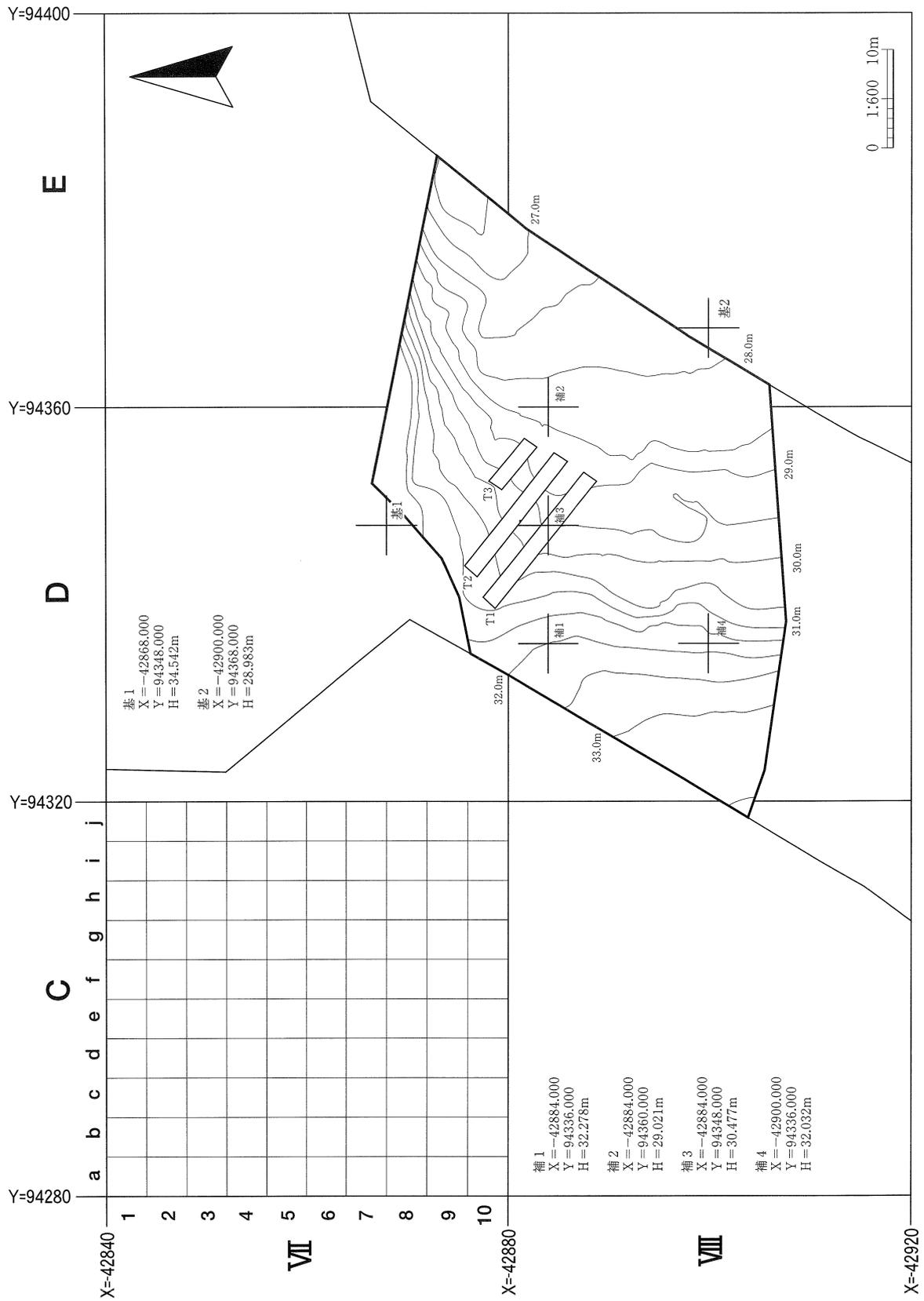
IV 10YR 2/2 黒褐色シルト 粘弱・しまりやや強 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）10% 風化花崗岩ブロック（ ϕ 5～20cm）20%。

V 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘弱・しまりやや強 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）10% 風化花崗岩ブロック（ ϕ 5～15cm）1%。

VI a 7.5YR 2/1 黒色シルト 粘弱・しまりやや強 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）10%。

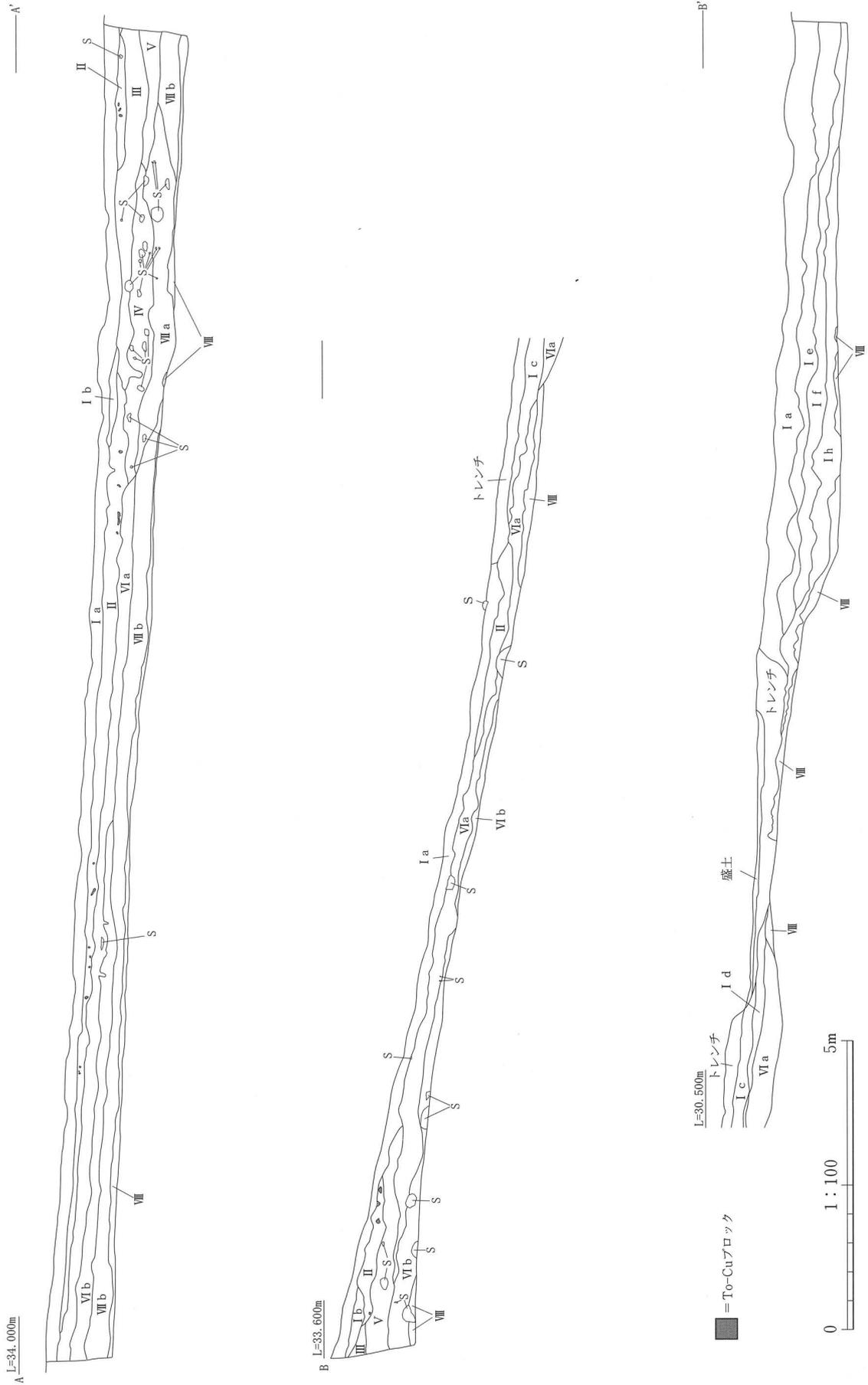
VI b 7.5YR 3/2 黒褐色シルト 粘弱・しまりやや強 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）5%。

VII a 7.5YR 3/3 暗褐色シルト 粘弱・しまり強 マサ土粒（ ϕ 2～5mm）10% 風化花崗岩ブロック（ ϕ 10～20cm）。局所的に含む15%。



第30図 グリット・基準点・トレンチ配置図

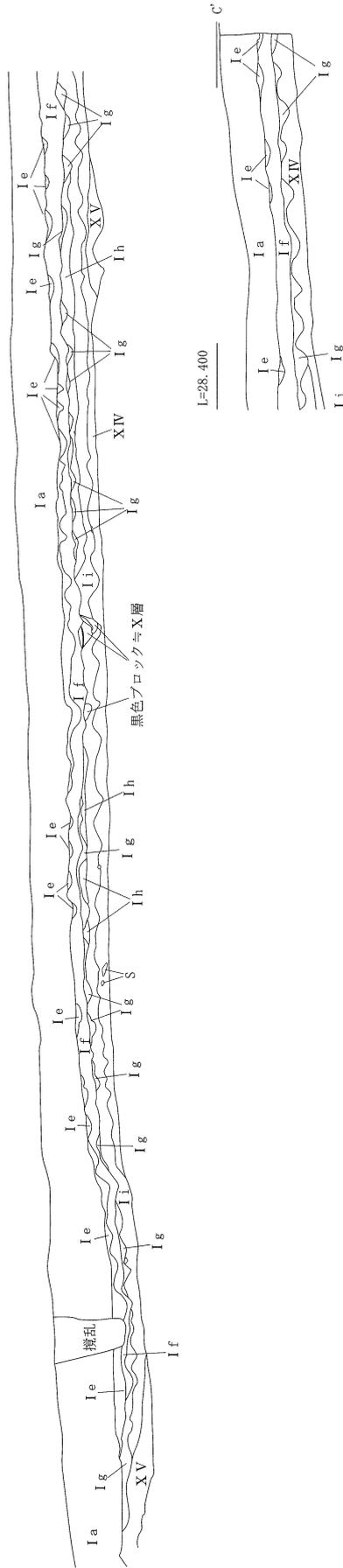
メインベルトセクション (基本層序)



第31図 メインベルトセクション (1) (基本層序)

メインベルトセクション (基本層序・1・2号畑跡、1号粗起痕注記含)

C L=28,400

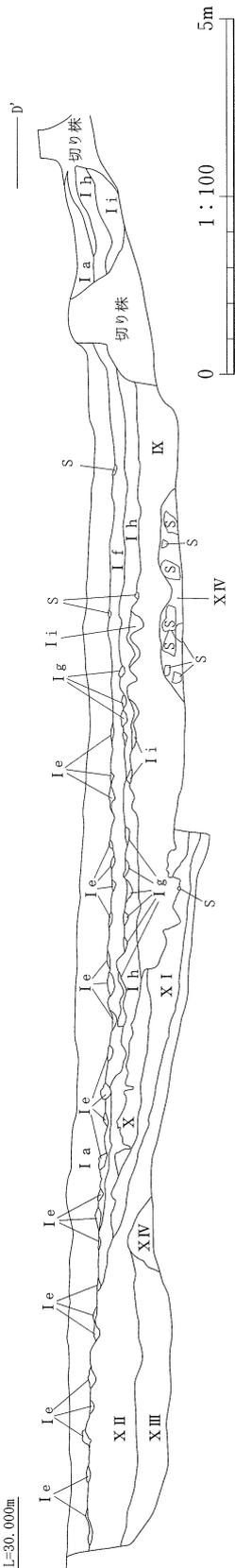


基本層序・1・2号畑跡、1号粗起痕注記

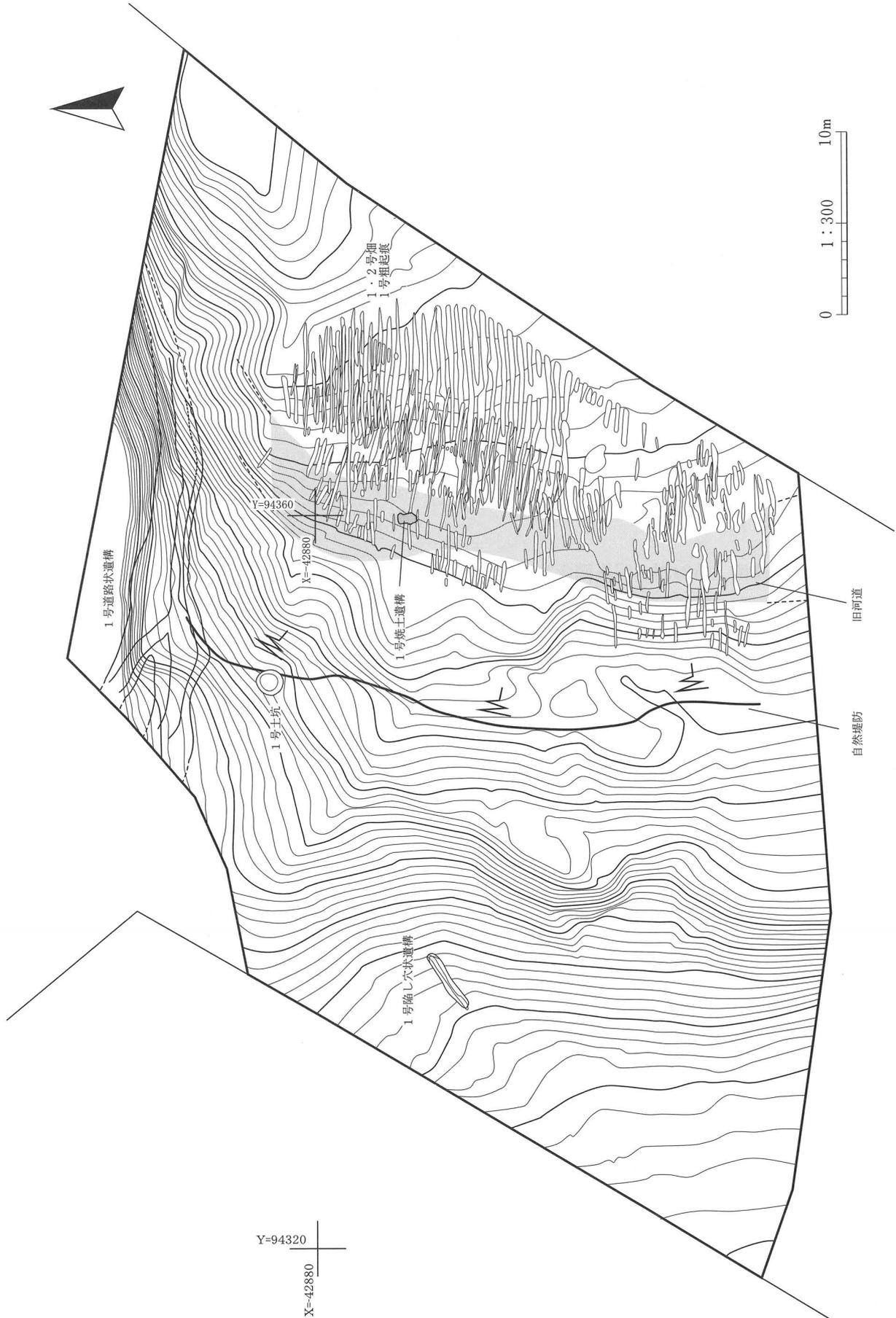
- Ia 10VR2/1黒色シルト 粘性やや弱 しまり中 (表土)
- Ib 7.5VR1.7/1黒色シルト 粘性やや弱 しまり中
- Ic 10VR4.3/3にぶい黄褐色シルト 粘性やや弱 しまり中
- Id 10VR4.4/4褐色シルト 粘性やや弱 しまり中
- Ie 10VR3/2黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 10VR4/2灰黄褐色細砂のレンズ状堆積 (畝間堆積土) 水成堆積の様相
- If 10VR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 10VR4/2灰黄褐色細砂のレンズ状堆積 (畝間堆積土) 複雑見られる (縞数回の畝耕作土相当) 水成堆積の様相
- Ig 10VR4/3にぶい黄褐色砂 粘性弱 しまり中 (畝耕作土相当) 水成堆積の様相
- Ih 10VR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 しまり中 粒度の異なる縞数層からなる (畝耕作土相当) 水成堆積の様相
- Ii 10VR5/3にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 (畝耕作土相当) 粘性弱 しまり中 (水成堆積の様相)
- II 部分的にX層に類似した黒色粘質シルト大ブロック状に含む (φ10~15cm) 礫 (φ5~10cm) 3% 局所的にモヤ〜ブロック状に混入 (φ5~10mm) 5%
- III 10VR 3/1黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 マサ土粒 (φ2~5mm) 10% 風化花崗岩ブロック (φ5cm) 局所的に含む1%
- IV 10VR 2/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 マサ土粒 (φ2~5mm) 10% 風化花崗岩ブロック (φ5~20cm) 20%
- V 10VR 3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中 マサ土粒 (φ2~5mm) 10% 風化花崗岩ブロック (φ5~15cm) 1%

- Via 7.5VR2/1黒色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - Vib 7.5VR3/2黒褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - VIIa 7.5VR3/3暗褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - IX 風化花崗岩ブロック (φ10~20cm) 局所的に含む15%
 - VIII 7.5VR3/1暗褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - X 10VR5/5黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - XI 10VR6/4にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - XII 10VR6/4にぶい黄褐色シルト 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - XIII 2.5VR2/1暗灰色細砂 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - XIV 2.5VR2/1暗灰色細砂 粘性弱 しまり中 (水成堆積)
 - XV 10VR6/6明黄褐色砂礫 粘性・しまり共弱 (自然堤防砂礫層)
 - XVI 10VR4/1褐灰色砂礫 粘性弱 しまり中 (自然堤防砂礫層)
- ※ IX〜VIII層は埋没沢相当。低地特有の堆積状況を示す。XIV〜XV層は八木沢川支流の自然堤防に相当。

D L=30,000m



第32図 メインベルトセクション (2) (基本層序・畑関連遺構)



第33図 遺構配置図

- Ⅶb 7.5YR 3/1 暗褐色シルト 粘弱・しまり強。
Ⅷ 10YR 5/6 黄褐色シルト 粘弱・しまり強（風化花崗岩層）。
Ⅸ 7.5YR 5/8 黄褐色砂 粘弱・しまり中（沢状堆積）。
Ⅹ 10YR 2/1 黒色シルト 粘やや弱・しまり中（沢状堆積）。
ⅩⅠ 10YR 3/3 暗褐色シルト 粘やや弱・しまり中（沢状堆積）。
ⅩⅡ 10YR 4/1 暗灰色細砂 粘やや弱・しまり中（沢状堆積）。
ⅩⅢ 2.5Y 2/1 黒色シルト 粘・しまり共中（沢状堆積）。
ⅩⅣ 10YR 6/6 明黄褐色砂礫 粘・しまり共弱（自然堤防砂礫層）。
ⅩⅤ 10YR 4/1 褐灰色砂層 粘弱・しまり中（自然堤防砂層）。
※ Ⅸ～Ⅷ層は埋没沢相当。低地特有の堆積状況を示す。ⅩⅣ～ⅩⅤ層は八木沢川支流の自然堤防に相当。

3 検出遺構

縄文時代

(1) 陥し穴状遺構

1号陥し穴状遺構（第34図、写真図版21）

〔位置・検出状況〕調査区西側、ⅧD2dグリッドに位置する。検出面はⅧ層上面で、黒褐色の溝状プランとして確認した。

〔規模・形状〕平面形は開口部径3.53×0.50m、底部径3.64×0.08mの溝形を呈する。長軸方向はN-54°-Eである。短軸の断面形はV字形を呈し、長軸の断面形は両端の壁が内湾して立ち上がるフラスコ形を呈する。底面は南西から北東方向に向けて緩やかに傾斜する。深さは最深部で145cmを測る。

〔埋土〕5層からなり、黒褐色～褐灰色シルト主体で構成される。第3層はマサ土崩落層と考えられる。自然堆積の様相を呈する。

〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。形態から、縄文時代の陥し穴であると考えられる。

近世以降

(2) 土坑

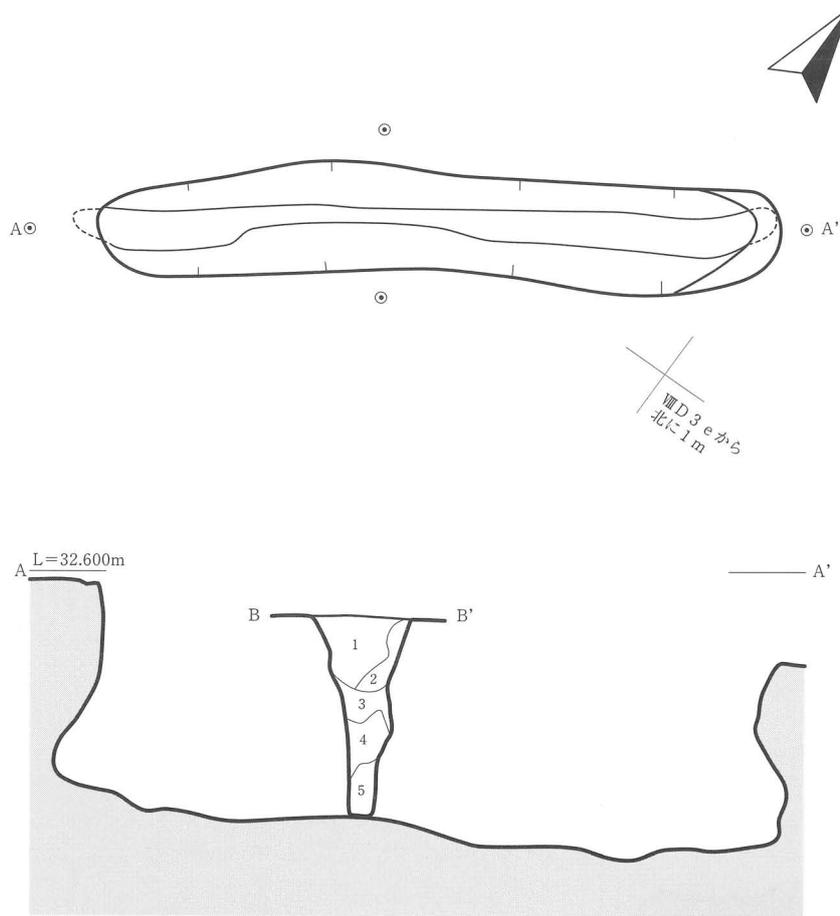
1号土坑（第35図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区北側、ⅦD10hグリッドに位置する。検出面はⅧ層上面で、黒褐色の円形プランとして確認した。

〔規模・形状〕平面形は開口部径1.46×1.35mの円形を呈する。断面形は皿形で、深さは最深部で49cmを測る。

〔埋土〕5層からなり、黒褐色シルト主体で構成される。断面図上には表れていないが、底面から壁面の一部が被熱しており、埋土の最下層には炭化材の小片が混じっている。なお、炭化材は肉眼観察の結果、センノキであるという鑑定結果を得ている。

〔出土遺物・時期〕出土遺物なし。近世以降の炭窯の可能性はある。

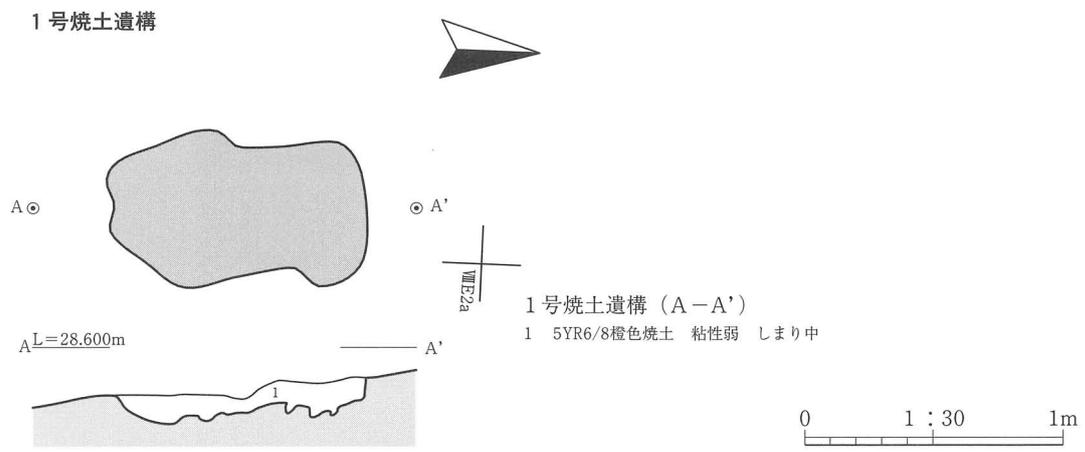
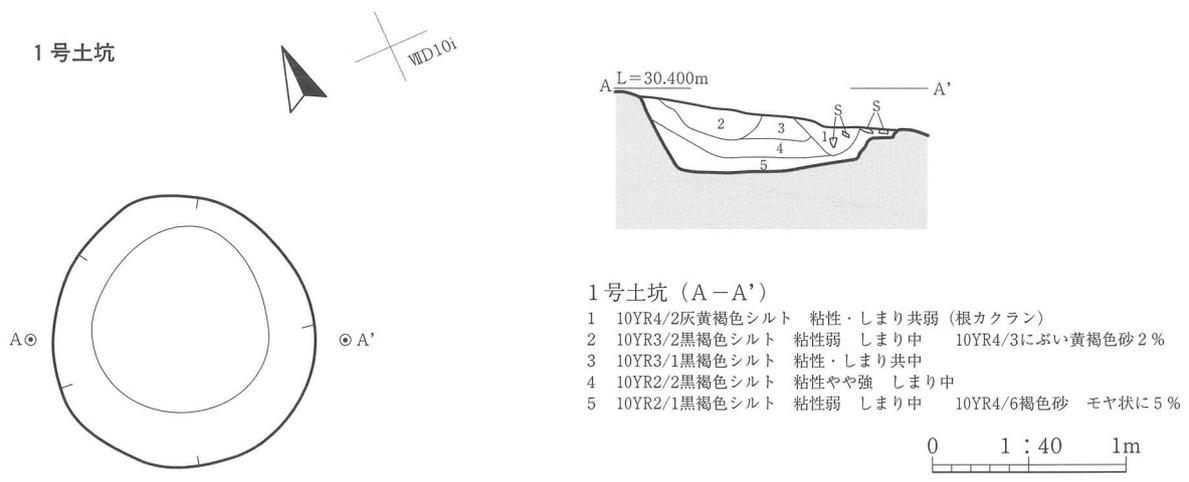


A-A'、B-B' 共通

- 1 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや弱・しまり中
- 2 10YR3/1黒褐色シルト 粘性やや弱・しまり中 10YR4/6褐色砂質シルト（マサ土）40%混入
- 3 10YR4/6褐色砂質シルト（マサ土崩落層） 粘性弱・しまりやや弱
- 4 10YR4/1褐色砂質シルト 粘性やや弱・しまり弱 10YR4/2灰黄褐色シルト（マサ土）20%混入
- 5 10YR2/1黒色シルト 粘性中・しまりやや弱

第34図 1号陥し穴状遺構

3 検出遺構



第35図 1号土坑、1号焼土遺構

(3) 焼土遺構

1号焼土遺構（第35図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区中央部、ⅧD2iグリッドに位置する。I g層中の検出で、明瞭な橙色のプランとして確認した。

〔規模・形状〕平面形は0.99×0.51mの不整形を呈する。断面形は皿形で、厚さは最厚部で13cmを測る。

〔被熱土〕橙色の単層である。

〔出土遺物・性格〕磁器皿（1）が出土している。出土遺物と被熱状況より、近世以降の現地性焼土と思われる。（鈴木）

(4) 道路状遺構

1号道路状遺構（第36図、写真図版22）

調査区北側尾根部斜面縁辺から、等高線に沿うように走る黒褐～暗褐色の帯状プランとして確認した。ⅧD8jグリッドほかに位置する。検出面は表土直下である。規模は長さ21.9m、幅2.3～4.8mの範囲に収まる。埋土は暗褐～黒褐色シルト主体で構成されるが、下位はマサ土小ブロックを若干含み硬くしまる。遺構のプランは東―西方向にかけて認められ、東側斜面に回ったところで徐々に薄くなっている。表土直下で確認されたこと、形状などから近世～近代に形成された山仕事に関わる踏分け道のようなものであった可能性がある。

(5) 畑関連遺構

1号畑跡（第37・40図、写真図版22）

〔位置・検出状況〕調査区東半部の自然堤防および旧河道上、ⅧD1jグリッドほかに位置する。I f層上面において平面観察により灰黄褐色細砂（I e層）の筋状プラン群として、また、メインベルト断面（以下、MBと略）C-C'、D-D'において灰黄褐色の細砂（I e層）に覆われる断面カマボコ状の黒褐色シルト（I f層）の高まりと凹みの連続として検出された。

〔重複関係〕2号畑、1号粗起痕と同一地点に作られており、もっとも上層に位置する。

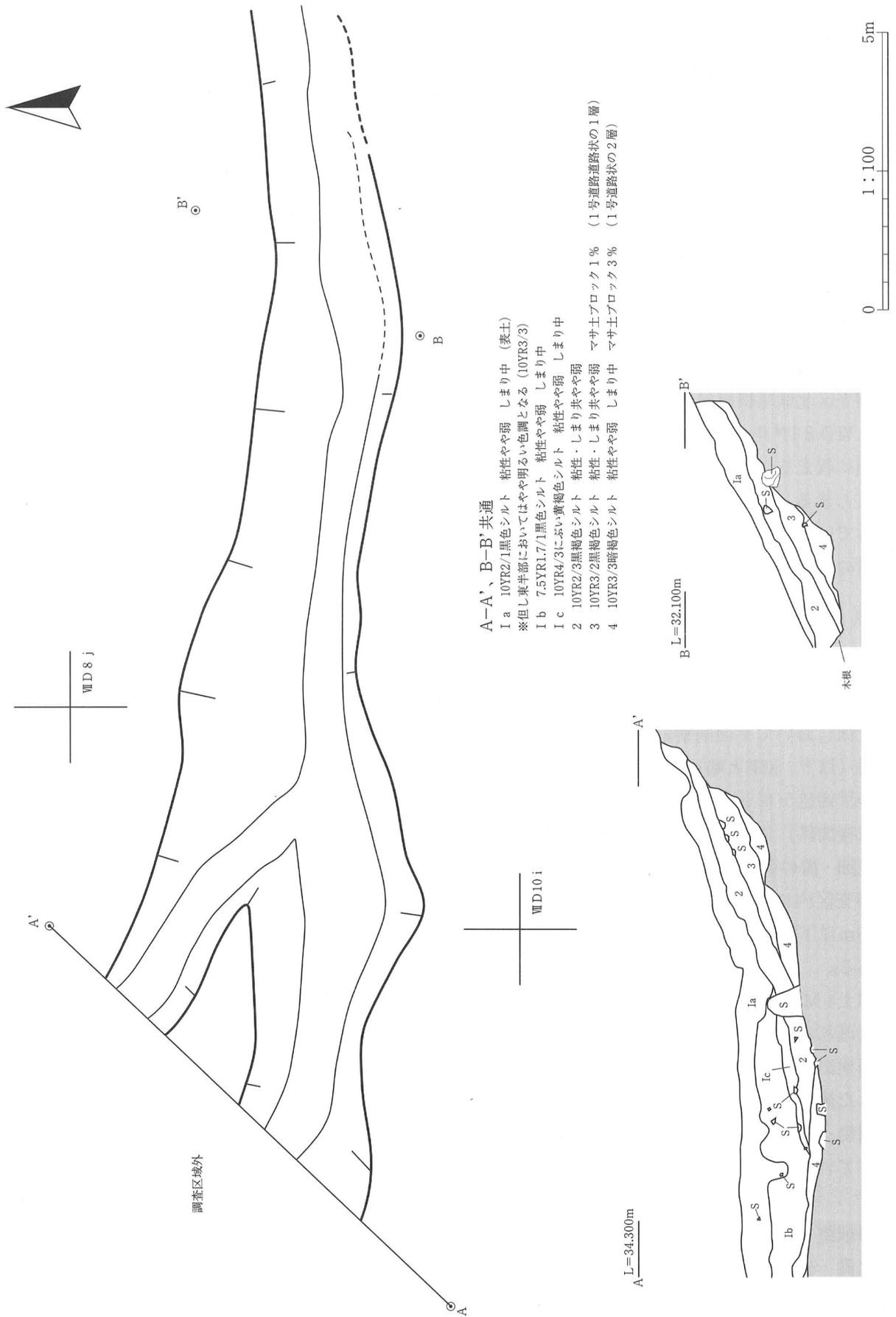
〔範囲・溝の条数・配列・規模〕検出範囲は244㎡である。平面で検出した灰黄褐色土の筋状プラン群の調査区内における確認条数は約67本で、等高線と直交するように西―東方向に延びる。検出長は10.8m以下、幅は6～24cmである。MB断面C-C'によると各凹部間の距離は60.9cm、畝高は約18cmである。

〔埋土〕MB断面C-C'、D-D'により表土からの連続した観察が可能である。基本土層I e層は東側を流れる八木沢川支流の氾濫による水成堆積層で、黒褐色シルトを主体とする。基本土層I f層は、平面検出の際に筋状プランとして捉えた黒褐色土である。同一層中には灰黄褐色細砂がレンズ状に堆積した箇所が複数見られ、複数回の畑耕作土および畝間堆積層と推定される。

〔遺物・時期〕畝および畝間相当レベルから陶磁器片4点、鉄製品（船釘）1点、赤レンガ1点が出土している。時期は検出層位および出土遺物から近世といえる。

2号畑跡（第38・40図、写真図版23）

〔位置・検出状況〕調査区東半部の自然堤防および旧河道上、ⅧD1jグリッドほかに位置する。I h層、I i層上面において平面観察によりにぶい黄褐色砂（I g層）の筋状プラン群として、また、MB



第36図 1号道路状遺構

断面C-C'、D-D'においてにぶい黄褐色砂（I g層）に覆われる断面カマボコ状のにぶい黄褐色シルト（I i層）および黒褐色シルト（I h層）の高まりと凹みの連続として検出された。

〔重複関係〕1号畑、1号粗起痕と同一地点に作られる。1号畑より古く、1号粗起痕よりは新しい。

〔範囲・溝の条数・配列・規模〕検出範囲は106㎡である。平面で検出した灰黄褐色土の筋状プラン群の調査区内における確認条数は約35本で、等高線と直交するように西-東方向に延びる。検出長は5.2m以下、幅は7～23cmである。MB断面C-C'によると各凹部間の距離は48.3cm、畝高約18cmである。

〔埋土〕MB断面C-C'、D-D'により表土からの連続した観察が可能である。基本土層I g層は東側を流れる八木沢川支流の氾濫による水成堆積層である。平面検出の際に筋状プランとして捉えたもので畝間堆積土と推定される。基本土層I h層、I i層は畝耕作土と推定される。

〔遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は検出層位および埋土状態から近世といえる。

1号粗起痕（第39図、写真図版23・24）

〔位置・検出状況〕調査区東半部の自然堤防および旧河道上、ⅧD 1 jグリッドほかに位置する。X IV層上面において平面観察によりにぶい黄褐色シルト（I i層）の筋状プラン群として、また、MB断面C-C'、D-D'においてにぶい黄褐色シルト（I i層）に覆われる断面カマボコ状の明黄褐色砂礫（X IV層）の高まりと凹みの連続として検出された。

〔重複関係〕1・2号畑と同一地点に作られており、もっとも下層に位置する。

〔範囲・溝の条数・配列・規模〕検出範囲は216㎡である。平面で検出したにぶい黄褐色の筋状プラン群の調査区内における確認条数は約53本で、等高線と直交するように西-東方向に延びる。検出長は10.6m以下、幅は15～34cmである。MB断面C-C'によると各凹部間の距離は60.9cm、畝高は約19cmである。

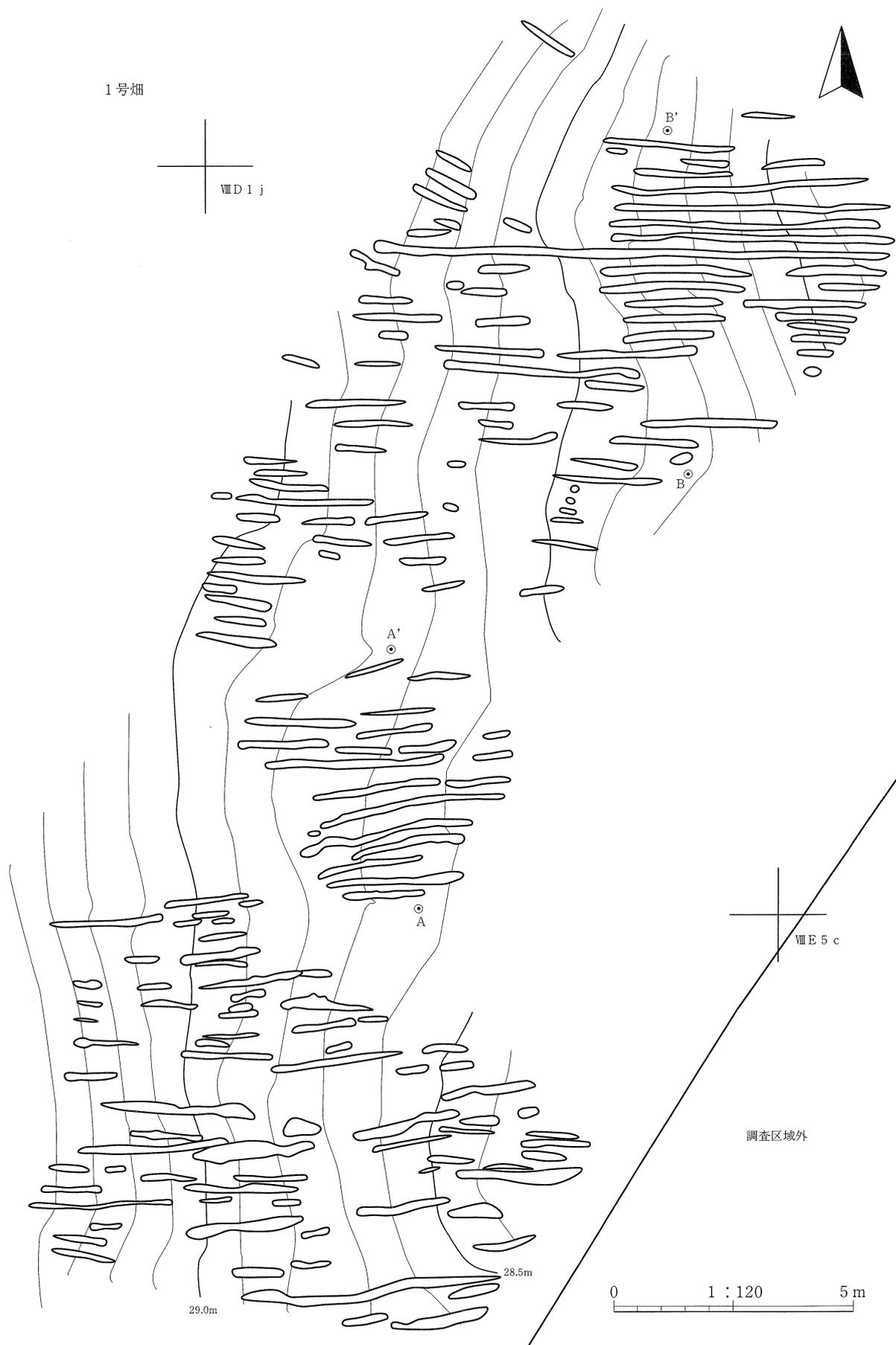
〔埋土〕MB断面C-C'、D-D'により表土からの連続した観察が可能である。基本土層I i層は東側を流れる八木沢川支流の氾濫による水成堆積層で、平面検出の際に筋状プランとして捉えたものである。粗起後の溝内堆積土にあたることから、畝耕作土に相当すると推定される。基本土層X IV層は、明黄褐色砂礫層で、八木沢川支流の自然堤防に相当する。

〔遺物・時期〕遺物は出土していない。時期は検出層位および埋土状態から近世といえる。

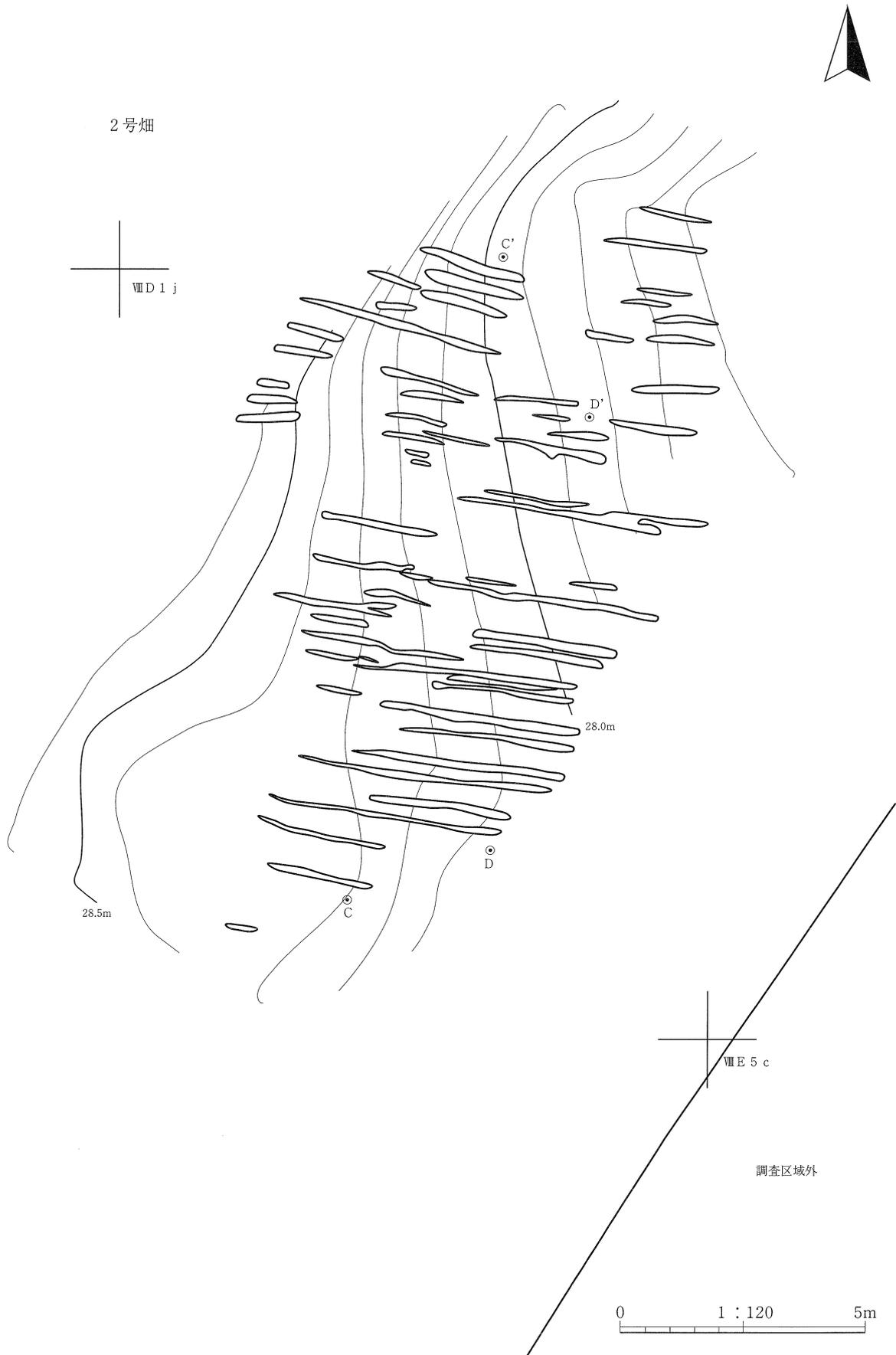
（丸山）

第20表 畑関連遺構の計測値一覧

遺構名	グリッド	検出層位	覆土	検出面積	検出	畝間距離
1号畑跡	ⅧD 1 jほか	I e	I e	244㎡	畝・畝間(メインベルト断面による確認)	60.9cm(畝高約18cm)
2号畑跡	ⅧD 1 jほか	I g	I g	106㎡	畝・畝間(メインベルト断面による確認)	48.3cm(畝高約18cm)
1号粗起痕	ⅧD 1 jほか	I i	I i	216㎡	畝・畝間(メインベルト断面による確認)	60.9cm(畝高約19cm)



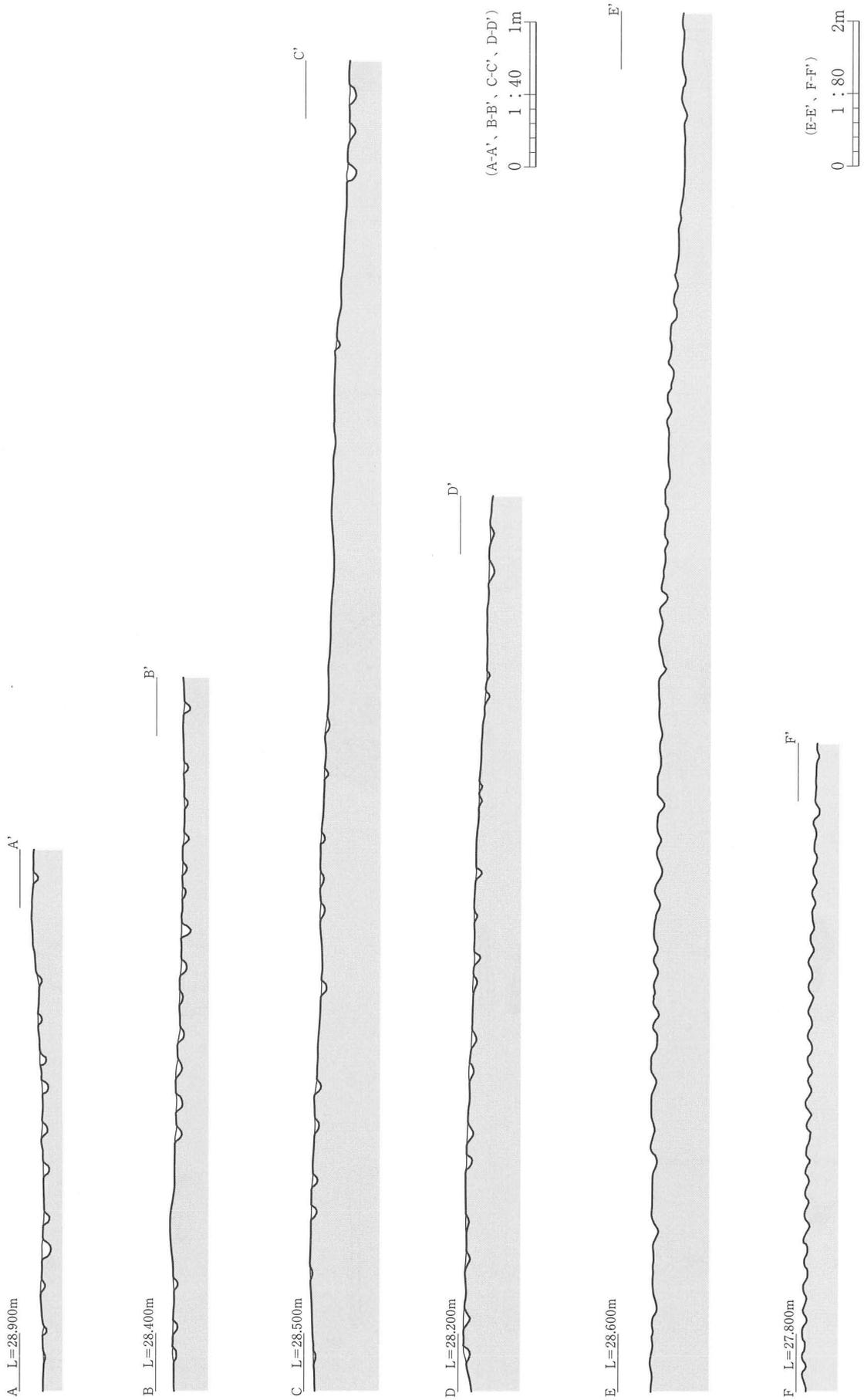
第37図 1号畑跡



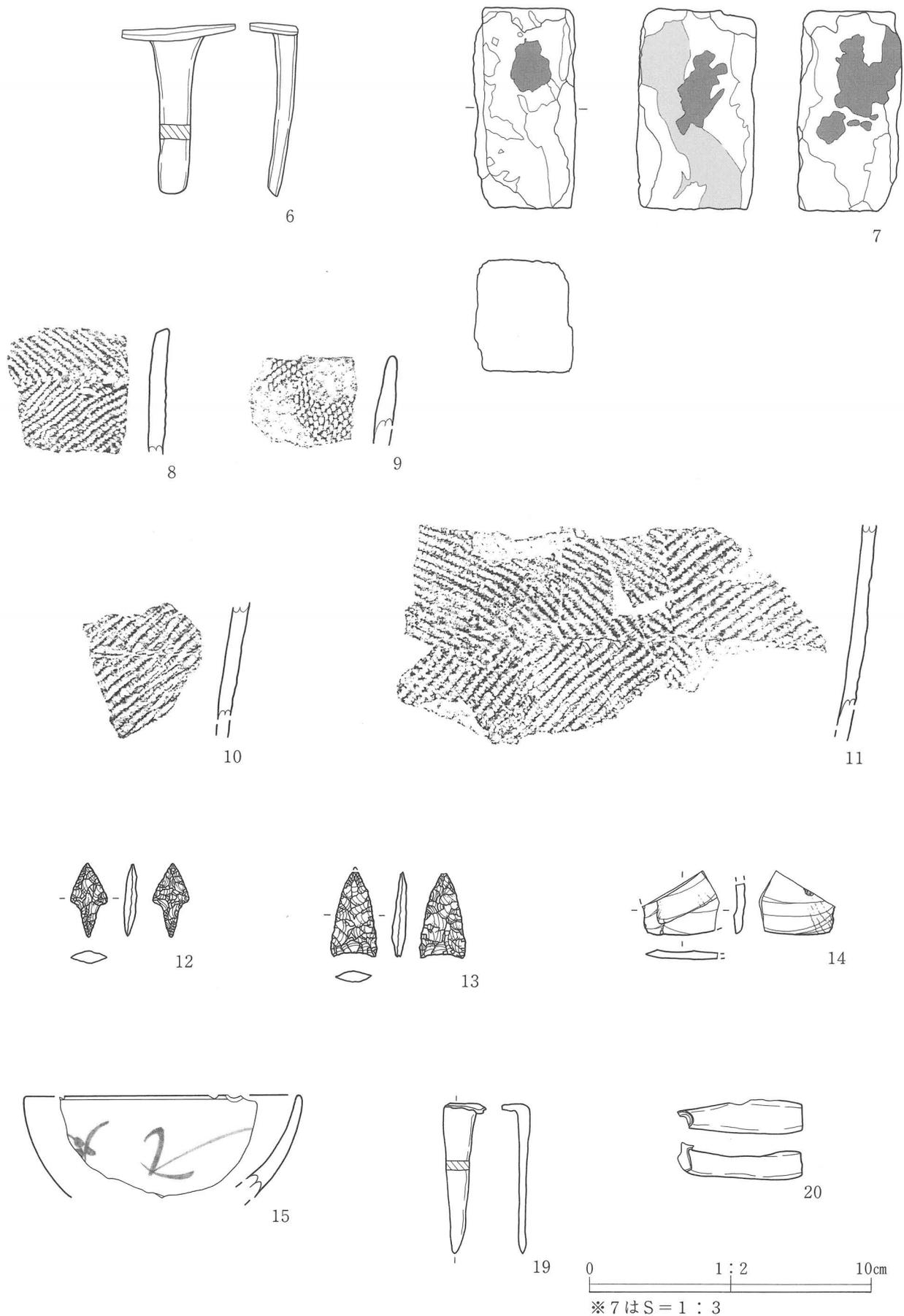
第38図 2号畑跡



第39図 1号粗起痕



第40図 1・2号畑跡、1号粗起痕断面



第41図 出土遺物

4 出土遺物

今回の調査による出土遺物の内訳は、縄文土器、陶磁器、土製品、石器、鉄製品、金属製品である。いずれも量は少なく、総量は小コンテナ（40×30×10cm）でおよそ1箱分である。以下、種類ごとに概観する。

（1）縄文土器

縄文土器は4片出土しており、すべて掲載・図示した（第41図、写真図版26）。8～11は深鉢の破片で、胎土に植物繊維を多量に含む。主に西半部の沢筋付近から出土したもので、出土層位はⅥa層、およびⅦb層である。地紋は羽状縄文（結束第1種）や短節斜縄文で、10・11は0段多条である。これらは胎土や文様の特徴などから前期初頭の特徴を持つ。

（2）陶磁器

8点を掲載、1点を図示した（第41図、写真図版26）。1は1号焼土遺構から出土した染付皿で、胎土目痕を持つ。2～5は1号畑跡の畝間および畝耕作土相当レベルから出土している。2・4は染付椀、3は染付皿、5は甕で、青灰色の釉薬が施される。15～17は遺構外から出土している。17は灰釉菊皿である。これらは文様の特徴等から16世紀後半代～19世紀以降の時期幅を持つと思われる。

（3）土製品

土製品は1号畑跡の畝間および畝耕作土相当から1点出土した（第41図、写真図版26）。7はレンガで、3面に敲打痕、1面に磨面を持つ。

（4）石器

石器は3点が出土した（第41図、写真図版26）。12・13は石鏃、14はフレイクで、いずれも頁岩を素材とする。

（5）鉄製品・金属製品

鉄製品は2点出土している（第41図、写真図版26）。6は1号畑跡畝間底面から出土した船釘である。19はI g層から出土した釘である。20はI d層から出土したキセルである。

（6）鉄滓

I g層から1点出土している。表面暗褐色を呈し、全体的に砂が付着する。三か所に鋭い破断面を持つ。

第21表 縄文土器観察表

No	出土地点	器種名	胎土	文様特徴	時期
8	西側メインベルトⅥa層	深鉢	繊維含む	地紋：羽状縄紋（結束第1種LR・RL）	縄文前期
9	4区Ⅶb層	深鉢	繊維含む	地紋：単節斜縄紋（RL縦）	縄文前期
10	4区Ⅶb層	深鉢	繊維含む	地紋：単節斜縄紋・0段多条（LR）	縄文前期
11	4区Ⅶb層（T2）	深鉢	繊維含む	地紋：羽状縄紋（結束第1種LR・RL）・0段多条	縄文前期

第22表 石器・石製品観察表

（ ）は推定値・〈 〉は残存値を表す

No	出土地点	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	石材	産地	備考
12	2区Ⅰe～Ⅰf層	石鏃	2.7	1.3	0.55	1.1	頁岩	北上山地	古生代末～中生代初
13	4区Ⅵa層	石鏃	〈3.05〉	1.65	0.5	1.9	頁岩	北上山地	古生代末～中生代初
14	4区Ⅵa層	フレイク	〈2.35〉	〈2.7〉	〈0.4〉	2.9	頁岩	北上山地	古生代末～中生代初

第23表 鉄製品観察表

No	出土地点	種類	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
6	1号畑跡畝間底面	船釘	5.9	4.0	0.8	33.2	
19	2区Ⅰg層	釘	5.5	1.2	0.3	6.7	
20	西側メインベルトⅠd層	キセル	4.5	1.2	0.1	4.3	

第24表 その他観察表

No	出土地点	種類	重量（mg）	備考
7	1号畑跡2区	レンガ	448.3	長さ10.7cm・幅6.1・厚さ5.5cm
18	2区	貝殻	2.9	ホタテガイ

第25表 鉄滓類観察表

No	出土地点	種別	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
21	2区Ⅰg層	椀形滓（炉底）	8.7	6.0	5.7	271.1	表面暗褐色を呈する。全体的に砂が附着。三か所に破断面有。

第26表 陶磁器観察表

No	出土地点	器種	釉薬・絵付	胎土	製作地	制作年代	その他
1	1号焼土遺構	磁器皿	染付	灰白	肥前	17世紀前半代	胎土目痕
2	1号畑跡	磁器碗	染付	灰白	肥前	18世紀後半代	
3	1号畑跡	磁器皿	染付	灰白	肥前	18世紀後半代	
4	1号畑跡	磁器碗	染付	灰白	肥前	18世紀後半代	二重網目文
5	1号畑跡	陶器甕	灰釉	褐灰	不明	19世紀以降	
15	試掘Ⅰ層	磁器碗	染付	灰白	肥前	18世紀後半代	Ⅳ～Ⅴ期
16	2区Ⅰ層	陶器皿	鉄釉	暗赤褐	不明	19世紀以降	
17	排土場一括	陶器皿	灰釉	灰黄褐	美濃	16世紀後半代	大窯Ⅳ期 灰釉菊皿

5 ま と め

今回の発掘調査、および整理作業で明らかになった事項は下記のとおりである。

(1) 立 地

遺跡は、JR東日本山田線磯鷄駅の南西約3.2m付近にある小起伏山地の先端部に立地する。調査区はこのうち八木沢川支流の低地面と山地から延びる少支谷がぶつかる地点にかかる1,600㎡である。標高は27～33m、調査前の現況は山林および畑地である。

(2) 遺 構 ・ 遺 物

検出した遺構は、縄文時代の陥し穴状遺構1基、近世以降の土坑1基（炭窯の可能性あり）、焼土遺構1基、道路状遺構1条、畑関連遺構3ヵ所（畑跡2、粗起痕1）である。出土した遺物は、縄文土器、陶磁器、土製品、石器、鉄製品、金属製品等各少量である。

①縄文時代の遺構

縄文時代の遺構としては、東半部から陥し穴状遺構が1基検出された。検出された陥し穴状遺構は平面が溝形で断面はV字状を呈するものである。遺構は西側から延びる沢筋の縁辺部に位置しており、付近からは縄文時代前期の土器片も数辺出土している。このことから本区域が縄文時代においては狩場の一部であったことが判明した。

②近世以降の遺構

近世以降の遺構としては土坑、焼土遺構、道路状遺構、畑関連遺構がある。土坑は底面から壁面の一部が被熱を受け淡く焼土化している。埋土下位からは炭化材小片が出土していることから小規模な炭窯であった可能性がある。焼土遺構は西半部から検出された。焼土内部から胎土目痕を持つ染付皿の破片が出土しており、近世の遺構と推定される。道路状遺構は、表土直下から北側の斜面裾部を廻るように検出され、山仕事に関わる踏み分け道のようなものと推定される。畑関連遺構（畑跡2・粗起痕1）は東半部の旧河道から自然堤防上にかけて検出された。MB断面により、1・2号畑跡は八木沢川支流の氾濫時の洪水砂によって被覆されていることが判明している。また、基本土層If層黒褐色シルト中にはさらに畝間堆積土とみられる横位に連続する灰黄褐色細砂のレンズ状堆積が重層的に確認され、平面的に確認された畑以外にも本来は複数の畑跡が存在するものと思われる。1号粗起痕は、XIV層自然堤防礫面に連続する溝が掘られるものである。当初、畑跡を想定したが、畑跡とするには畝耕作土層が自然堤防の砂礫面であることに不自然な点があること、また、XIV層以下に人為的な掘削が及んだ痕跡がないことから畑跡として認定するまでには至らなかった。最終的には畑作耕地を開く際の粗起の痕跡ではないかと推測している。

(3) お わ り に

調査区は八木沢川支流の西岸に形成された小起伏山地の先端部に位置し、八木沢川支流の低地面と山地から延びる少支谷がぶつかる地点に立地する。調査の結果、西半部は縄文時代の狩場として、東半部の旧河道および自然堤防上は主に近世以降の畑作耕地として利用されていることが判明した。特に東側メインバルト断面からは、洪水成の堆積土層にパックされた畑の畝および畝間が重層的に検出され、近世から現代に至るまでこの地が畑作耕地として利用されていたことが判明した。

VI 平成21年度調査の成果

1 検出遺構

(1) 竪穴住居跡・竪穴建物跡

縄文時代の竪穴住居跡と中世の竪穴建物跡が合わせて4棟確認されている。数が少ないので遺構名は連番で付すこととした。各遺構の規模については検出面での長軸×短軸×深さ(m)で記している。

1号竪穴建物跡(第45図、写真図版29)

[位置・検出状況] 調査区北側の平坦面、XC4hグリッドに位置し、IV層面で検出した。

[重複関係] 1号掘立柱建物跡と平面的に重複しているが、直接遺構が切り合っていない。

[規模・平面形] 3.84×3.58×0.14mの方形プランの北東隅に張出しが設けられている。張出し部の幅は1.42m、長さは1.36mまで確認できたが、北西側は地形的に低くなっていくため、遺構も不明瞭になっていく。張出しを除く床面積は約11.9㎡である。

[床・壁] 貼床ではなく、地面を掘り込んでそのまま床面としていたようである。壁はほぼ垂直に立ちあがるようだが、調査区の地形が北東-東方向に向かって緩やかに低くなっているため、壁も北東部では残っていなかった。

[埋土] 黒褐色土を主体とし部分的に小礫などが見られる。埋土の残りも悪かったが、人為的に埋め戻したような雰囲気はあまりなかった。

[柱穴・周溝] 壁に沿って21個の柱穴と周溝を確認した。床面中央付近にも1個柱穴がある。柱穴間の間尺はばらついている。向かい合うところに柱穴が位置するわけでもない。壁の失われた東側も柱穴の分布から壁周溝が巡っていたと推察される。

[炉] なし。

[出土遺物] なし。

[時期] 遺構の形態から中世に位置づけられる。

2号竪穴住居跡(第46図、写真図版30・31)

本遺構は建て替えられ拡張されている。古い段階から記載したい。

古段階

[位置・検出状況] 調査区南半の緩斜面部(B)、XIC2dグリッドに位置し、IV層で検出された。

[重複関係] 3号竪穴建物跡と重複し、本遺構のほうが古い。

[規模・平面形] 残りが悪いが3.09×2.56×0.20mの不整形を基調とすると想定された。

[床・壁] 概ね平坦であったようだが、拡張されていること、遺構が緩斜面地形に立地しており東側に向かって下がっていることなどから、西側と東側の残りが悪い。壁についても同様である。

[埋土] 新段階の埋土のみがある。

[柱穴・周溝] 10個の柱穴があるが古段階か新段階に属するか判然としない。周溝はない。

[炉] 石組の炉であったが住居が建て替えられる際に、炉も新しく造り替えられたため一部が残るのみである。北西-南東方向に長軸を持つ複式炉であった可能性がある。

[出土遺物] 古段階に確実に伴う遺物は出土していない。

[時期] 縄文時代中期後葉であろう。

新段階

[重複関係] 3号竪穴建物跡と重複し、本遺構のほうが古い。

[規模・平面形] 残りが悪い。4.99×3.30×0.22mの不整形円形プランで検出された。

[床・壁] 床は概ね平坦である。貼床ではなく、古段階の床面をほぼ踏襲しつつ四方へ拡幅されたようである。壁は北側と南側のごく一部に残るだけであった。

[埋土] 黒褐色土を主体とし、床面付近では特に炭粒を多く含んでいた。焼土は確認できなかったが、本遺構は焼失している可能性がある。

[柱穴・周溝] 10個の柱穴があるが古段階か新段階に属するか判然としないものが多い。周溝は見られなかった。

[炉] 複式炉で東西方向に長軸を持つ規模は1.05×0.68×0.12mである。大小の細長い礫を組み合わせて3部屋に区切られている。西側が最も狭く、中央部が最も広い。東側は礫が全周せず東側が開いている。明瞭な焼土は確認できなかったが中央及び西側を区画する礫は熱を受けたためか脆くなっているものが多かった。灰も検出されていない。

[出土遺物] 炉のすぐ西側にその場で潰れたような状態で1が出土した。本遺構に伴う。

[時期] 縄文時代中期後葉。

3号竪穴建物跡（第47図、写真図版31・32）

[位置・検出状況] 調査区南半の緩斜面部（B）、XIC2dグリッドに位置し、IV層で検出された。

[重複関係] 2号竪穴住居跡と重複し、本遺構のほうが新しい。

[規模平面形] 4.00×2.74×0.32mの長方形を基調とするようであるが、東側から北東側が2号竪穴住居跡との重複や地形的に低くなることもあり、プランは不明瞭である。

[床・壁] 床面は概ね平坦であるが貼床ではない。壁はやや外傾気味に立ちあがっている。

[埋土] 黒褐色土・暗褐色土からなる。自然堆積と思われる。

[柱穴・周溝] 壁に沿って4個、その他に2個の計6個の柱穴を検出した。東側は地形的に低くなっていくため失われてしまった可能性が高い。周溝は造られていない。

[出土遺物] 遺構に伴う遺物は出土していない。

[時期] 遺構の形態から中世の竪穴建物跡と考えられる。

4号竪穴住居跡（第47図、写真図版32）

[位置・検出状況] 調査区南半の緩斜面部（B）、XIC4eグリッドに位置し、IV層で検出した。また、東側にあった道路法面からも本遺構の断面が確認できていた。

[規模平面形] 3.55×(0.84)×0.34mで不整形円形を呈すると見られるが、東側は道路によって失われていた。

[床・壁] 底面は概ね平坦である。壁はやや外傾して立ち上がっている。

[埋土] 黒褐色土や暗褐色土を主体とし炭粒なども混じる自然堆積。

[柱穴・周溝] 1個のみ検出された。周溝は造られていない。

[炉] 残存している部分には確認できなかった。

[出土遺物] 剥片石器が1点出土している。

[時期] 縄文時代。

(2) 掘立柱建物跡

調査区北側の平坦面から4棟の掘立柱建物跡が検出された。1～3棟は重複しており、同じ場所で少なくとも3回にわたって建て替えを繰り返していたことが分かった。各建物を構成する柱穴から時期を判断する遺物は出土していない。周辺から出土した陶磁器をみると18世紀中葉頃の瀬戸腰鏝碗や18世紀代の肥前産染付碗が最も時期的に新しい。このことから3棟の掘立柱建物跡に関しては、18世紀中葉を下限とする遺構群と考えたい。柱穴は地表面から20～50cm掘り下げた段階で検出されたが、殆どの柱穴は地表面から40～50cm掘り下げた段階で検出されている。もう1棟の掘立柱建物跡については残りが悪いが、中世まで遡る可能性がある。

1号掘立柱建物跡（第48図、写真図版33）

[位置] XC7hグリッドに位置する。

[重複関係] 2・3号掘立柱建物跡、1号竪穴建物跡と重複するが本遺構が最も新しい。

[平面形式] 掘立柱建物である。桁行き2027cm（66.9尺）、梁行き912cm（30.1尺）である。上屋柱と下屋柱からなる構造である。梁行き方向の柱穴をかなり探したが検出できなかったため間取りを想定することはできない。南東側が調査区外へ延びているが面積は約184.8m²（56坪）と推定される。

[建物方位] N-13°-W

[柱穴] 上屋柱の柱穴は大きく深いのに対し、下屋柱の柱穴は小さく浅いものが多い。明瞭な抜き取り痕跡を有するものはなかった。柱痕もはっきり検出できる柱穴は少ないが、上屋柱で18～24cm、下屋柱で15～18cmの柱が用いられていたようである。

[柱間寸法] 桁行き方向は7.2～8.3尺と一定ではないが7.8尺で概ね割り切れるようである。桁行きはほぼ真っ直ぐに柱穴が並んでいる。梁行きは30.1尺であるから、30尺を意識して構築されたと推察されるが、P90はその中心には位置していない。上屋柱と下屋柱は必ずしも同じ柱間寸法となるわけではないようである。

[出土遺物] 遺構に伴う遺物はない。

[時期・建物の性格] 18世紀中葉かそれよりやや古い近世民家の母屋である。第V章で改めて触れたい。

2号掘立柱建物跡（第49図、写真図版33）

[位置] XC7hグリッドに位置する。

[重複関係] 1号掘立柱建物跡より古く、3号掘立柱建物跡よりは新しい。

[平面形式] 掘立柱建物である。桁行き1410cm以上、梁行き645cm以上である。面積は91m²（28坪）以上である。上屋柱と下屋柱からなる構造と思われるが、東側は地形的にも低くなるため下屋柱を検出できなかった。梁行きにあたる柱穴を丁寧に探したが検出できなかった。よって間取りを想定するのは難しい。桁行きは6間まで確認できたが、南東側が調査区外へ延びているため、あとどれくらい桁行きが延びるか分からない。

[建物方位] N-15°-W

[柱穴] 上屋柱の柱穴よりも下屋柱の柱穴は小さく浅いものがある。明瞭な抜き取り痕跡を有するものはなかった。柱痕も辺りの覆土と見分けがつかない。柱穴の下端径から上屋柱で21～15cm、下屋柱

で15～18cmの柱が用いられていたようである。

[柱間寸法] 桁行きは10.7尺～5.1尺と一定ではない。P134-P207間の平均を出すと約7.8尺となる。この建物は桁行きと梁行きとが直角ではない。少し歪みを持つ建物である。桁行きは概ね平行にはいられるが、桁行きは歪んだ状態を通っている。

[出土遺物] 遺構に伴う遺物はない。

[時期・建物の性格] 近世民家の母屋である。間仕切りのない構造から、近世初頭から前半頃の建物と考えているが、第V章で改めて触れたい。

3号掘立柱建物跡（第50図、写真図版34）

[位置] XC8hグリッドに位置する。

[重複関係] 1・2号掘立柱建物跡と重複関係にあり、本遺構が最も古い。

[平面形式] 掘立柱建物である。桁行き930cm、梁行き721cm以上と推測される。3間×2間の北を除く三面に縁が巡る建物のようなものである。面積は上記の規模から約67㎡（20.3坪）である。梁行き方向には注意して探したものの柱穴は見られなかった。

[建物方位] N-13°-W

[柱穴] 柱痕から径12～21cmの柱を使用していたようである。縁の柱穴が主屋より小さい傾向がある。明確な柱抜き取り痕跡を有する柱穴はない。

[柱間寸法] 桁行きは8.0～9.5尺とばらつきがある。梁間は一間を9.6尺とすると割り切れる。

[出土遺物] 遺構に伴う遺物はない。

[時期・建物の性格] 他の建物より古いこと、間仕切りのない構造などから近世初頭から中世末頃の建物と思われる。

4号掘立柱建物跡（第50図、写真図版34）

[位置] XC8fグリッドに位置する。

[平面形式] 東側に向かって低くなる緩斜面に位置しているため、東側に向かうほど柱穴の残りが悪い。南北方向に2間、東西方向は1間までしか検出できなかった。柱穴間には溝が巡る部分もあり、平地式の建物ではなく1号竪穴建物跡のような構造であったと思われ、建物の長軸は東西方向と考えている。

[柱穴] 16個の柱穴があるが、ほぼ同規模の建物で2～3回の建て替えが行われているようである。

[出土遺物] 遺構に伴う遺物は出土しなかった。

[時期] 中世。

（3）土 坑

22基の土坑を検出した（第51～53図、写真図版34～39）。個々の内容については観察表に整理したので、ここでは立地や所属時期などを中心にその特徴をまとめた。

[位置・検出状況] 調査区北部の平坦面に19基、調査区中央の緩斜面部から3基検出されている。殆どがⅣ層面での検出であったが、中にはⅢ層面でも検出された土坑もある。これらは何れも北側平坦面に位置し、中近世の遺構であった。

[形状] 円形・不整円形を基調とするもの、長円形を基調とするものが多く、その他の形状を呈するものは少ない。前者は近世の土坑が多く一部に縄文時代の土坑もある。長円形の土坑は墓壇の可能性

があるものの時期までは分からなかった。

[出土遺物・時期] 遺構に伴って遺物が出土している例は殆どない。周辺遺構の状況から縄文時代と考えられるもの2基、中近世が3基、近世が7基、縄文または中近世が2基、時期不明8基とに分けられた。

(4) 墓 壙

6基の墓壙を検出した(第54・55図、写真図版39・40)。何れも調査区南側にあり、斜面―緩斜面地形に立地していた。墓石も1基だけが見つかっており、宝永六(1709)年銘がある。これは出土状況から1号墓壙に伴う可能性が最も高い。古寛永のみが出土した5号墓壙が17世紀中葉と最も古い可能性があり、文銭、新寛永も出土した1・2号土坑が18世紀以降と最も新しい可能性が高い。3・4号墓壙も近世墓ではあるが銭貨の出土はない。個々の内容については観察表を作成し整理した。人骨の出土状況や特徴に関してはⅦ章を参照願いたい。

第27表 土坑類観察表

計測値の単位: cm

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸、 短軸、深さ	形状 底面	埋 土	出土遺物・時期	その他
1号土坑	XC 2 f	C IV層	68.40.11	隅丸方形 概ね平坦	黒褐色土の単層で3号土坑に似る。人為堆積かもしれない	縄文土器片1 近世の可能性高い	
2号土坑	XC 6 e	C IV層	134.130.37	不整形円形 平坦	黒色土の風化花崗岩粒を多量に含むが人為堆積ではないと思われる	縄文土器片3 時期不明	
3号土坑	XC 3 f	C IV層上面	66.49.18	隅丸方形 平坦	地山ブロックを多量に含む人為堆積	なし 近世の可能性高い	
4号土坑	XC 6 d	C IV層上面	110.83.18	長円形 やや凹凸	地山ブロックを多量に含む人為堆積	なし 近世の可能性高い	
5号土坑	XC 7 e	C IV層上面	102.79.20	長円形 やや凹凸	地山ブロックを少量に含む人為堆積	なし 近世の可能性高い	
6号土坑	XC 8 e	C IV層上面	83.69.20	不整形円形 平坦	地山ブロックを多量に含む人為堆積	なし 近世の可能性高い	
7号土坑	XC 9 e	C IV層上面	82.73.23	円形 やや凹凸	地山ブロックを多量に含む人為堆積	なし 時期不明	
8号土坑	XC 2 j	C IV層上面	105.99.27	円形 平坦	黒褐色土を主体とする人為堆積	縄文土器片2 近世の可能性高い	
9号土坑	XC 4 g	C Ⅲ～IV層	107.88.23	不整形 平坦	黒褐色土中に褐色土や黄褐色砂が流れ込んだように堆積	縄文土器片7、貝殻片1、 近世の可能性が高い	
10号土坑	XC 4 g	C Ⅲ層	85.75.21	不整形円形 平坦	地山ブロックを少量に含む人為堆積	縄文土器片2 縄文時代または中近世	
11号土坑	XC 6 h	C Ⅲ～IV層	1.89.172.61	不整形 平坦	小礫を不規則に含む黒褐色土が主体。自然堆積と思われる	縄文土器片3 縄文または中近世	
12号土坑	XC 5 h	C IV層	75.73.20	不整形円形 凹凸	黒褐色土に小礫を含む自然堆積	なし 縄文時代の可能性が高い	
13号土坑	XC 5 h	C IV層上面	99.98.25	円形 平坦	地山ブロックを多量に含む人為堆積	縄文土器片1 縄文時代の可能性が高い	
14号土坑	X I C 4	AB IV層	169.131.92	不整形円形 平坦	人為堆積	なし 中近世の可能性はある	15号土坑 より新
15号土坑	X I C 4	AB IV層上面	337.178.25	不整形 平坦	にぶい黄褐色土の単層	なし 中近世の可能性はある	14号土坑 より古
16号土坑	XC 5 h	C IV層	85.75.14	円形 平坦	小石を多く含む黒褐色土、人為堆積の可能性はある	なし 中近世の可能性はある	
18号土坑	XC 7 g	C IV層上面	150.81.53	隅丸方形 平坦	埋土下層にいくほど地山ブロックを多く含む人為堆積	なし 時期不明	墓の可能 性あり
19号土坑	XC 7 g	C IV層	183.102.35	長円形 平坦	小礫や地山ブロックを不規則に含む人為堆積	縄文土器片5 時期不明	墓の可能 性あり
20号土坑	XC 3 f	C IV層上面	72.63.21	不整形円形 凹凸	黒褐色土や暗褐色土からなり、人為堆積の可能性はある	なし 時期不明	
22号土坑	X I C 3 d	B IV層	92.83.14	不整形円形 平坦	自然堆積	なし 時期不明	

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸・ 短軸、深さ	形状 底面	埋 土	出土遺物 時期	その他
23号土坑	X C10e	C IV層	106.83.26	不整形円形 やや凹凸	地山ブロックを不規則に含む人為堆積	なし 時期不明	
24号土坑	欠番				駒IIで使った		
25号土坑	X C8g	C IV層	166.81.12	長円形 やや丸味	黒褐色土の単層	なし 時期不明	墓の可能性あり
1号墓墳	X I B7j	A IV層	112.112.53	ほぼ円形 平坦	遺構検出面中央部に径24cm程の扁平な礫が置かれていた 人為堆積。人骨の残りは良いとはいえない。底部中央よりやや北側に頭部、その周辺に腕・脚と思われる部位 煙管・銭は北西側にまとめて置かれていたようだ。遺物はすべてを掲載		
2号墓墳	X I C6a	A IV層	160.143.75	不整形円形 概ね平坦	人為堆積 人骨の残りは本遺構が最も良かった。やや北西側に寄った位置に折り曲げられた脚部、そのすぐ上には頭部がほぼ原形を留めた状態で残っていた 顔は北東側を向く 桃と見られる種が約15個、銭は6点		
3号墓墳	X I B7i	A IV層	157.88.46	長円形 平坦	人為堆積 底面付近やや北寄りに頭部や脚部等の骨が少し残っていた		
4号墓墳	X I b7j	A IV層	150.88.44	不整形 平坦	人為堆積 人骨は出土しなかった		
5号墓墳	X I C10b	B IV層	112.93.43	不整形円形 平坦	底面より30cmほど上位に径20cmの円礫と拳大の礫が入れられていた。人為堆積	人骨の残りはよくない 腕・脚他の小片と煙管が 底面北側。	
6号墓墳	X I C9e	BC IV層	163.89.50	長円形 概ね平坦	人為堆積。黒褐色土に地山ブロックを不規則に含む	人骨、遺物は出土していない。近世か	3号墓墳に似る

(5) 陥し穴状遺構

6基の陥し穴状遺構が見つまっている（第56・57図、写真図版41・42）。個々の諸特徴については観察表にまとめた。

第28表 陥し穴状遺構観察表

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸・ 短軸、深さ	形状 底面	埋 土	出土遺物 時期	その他
1号陥し穴	X C3e	BC IV層	(200).47.50	やや弓なり 平坦	上位は黒褐色土、中位は風化花崗岩粒、下位には砂礫が堆積	なし 縄文時代	
2号陥し穴	X I C8b	A IV層	219.72.95	長円形 概ね平坦	黒褐色土、風化花崗岩粒、黄褐色土が流れ込むように堆積	なし 縄文時代	
3号陥し穴	X I C4b	A IV層	345.155.95	長円形 逆茂木の柱穴4個	黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土の流れ込み。自然堆積	なし 縄文時代	底面南端にもう1個小穴があるのではないかと探したがなかった
4号陥し穴	X I C4b	A IV層	267.42.97	長円形 中央部が最も深い	周囲の土砂が流れ込んだ様相を呈する	なし 縄文時代	3号陥し穴との新旧関係は不明
5号陥し穴	X I C6d	AB IV層	208.53.22	長円形 平坦	暗褐色土から褐色土が主体の自然堆積	なし 縄文時代	
6号陥し穴	X I C6e	BC IV層	297.48.58	長円形 逆茂木の柱穴3個	周囲の土砂が流れ込んだ様相を呈する	なし 縄文時代	

(6) 炭 窯 跡

1基のみの検出である（第61図、写真図版46）。遺構の特徴については表に整理した。

第29表 炭窯跡観察表

遺構名	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸・ 短軸、深さ	形状 底面	埋 土	出土遺物 時期	その他
1号炭窯跡	X I C2b	A IV層	280.95.16	不整形長円形 やや凹凸ある	炭小粒を多量に含む黒褐色土	なし 古代か	残りが悪く、炭窯の構造についての詳細は不明

(7) 焼土遺構

調査区北側の平坦面において23基の焼土遺構を検出した(第58~60図、写真図版42~44)。これらの焼土遺構は南北約18m、東西約11mの広がりを持ち、不規則ながらも南北方向へ連なるように分布していた。よって焼土群として捉えることも可能かもしれないし、本来は住居跡に伴っていた遺構かもしれない。調査中にはこれら焼土群を中心に多くの土層観察用のベルトを設定し、住居跡の検出につとめたが、見つからなかった。各焼土遺構はⅡ層(黒褐色土)から検出されるものが主体で、その中でもⅡ層中位から下位にて確認される遺構が多かった。その場で火を焚いてできたのが多く、別の場所から持ち込まれた(この地に廃棄された)ようなものは殆どないようである。但し規模の小さい焼土遺構については判断に迷うものもあった。これら焼土群は南側及び東側の調査区外へ延びている可能性が高い。各遺構の規模については検出面での長軸×短軸×深さ(cm)で記している。

第30表 焼土遺構観察表

計測値の単位: cm

遺構	位置 グリッド	立地 検出面	規模 長軸, 短軸, 深さ	形状	被熱土、性格	出土遺物 時期	その他
1号焼土	XC7h	C Ⅱ層	東: 43.33.4 西: 23.13.4	長円形 不整形	ともに暗赤褐色の単層 現地性	なし 縄文時代	
2号焼土	XC5h	C Ⅱ層	30.29.3	円形	赤褐色で黒褐色土が混じる 現地性 焼土	なし 縄文時代	
3号焼土	XC5g	C Ⅱ層	53.42.6	卵形	中心部は明赤褐色で周囲はこれに黒 色土が混じる 現地性焼土	なし 縄文時代	
4号焼土	XC4g	C Ⅱ層	17.14.2	長円形	明赤褐色の単層 性格は不明	なし 縄文時代	
5号焼土	XC4e	C Ⅱ層	53.27.8	長円形	明赤褐色で遺構検出面部分が最もよ く焼けていた 現地性焼土	なし 縄文時代	
6号焼土	XC4f	C Ⅱ層	65.55.9	不整形	赤褐色で礫周辺が最もよく焼けてい る 現地性焼土	縄文土器片8点 縄文時代	
7号焼土	XC7h	C Ⅱ層	西: 3.57.13 東: 80.37.5	不整形	橙色から赤褐色を呈する。現地性焼土	縄文土器片4点 縄文時代	
8号焼土	XC6h	C Ⅱ層	51.37.3	長円形	赤褐色土の単層 現地性焼土の可能 性あり	なし 縄文時代	
9号焼土	XC6h	C Ⅱ層	54.45.5	長円形	黒色土が混じる明赤褐色を呈する 現地性焼土の可能性あり	縄文土器片2点 縄文時代	
10号焼土	XC6f	C Ⅱ層	97.64.9	不整形	明赤褐色の単層で焼成はよくない 現地性焼土の可能性あり	縄文土器片4点 縄文時代	
11号焼土	XC6g	C Ⅱ層	北: 35.25.7 南: 30.23.8	不整形	ともに暗赤褐色の単層で焼成は弱い 現地性焼土の可能性あり	なし 縄文時代	
12号焼土	XC6g	C Ⅱ層	92.83.11	不整形	中央部が特によく焼けている。現地性 焼土。	縄文土器片1点 縄文時代	
13号焼土	XC7g	C Ⅱ層	70.58.15	不整形	明赤褐色の単層 現地性焼土	なし 縄文時代	
14号焼土	XC7g	C Ⅱ層	58.38.9	不整形	橙色でよく焼けている 現地性焼土	縄文土器片1点 縄文時代	
15号焼土	XC7g	C Ⅱ層	132.97.14	不整形	明赤褐色を呈し、上位ほどよく焼けて いる。現地性焼土	なし 縄文時代	
16号焼土	XC8h	C Ⅱ層	150.137.15	不整形	焼土ブロックを多量に含む。その場で 火を焚いたのか、別の場所から持ち込 まれたのが判然としない	縄文土器片18点 縄文時代	
17号焼土	XC8h	C Ⅱ層	86.58.12	不整形	上位に薄く淡橙色焼土、その下はよく 焼けた明赤褐色焼土 現地性	縄文土器片3点 縄文時代	
18号焼土	XC7f	C Ⅱ層	22.18.2	不整形	その場で火を焚いたものか、別の場所 から持ち込まれたものか判然としない。	なし 縄文時代	
19号焼土	XC8h	C Ⅱ層	99.92.15	円形	よく焼けた明赤褐色焼土。現地性焼 土。	縄文土器片4点 縄文時代	
20号焼土	XC7g	C Ⅱ層	146.97.18	不整形	南半はよく焼けた明赤褐色焼土 北 半には焼土ブロックとなって広がる 現地性焼土	縄文土器片3点 縄文時代	
21号焼土	XC8h	C Ⅱ層	149.116.25	不整形	中央はよく焼け、周辺には焼土ブロッ クが広がっている 現地性	縄文土器片17点 縄文時代	
22号焼土	XC7h	C Ⅱ層	33.14.14	不明	その場で火を焚いたものか、別の場所 から持ち込まれたものか判然としない	縄文土器片3点 縄文時代	西側に延びていたが、風倒木 によって攪乱を受けていた
23号焼土	XC6g	C Ⅱ層	58.25.16	不整形	明赤褐色の単層 現地性焼土	なし 縄文時代	西側は掘りすぎて失ってし まった

(8) その他の遺構

1号集石 (第61図、写真図版45)

北側調査区に位置し、Ⅲ層下位面で検出された。Ⅲ層は礫を殆ど含まない層である。加工の無い角礫を不整形にまとめたように置かれている。礫群の下位に土坑や土器埋設といった施設は何もない。本遺構は16号焼土遺構の下、約4 cmから検出されており、両遺構は関連のあった可能性がある。

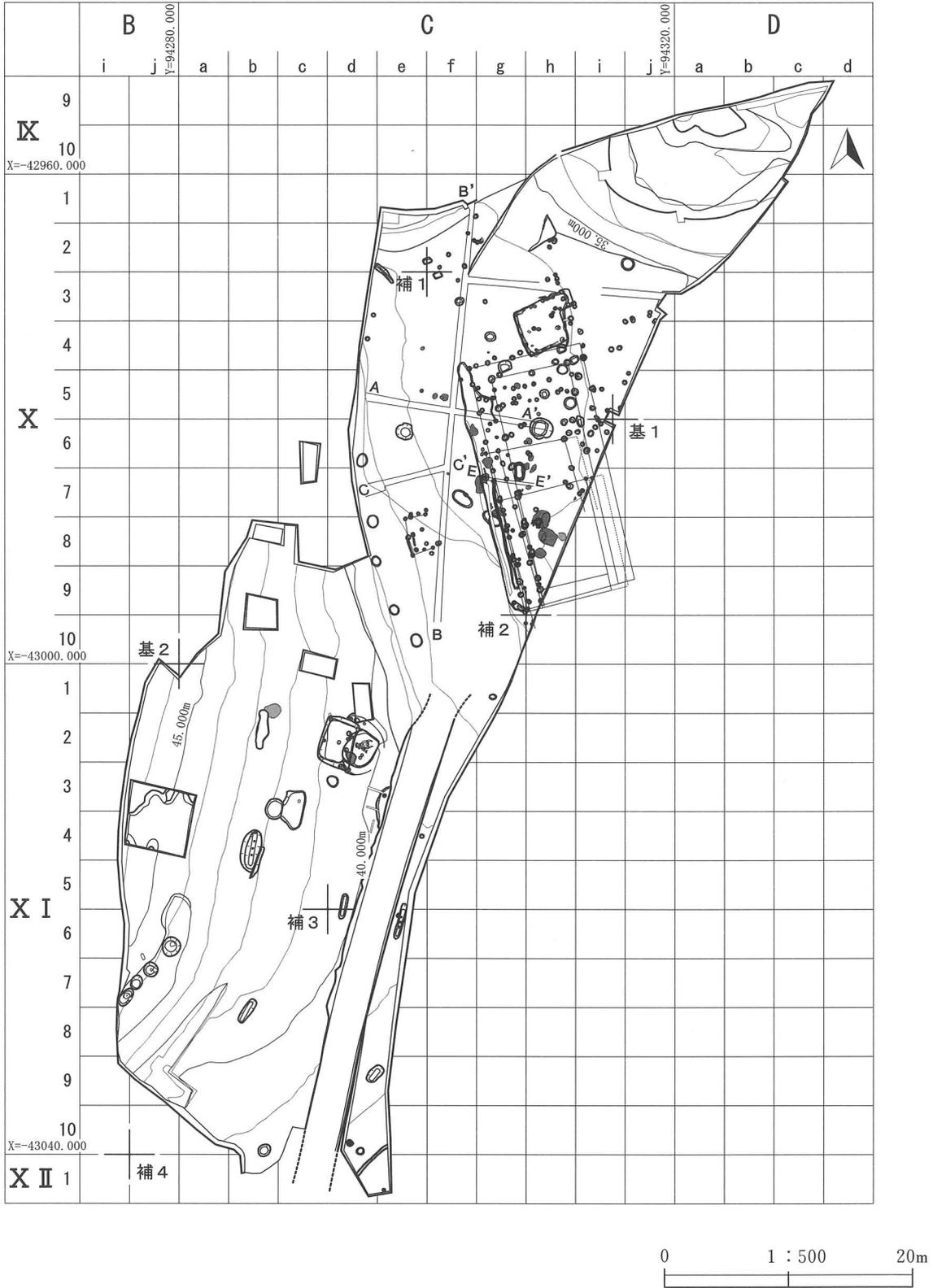
1号溝跡 (第48図、写真図版45)

北側調査区に位置し、Ⅲ層中位から下位面で検出された。1号掘立柱建物跡の雨落ち溝と見られる。遺物は出土していない。

2号溝跡 (第48図、写真図版45)

1号溝跡とほぼ同じ場所にあり、検出面もほぼ同じである。2・3号掘立柱建物跡の雨落ち溝と思われる。出土遺物はない。

1 検出遺構

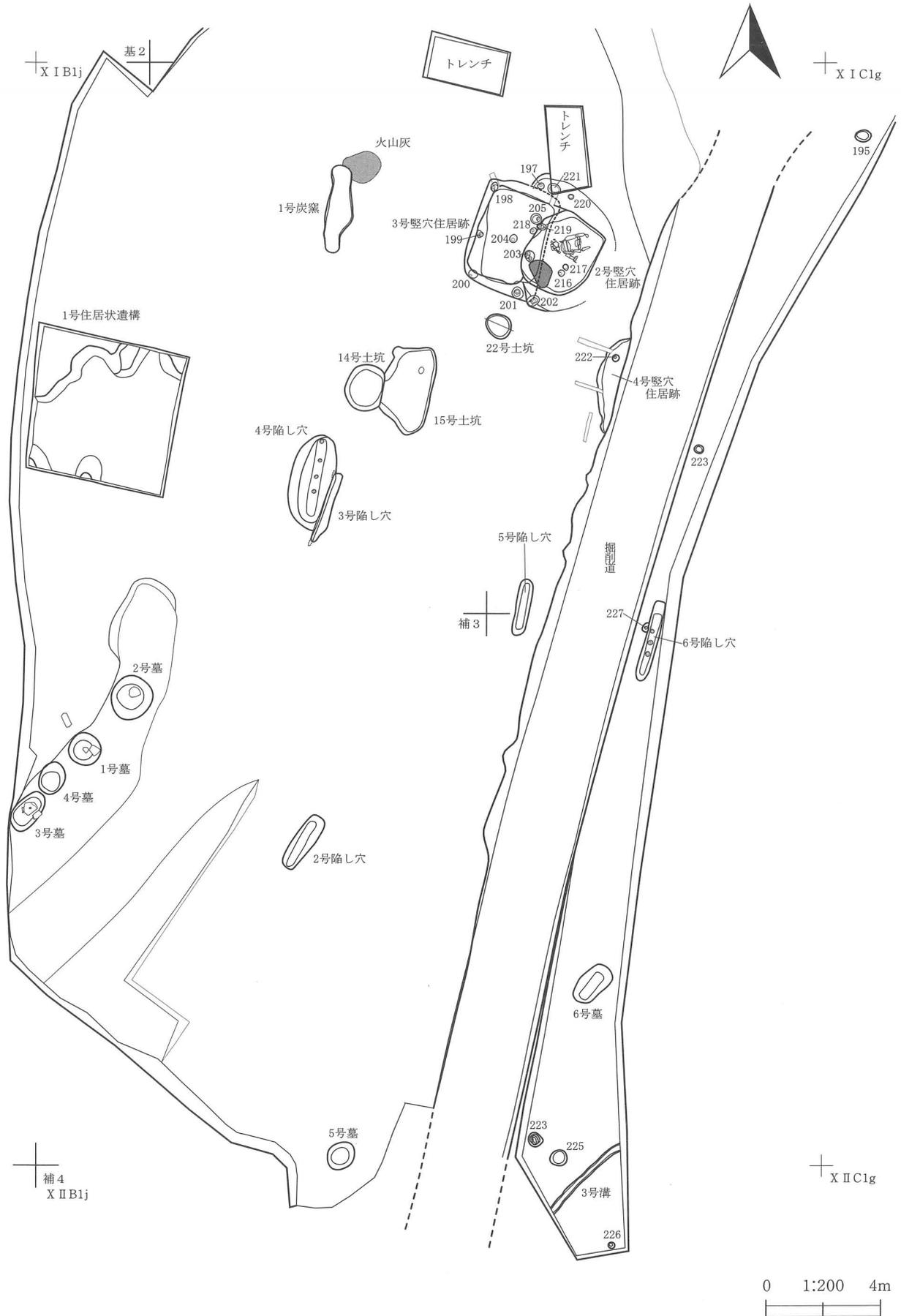


第42図 グリッド配置図



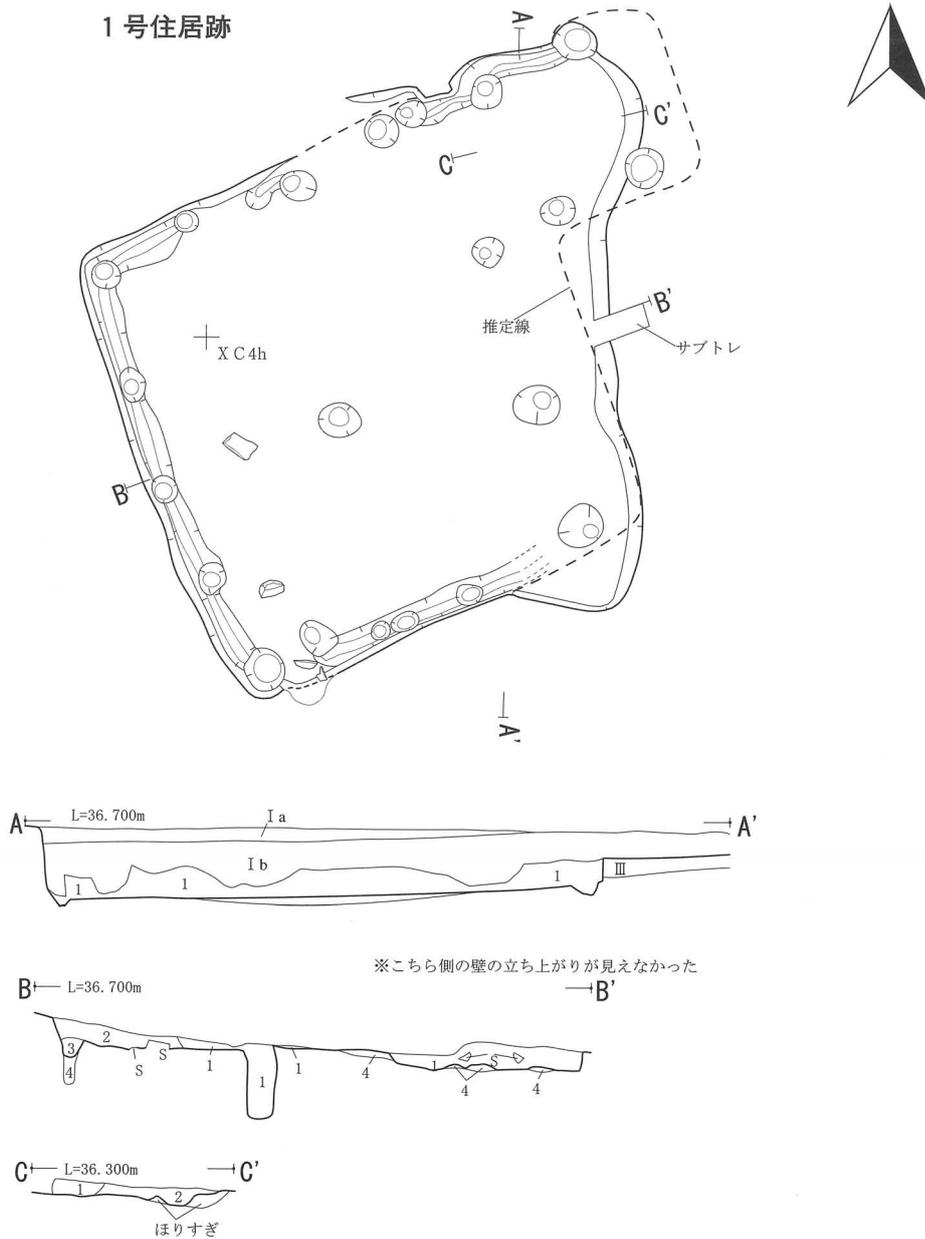
第43図 遺構配置図(1)

1 検出遺構

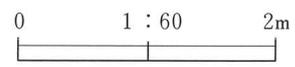


第44図 遺構配置図(2)

1号住居跡



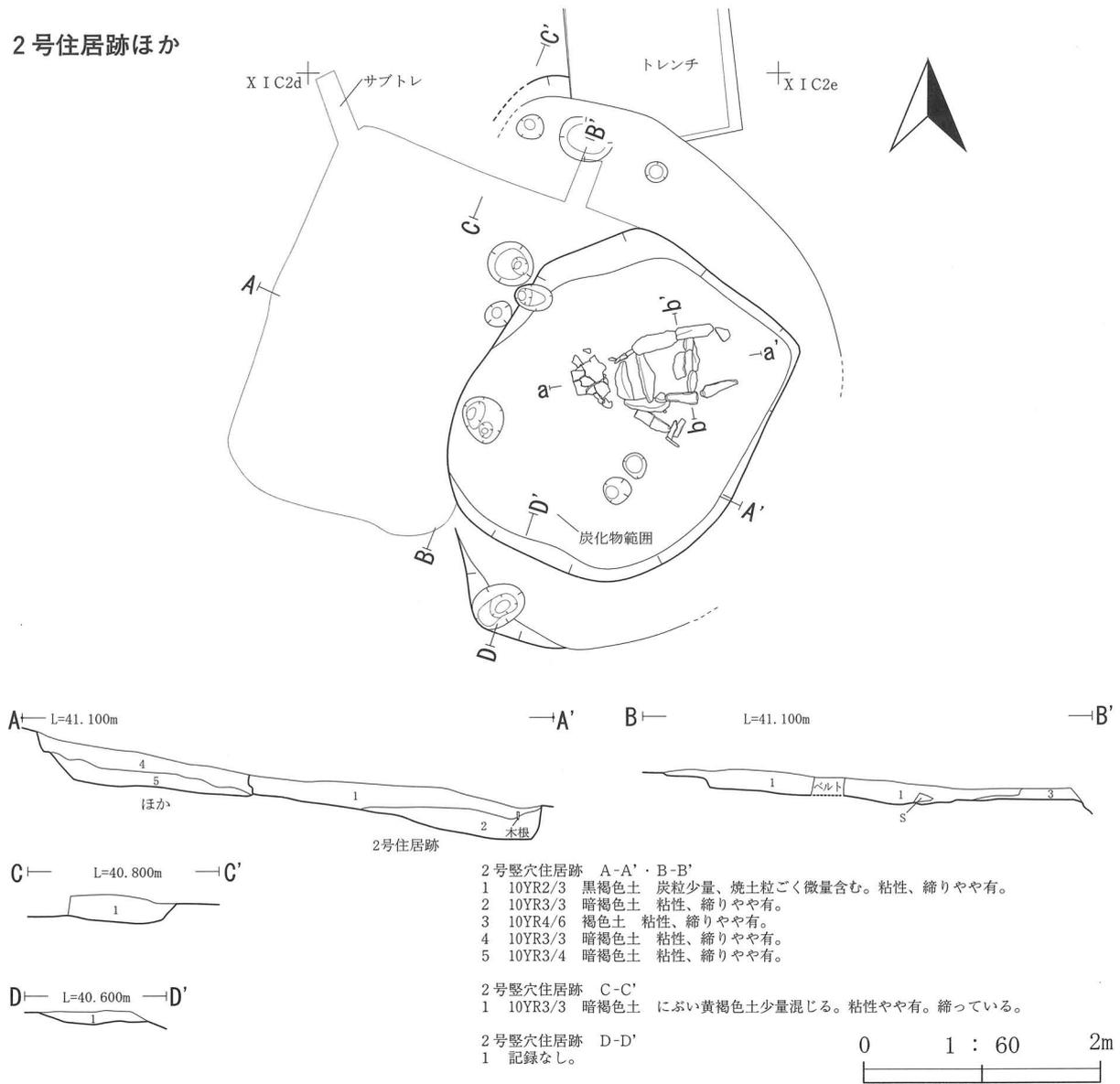
- 1号竪穴住居跡 Aセク
- Ia 10YR3/3 暗褐色表土 粘性弱。締っている。
 - Ib 10YR3/2 黒褐色土 小石多量に含む。粘性弱。締っている。
 - III 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
 - 1 10YR2/2 黒褐色土 部分的に黄褐色土微量含む。粘性、締りやや有。(自然堆積か)
- 1号竪穴住居跡 Bセク
- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱。締りやや有。
 - 2 10YR3/2 黒褐色土 小石少量含む。粘性弱。締りやや有。
 - 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性弱。締り弱。
 - 4 10YR5/8 黄褐色風化花崗岩 柱穴の壁及び床面掘りすぎ部分。
- 1号竪穴住居跡 Cセク
- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締り弱。カクラン。
 - 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性。締りやや有。



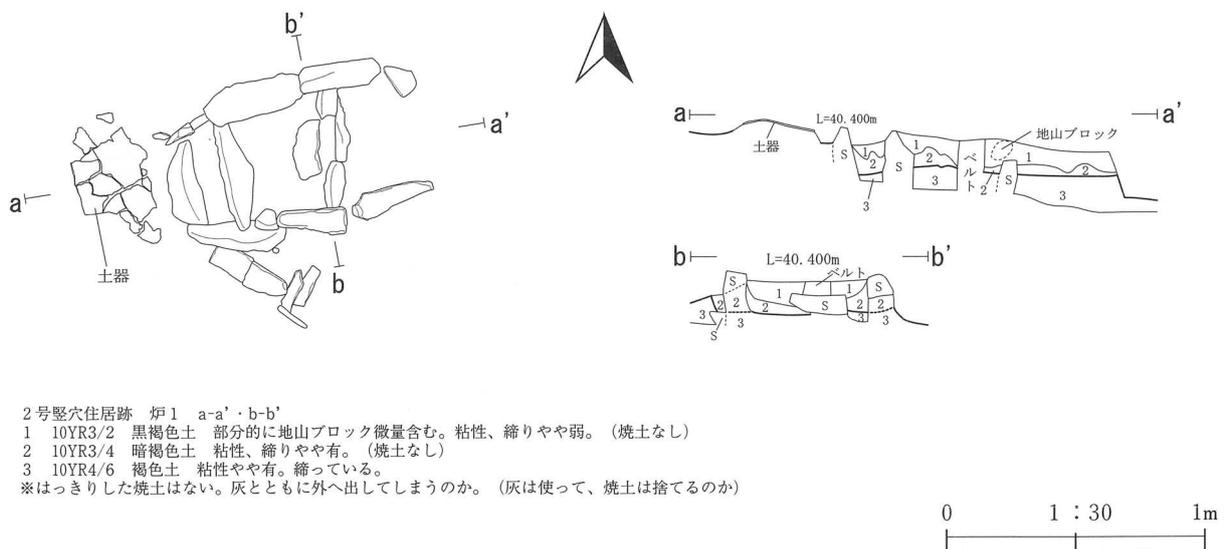
第45図 竪穴住居跡(1)

1 検出遺構

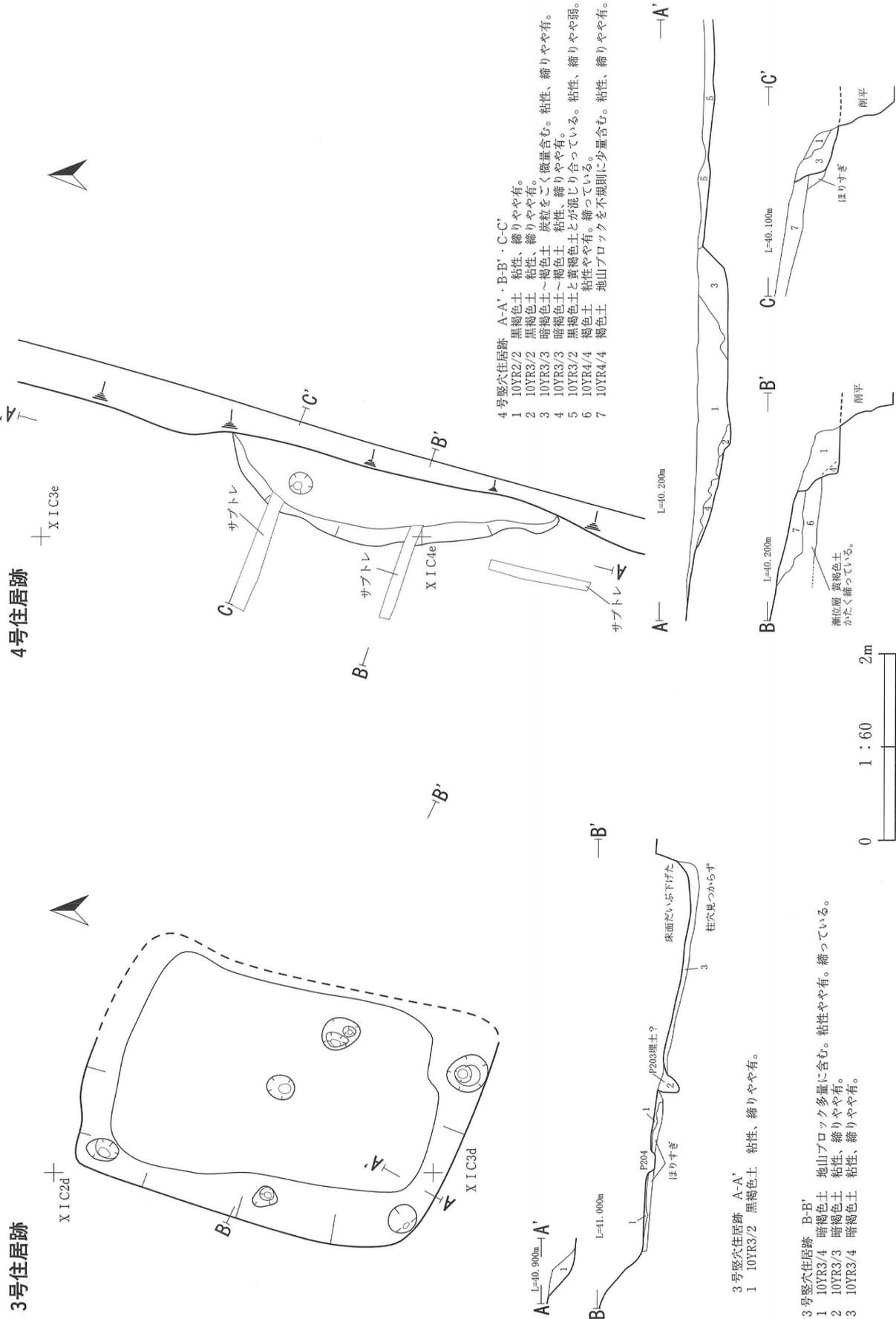
2号住居跡ほか



2号住居跡 炉

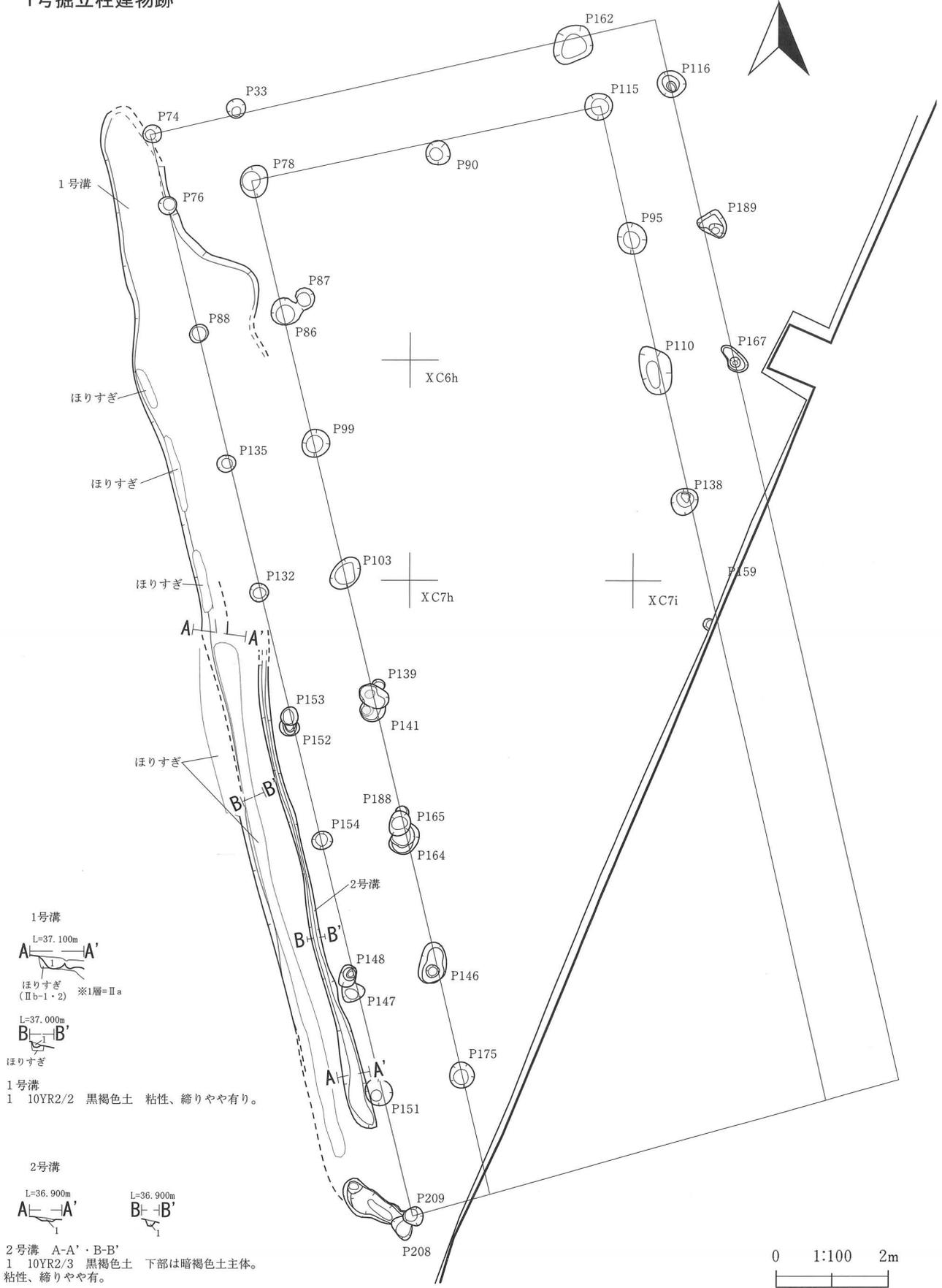


第46図 堅穴住居跡 (2)



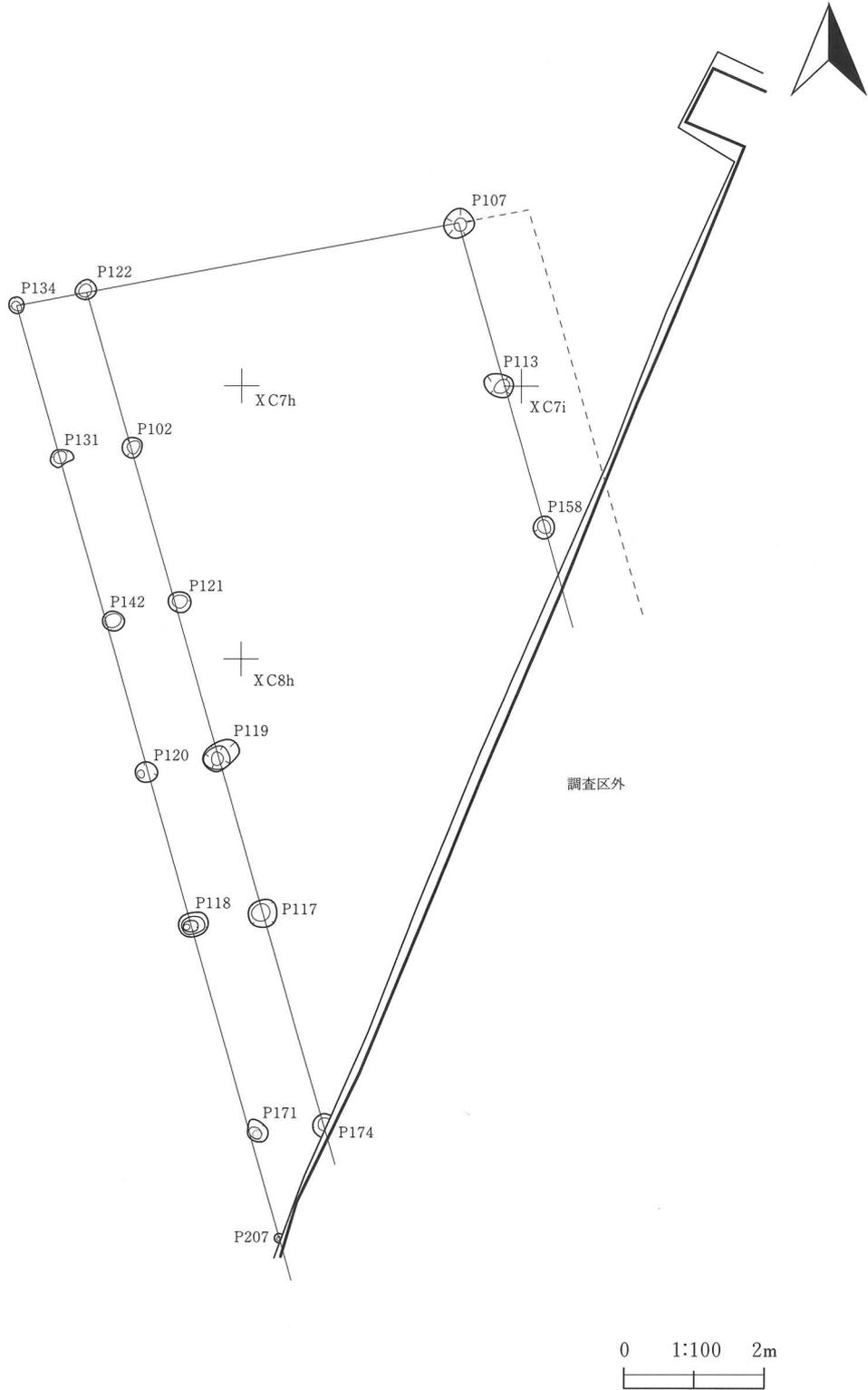
第47図 竪穴住居跡 (3)

1号掘立柱建物跡



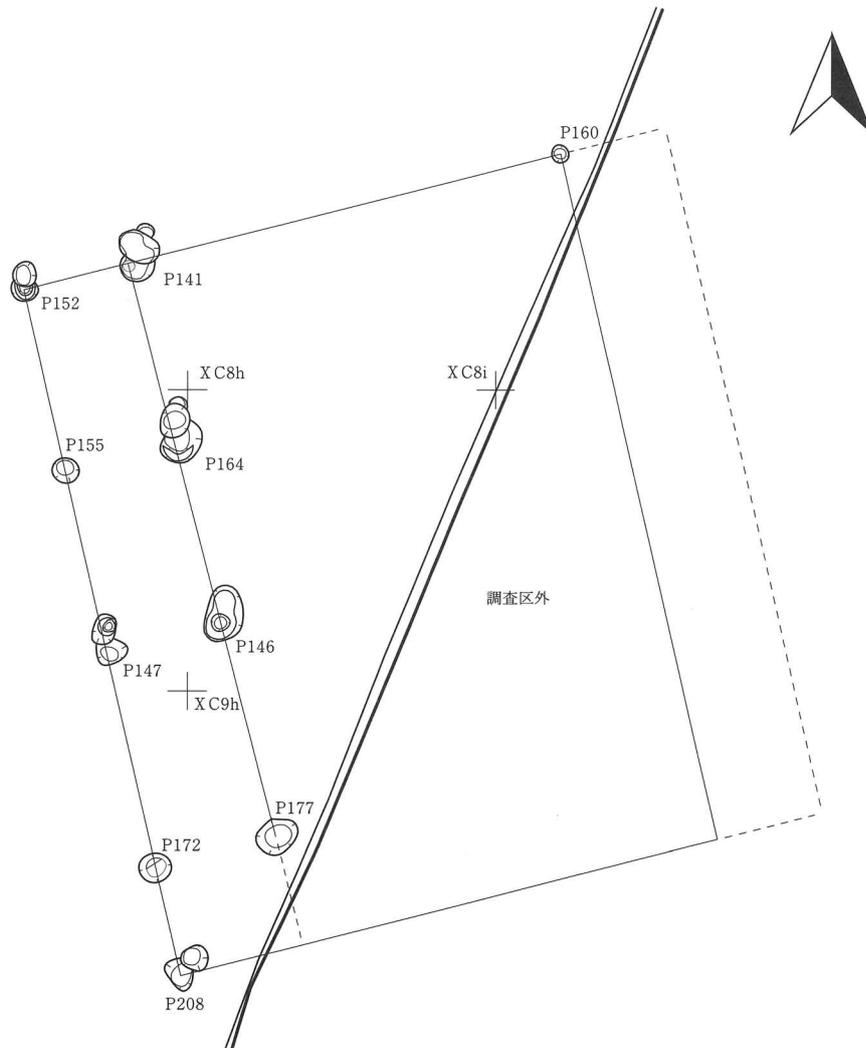
第48図 掘立柱建物跡 (1)

2号掘立柱建物跡

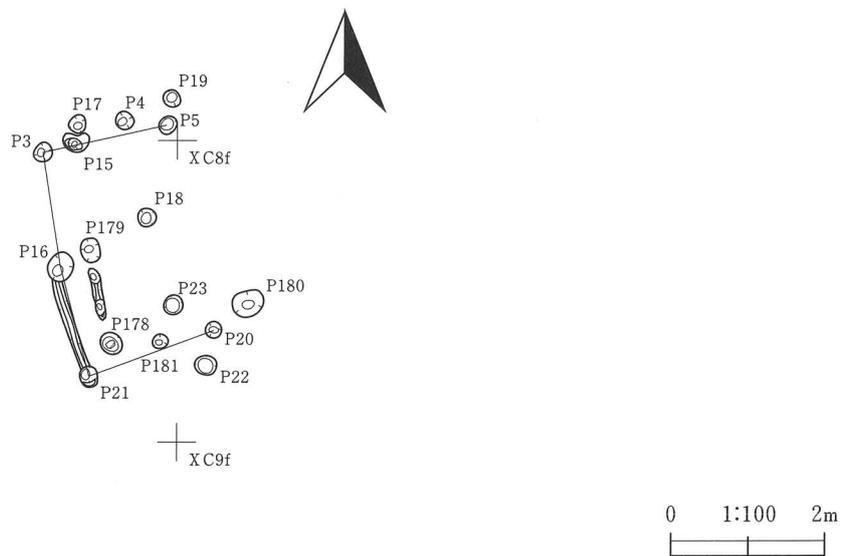


第49図 掘立柱建物跡（2）

3号掘立柱建物跡

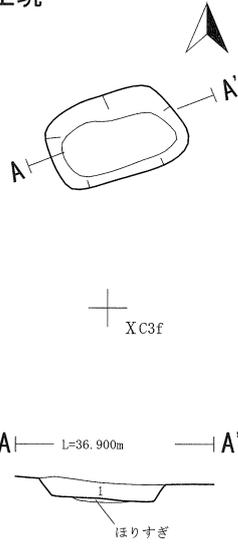


4号掘立柱建物跡



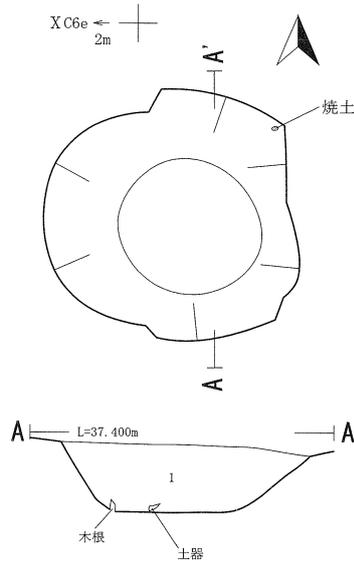
第50図 掘立柱建物跡 (3)

1号土坑



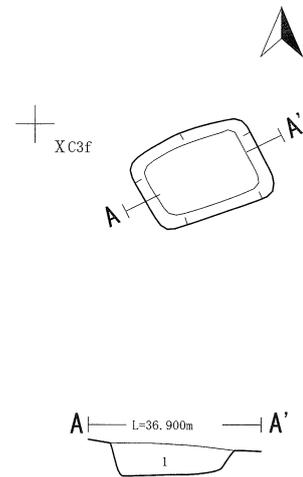
1号土坑
1 10YR3/2 黒褐色土 粘性弱。締り弱。
3号土坑に似る。(人為堆積か?)

2号土坑



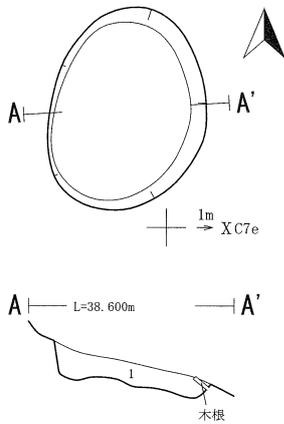
2号土坑
1 10YR2/1 黒色土 白色浮石(?)多量に含む。
粘性、締りやや有。人為堆積か自然堆積か不明
だが、人為堆積ではないと考えられる。

3号土坑



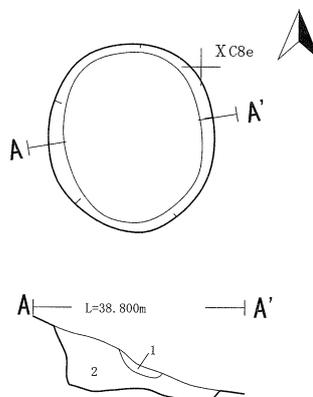
3号土坑
1 10YR3/2 黒褐色土 明黄褐色土ブロックを
多量に含む。粘性、締りやや弱。人為堆積。

4号土坑



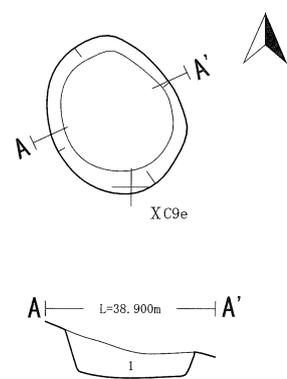
4号土坑
1 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック微量含む。
粘性やや有。締り弱。人為堆積。

5号土坑



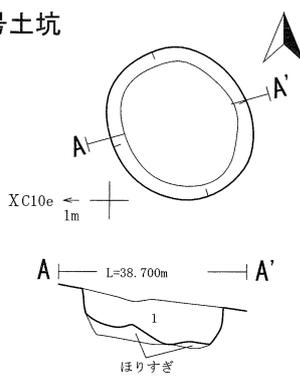
5号土坑 (人為堆積)
1 10YR6/8 明黄褐色土 粘性やや有。
締り弱。
2 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック少量
含む。粘性やや有。締り弱。

6号土坑



6号土坑
1 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック
多量に含む。粘性やや有。締り弱。

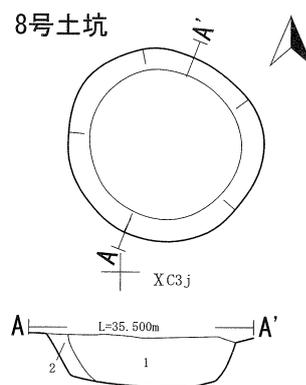
7号土坑



7号土坑
1 10YR4/2 灰黄褐色土 地山ブロック多量に含む。
粘性やや有。締り弱。

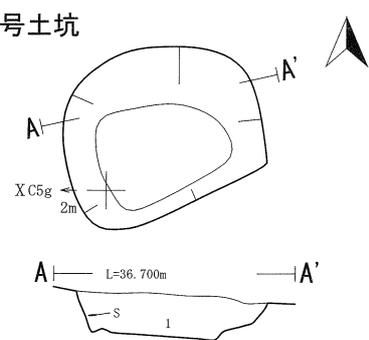
※ 4~7号土坑は同じ目的で作られたものではないか。

8号土坑

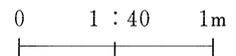


8号土坑
1 10YR2/1 黒色土 粘性、締りやや有。
2 10YR3/1 黒褐色土 粘性、締りやや有。
人為堆積。

9号土坑



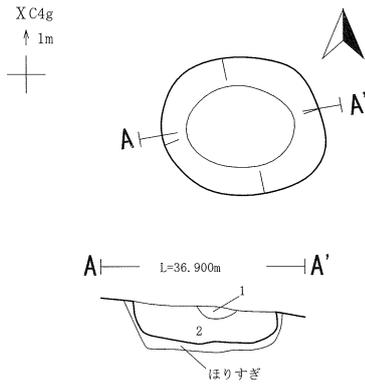
9号土坑 (自然堆積か)
1 10YR2/3 黒褐色土を主体に褐色土や黄褐色砂などが
流れ込んだように堆積している。粘性、締りやや有。



第51図 土坑(1)

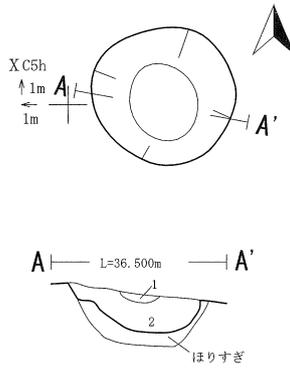
1 検出遺構

10号土坑



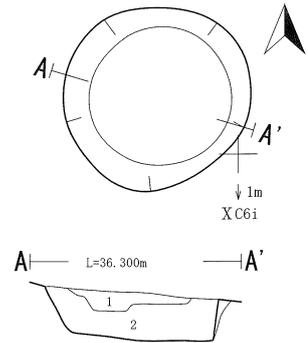
- 10号土坑 (人為堆積)
 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締りやや有。
 2 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック少量含む。粘性やや有。締っている。

12号土坑



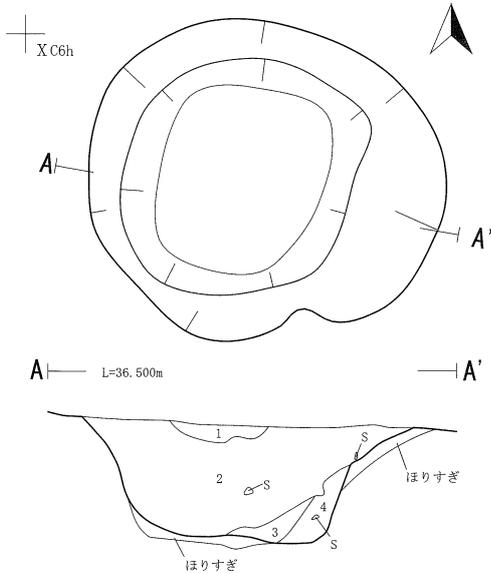
- 12号土坑 (自然堆積か)
 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性やや弱、締りやや有。
 2 10YR3/2 黒褐色土 小礫多量に含む。粘性やや弱。締っている。

13号土坑



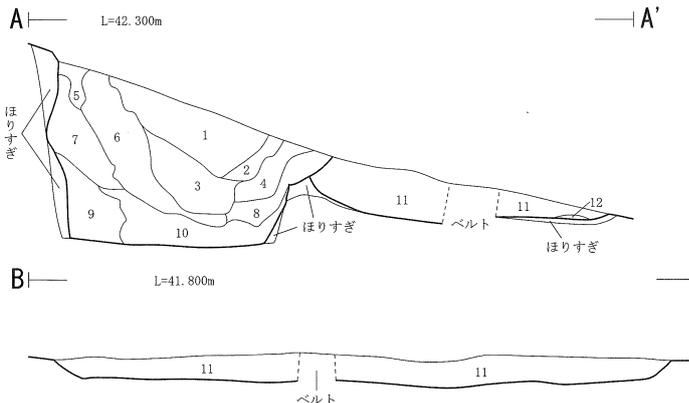
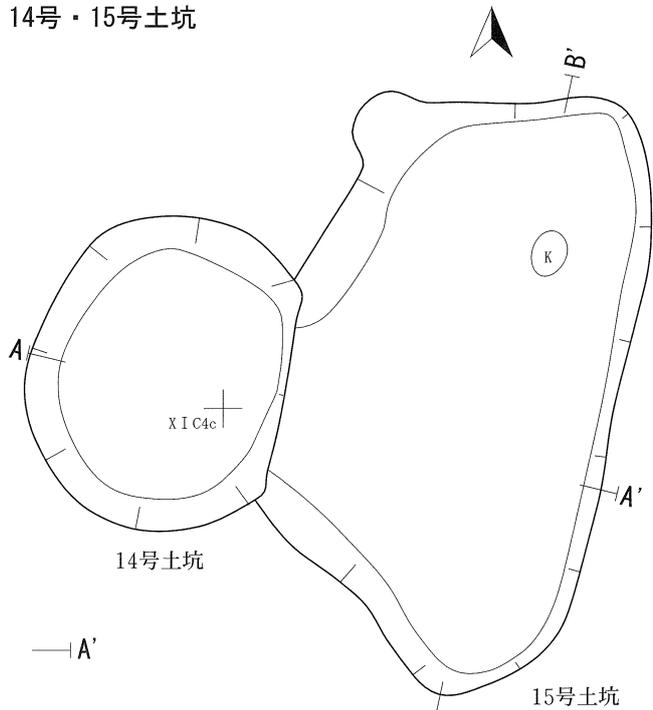
- 13号土坑
 1 10YR2/3 黒褐色土 小石多量に含む。粘性やや弱。締りやや有。
 2 10YR3/2 黒褐色土 地山ブロック、小石多量に含む。粘性やや弱。締っている。

11号土坑

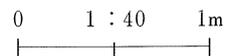


- 11号土坑
 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性やや弱。締りやや有。
 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱。締りやや有。小石不規則に含む。
 3 10YR3/3 暗褐色土 中小礫含む。粘性、締りやや有。
 4 10YR4/6 褐色土 小礫含む。粘性、締りやや有。

14号・15号土坑

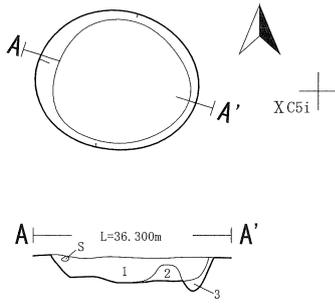


- 14号・15号土坑
 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締りやや有。14号・15号土坑
 2 10YR4/4 褐色土 粘性、締りやや有。
 3 10YR2/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
 4 10YR5/6 黄褐色土 粘性やや弱、締りやや有。
 5 10YR5/6 黄褐色土 暗褐色土との混合。粘性やや弱。締りやや有。
 6 10YR3/3 暗褐色土 粘性、締りやや有。
 7 10YR5/8 黄褐色土 黒褐色土少量混じる。粘性、締りやや弱。
 8 10YR5/6 黄褐色土 黒褐色土多量混じる。粘性、締りやや有。
 9 10YR5/6 黄褐色土 粘性、締りやや有。
 10 10YR4/4 褐色土 黒褐色土微量含む。粘性、締りやや有。
 11 10YR4/3 にぶい黄褐色土 粘性やや弱。締りやや有。
 12 記録なし。



第52図 土坑 (2)

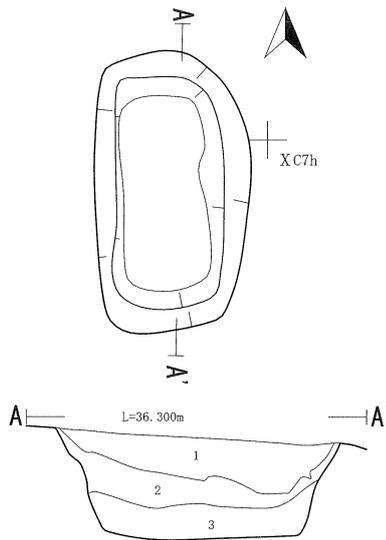
16号土坑



16号土坑

- 1 10YR2/2 黒褐色土 小石多量に含む。粘性弱。締りやや有。
- 2 10YR3/4 暗褐色土 粘性、締りやや有。
- 3 10YR4/4 褐色土と黒褐色土少量混じる。粘性、締りやや有。

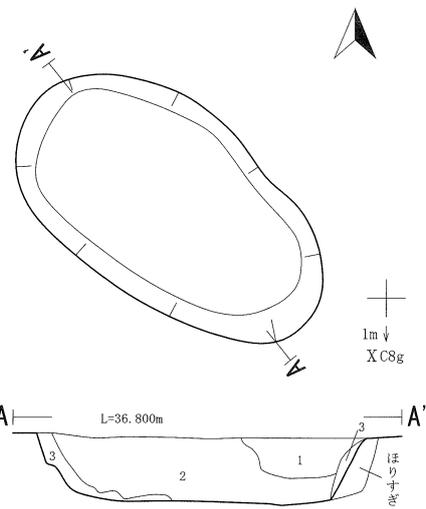
18号土坑



18号土坑

- 1 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締りやや有。
- 2 10YR2/2 黒褐色土 地山ブロック微量含む。粘性、締りやや有。
- 3 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック多量含む。粘性やや有。締っている。

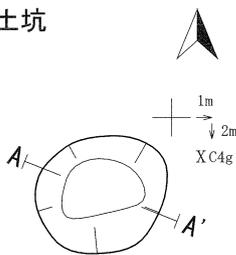
19号土坑



19号土坑

- 1 10YR2/2 黒褐色土 小石微量に含む。粘性、締りやや有。
 - 2 10YR2/4 黒褐色土 黄褐色土中小粒を不規則に含む。粘性、締りやや有。
 - 3 10YR2/3 暗褐色土 黄褐色土多量に含む（壁崩れ）。粘性、締りやや有。
- ※2層の土は混ざったような感じの土なので、人為堆積の可能性あり。

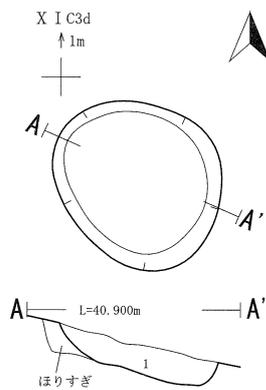
20号土坑



20号土坑

- 1 10YR2/2 黒褐色土 粘性、締りやや弱。
 - 2 10YR3/4 暗褐色土 地山ブロック微量含む。粘性、締りやや弱。
- ※おそらく人為堆積。

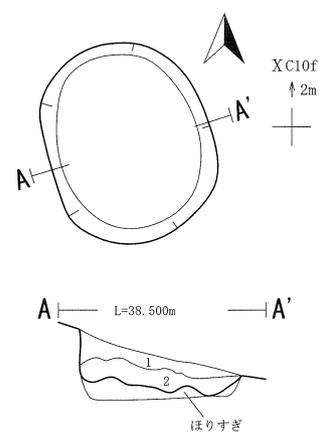
22号土坑



22号土坑

- 1 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色土少量含む。粘性、締りやや有。（自然堆積）

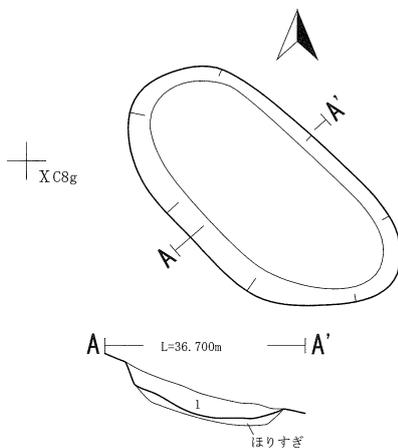
23号土坑



23号土坑

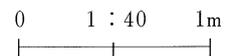
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色土 地山ブロックを少量含む。粘性なし。締りやや有。
- 2 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロックを少量含む。粘性、締りなし。

25号土坑

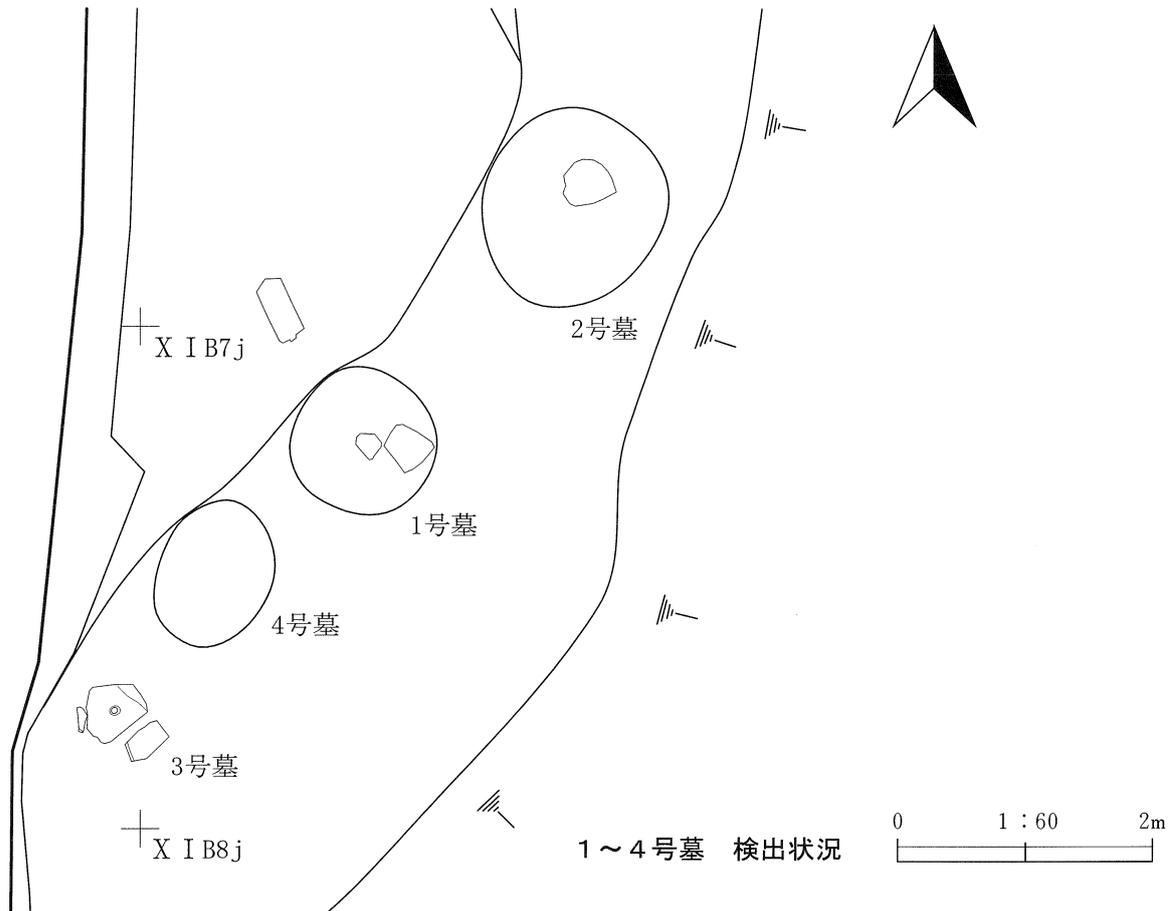


25号土坑

- 1 10YR3/1 黒褐色土 粘性やや有。締っている。

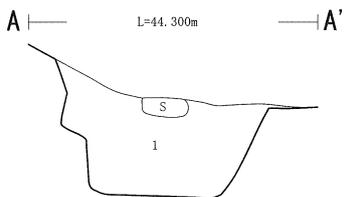
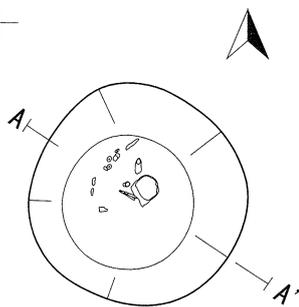


1 検出遺構



1号墓

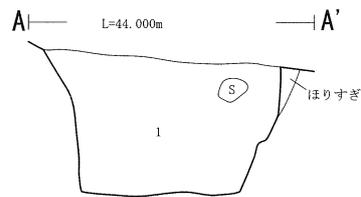
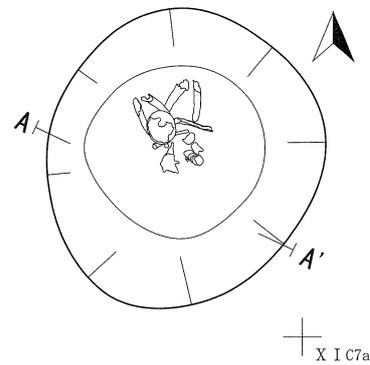
X I B7j ← 1m



1号墓

1 10YR3/2 黒褐色土 中央に大石を置いていた。
粘性やや弱。締りやや有。煙管・骨片出土。

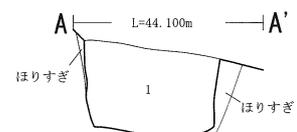
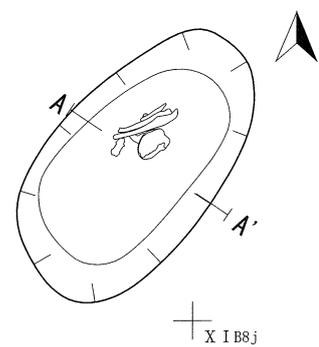
2号墓



2号墓

1 10YR3/2 黒褐色土 壁近くを中心に黄褐色風化
花崗岩少量混じる。粘性やや弱。締りやや有。
(人為堆積)

3号墓

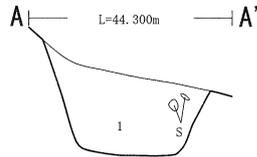
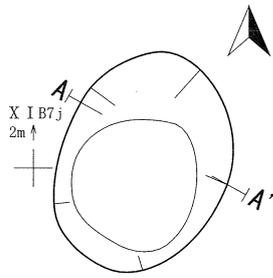


3号墓

1 10YR4/2 灰黄褐色土 風化花崗岩粒
多量に含む。粘性、締り弱。(人為堆積)

第54図 墓墳(1)

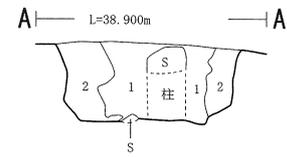
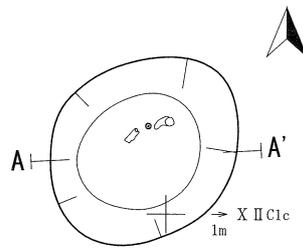
4号墓



4号墓

- 1 10YR4/2 灰黄褐色土 風化花崗岩粒多量を含む。粘性、締りやや弱。(人為堆積)

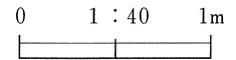
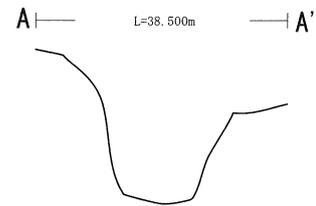
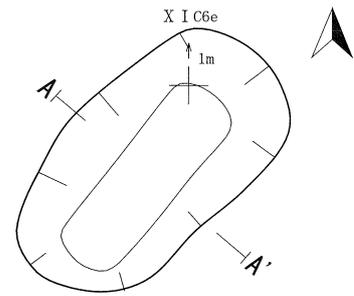
5号墓



5号墓

- 1 10YR2/1 黒色土 大礫が中央にある。粘性、締りやや有。
2 10YR2/3 黒褐色土 地山ブロック多量を含む。粘性やや有。締っている。

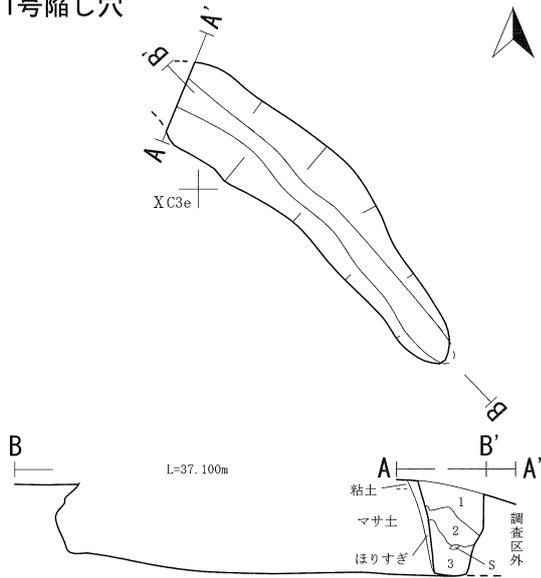
6号墓



第55図 墓墳(2)

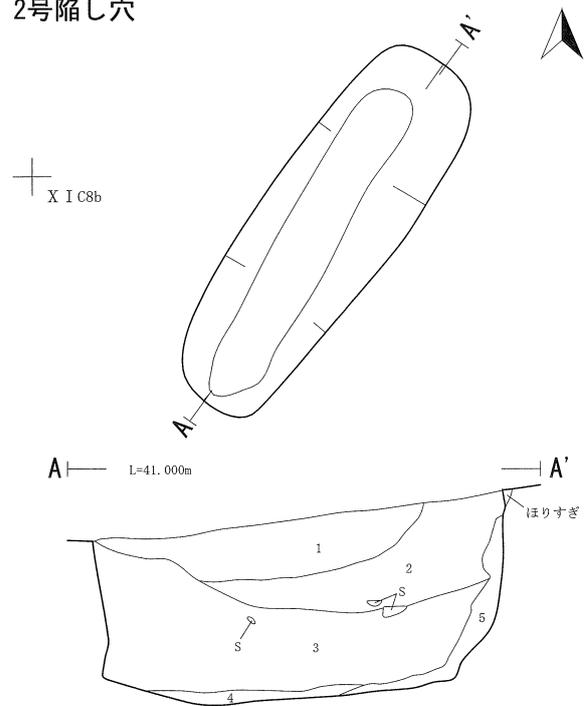
1 検出遺構

1号陥し穴



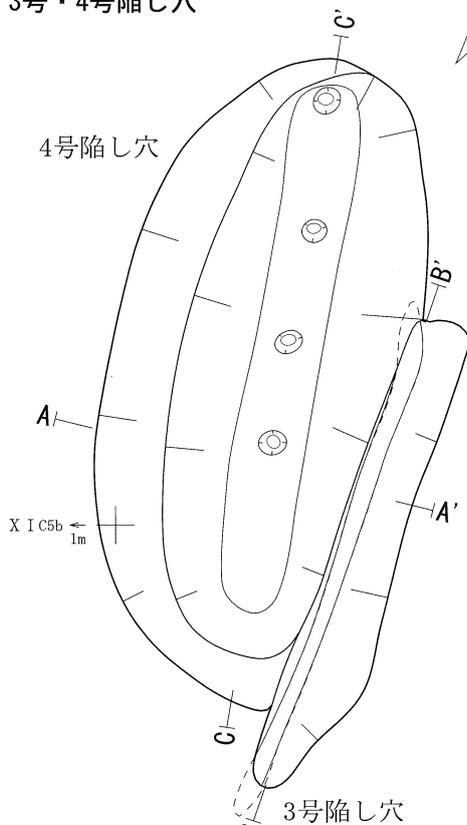
- 1号陥し穴
 1 10YR2/1 黒色土 粘性、締りやや有。
 2 10YR6/8 明黄褐色風化花崗岩粒(小) 粘性なし。締りやや有。
 3 10YR4/3 におい黄褐色砂礫 粘性弱。締りやや有。

2号陥し穴

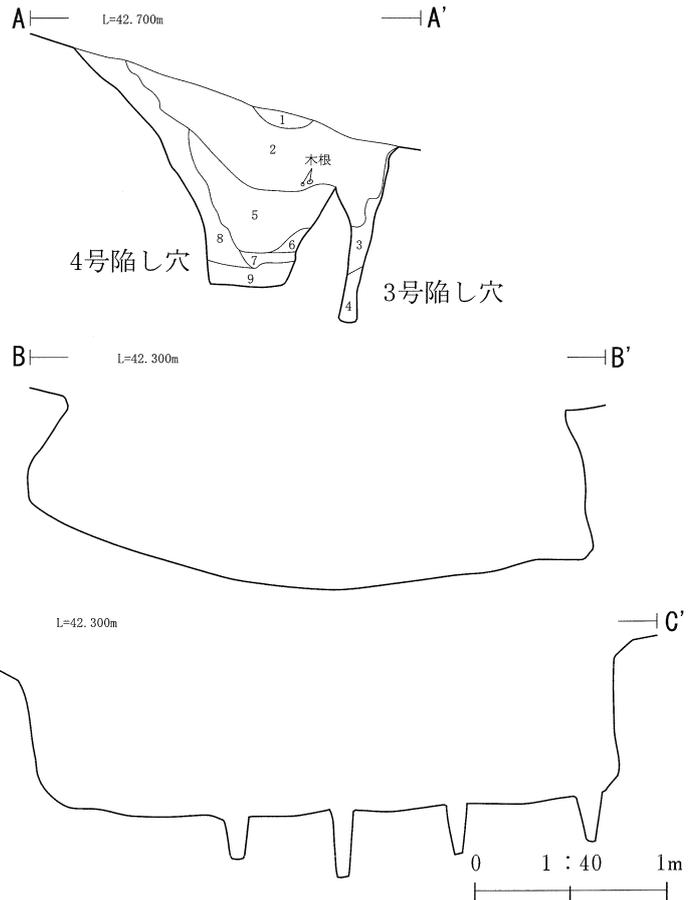


- 2号陥し穴
 1 10YR2/3 黒褐色土 小石多量に含む。粘性、締りやや有。
 2 10YR2/2 黒褐色土 中小の石少量含む。粘性、締りやや有。
 3 10YR3/2 黒褐色土と黄褐色粘土及び風化花崗岩が流れ込んだように堆積 粘性やや弱。締りやや有。
 4 10YR5/6 黄褐色土 粘性やや有。締っている。
 5 10YR7/2 におい黄褐色火山灰(中振か?) 粘性弱。締っている。

3号・4号陥し穴

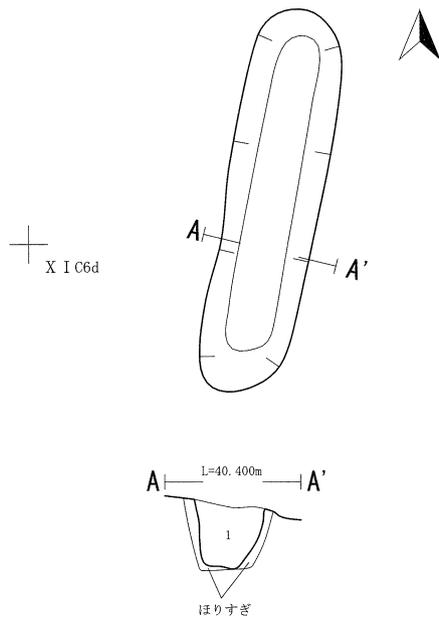


- 3号・4号陥し穴
 1 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性、締りやや弱。
 2 10YR2/2 黒褐色土 粘性、締りやや有。
 3 10YR5/3 黄褐色土 黒褐色土ブロック多量に含む。粘性やや有。締りやや弱。
 4 10YR5/3 黄褐色土 黒褐色土ブロック微量含む。粘性やや有。締りやや弱。
 5 10YR3/3 暗褐色土 黄褐色土ごく微量含む。粘性、締りやや有。
 6 10YR5/8 黄褐色土 粘性やや有。締っている。
 7 10YR2/3 黒褐色土 粘性、締りやや弱。
 8 10YR5/8 黄褐色土 黒褐色土多量に混じる。粘性、締りやや弱。
 9 10YR4/3 におい黄褐色土 粘性、締りやや弱。



第56図 陥し穴状遺構(1)

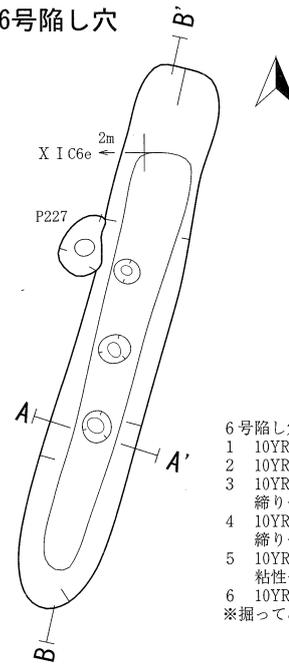
5号陥し穴



5号陥し穴

- 1 10YR4/3 暗褐色～褐色土 黄褐色土ブロック少量含む。
粘性、締りやや有。

6号陥し穴



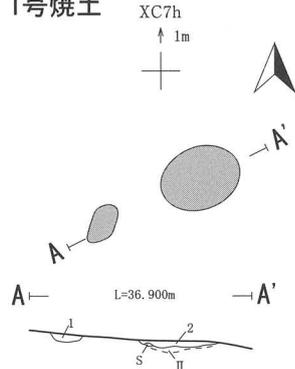
6号陥し穴

- 1 10YR3/2 黒褐色土 粘性、締りやや弱。
2 10YR5/6 黄褐色土 粘性、締りやや有。
3 10YR4/4 褐色土とにぶい黄褐色土との混合土 粘性やや弱。
締りやや有。
4 10YR4/4 褐色土とにぶい黄褐色土との混合土 粘性やや弱。
締りやや有。
5 10YR4/4 褐色土 暗褐色土・黄褐色土ブロック多量に含む。
粘性やや有。締りやや弱。
6 10YR5/6 黄褐色土～にぶい黄褐色土 粘性、締りやや有。
※掘ってみれば土色の違いがはっきりしていた。(底部付近)

第57図 陥し穴状遺構(2)

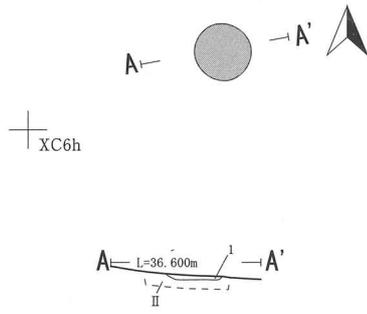
1 検出遺構

1号焼土



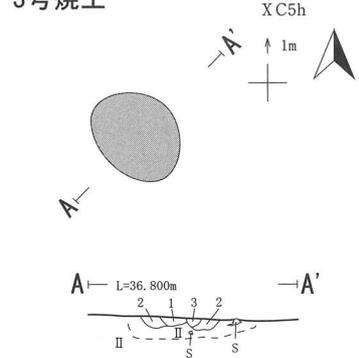
- 1号焼土
 1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性なし。縮りやや有り。
 2 2.5YR5/8 明赤褐色~7/8 橙色焼土 粘性なし。縮りやや有り。

2号焼土



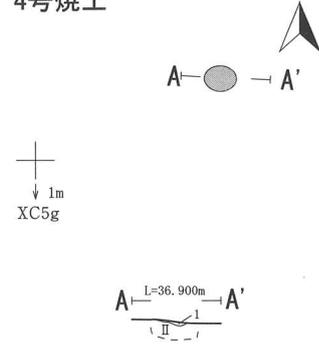
- 2号焼土
 1 2.5YR4/6 赤褐色焼土 黒色土が混じる。粘性弱。縮りやや有り。

3号焼土



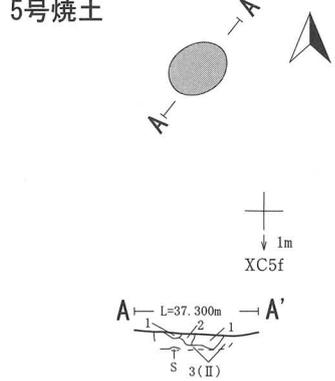
- 3号焼土
 1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。縮りやや有。
 2 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 黒色土と混じる。粘性やや有。縮りやや有。
 3 10YR2/1 黒色土 粘性やや有。縮りやや有。

4号焼土



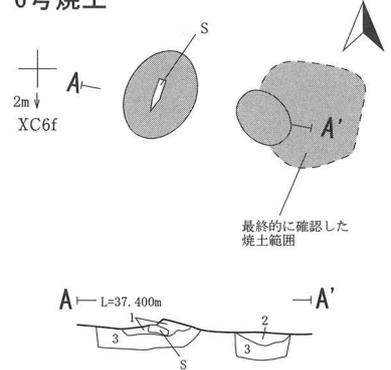
- 4号焼土
 1 5YR5/6 明赤褐色焼土 (薄く、あまり焼けていない) 粘性弱。縮りやや有り。

5号焼土



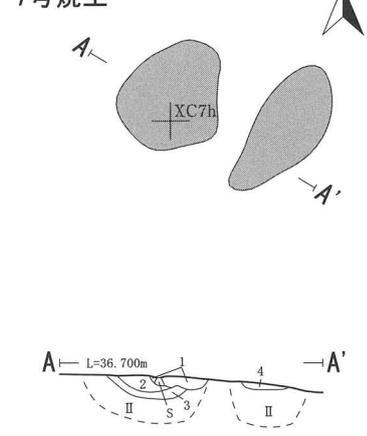
- 5号焼土
 1 5UR5/8 明赤褐色焼土 地表面が最も焼けている(動いていない)。粘性なし。縮りやや有り。
 2 10YR2/1 黒色土 粘性やや有り。縮りやや有り。
 3 II層。

6号焼土



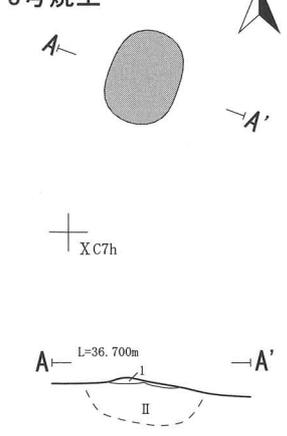
- 6号焼土
 1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 礫の近くが特に焼けている。礫も焼けているようである。粘性なし。縮りやや有り。(現地性)
 2 2.5YR5/8~5/6 明赤褐色焼土 粘性なし。縮りやや有。
 3 10YR2/1 黒色土 粘性やや有。縮りやや有。(II層)

7号焼土



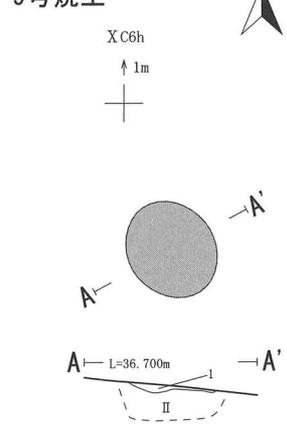
- 7号焼土
 1 10YR2/1 黒色土 粘性やや有り。縮りやや有り。
 2 2.5YR7/8 橙色焼土 黒褐色土が混じる。粘性弱。縮りやや有り。
 3 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 よく焼けている。粘性なし。縮りやや有り。
 4 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性なし。縮りやや有り。

8号焼土

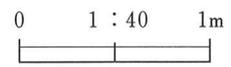


- 8号焼土
 1 10YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。縮りやや有り。

9号焼土

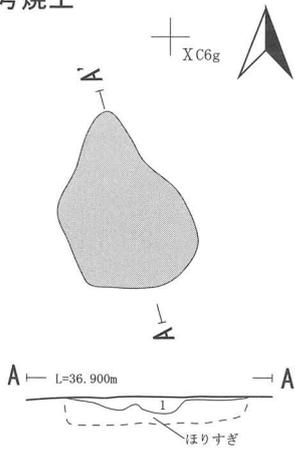


- 9号焼土
 1 5YR5/8 明赤褐色焼土 黒色土と混じる。粘性弱。縮りやや有り。



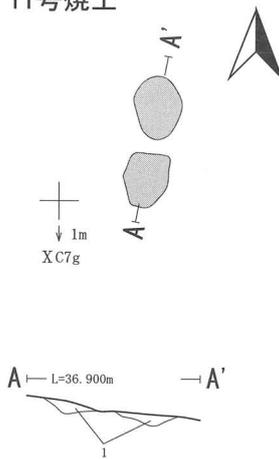
第58図 焼土遺構(1)

10号焼土



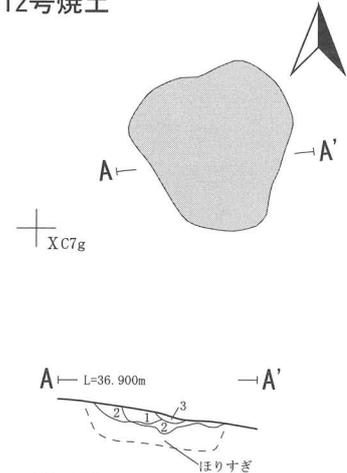
10号焼土
1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 焼成弱。
粘性やや弱。縮りやや弱。

11号焼土



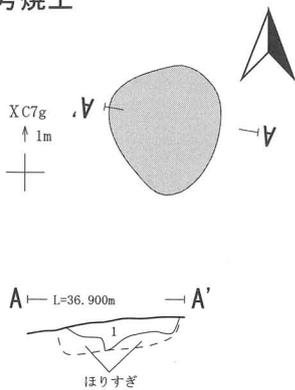
11号焼土
1 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 焼成弱。粘性弱。縮り弱。

12号焼土



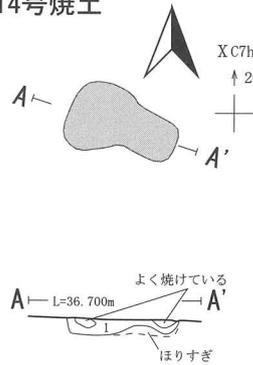
12号焼土
1 2.5YR4/8 赤褐色焼土 焼成良好。
粘性弱。縮っている。
2 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性弱。
縮りやや有り。
3 10YR2/2 黒褐色土 粘性、縮り
やや有り。

13号焼土



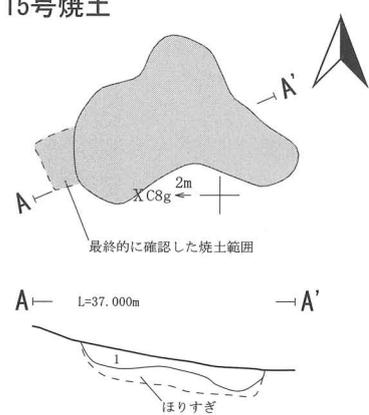
13号焼土
1 10YR5/6 明赤褐色焼土
焼成良好。粘性弱。縮りやや有り。

14号焼土



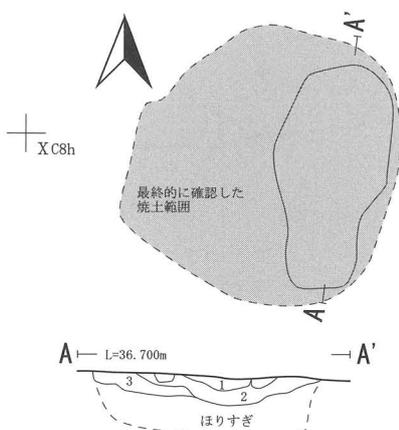
14号焼土
1 5YR6/8 橙色焼土 焼成良好。
粘性やや弱。縮っている。

15号焼土



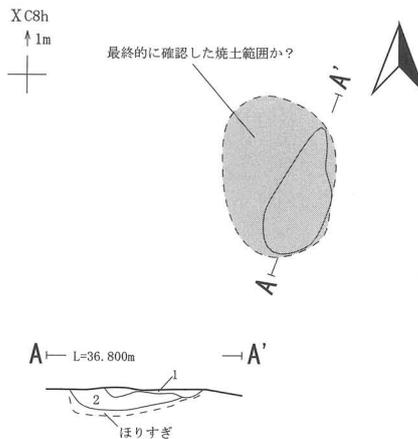
15号焼土
1 5YR5/8 明赤褐色焼土 上部ほどよく
焼けている。粘性、縮りやや弱。

16号焼土



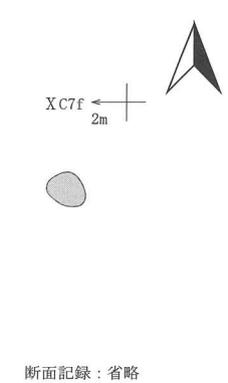
16号焼土
1 10YR4/6 褐色土 小石・焼土ブロック多量に含む。
粘性弱。縮りやや有り。
2 2.5YR 明赤褐色焼土 赤色で色分けしている所は
焼成が良い部分。粘性、縮りやや弱。
3 10YR3/2 黒褐色土 中礫ブロックを微量に含む。
粘性、縮りやや有り。

17号焼土

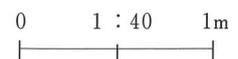


17号焼土
1 5YR8/3 淡橙色焼土 薄く堆積している。
粘性、縮りやや弱。
2 2.5YR5/8 明赤褐色焼土 よく焼けている。
粘性弱。縮っている。

18号焼土



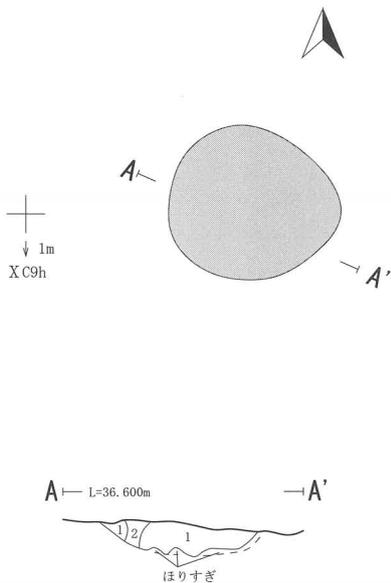
断面記録：省略



第59図 焼土遺構(2)

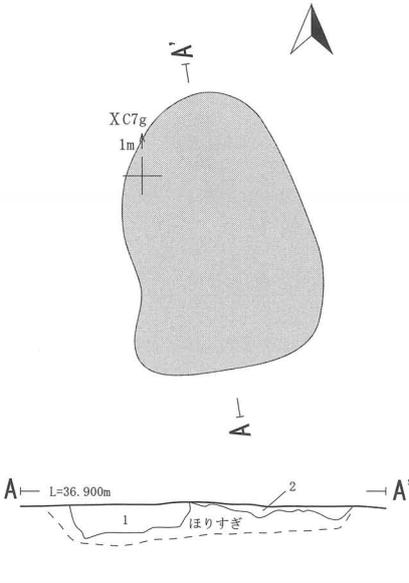
1 検出遺構

19号焼土



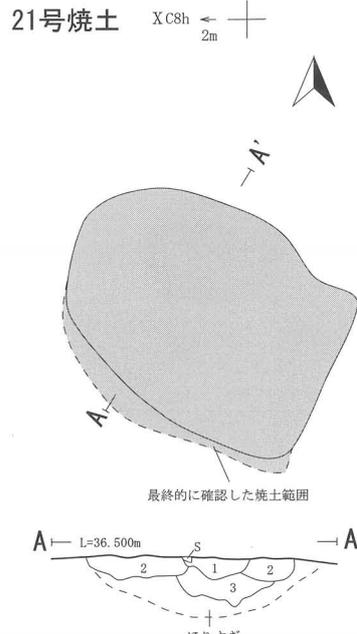
- 19号焼土 (廃棄焼土ではない。)
 1 10YR5/8 明赤褐色焼土 良く焼けている。
 粘性弱。縮りやや有り。
 2 10YR3/3 暗褐色土 粘性、縮りやや有り。

20号焼土



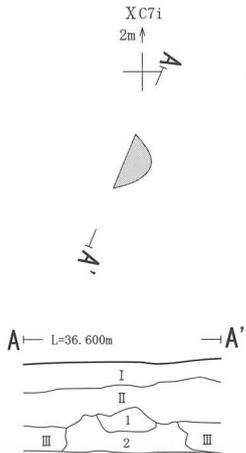
- 20号焼土
 1 10YR5/8 明赤褐色焼土 良く焼けている。
 粘性弱。縮っている。
 2 5YR5/4 にぶい赤褐色焼土 黒褐色土の中に
 粒状に分布。粘性、縮りやや有り。

21号焼土



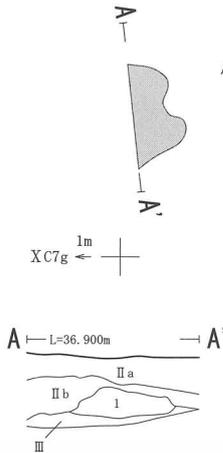
- 21号焼土
 1 5YR7/6 橙色焼土 良く焼けている。
 粘性弱。縮りやや有り。
 2 5YR5/6 明赤褐色焼土 黒褐色土の
 中に混じる。粘性やや弱。縮りやや有り。
 3 5YR4/8 赤褐色焼土 良く焼けている。
 粘性弱。縮っている。

22号焼土



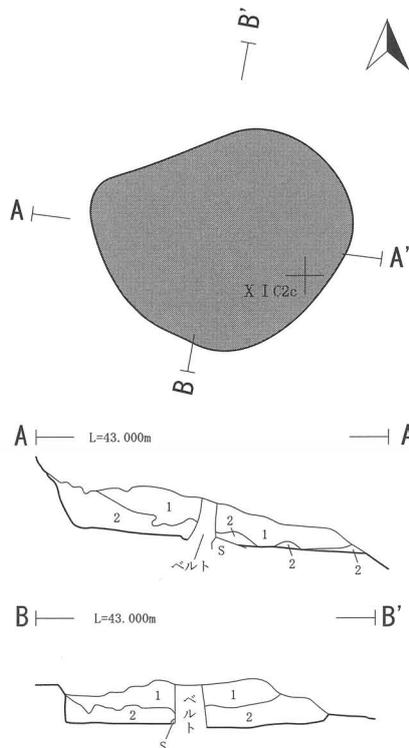
- 22号焼土
 I 10YR2/3 黒褐色土 (表土・耕作土)
 粘性、縮りやや有り。
 II 10YR2/2 黒褐色土 (表土・耕作土)
 粘性、縮りやや有り。
 III 10YR3/3 暗褐色土～黒褐色土
 粘性やや有り。縮っている。
 1 5YR4/6 赤褐色焼土 あまり焼けていない。
 粘性、縮り弱。
 2 10YR2/3 黒褐色土 風倒木、地山ブロック
 を部分的に含む。粘性、縮りやや有り。

23号焼土

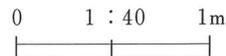


- 23号焼土
 IIa 10YR2/3 黒褐色土 粘性、縮りやや有り
 (小石少量含む)。
 IIb 10YR2/3 黒褐色土 粘性、縮りやや有り
 (小石少量含む)。
 III 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや有り。縮っ
 ている。
 1 5YR5/8 明赤褐色焼土 粘性やや弱。
 縮りやや有り。

火山灰

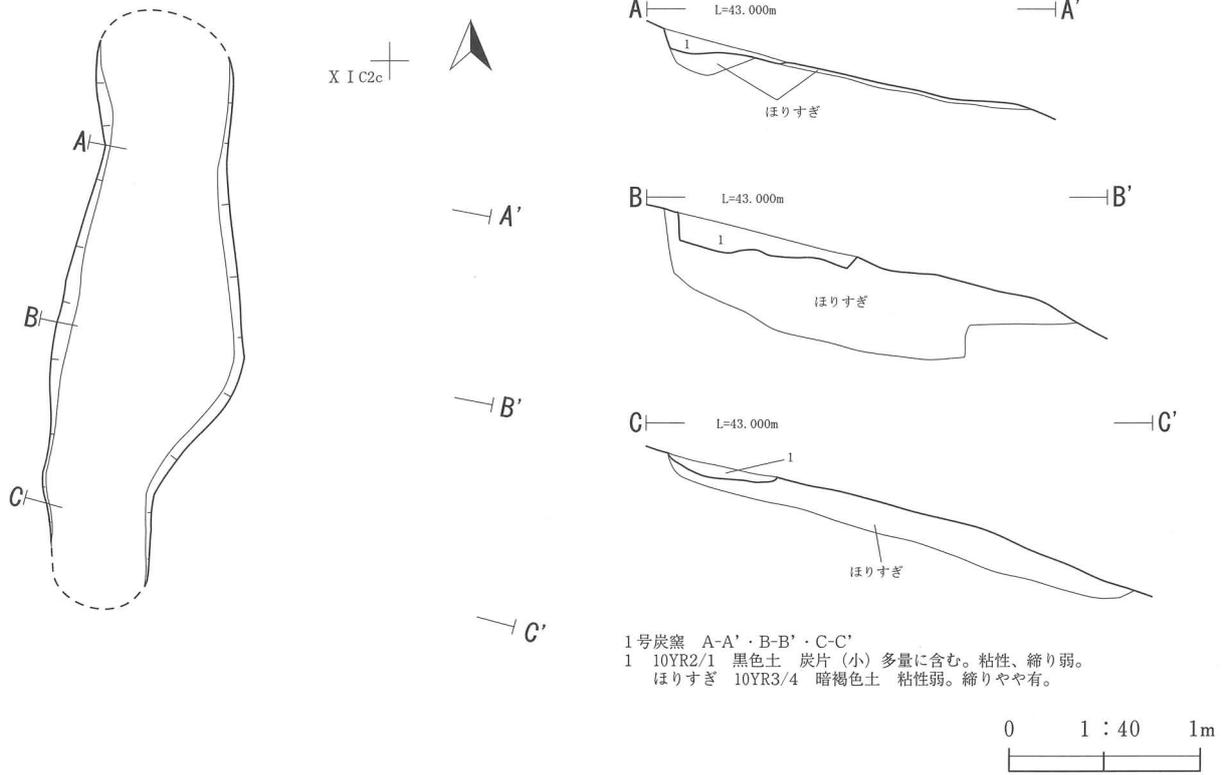


- 火山灰 (1号炭窯の北) A-A'・B-B'
 1 2.5Y8/4 淡黄色火山灰ブロックとにぶい黄色火山灰
 これらは同じものであろう。粘性弱。縮っている。
 2 10YR2/3 黒褐色土 粘性やや弱。縮りやや有。

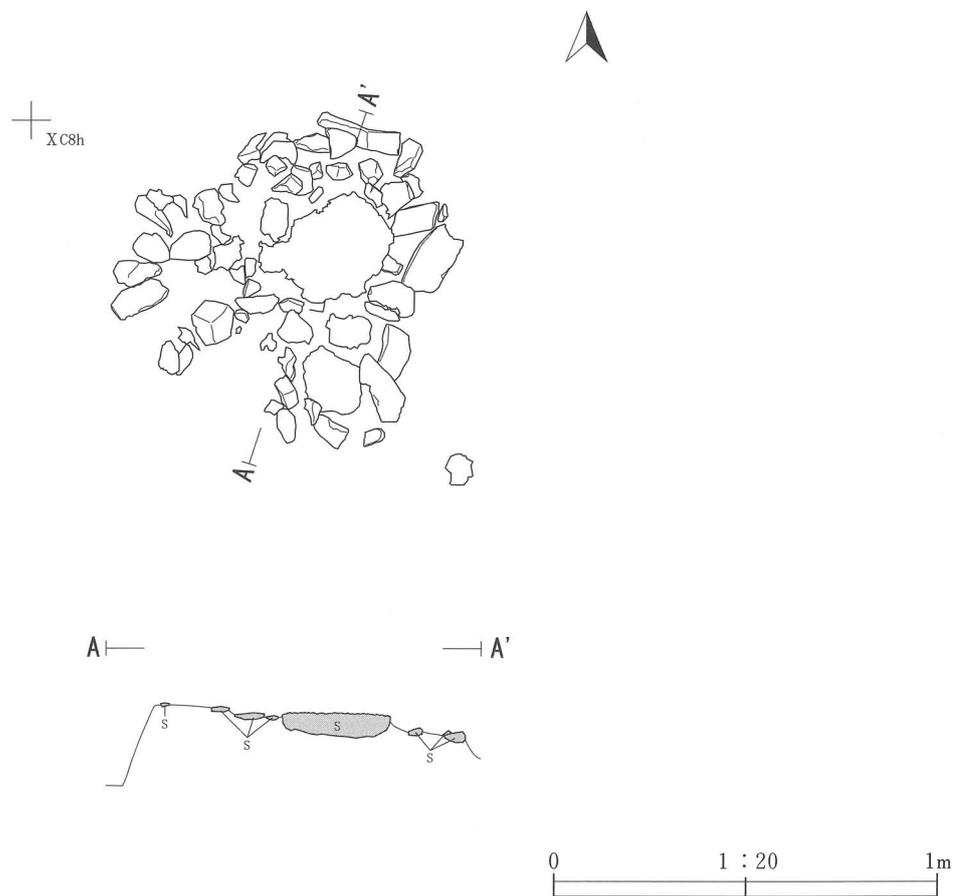


第60図 焼土遺構 (3)

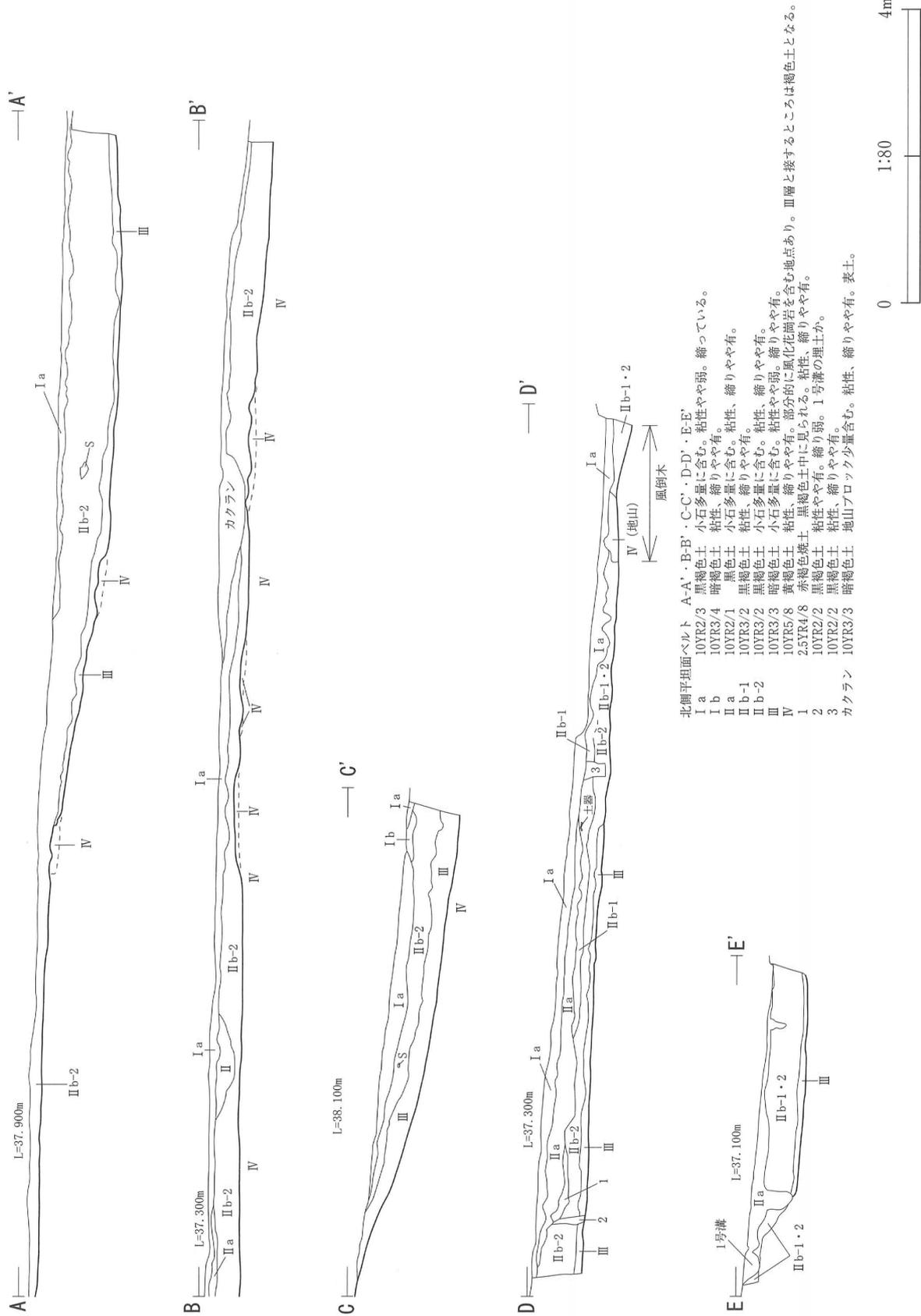
1号炭窯



1号集石



第61図 炭窯、集石



第62図 調査区土層断面図

2 遺構外出土遺物

縄文時代の土器・石器類、弥生時代の土器、中近世の陶磁器が出土している。

(1) 縄文時代の土器

調査区北側の平坦面からその殆どが出土している（第63～65図、写真図版47～49）。縄文時代の遺物はⅡ層に多く含まれているが、調査区北側の平坦面以外ではこのⅡ層の残りがよくない。この平坦面は調査区外東側にも広がっているため、遺物も調査区外の東側には多く残っていると推察される。現況は畑地であるため、遺構・遺物の残りは良いと思われる。調査区北端の沢跡からはあまり出土していない。

7～18は早期中葉、白浜式・蛇王洞Ⅱ式に併行する土器群である。器形を復元できる資料はないが破片資料はそれなりにある。口縁部には刻目が付され、そのすぐ下には数条の細い沈線が横に引かれる。その下部には指先でつまんでつけたような刺突文がある。地文は貝殻状痕文で7・8・13～16では細かな状痕、17・18では粗い状痕が施文されている。

19～28は早期中葉、物見台式に併行する土器群である。何れも破片資料で、立体的に復元できたものはない。24・26は胴部屈曲部の破片である。文様を持つ21～28は貝殻腹縁文と細い沈線の組合せが多い。破片が小さいため文様の展開についての詳細は明らかではない。27・28には器面調整が縦方向になされている。貝殻条痕文か篋状工具による調整のようである。

29は早期後葉のムシリⅠ式（槻木Ⅰ式）に併行する土器と思われる。器厚は薄く、やや軟質な質感で、細かい隆線文が見られる。

30～33は早期末の赤御堂式に併行する土器群である。胎土には繊維を多く含み、器厚は厚い。30・31は胴部破片、32・33は尖底部の破片である。

34は前期初頭の上川名Ⅱ式に併行する土器と思われる。量的には多くない。千鷲遺跡で出土するような蕨状の文様を持つ資料は出土しなかった。

35～54は前期前葉から中葉の大木1～2a式頃のものを中心としながら、その前後型式のものを含む。35～37は口唇の端部に刻目列を持つ。35・36では平縁ではなく小山形口縁となる。38～47は羽状縄文が施文されているものである。殆どが結束の羽状縄文で0段多条のものも見られる。48～54は羽状縄文以外のものを集めたが、殆どは単節斜状文で53は組紐文と思われる。50は口縁部は大きく外に反る器形である。

55～69は大木2a式頃の土器群を集めた。口縁部に不整撚糸文を施文している土器である。口縁部は殆どが平縁となるが68では小山形口縁となる。口縁部の不整撚糸文の幅狭いものが多く、本遺跡の特徴の一つと言える。胴部は単節斜状文が多く、明らかな羽状縄文などは見られない。69は不整撚糸文ではなく、撚糸厚痕文のようで時期も異なるかもしれない。

70～72は中期の土器である。71は小形の土器になる。73・74は晩期の土器と思われる。74は晩期末の浅鉢である。

75は弥生時代の土器である。口縁部と頸部に鋸歯状の貼付文を持つ。内外面に使用した際に付着した煤が多く残っている。76は時期不明の土器である。

縄文時代早期・前期・中期・晩期・弥生時代の土器が出土しているが、各時期の様相、隣接する遺跡との関係については第V章で整理したい。

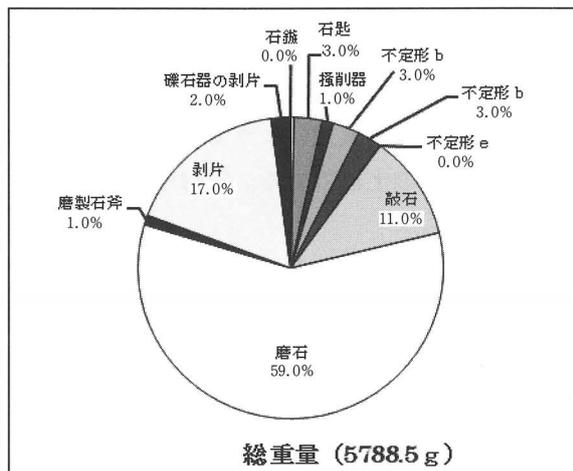
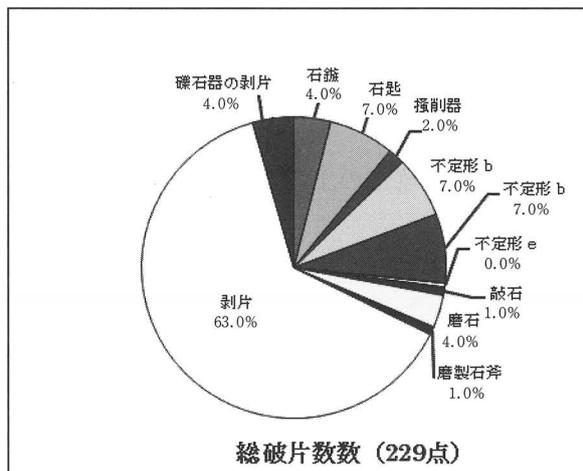
(2) 石 器

出土状況は土器類と違いはない(第66~69図、写真図版50~52)。調査区北側の平坦面からその殆どが出土している。

石器類は下記のように分類し、数量でグラフ化した。個別の内容については表にまとめた。

第31表 石器・石製品分類表

A 剥片石器	I 石鏃	a 完形品	1 凸基	2 凹基	3 不明ほか		
		b 未製品	1 凸基	2 凹基	3 不明ほか		
	II 石錐	出土しなかった。					
	III 石匙	a 縦長					
		b 横長					
IV 石篋	剥片石器の石材	1 刃部一部	2 一部ない部分有り	3 中まで剥離が及ぶもの			
V 搔・ 削器・不 定形石器	a 一般的な搔・削器						
	b 押圧剥離系列の石器を製作する過程でできる剥片に使用してできた痕跡があるもの						
	c 押圧剥離系列の石器を製作する過程でできる剥片に簡単な加工を施しているもの						
	d ピエス・エスキーユ						
	e 磨製石斧や礫石器によく使われる石材を用いているもの						
B 礫石器	VI 敲石	a 一般的な敲石	1 片手で持てる通常の敲石	2 板状で縁辺に敲打痕	3 永く棒状	4 掌に隠れる程度の小さなもの	5 その他
		b 多面体石器	1 掌にすっぽりと収まるもの		2 片手で握れるもの	3 大型	
	VII 砥石	a 棒状の一般的な砥石					
		b それ以外のもの					
	VIII 磨石	a 片手でもてる一般的なもの					
		b その他	1 細長いもの	2 掌に収まる小石状	3 その他		
	IX 凹石						
	X 台石	1 最大長20cm以下		220~30cm	330cm以上		
	XI 石皿	出土しなかった。					
	XII 磨 製石斧	a 完形品	細分しなかった。				
		b 未製品	0 原石	1 剥離段階	2 敲打段階	3 研磨段階	
	XIII 打製石斧?	細分しなかった。					
	XIV その他						
	C 剥片・ 残核	XV 剥片・残核	a 押圧剥離系列の石器制作時に出る剥片				
b 押圧剥離系列の石器に使用されるような石材の残核							
XVI 剥片・残核		a 礫石器、石製品系列の作成時に出る剥片					
		b 礫石器、石製品製作に使用されるような石材の残核					
D 石製品	XVII 石棒		XIX 石製円盤	XX その他			



剥片石器を製作した際に出る剥片が多く出土している。今回の調査では剥片石器が礫石器よりも多く出土しているようである。磨石と敲石は複合するものも多くあった。磨製石斧も極めて少なく、小形のものばかりであった。石棒・石剣のような石製品は出土しなかった。

その他に扁平な礫の表裏面に煤が付着している資料もある。

(3) 陶磁器

陶磁器は4点出土している(第65図、写真図版49)。77は青磁碗の口縁部である。内外面無文で16世紀代の中国産と思われる。78は中国産の天目茶碗で内外目には鉄釉がかかる。16世紀代のものと思われる。79は肥前産染付碗で18世紀代、80は瀬戸美濃産の腰鍔の碗で18世紀中葉頃のものである。

(4) その他の遺物

鉄滓・銭貨・金属製品があり、その特徴は観察表にまとめた。

第32表 土器類観察表

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	種別	年代観	文様の特徴
1	2号竪穴住居跡	北東区 埋土	深鉢	中期後半	捺糸文
	2号竪穴住居跡	土器-1 (一括)	住居跡		
	2号竪穴住居跡	土器-1 (一括)その2	住居跡		
	20号焼土	東半 暗褐色土層	焼土		
	西側斜面 1号炭窯の東	第1検出面			
	出土地点不明				
74	北側平坦面 ブロック⑦	表土	浅鉢	大洞A'	口唇部に小突起、口縁部変形工字文、LR。内面磨き
73	北側低位面 RN076周辺沢跡	北西区 黒色土(1回目)	鉢類		口縁部は無文、LR
70	北側低位面 沢跡(E-Wベルト 東)	黒色土層	小形	大木8a頃	縄文が横回転なら RL横、沈線による区画
72	北側低位面 RN076周辺沢跡	南東区 黒色土層			口縁部は無文、LR
71	北側低位面 RN076周辺沢跡	南東区 黒色土層	小形	中期後半のミニチュア	口縁が内湾、複節LRLか
11	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤と⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	白浜式、蛇王洞Ⅱ式	口縁部だが文様は施されていない
29	北側平坦面 ブロック⑥	黄褐色土層 上面	鉢類	早期後葉 槻木下層、ムシリ。	微隆起線文、薄手
75	北端部 沢跡		鉢類	弥生	口唇部小波状、口縁部下も鋸歯状隆線を2単位 内外面に煤
10	北側平坦面 ブロック⑧	黒褐色土層下位	鉢類	白浜式	指先による刺突文、捺糸文か
9	北側平坦面 ブロック⑧	黒褐色土層下位	鉢類	白浜式、蛇王洞Ⅱ式	指先による刺突文、捺糸文か。9と同一個体か
51	北側平坦面 ブロック⑥	1次検出面(表土直下)	鉢類	前期前葉 大木2a-1	LR端部を桔節、やや繊維含
49	北側平坦面 ブロック⑧(基1周辺)	暗褐色土層	鉢類	前期前葉 大木2a-1	角張った口唇、LR、繊維
48	北側平坦面 ベルト⑤南半	Ⅱb~2層	鉢類	前期前葉 大木2a-1	LR、口唇部も原体を回転。繊維含
2	02号竪穴住居跡	南東区 埋土	鉢類	前期前葉 大木2a-1	RL、繊維はよく見えない
53	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ベルト⑨以南)	黒褐色土層	鉢類	大木2bその前後	組紐、小石含むが繊維はよく見えない
52	01号竪穴住居跡	埋土	鉢類		LR、繊維・小石含
3	04号住居	1層	鉢類		複節LRLか
50	北側平坦面 ベルト⑧	黒褐色土層	鉢類	大木2a	原体不明、繊維
4	19号焼土		尖底	早期末 赤御堂	原体不明、内面に煤
54	北側平坦面 ブロック⑧'	黄褐色土層 検出面	鉢類		縄文の原体は不明。底:木葉痕
12	出土地点不明		鉢類	白浜式	文様なし
31	北側平坦面 ブロック⑧	暗褐色土層下位	鉢類	早期末 赤御堂	LR、繊維
123	北側平坦面西半 ブロック③'	表土~黒褐色土層	尖底	早期末 赤御堂	原体不明、繊維
32	北側平坦面 ブロック⑦(20号焼土周辺)	黒褐色土層	尖底	早期末 赤御堂	原体不明、繊維
34	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ベルト⑨以北)	黒褐色土層	鉢類	前期初頭上川名Ⅱ頃か	捺糸文、繊維。捺糸文は大木2頃にない
30	北側平坦面西半 ブロック③'	表土~黒褐色土層	鉢類	早期末 赤御堂	LR、繊維
	北側平坦面西半 ブロック③'	表土~黒褐色土層	鉢類		
20	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤と⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	物見台式	文様なし

2 遺構外出土遺物

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	種別	年代観	文様の特徴
40	北側平坦面 ブロック⑦	ベルト⑤東 サブトレ 黒褐色土層	鉢類	前期前葉 大木1-2a	結束RL・LR、繊維。口唇部やや平
38	北側平坦面 ブロック⑦西(旧重機道)	暗褐色土層	鉢類	大木1-2a	結束LR・RL、繊維
46	北側平坦面 ブロック⑦	黒褐色土層	鉢類	大木2a	単節の結束、繊維
41	北側平坦面 ブロック⑦	黒褐色土層上面	鉢類	大木1-2a	複節の結束、繊維
43	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ ベルト⑤以南)	黒褐色土層～暗褐色土層	鉢類	前期前葉 大木2a頃	単節の結束、繊維
45	北側平坦面西半 ブロック②	黒褐色土層	鉢類	前期前葉 大木2a頃	単節の結束、繊維
42	北側平坦面 東壁拡張部(基1～ベル ト⑤間)	黒褐色土層	鉢類	大木1-2a	口唇部丸味、単節の結束、繊維
44	北側平坦面 ブロック⑧	暗褐色土層下位	鉢類	大木1-上川名Ⅱ 18と 同時期か	単節の結束、繊維
39	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ ベルト⑤以南)	黒褐色土層～暗褐色土層	鉢類	大木2a-1(1か)	RL・LR結束か。繊維
47	北側平坦面 ブロック⑦	黒褐色土層上面	鉢類	大木2a	単節の結束、繊維
37	西側斜面南端	Ⅲ層	鉢類		端部結RL。口唇部端に刻目列
35	北側平坦面 ベルト⑧	黒褐色土層	鉢類	前期前-中葉	口唇部に刻目、体部RL・LR、穿孔2ヵ所、繊維含
36	北側平坦面西半 ブロック①	黒褐色土層	鉢類		端部結節RL、口唇部端に刻目列
18	北側平坦面 東壁際(南)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
17	北側平坦面 東壁際(南)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
16	北側平坦面(1号堅穴住居跡の南西 旧重機道)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
19	北側平坦面西半 ベルト①	暗褐色土層	鉢類	物見台式	細く浅い沈線
8	北側平坦面 ブロック⑥南	暗褐色土層	鉢類	白浜式	平らな口唇部端に刻目、口縁：沈線、体部：貝殻状痕文・ 横位連続刺突文
76	北側低位面 RN076周辺	検出中	鉢類	弥生時代	甕のようなもので表面を調整
15	北側平坦面 ブロック⑧	暗褐色土層下位	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
14	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤ と⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
27	北側平坦面 N075杭以南	黒褐色土層	鉢類	物見台式	沈線、貝殻状痕文、内面煤
7	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤ と⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	口唇部内外端部に刻み目、口縁：複数の沈線、胴部、爪 先で付けられた連続刺突
28	北側平坦面西半 ブロック②南	黒褐色土層	鉢類	物見台式	沈線文
13	北側平坦面(1号堅穴住居跡の南西 旧重機道)	暗褐色土層	鉢類	白浜式	貝殻状痕文
58	北側平坦面西半 ブロック②	黒褐色土層	鉢類		口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：RLRか、穿孔1
63	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤ と⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：LR、繊維
59	北側平坦面 ブロック⑦	表土	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：繊維はつきりし ない
67	北側平坦面 ブロック⑦南	黒褐色土層(Ⅱ層)	鉢類	大木2a	口唇部・口縁：捻糸文。体部：LR。繊維
64	北側平坦面(16・17号焼土周辺)	暗褐色土層 検出中	鉢類	大木2a	口唇部：面取なし。口縁：不整然糸文。体部：繊維
60	北側平坦面(16・17号焼土周辺)	暗褐色土層 検出中	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：RL、繊維
57	北側平坦面 ブロック⑧南	黒褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取はつきりしない。口縁：不整然糸文。体部： LR、繊維多
66	北側平坦面 ブロック⑧(基1周辺)	暗褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：LR0段多糸、繊 維
56	北側平坦面～低位面間斜面(重機道)	黄褐色土層 検出中	鉢類	大木2a	口唇部：面取はつきりしない。口縁：不整然糸文。 体部：RL、繊維
6	21号焼土	東半	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：LR、貫通してい ない孔、繊維
65	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ ベルト)以北)	黒褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：R。繊維
62	北側平坦面 ベルト⑤南半	Ⅱb～2層	鉢類	大木2a	口唇部：面取か。口縁：不整然糸文。体部：LR、繊維
61	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西・ ベルト)以南)	黒褐色土層～暗褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。体部：LR、繊維
55	北側平坦面 重機道北側(ブロック⑤・ ⑥と⑧・⑧'間)	暗褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然文(狭)。体部：LR、繊維
68	北側平坦面 ブロック⑦ 東西サブ トレ	黒褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：不整然糸文。波状口縁。体部：繊維
69	北側平坦面 ベルト⑧	黒褐色土層	鉢類	大木2a	口唇部：面取。口縁：捻糸圧痕非回転。体部：LR。繊維
26	北側平坦面 LNo75杭以北	黒褐色土上面	鉢類	物見台式	沈線による文様
25	北側平坦面 LNo75杭以北	黒褐色土上面	鉢類	物見台式	貝殻腹縁文。焼成良好
21	北側平坦面(1号堅穴住居跡の南西 旧重機道)	暗褐色土層	鉢類	物見台式	貝殻腹縁文による文様
24	北側平坦面西半 ブロック②	黒褐色土層	鉢類	物見台式	沈線を横・斜位に引きその中に貝殻腹縁文

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	種別	年代観	文様の特徴
22	北側平坦面 No75杭以北	表土	鉢類	物見台式	貝殻腹縁文、内面に煤
5	09号土坑	西半 覆土	鉢類	物見台式	貝殻腹縁文、焼成良好
147	02号土坑	西半 1層下位	鉢類	前期か	羽状縄文LR・RL、繊維
148	09号土坑	西半 覆土	鉢類	前期か	LR、繊維
149	10号土坑	北半 2層	鉢類	前期か	複節LRLか
150	11号土坑	南半 埋土	鉢類	早期か前期	無文
151	11号土坑	南半 埋土	鉢類	前期か	LRか、繊維
152	13号土坑	南半 埋土	鉢類	前期か	LR、繊維は不明瞭
153	21号土坑	埋土	鉢類	前期か	LR、繊維多
154	19号土坑	南半 2層	鉢類	前期か	LR、繊維
155	06号焼土（追加）	南半 覆土	鉢類	前期か	撚糸文、繊維
156	北側平坦面（5号焼土の北側検出面）	清掃中	鉢類	前期か	原体不明、繊維
157	16号焼土	西半 焼土層	鉢類	前期か	LR、繊維
158	17号焼土	東半 焼土層	鉢類	前期か	原体不明、繊維
159	20号焼土	西半（黒褐色土層）	鉢類	前期か	LR、繊維
23	北側平坦面西半 ブロック④	表土～黒褐色土層	鉢類	物見台式	沈線と貝殻腹縁文を縦横に施す

第33表 陶磁器観察表

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	重量 (g)	種別	特徴	産地	時期
79	北側平坦面 北端（ブロック⑤～⑧'間）	暗褐色土層	3.98	染付碗		肥前	18世紀
77	北側平坦面 ベルト⑦	北サブトレ II～III層	3.42	青磁碗	無文	中国	16世紀か
78	北側平坦面南	表採	3.04	天目碗	鉄釉	瀬戸美濃	16世紀か
80	北側平坦面 東壁拡張部（基1～ベルト⑨間）	黒褐色土層	3.20	陶器碗	腰錆びの碗	瀬戸美濃	18世紀前半

第34表 鉄滓観察表

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	重量 (g)	備考
401	北側低位面 RNo76周辺	1次検出中	67.79	
402	北側平坦面 ブロック⑧（基1周辺）	暗褐色土層	68.07	

第35表 銭貨・金属製品観察表

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	重量 (g)	直径 (cm)	穿孔 (cm)	厚さ (cm)	備考
123	01号墓	1-2 写真有	3.50	2.50×2.52	0.61×0.61	0.15	古
124	01号墓	古銭4	(2.85)	2.53×2.49	0.60×0.60	0.13	古
125	01号墓	1-1 写真有	3.13	2.43×2.40	0.52×0.53	0.13	古
126	01号墓	古銭1	3.31	2.47×2.48	0.61×0.60	0.14	古
127	01号墓	1-3 写真有	3.42	2.57×2.57	0.56×0.56	0.15	文
128	01号墓	古銭3	3.65	2.56×2.54	0.56×0.54	0.16	新文
129	01号墓	古銭2	3.16	2.45×2.45	0.55×0.57	0.15	新か
130	01号墓	古銭2（繊維付き）	(3.00)	2.57×2.58	0.54×0.55	0.18	新
131	02号墓	銭1	3.91	2.51×2.52	0.53×0.53	0.14	古
132	02号墓	銭2	2.76	2.33×2.34	0.62×0.62	0.13	新
133	02号墓	銭3	2.48	2.34×2.35	0.62×0.65	0.10	新
134	02号墓	銭3	4.15	2.56×2.54	0.57×0.58	0.14	新文
135	02号墓	銭3	4.15	2.53×2.53	0.55×0.56	0.14	新文
136	02号墓	銭3	3.42	2.52×2.53	0.59×0.56	0.15	新文
137	05号墓	埋土 1-2	(1.86)	2.40×(2.37)	0.53×(0.55)	0.14	古
138	05号墓	埋土 1-3	2.34	2.43×2.44	0.57×0.58	0.12	古
139	05号墓	埋土 1-6	(1.26)	2.47×(2.48)	(0.53)×(0.54)	0.14	古
141	05号墓	埋土 1-4	3.15	2.51×2.53	0.52×0.51	0.16	古
142	05号墓	埋土下位（平面図有）	(2.32)	2.48×2.48	0.62×0.59	0.13	古
143	05号墓	埋土 1-1	(2.12)	2.46×(2.42)	0.54×0.52	0.14	古
144	05号墓	埋土 1-8	2.62	2.41×2.37	0.53×0.50	0.15	不明

2 遺構外出土遺物

掲載番号	遺構名・出土地点	層位など	重量 (g)	直径 (cm)	穿径 (cm)	厚さ (cm)	備考
145	05号墓	埋土 1-5	3.15	2.49×2.49	0.53×0.52	0.16	古
-	01号竪穴住居跡	北半覆土	4.53				釘
-	05号墓	埋土	8.56				
-	05号墓	埋土	15.13				

第36表 石器観察表

計測値の単位：cm

番号	分類	遺構名・出土地点	層位など	種類	重量	長さ	幅	厚さ	石材	産地ほか	備考	仮番号
82	A I a 2	北側平坦面 ブロック⑦南	サブトレ② II層	石鏃	1.84	1.7	1.5	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		501
83	A I a 2	北側平坦面西半 ブロック③	表土~II層	石鏃	2.06	2.1	1.5	0.4	頁岩	北上山地? 中生代初期		502
86	A I a 2	北側平坦面 ブロック⑥	サブトレ III層	石鏃	1.65	2.4	1.6	0.4	頁岩	北上山地? 中生代初期		503
85	A I a 2	北側平坦面 ブロック⑦	II層上面検出中	石鏃	1.11	2.6	1.9	0.3	頁岩	北上山地? 中生代初期		504
87	A I a 2	北側平坦面 ベルト⑧	II層	石鏃	1.11	2.8	1.6	0.4	頁岩	北上山地? 中生代初期		505
81	A I a 1	西側斜面南端	II III層	石鏃	3.57	3.7	1.8	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		506
84	A I a 2	北側平坦面 ブロック⑧	I~II層	石鏃	2.21	3.1	1.3	0.4	頁岩	北上山地? 中生代初期		507
88	A I a 2	北側平坦面 ブロック⑧	II~IV層	石鏃	2.32	2.5	2.0	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		508
89	A I a 2	出土地点不明		石鏃	2.91	2.7	2.1	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		509
92	A III a	01号竪穴住居跡 P53	埋土	石匙	18.64	8.2	4.1	0.7	頁岩	? -		510
99	A III b	02号竪穴住居跡	北東区 埋土	石匙	8.13	3.2	4.4	0.7	頁岩	? -		511
91	A III a	北側平坦面西半 ブロック②	II層	石匙	8.50	5.65	2.4	0.7	頁岩	? -		512
97	A III b	北側平坦面西半 ブロック③	表土~II層	石匙	10.41	4.1	5.4	1.1	頁岩	北上山地? 中生代初期		513
90	A III a	01号溝跡	埋土(ブロック⑦の12・13号焼土の間)	石匙	4.25	4.9	1.3	0.6	頁岩	北上山地? 中生代初期		514
160	A III b	北側平坦面 ベルト⑦	II~III層	石匙	6.57	-	-	-	頁岩	北上山地? 中生代初期	写真のみ	515
98	A III b	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西、ベルト以南)	II~III層	石匙	7.46	2.3	5.4	0.6	頁岩	北上山地? 中生代初期		516
93	A III a	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西、ベルト以南)	II~III層	石匙	11.42	4.1	2.6	1.1	頁岩	北上山地? 中生代初期		517
96	A III b	北側平坦面 ブロック⑦	II層	石匙	7.89	2.9	3.2	0.9	頁岩	北上山地? 中生代初期		518
95	A III a	北側平坦面 ベルト⑦	II~III層	石匙	36.57	8.5	5.3	1.2	頁岩	? -		519
94	A III a	北側平坦面 ブロック⑧南	II層	石匙	8.20	5.7	2.2	0.9	頁岩	北上山地? 中生代初期		520
161	A III a	北側平坦面 旧重機道(16・17号焼土周辺)	III層	石匙	15.86	-	-	-	頁岩	? -	写真のみ	521
162	A III b	西側斜面北端ふもと(7号土坑近辺)	表土	石匙	15.22	-	-	-	頁岩	北上山地? 中生代初期	写真のみ	522
110	B X II a	北側平坦面 東壁拡張部(基1~ベルト)間	II層	磨製石斧	26.71	4.8	2.8	1.0	頁岩	北上山地? 中生代初期		523
109	B X II a	北側平坦面 旧重機道(ベルト)以南	II層	磨製石斧	33.90	6.1	3.5	0.8	頁岩	北上山地? 中生代初期		524
108	A V c	09号土坑	南半 埋土	不定形石器	2.76	3.0	2.3	0.6	頁岩	北上山地? 中生代初期		525
106	A V c	06号焼土	北半 埋土	不定形石器	3.66	4.3	2.7	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		526
104	A V b	北側平坦面 ブロック⑦西(旧重機道)	III層	不定形石器	7.37	4.5	2.2	0.9	頁岩	北上山地? 中生代初期		527
101	A V a	北側平坦面 ブロック⑦(1号溝以西、ベルト以南)	II~III層	搔削器	9.08	3.9	3.2	0.6	頁岩	北上山地? 中生代初期		528
163	A、~A III	北側平坦面 ブロック⑧南	III層	石匙か	3.56	-	-	-	頁岩	北上山地? 中生代初期	写真のみ	529
107	A V c	北側平坦面 ブロック⑧南	II層下位~III層上面	不定形石器	2.81	3.7	1.6	0.5	頁岩	北上山地? 中生代初期		530
164	A V c	北側平坦面 東壁拡張部(基1~ベルト)間	II層	不定形石器	6.35	-	-	-	頁岩	北上山地? 中生代初期	写真のみ	531
105	A V c	北側平坦面 ブロック⑦(ベルト以南、1号溝以東)	II層	不定形石器	38.08	5.8	4.0	1.4	頁岩	北上山地? 中生代初期		532
103	A V b	北側平坦面 旧重機道(1号住居跡の南東)	III層	不定形石器	6.72	3.4	2.4	1.0	頁岩	北上山地? 中生代初期		533
102	A V a	北側平坦面(1号竪穴住居跡の南)	III層	搔削器	5.01	3.3	2.5	0.9	頁岩	北上山地? 中生代初期		534
114	B VII b 3	P094	埋土	磨石	588.51	13.7	6.8	7.1	砂岩	北上山地 中生代白亜紀		535
112	B VII a	ブロック⑦	南サブトレ	磨石	525.32	9.3	8.5	4.8	頁岩	北上山地? 中生代初期		536
111	B VII a 1	北側平坦面 ブロック⑦西(旧重機道)	III層	敲石	302.05	12.0	5.9	2.5	砂岩	北上山地 中生代白亜紀		537
113	B VII b 1	北側平坦面 (No75以北)	表土	磨石	497.45	15.4	5.0	6.2	砂岩	北上山地 中生代白亜紀		538
118	その他	P138	図有 その他	その他	2135.52	24.5	16.5	5.1	デーサ介	北上山地 中生代白亜紀	表・裏に煤付着	539
100	A V a	No75より北側平坦面	表土	搔削器	49.87	5.6	3.9	1.1				540

3 ま と め

八木沢駒込Ⅰ遺跡は八木沢川の西岸に発達した緩斜面とそれに接する山の斜面部を一部含んでいる。遺跡の範囲は南北に約350m、東西約50mと南北に細長い遺跡である。小規模な沢によって緩斜面部は分断されており、同じ遺跡の中でもこうした地形の影響を受けてか、検出された遺構や出土遺物に違いがでていいる。今回の調査区は本遺跡の南半部にあたり、前回の調査区とは沢を挟んで分かれていいる。よって遺跡名は同じであっても別の遺跡と細分して捉えることが可能である。

平成21年度調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡2棟、中世の竪穴建物跡2棟、近世の掘立柱建物跡4棟、土坑24基（縄文2、縄文か中近世2、中近世3、近世7基、不明10）、近世墓6基、陥し穴6基、古代の炭窯1基、縄文時代の焼土23箇所、近世の溝跡2条など、出土遺物は縄文時代の土器・石器、弥生土器、中世の陶磁器、近世陶磁器、近世の銭貨・金属製品などである。

以下、時代ごとに内容を整理して今回の調査のまとめとし、これまでの調査や周辺遺跡との関係に若干触れて全体の総括とする。

縄文時代

本遺跡に於いて最初に人間の営みが確認されるのは縄文時代早期中葉である。白浜式・蛇王洞Ⅱ式段階の土器が出土している。物見台式、ムシリⅠ式、赤御堂式段階の土器もあるが、何れも破片の資料で立体的に復元できるまでのものはない。早期の遺構も確認できなかった。遺跡そのものは調査した範囲よりも東側（現況は畑地）へ続いているので、この時期に限らず縄文時代の遺構は遺跡東側の畑地のほうで見つかる可能性がある。

前期の遺物も早期から時期的には殆ど連続して見られるようである。前期初頭頃の上川名Ⅱ式の土器、大木1～2a式段階の土器が見つかった。特に大木2a式頃の土器が今回の調査の中では最も多く出土しており、集落として最も充実した時期を迎えたと遺物からは言える。また遺物の出土状況と焼土群の検出状況から23箇所検出された焼土もその多くが前期に位置づけられると想定している。

次に遺構遺物が見られるのは中期後半になってからである。2号竪穴住居跡は複式炉を持ち、1度建て直しを行っている。この間（前期後半から中期前半頃）、土器が見られず集落の断絶が見られる。しかしながらこの断絶期に陥し穴が造られ、狩猟の場として利用していたと解釈できるのではなかろうか。中期後半以降にも断絶があるのでその時も狩場となっていた可能性がある。6基検出された陥し穴の配置にも、重複関係を持つものがあるなど同時期に掘られたというよりも複数の時期に構築されたものと見たほうがその分布を理解しやすい。

この後、遺物が出土するのは晩期末から弥生時代になってからである。しかしながらその量もごく微量で、集落を営んでいた期間もあまり長くは想定できない。この遺跡が再び利用されるのは古代（平安時代か）になってからのようである。

古代

斜面部から炭窯が1基検出された。住居跡や遺物などは見つかっておらず、遺跡内に集落を営んでいた雰囲気はない。木炭を得るためなど短期的な利用に限られるようである。

中世

この時期になると再び遺構・遺物がみられるようになる。竪穴建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟（こ

れも竪穴建物跡であろう)が検出され、16世紀代の青磁碗・天目茶碗が出土している。中世城館の一部というよりは小規模な集落と捉えたほうがよい。沿岸地域での中世集落の事例は多くはない。平野部ではなく小河川の谷筋に沿ったわずかな緩斜面に立地する竪穴建物が主体の集落として位置付けられよう。加えてこの時期の集落がそのまま近世へと連続するのではないかという印象も持っている。

近世

調査区北側の平坦面から掘立柱建物跡が3棟、南側の斜面部からは墓墳が6基見つかっている。2条の溝は建物の雨落ち溝であろう。掘立柱建物跡3棟は重複関係にあり、最も規模の大きな1号掘立柱建物跡が最も新しく、最小規模の3号掘立柱建物跡が最も古い。1号掘立柱建物跡は桁行き8間ある大形の屋敷であるが上屋柱と下屋柱からなるものの間仕切りが見られない建物である。周辺からは18世紀後半頃の陶磁器などが出土しているが、1号掘立柱建物跡が建てられたのは、その平面形式の間仕切りが未発達の間仕切りといえることから18後半よりも古いと思われる。あまり根拠はないが18前半に構築されたと考えたい。これに基づいて2号掘立柱建物跡は17世紀中頃-17世紀末に使われていたと推察され、1号掘立柱建物跡は16世紀末-17世紀前半に使われていたとし、前述した中世の竪穴建物跡を主体とする中世集落からほぼ時期的に連続していると捉えたい。

墓墳についてもややはなれているもののこの掘立柱建物跡群とセット関係にあると見たい。両者を隔てるような施設は見つからなかったため、墓墳群は屋敷墓であったと位置付けておく。1~4号墓が斜面の上方、5・6号墓が斜面下方から検出されている。宝永六(1710)年の墓石は1号墓に伴う可能性が最も高い。3号墓にも墓石を立てるための台石が残っていた。5号墓では古寛永のみが出土しており、墓墳の中では古手と見ている。近くにある6号墓からは出土遺物がないので確実ではないが5号墓よりも古い可能性も否定できない。1・2号墓からは古寛永と新寛永が混ざって出土している。このような状況から古い順に6→5→4→2→3→1号墓と推定した。時期的には掘立柱建物跡群とも矛盾はない。この土地の前地権者は墓の存在、掘立柱建物跡の存在を全く伝え聞いてはなかった。よって1号掘立柱建物跡の後には屋敷域が離れた場所へ移ってしまった可能性が高い。逆に本遺跡では中世末から近世前半の遺構が良好な状態(複雑に重複しない状態)で残されていると推測される。

八木沢駒込 I 遺跡と周辺遺跡の関係(主に縄文時代)

当センターは三陸縦貫道宮古道路のルート上にある遺跡を継続して調査してきた。地域でいうなら南は金浜地区から八木沢川中流域をぬけて北は松山地区までである。各遺跡の分布は第II章に掲載しているが、ここではこれらの遺跡の中に本遺跡がどのように位置づけられるのかを整理し、3次にわたる本調査のまとめにかえたい。

この地域で最も古い遺物が出土しているのは八木沢野来遺跡である。この遺跡は本遺跡よりも八木沢川のやや上流部にあり、金浜地区(沿岸部)、大谷地地区(八木沢川の上流部)からの道が合流するところにも近く、集落を営み易い緩斜面も他より少し広い。縄文時代早期(日計式、物見台式)の土器が出土しており、八木沢駒込 I 遺跡(白浜式、物見台式、ムシリ I 式、赤御堂式の土器が出土)と強い関連性が窺われる(ほぼ同時期、或いは土器型式上交互に連続するような関係)。前期に入ってもこの関係は続いていたように感じられる。両遺跡では前期初頭から大木2 a 式頃までの遺構遺物が確認されており、その量は八木沢野来遺跡のほうが本遺跡よりも多いといった傾向をもって推移する。現段階ではともに大木2 a 式と位置付けている資料についても、1例をあげると口縁部の不整捺糸文

の施される幅が、八木沢駒込Ⅰ遺跡の資料が総じて狭いなど細分できる点がある。何れにせよ早期から前期中葉頃までは八木沢野来遺跡と八木沢駒込Ⅰ遺跡が集落を営む場として選ばれていたようで、八木沢野来遺跡では大木4式頃まで集落がつづく。

その後、両遺跡からは遺構・遺物は見られなくなり北側の木戸井内Ⅳ遺跡で前期の貯蔵穴が複数確認されている。但し正確な時期まではわかっていない。前期末から中期初頭にかけてもはっきりとした集落は検出されていないようで、時期的な空白が認められることを指摘しておきたい。

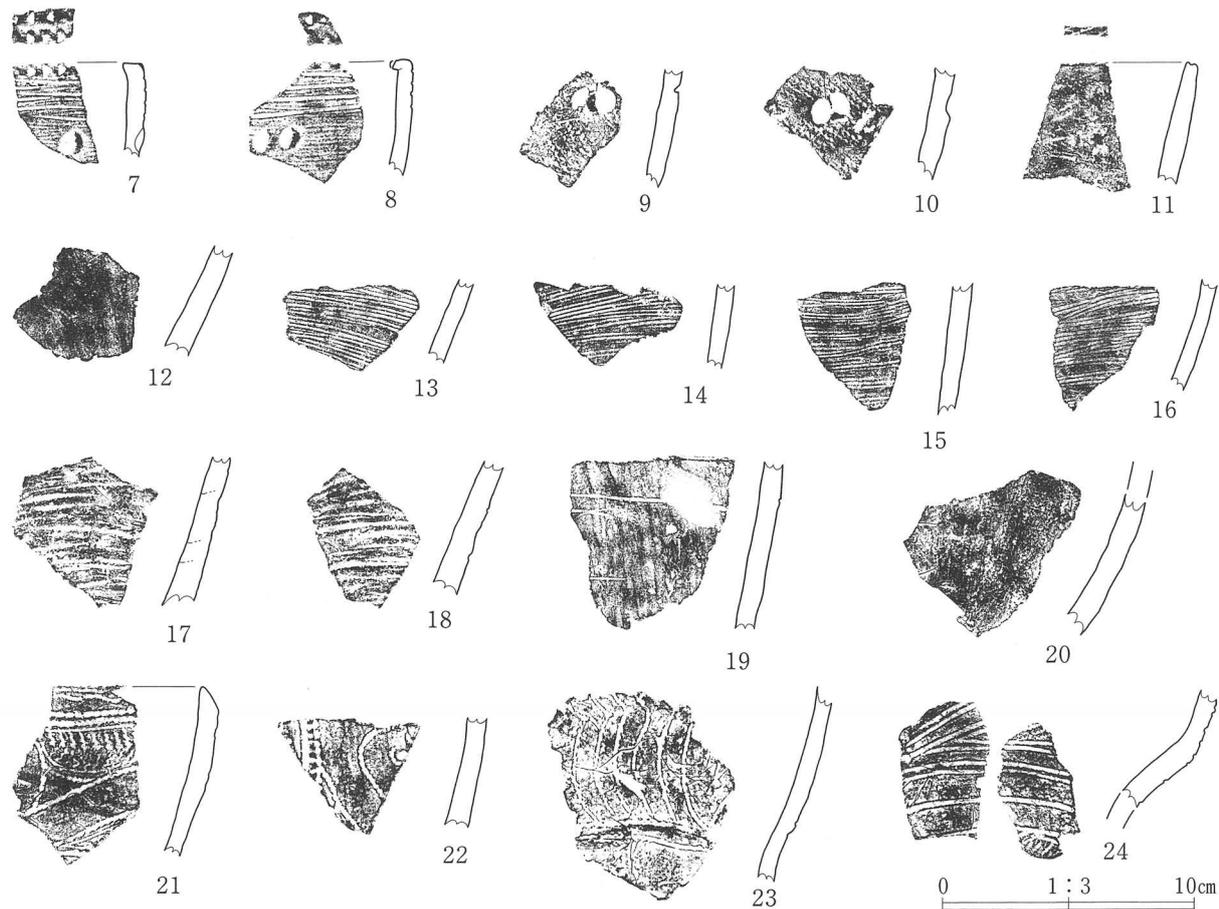
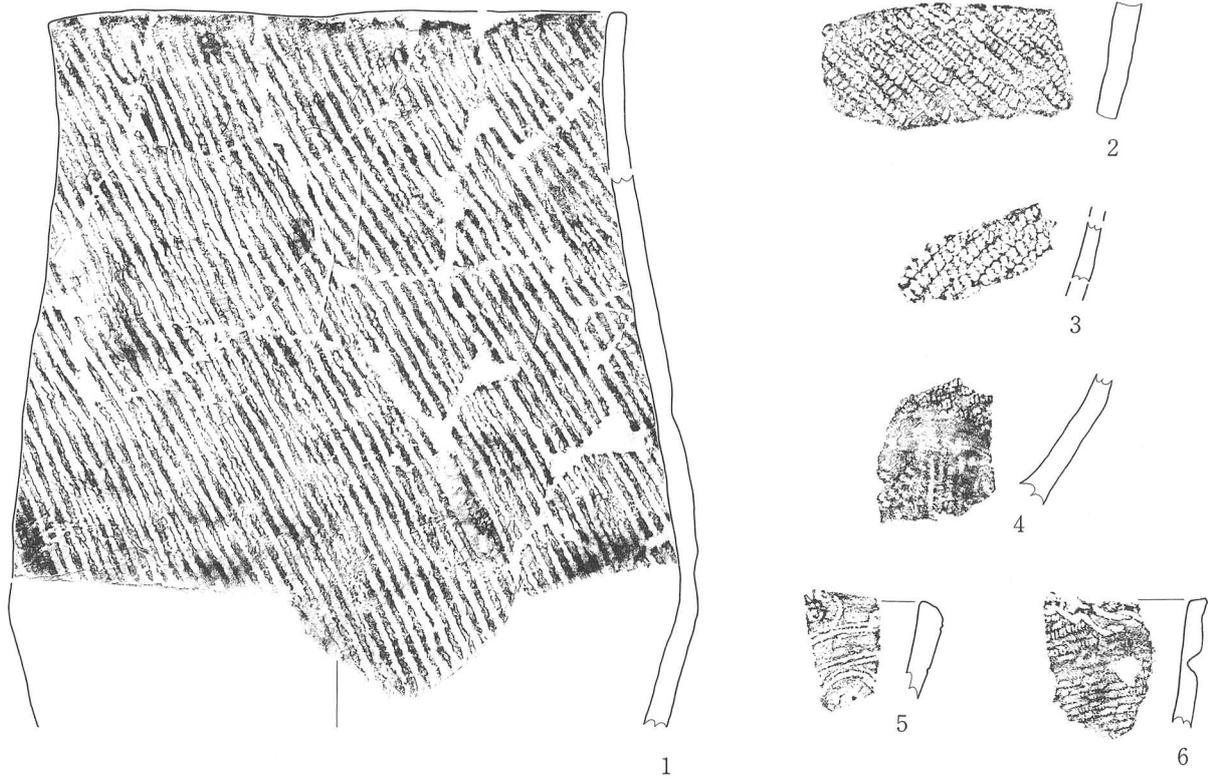
八木沢野来遺跡では大木7b・8・9・10式と量は多くないものの連続して遺物が得られ、再び利用されるようになる。八木沢駒込Ⅰ遺跡でも竪穴住居跡が検出されるのは中期後半の限られた時期のみのものである。下大谷地Ⅰ・Ⅱ遺跡では大木9式頃の竪穴住居跡、八木沢Ⅱ遺跡でも大木10式頃の竪穴住居跡が検出されるなど、遺跡は南側と北側へとやや動きを見せる。

後期に入ると明らかに遺構に伴って遺物が出土する遺物はなく、この状況は晩期初頭頃まで続いている感がある。本遺跡平成19年度調査区で晩期前半の遺構遺物があり小規模な集落が想定される。それ以降になると遺物は散見される遺跡はいくつかあるが、遺構の存在は不明瞭となる。

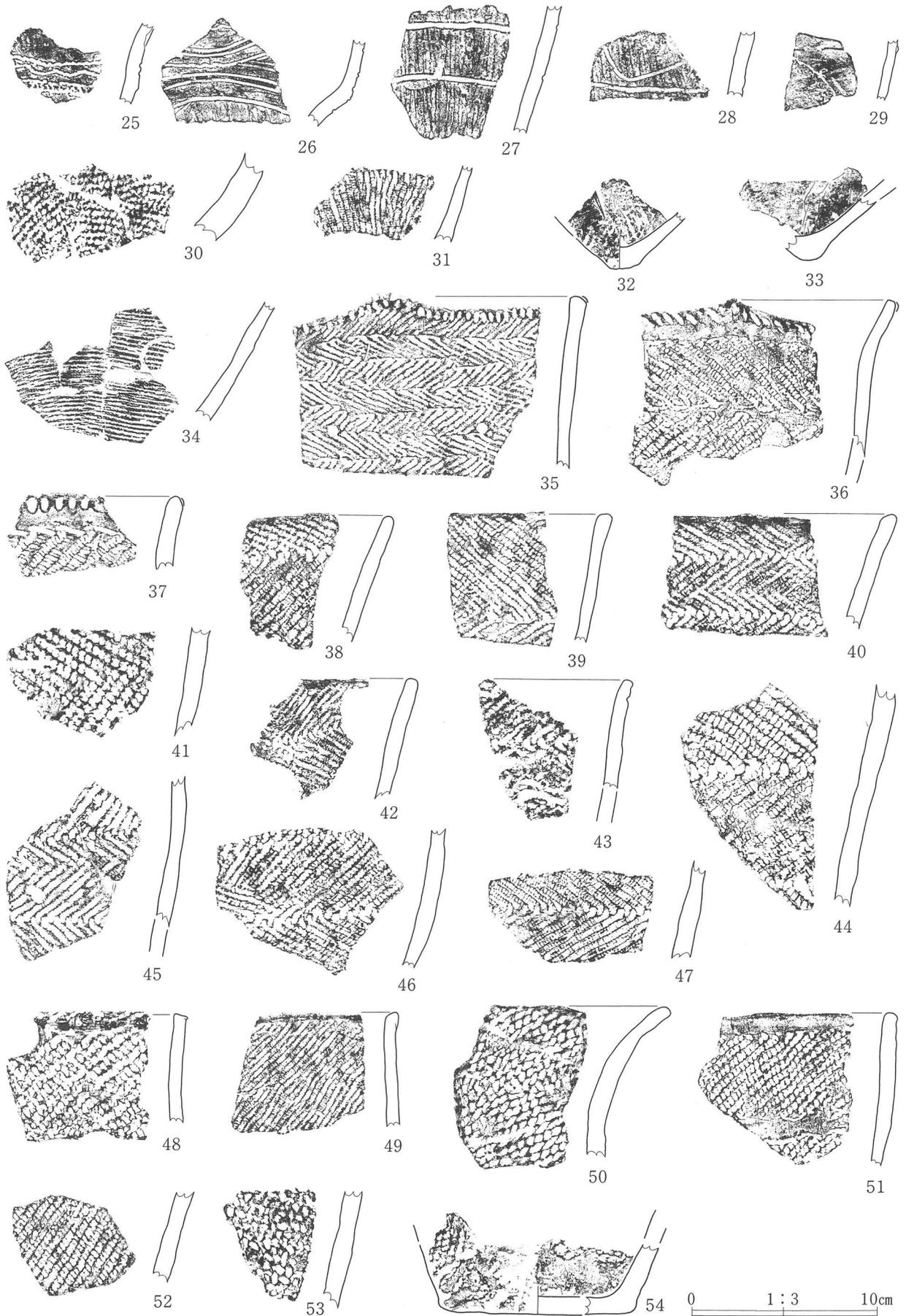
遺跡の全体を発掘調査したわけではないので、各遺跡の調査内容は限定的な情報であることには違いない。それでも遺物が殆ど出土しない状況については、その時代にはあまり人がいなかったとみるほうが素直な解釈といえよう。前述した前期末から中期初頭、後期～晩期初頭頃には集落の断絶、若しくは遺跡立地に大きな変化が生じたと想定される。

本遺跡のある八木沢川中流域は狩猟採集を基盤とする縄文人にとっては最良の地ではなかったのではないかという印象を持つ。なぜならば八木沢川は小河川であり、サケマス類はあまり捕れなかったはずである。それに海岸部からもやや離れた立地でもある。東西を山地で挟まれた場所に遺跡はあるが、東側の山は遺跡と海岸との間にあって面積も狭い。小動物以外はあまり生息できないところである。西側の山は八木沢川と長沢川に挟まれた南北に細長い山地で、東側の山地に比べるとかなり広い。しかしこの細長い山地（に生息する動物）も東にある八木沢川流域にある本遺跡や八木沢野来遺跡の集落、南側にある大谷地地区にある集落（遺跡）、西側の長沢側流域にある集落（遺跡）からの狩猟圧がかかるため、あまり多くの動物を獲ることは難しかったと思われる。それぞれの集落間で猟場が定められていたのなら、なおさら活動領域は狭い範囲であったと推察される。石器の石材を産する場所でもないようなので、残る植物類の採集が本遺跡の生業の柱であったと考えたい。現在、この付近の山林は杉とミズナラが多いようだが、当時は堅果類の多い山林であったのであろう。

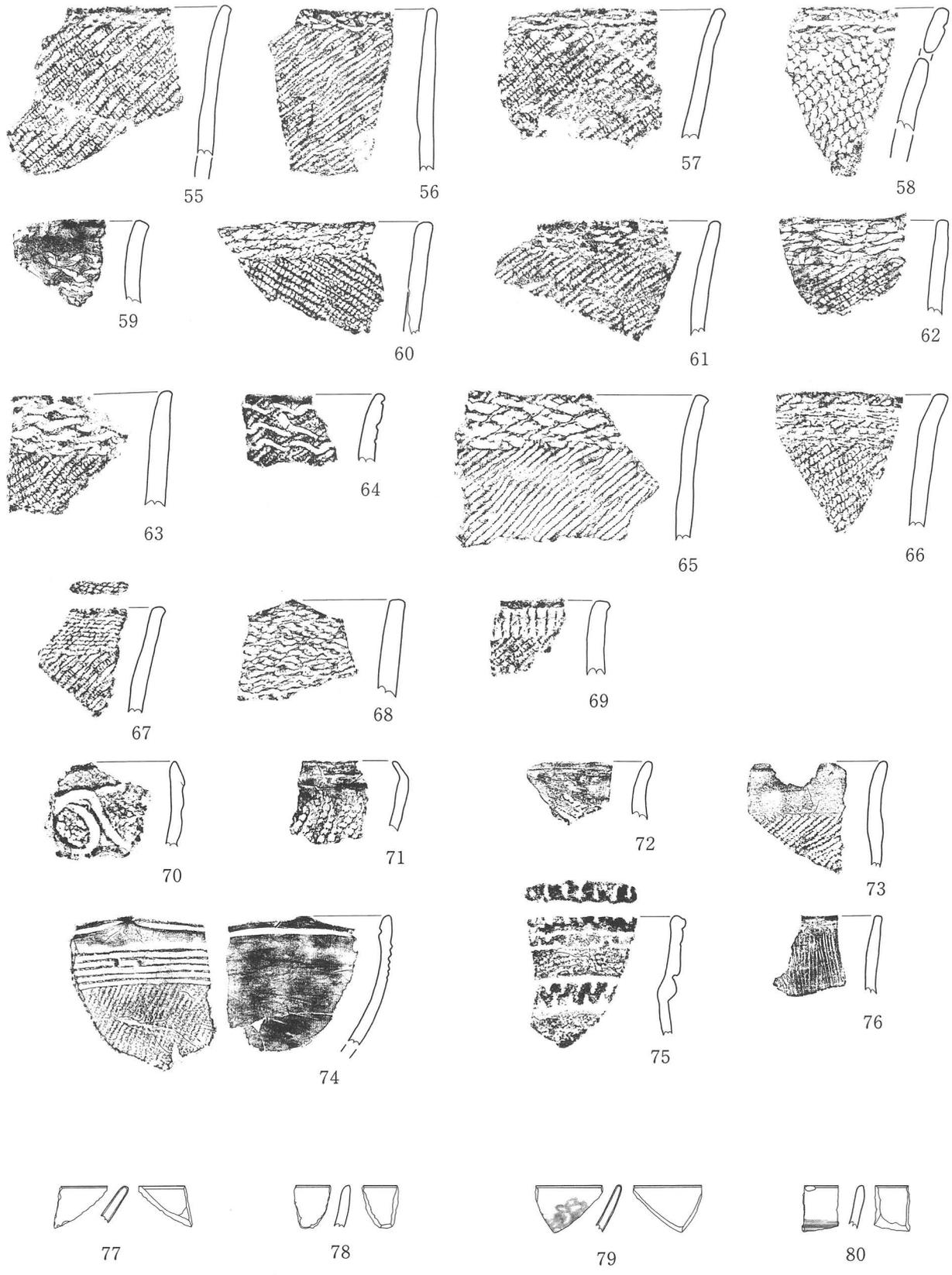
三陸縦貫道宮古道路関連の遺跡調査報告書はまだ未刊行のものもあり、各遺跡の内容についてはそれぞれ比較検討を継続し、改めて考察を加えたい。



第63图 土器 (1)

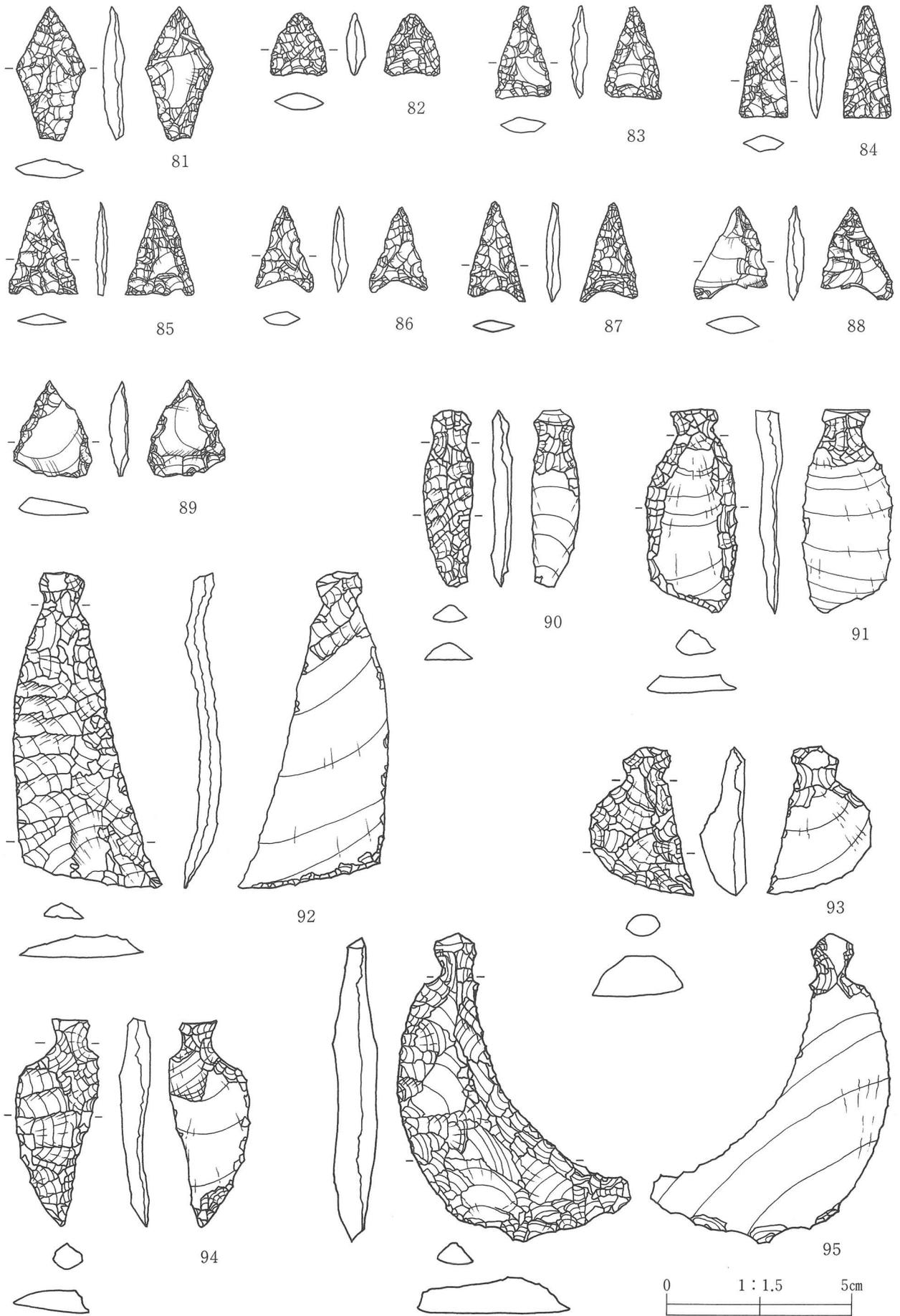


第64図 土器(2)

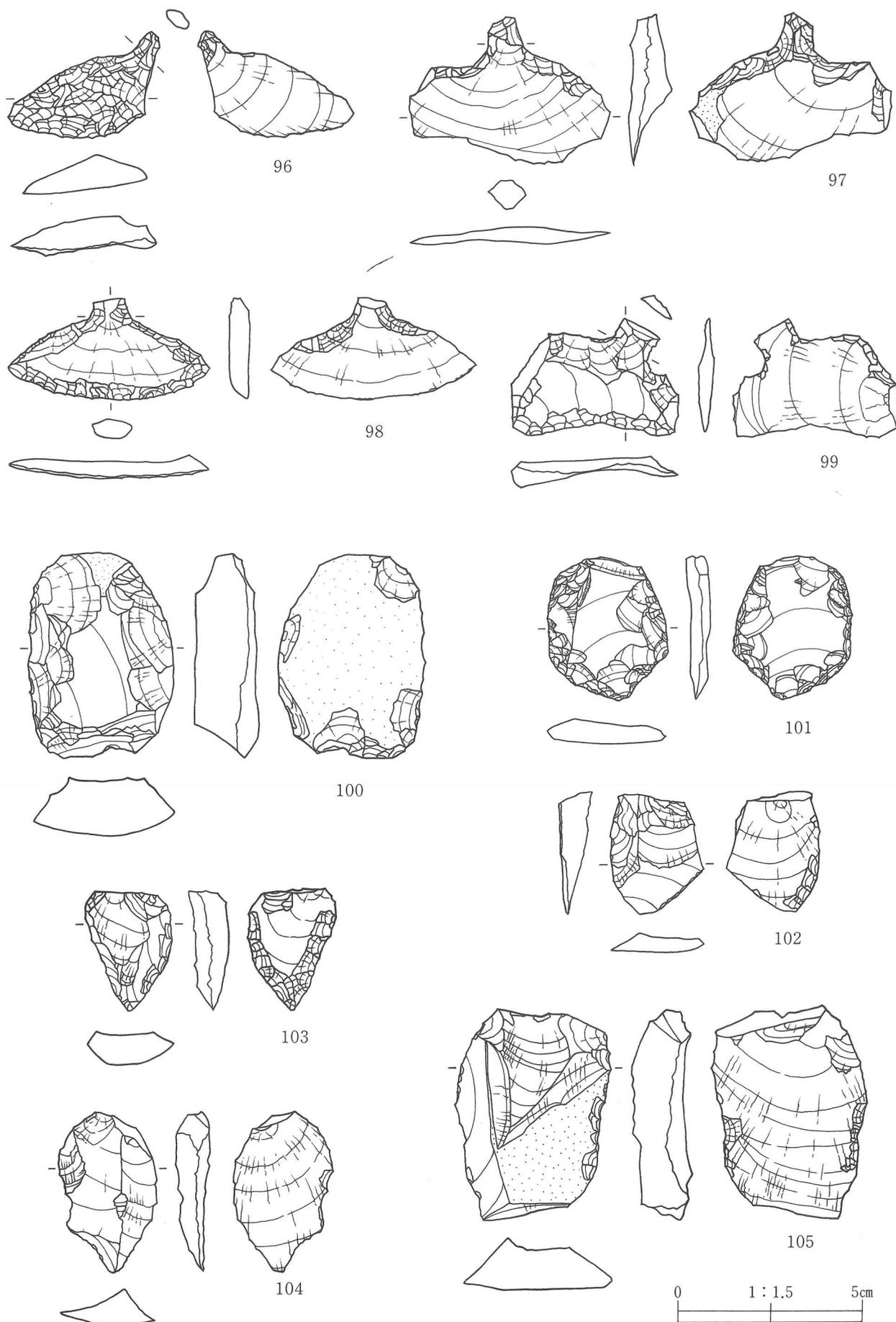


0 1:3 10cm

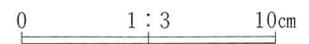
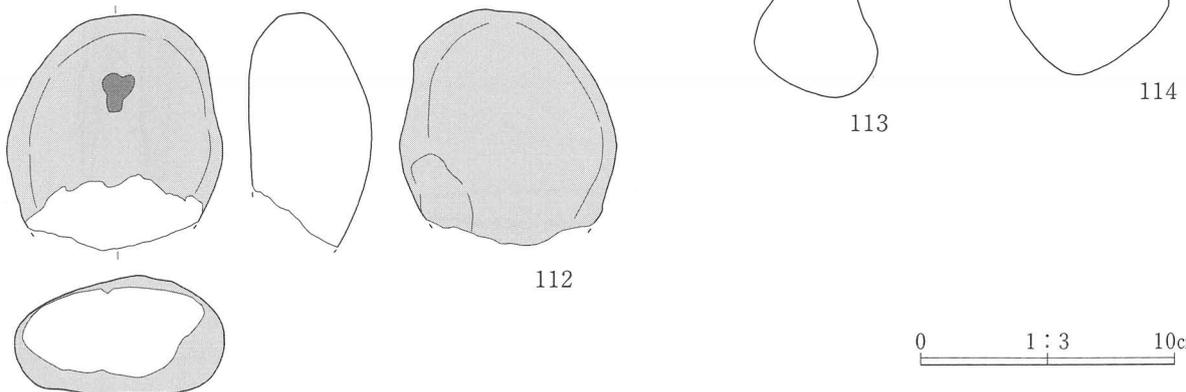
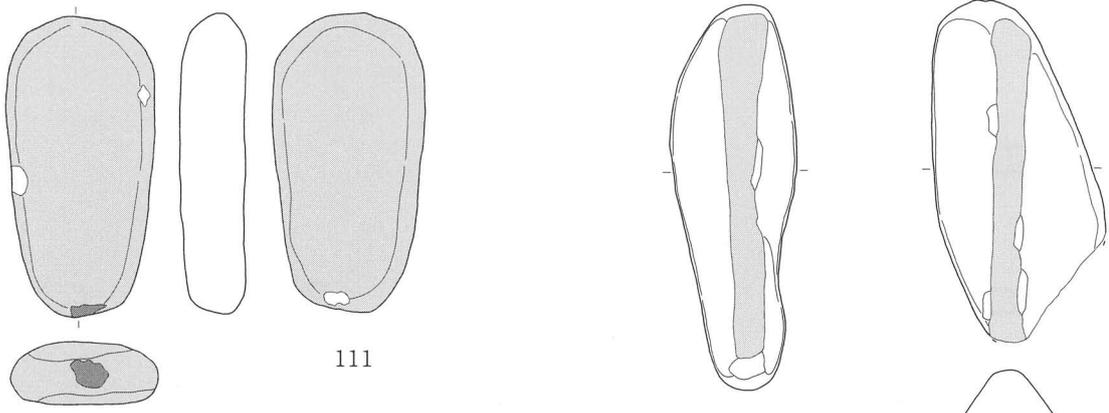
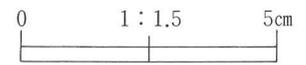
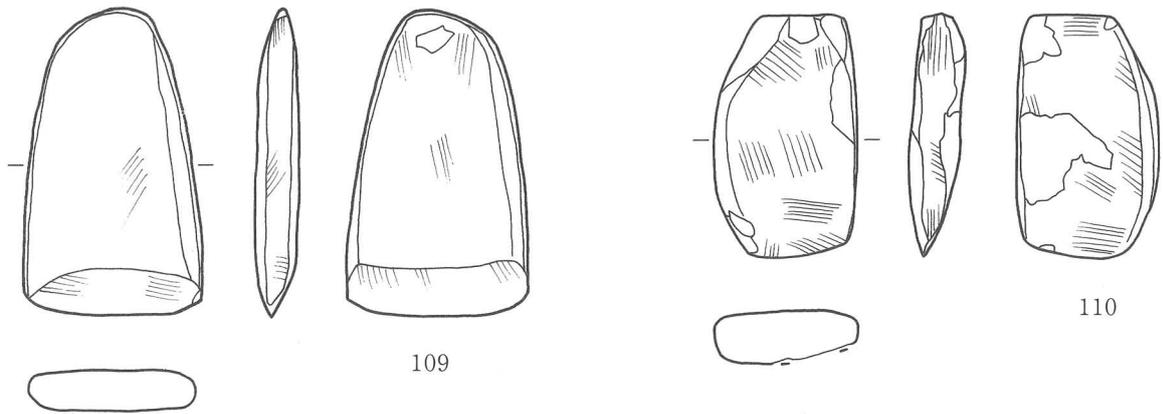
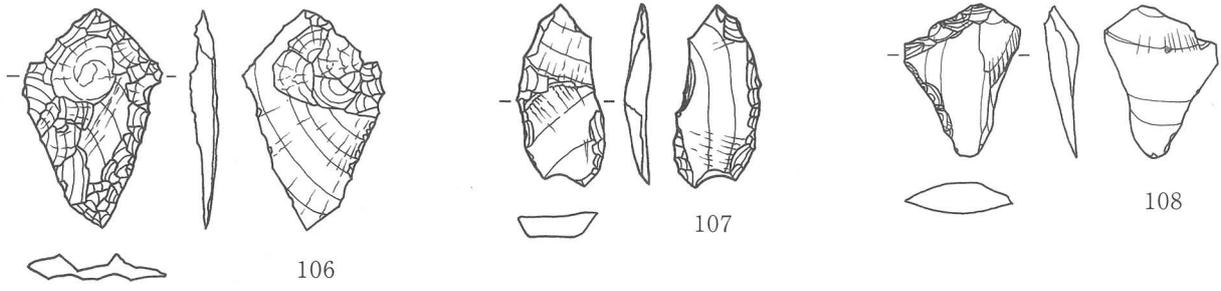
第65图 土器(3)、陶磁器



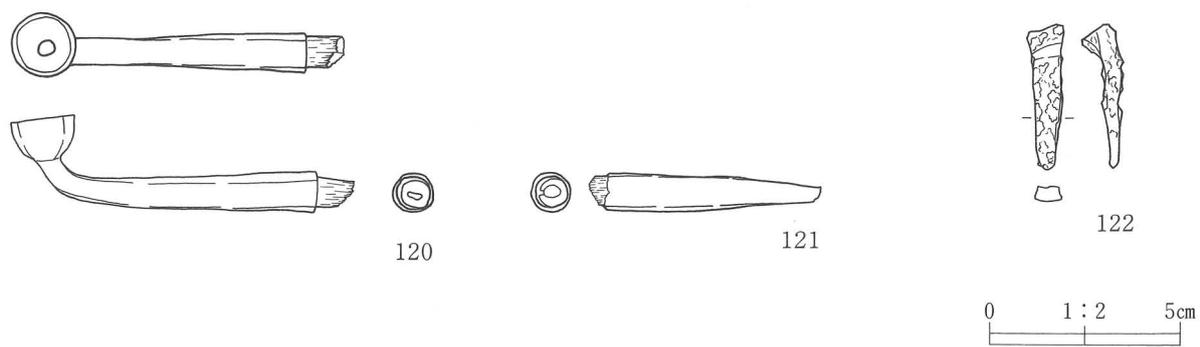
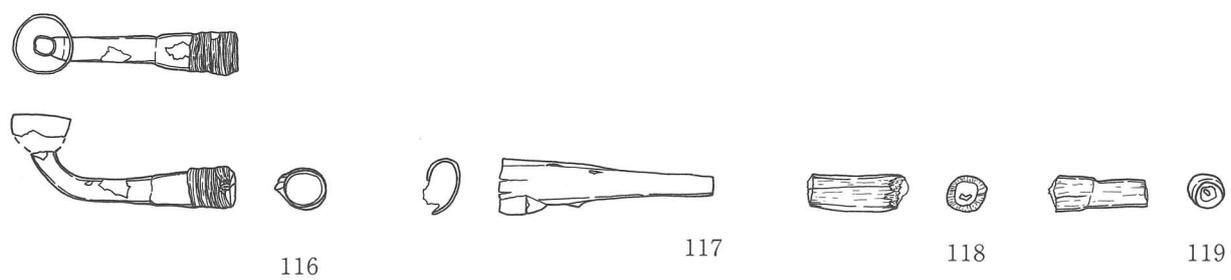
第66図 石器 (1)



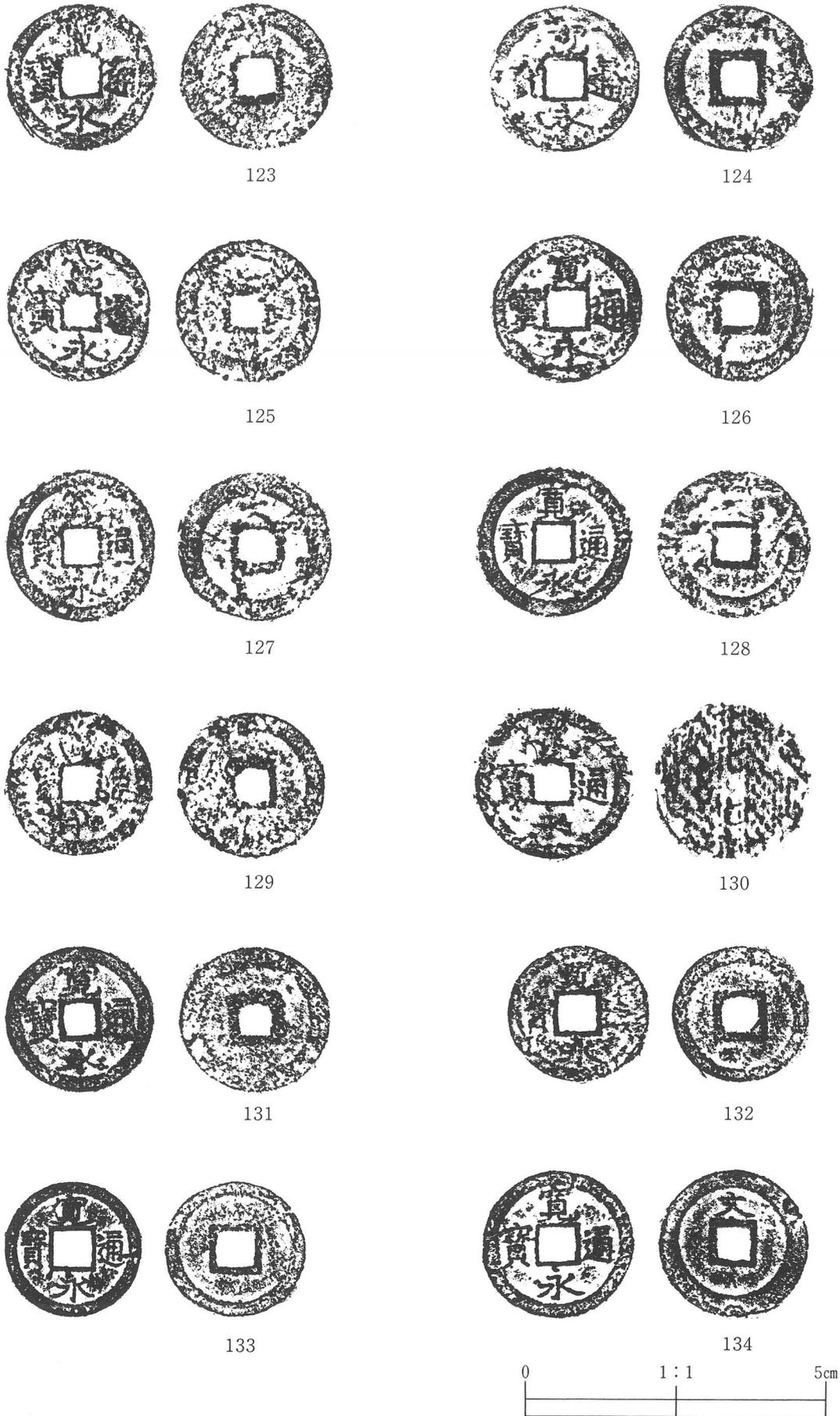
第67图 石器(2)



第68図 石器(3)



第69図 石器(4)、金属製品(1)



第70図 金属製品（2）



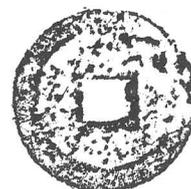
135



136



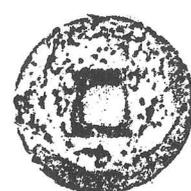
137



138



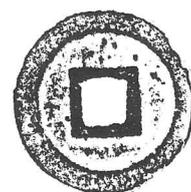
139



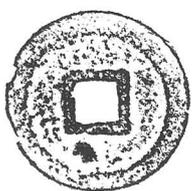
140



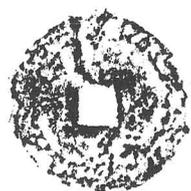
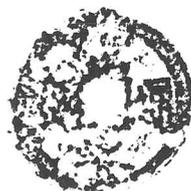
141



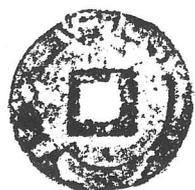
142



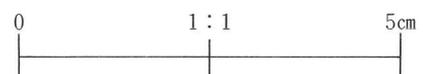
143



144



145

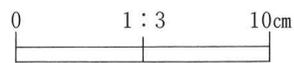


第71図 金属製品 (3)



3号墓には台座があるが
この墓石は1号墓の近くで
見つかった。

146



第72図 墓石

Ⅶ 分析・鑑定

1 人骨鑑定（平成19年度調査）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八木沢駒込I遺跡（岩手県宮古市八木沢に所在）は、八木沢川沿いに分布する山地に位置し、南側から北側へ向かう緩斜面に立地する。尾根部に縄文時代晩期の陥し穴、緩斜面部で縄文時代晩期の集落と中世後期の墓坑（16世紀頃）が検出されている。

この中世の墓坑から出土した人骨について、年齢や性別など個体情報を得るために分析調査を行った。

(1) 試料

試料は、I区SK06から出土した土葬人骨である。SK06は、140×110cmの南北に長い楕円形の土坑であり、人骨、洪武通寶（初鑄年1368年）、永楽通寶（初鑄年1408年）の銭貨、漆の皮膜が検出されている。

遺構を掘り下げる段階で覆土中から出土した骨は、北半覆土上位および西半覆土2層の2試料が取り上げられた。また、底部付近の骨は、ほぼ全体が確認できる程度まで土壌を除去した後、形状が崩れそうな骨に関してバインダーで補強し、ある程度の塊や部位ごとに番号を付し、計16試料を取り上げた。

(2) 分析方法

取り上げた骨は、室内において竹串等を用いて土壌を可能な限り除去する。場合によっては、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。自然乾燥させた後、試料を肉眼で観察し、部位を同定する。なお、人骨各部位の名称については、図1に示す。

(3) 結果

脳頭蓋、胸椎の一部、左右鎖骨、右上腕骨？が覆土中にみられ、それ以外の部位が土坑底面に重なった状態で出土する。全身の主要部位が検出されているが、完存する部位が無く、骨の実測は不可能である。各試料の同定結果を表1に、部位ごとにまとめた結果を表2に示す。また、取り上げた試料と同定結果については、図2に示す。

脳頭蓋は破損しており、左右頭頂骨～後頭骨

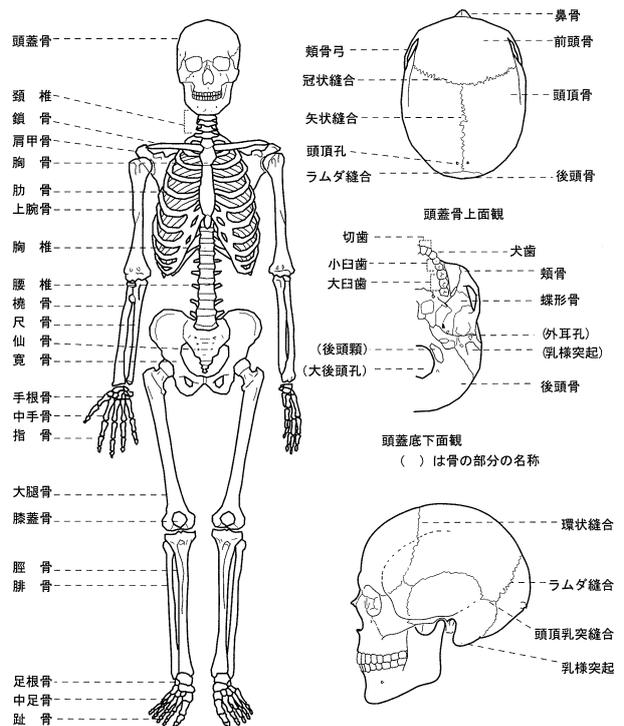


図1 人体骨格各部の名称

と破片が残存する。ラムダ縫合は、内側が閉じ、外側も一部閉じかけている。矢状縫合は、破損しているため外側の状態が不明であるが、内側が閉じていることが観察される。歯牙は、右上顎中切歯と側切歯が遊離した状態で出土する。咬耗が進んでおり、象牙質が露出する。

体幹では、頸椎1点、胸椎4点、腰椎4点、椎体片1点、肋骨片1点が確認される。この内、頸椎は胸椎・腰椎からやや離れた場所で出土する。腰椎には、椎体縁辺部に加齢に伴う変形がみられる。

上肢では、左右鎖骨、右肩甲骨、左上腕骨、右上腕骨？、左右橈骨、左右尺骨が確認される。右肩甲骨は関節窩部分が検出される。右橈骨は遠位端部のみが残存する。他の長骨は両端が欠損する。

下肢では、左寛骨、左右大腿骨、膝蓋骨、左右脛骨、腓骨が確認される。左寛骨は、臼部のみが大腿骨骨頭とともに検出される。左大腿骨は、比較的形狀を保っており、骨頭～遠位端部、遠位端がみられるが、大転子部付近が破損する。その他の部位も破片である。

(4) 考 察

本人骨は、左上腕骨が垂直方向に検出されること、頸椎、胸椎、腰椎の位置関係をみると、南西側に向いた座位屈葬であったと判断され、腐敗が進み土圧を受けて南西側に倒れたと考えられる。

埋葬された人骨の性別は、内外の後頭骨隆起が発達しておらず、四肢骨も全体的に華奢なことから、女性と判断される。年齢については、矢状縫合とラムダ縫合の縫合状態、および腰椎にも加齢に伴う変形がみられることから、老齢（60歳以上）に達していたと推定される。

なお、左大腿骨には、骨体中央部付近の内側やや前方に瘤状のふくらみがみられ、そこより後側の臀筋粗線付近にかけて明瞭な傷跡がみられる。これは、おそらく生前に骨折した痕跡で、ほぼ完全に癒合し、治癒した痕跡の可能性がある。

岩手県内では、縄文時代の大洞貝塚・崎山貝塚（奈良ほか, 1997; 奈良ほか, 1995など）、奈良・平安時代の駒焼場遺跡（佐藤・熊谷, 1989）、江戸時代の東館遺跡（奈良・鈴木, 2003）などで人骨が検出されている。一方、阿部（2004）は、岩手県内における鍋被り墓壇の地域的様相と時間的変遷についてまとめており、それによると山根遺跡（16世紀末～17世紀）、関沢口遺跡（18世紀前半～中頃）、大鳥I遺跡（16世紀）、高田館跡（14世紀～16世紀）、上似内遺跡（15世紀末～16世紀）、河崎の柵擬定地

表1 出土人骨同定結果

番号	部位	左右	部分	数量	備考
1	上腕骨	左	両端欠	1	
2	上顎中切歯	右	破損	1	
	上顎側切歯	右	破損	1	
	肋骨		破片	1	
3	胸椎		破片	3	
	四肢骨		破片	1	
4	頸椎		破片	1	
	不明		破片	2	
5	肩甲骨	右	関節窩部	1	
	上腕骨?	右	破片	1	
6	腰椎		破片	4	
7	尺骨	右	両端欠	1	他破片1
	腓骨	右	破片	1	
8	大腿骨	右	両端欠	1	他破片2
9	橈骨	左	両端欠	1	
	尺骨	左	両端欠	1	
10	橈骨	右	遠位端部	1	
11	上腕骨/大腿骨		骨頭部	1	
	不明		破片	1	
12	寛骨	左	臼部	1	
	大腿骨	左	遠位端欠	1	近位端部破損
	大腿骨	左	遠位端	1	
13	膝蓋骨		破片	1	
	大腿骨/脛骨		破片	2	
14	脛骨	左	両端欠	1	他破片1
15	脛骨	右	両端欠	1	他破片1
一括	不明		破片	1	
北半覆土上位	脳頭蓋		左右頭頂骨～後頭骨	1	
	脳頭蓋		破片	1	
	鎖骨	左	破片	1	
西半覆土2層	胸椎		破片	1	
	椎骨		椎体片	1	
	鎖骨	右	両端欠	1	
	上腕骨?	右	破片	1	

表2 部位別検出結果

部位		数量・状態	
		右	左
頭蓋	脳頭蓋	左右頭頂骨～後頭骨, 破片(1)	
		右上顎中切歯, 右上顎側切歯	
体幹	脊柱	頸椎	破片(1)
		胸椎	破片(4)
		腰椎	破片(4)
		椎骨	椎体片(1)
	胸郭	肋骨	破片(1)
上肢	上肢帯	鎖骨	骨体
		肩甲骨	関節窩部
	腕部	上腕骨	破片(2)
		橈骨	遠位端部
		尺骨	骨体
下肢帯	寛骨		臼部
	腿部	大腿骨	骨体
		膝蓋骨	破片(1)
		脛骨	近骨体
腓骨	破片(1)	骨体	
上腕骨/大腿骨		骨頭部(1)	
大腿骨/脛骨		破片(2)	
四肢骨		破片(1)	
不明		破片(4)	

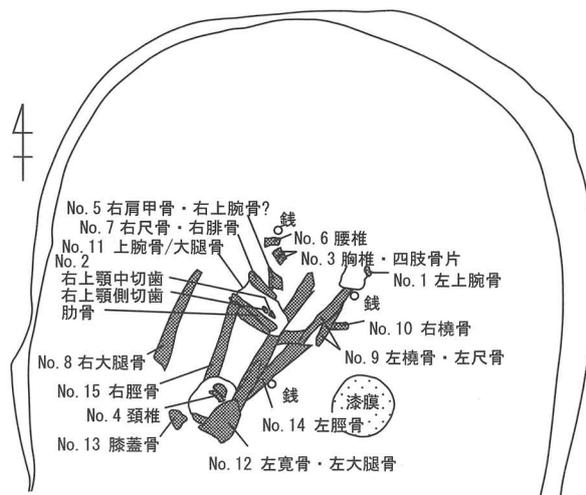


図2 出土骨取り上げ状況および同定結果

(16世紀末～17世紀前半)、姉帯城(16世紀末?)などでも人骨がみられると報告されている。今回の分析結果は、中世の資料を蓄積することができ、貴重な結果が得られたと言えよう。

引用文献

阿部 勝則, 2004, 発掘された鍋被り墓壙 —岩手県内出土事例の検討—. 館研究第3号—墓特集—, 岩手の館研究会, 11-28.

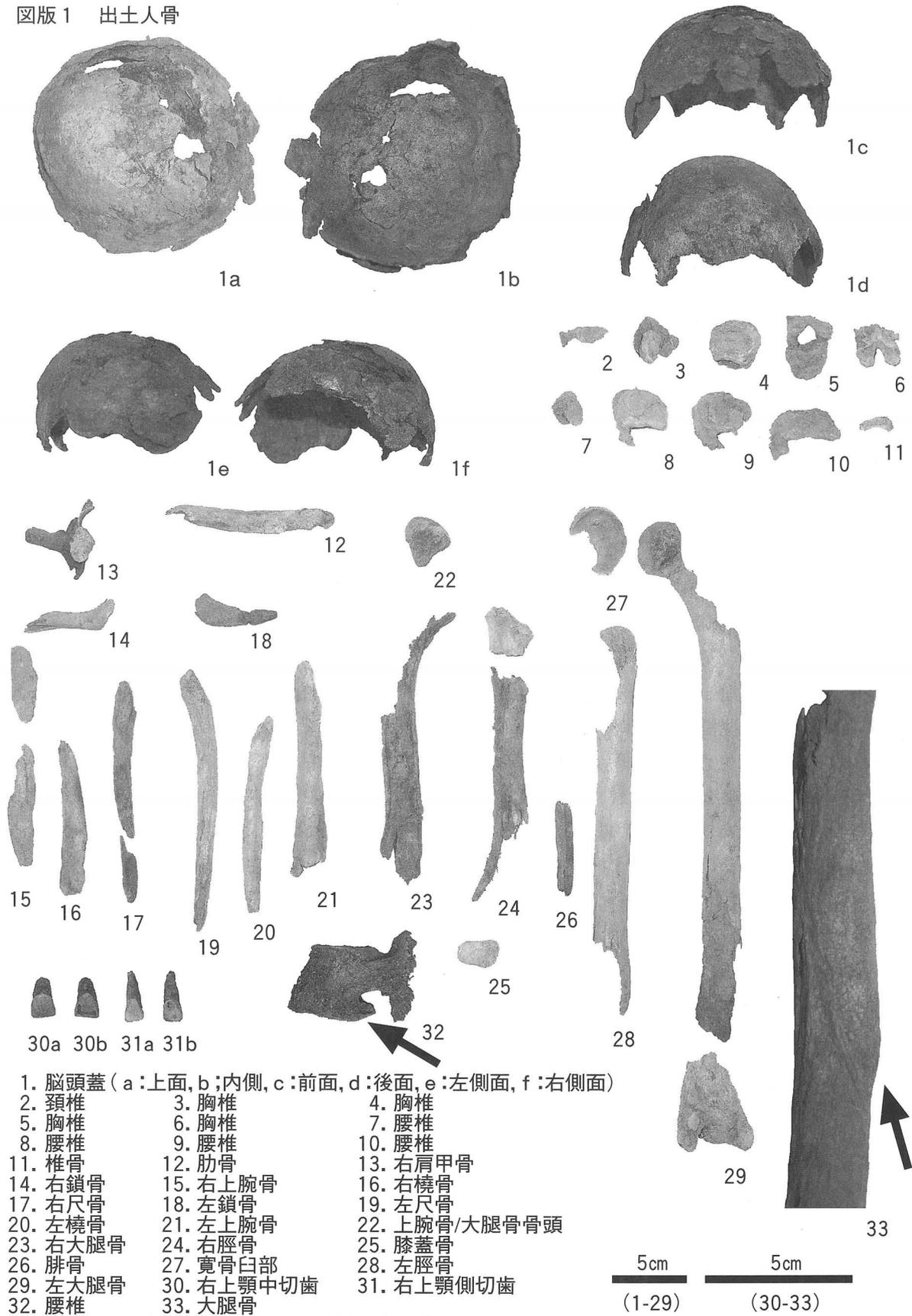
奈良 貴史・鈴木 敏彦・地土井 健太郎・佐宗 亜衣子・近藤 修・百々 幸雄, 1997, 平成8年度調査 大洞貝塚出土人骨について. 大洞貝塚 平成6・7・8年度範囲確認調査概報, 大船渡市教育委員会, 122-140.

奈良 貴史・鈴木 敏彦, 2003, 前沢町東館遺跡出土人骨について. 岩手県前沢町文化財調査報告書第14集 東館(赤生津城)遺跡発掘調査報告書・五合田遺跡発掘調査報告書, 前沢町教育委員会, 69-85.

奈良 貴史・鶴沢 和宏・佐宗 亜衣子・百々 幸雄, 1995, 崎山貝塚出土損傷人骨について. 宮古市埋蔵文化財調査報告書44崎山貝塚—範囲確認調査報告書—, 宮古市教育委員会, 435-439.

佐藤 正彦・熊谷 賢, 1989, 駒焼場遺跡出土の動物遺存体種同定. 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第133集 駒焼場遺跡発掘調査報告書 国道4号金田—バイパス関連遺跡発掘調査, 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター, 317-320

図版1 出土人骨



1. 脳頭蓋 (a:上面, b:内側, c:前面, d:後面, e:左側面, f:右側面)
 2. 頸椎 3. 胸椎 4. 胸椎
 5. 胸椎 6. 胸椎 7. 腰椎
 8. 腰椎 9. 腰椎 10. 腰椎
 11. 椎骨 12. 肋骨 13. 右肩甲骨
 14. 右鎖骨 15. 右上腕骨 16. 右橈骨
 17. 右尺骨 18. 左鎖骨 19. 左尺骨
 20. 左橈骨 21. 左上腕骨 22. 上腕骨/大腿骨骨頭
 23. 右大腿骨 24. 右脛骨 25. 膝蓋骨
 26. 腓骨 27. 寛骨臼部 28. 左脛骨
 29. 左大腿骨 30. 右上顎中切歯 31. 右上顎側切歯
 32. 腰椎 33. 大腿骨

注意1) No.32の矢印は腰椎の加齢に伴う変化を示す
 注意2) No.33の矢印は骨折痕?を示す

2 銅銭の成分分析（平成19年度調査）

JFEテクノリサーチ株式会社 分析・評価事業部 埋蔵文化財調査研究室

（1） は じ め に

岩手県宮古市大字八木沢に所在する八木沢駒込 I 遺跡から出土した銅銭について、化学成分分析に基づく本銭、模鑄銭などの特徴検討を依頼された。以下にその結果について報告する。

（2） 調査資料および分析方法

（1） 調査資料

資料は表 1 に示すSK06墓壙から副葬品として出土した 3 枚の古銭である。資料の記号は提供された資料に準拠した。

（2） 調 査 方 法

i 重量計測、外観観察

分析調査に先立ち重量、形状を測定した。結果は表 1 に示した。資料重量の計量には0.01gまで測定可能な電子天秤を使用した。各種試験用試料を採取する前に、資料の外観をmm単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。

ii 分析試料調整と分析方法

銭貨裏面の錆と付着物をダイヤモンドビット、超硬ビットで除去した後、超音波洗浄によりクリーニングした。蒸留水で十分洗浄し、乾燥した。さらにダイヤモンドビットで再度研磨し、アルコール中で超音波洗浄し、急速乾燥後、蛍光X線分析法により成分を分析した。

iii エネルギー分散型蛍光X線分析：(EDX元素分析)

原理はX線管で発生させたX線を試料にあてることによって、試料に含まれる元素固有のエネルギーを持った特性X線を発生させ、このX線をSi半導体検出器で検出し、試料中の構成元素を定性・定量分析するものである。蛍光X線分析装置（掘場製作所製、MESA-500）を使って遺物の元素分析（測定元素： ^{11}Na ～ ^{92}U 。）を行う。Sb、Asについては0.01%の分析感度を有する。測定条件は以下の通りである。（X線管ターゲット：Rh（ロジウム）、X線管電圧：1～500 μA （15kV）、1～240 μA （50kV）（全自動2段切り換え）、検出器：高純度シリコン検出器）。

(iv) X線回折測定

試料を粉砕して板状に成形し、X線を照射すると、試料に含まれている化合物の結晶の種類に応じて、それぞれに固有な反射（回折）された特性X線を検出（回折）できることを利用して、試料中の未知の化合物を同定することができる。多くの種類の結晶についての標準データが整備されており、ほとんどの化合物が同定される。

（3） 調査結果および考察

調査資料の外観写真を143頁に示す。表 1 に資料の法量値を、表 2 は分析成分である。139～141頁に分析チャートを示す。X線回折結果を142・143頁に示す。

従来研究の分類方法と同様にCu、Sn、Pbの3成分を100%に規格化して図 1 の3角ダイアグラムにプロットした。図 1 および表 2 から明らかのようにSnが8.5%～19.7%の範囲で含まれ、Pbも12.3%～14.6%の範囲である。模鑄銭や私鑄銭の特徴であるSnが少ないあるいは含まないことは明

らかに異なる。3資料ともAsは0.01%以下でSbも0.17%以下と微量成分も非常に低い特徴を持つ。また、Feも0.82%以下と非常に低い特徴がある。図2～図4はそれぞれ[(Cu+Sn+Pb)、(As+Sb)、Fe]、[(Cu+Sn+Pb)、As、Sb]、[(Cu+Sn+Pb)、As、Fe]を100%に規格化して三角ダイアグラムに表している。図2で見ると、Cu+Sn+Pbが99.6%以上でこの3成分のみで作られていると見なせるほどである。図3、図4ともにSb、Fe、Asなどの不純物成分が微量であることを示している。参考図表1、2は文献1から引用した公鑄銭と模鑄銭の成分による分類推定である。この分類に従えば本資料はいずれも公鑄銭と推察される。この文献ではPbが2.9%以下のデータは参考図表2ではPb無として分類されている。

X線回折結果：資料601宋通元宝では銅－錫合金としてCu5.6－Snが最強回折強度で検出される。資料602永楽通宝ではCu5.6－Snの銅－錫合金と銅（Cu）単体が強い強度で同定され、鉛（Pb）単体、錫酸化物（ SnO_2 ）、銅酸化物（ Cu_2O ）が検出されている。酸化物は表面に生成した薄い酸化被膜である。資料No603洪武通宝ではCu5.6－Snの銅－錫合金が最強強度で同定され、銅酸化物（ Cu_2O ）が検出される。銅（Cu）と錫（Sn）は合金化するのに対して鉛（Pb）は銅、錫にほとんど固溶しない。また、X線回折では表面から10ミクロン程度の深さの情報のため表面に出にくい鉛は大きくX線回折には表れなかったと思われる。また、鉛は単体として存在すると判断される。Cu5.6－Sn：銅が5.6原子と錫1原子が固溶体を形成している。

これから本調査試料は以下のように分類される。

(1) 601宋通元宝、Sb、Asをほとんど含まず、Feを僅かに含みCu、Sn、Pbが適正範囲に調整された公鑄銭と思われる。

(2) 602永楽通宝、Asをほとんど含まず、Sb、Feを僅かに含みCu、Sn、Pbが適正範囲に調整された公鑄銭と思われる。

(3) 603洪武通宝、Asをほとんど含まず、Sb、Feを僅かに含みCu、Sn、Pbが適正範囲に調整された公鑄銭と思われる。

(4) ま と め

八木沢駒込I遺跡から出土した銭貨はCu、Sn、Pbの含有量からいずれも公鑄銭と推察された。いずれもCu+Sn+Pbの主要成分だけで99.8%以上あり、Sb、As、Feの成分が少ない特徴がある。

文献

西本右子他：「公鑄銭・模鑄銭の化学分析」、ぶんせき、2002（10）、p585

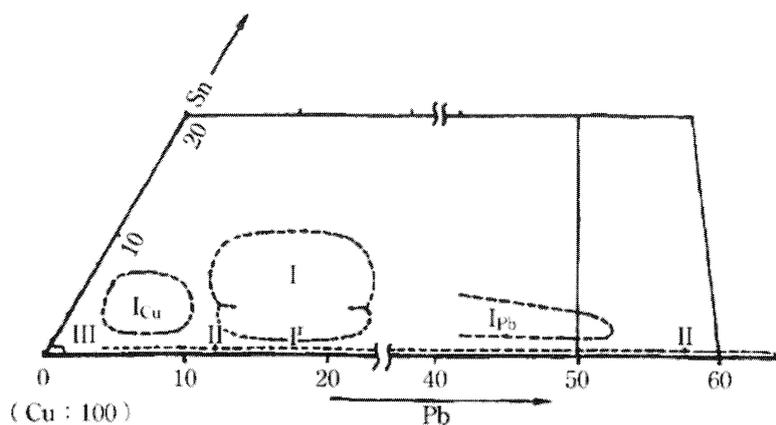
参考

参考図表 1 公鑄銭と模鑄銭材料配合の推定

No	公鑄銭/模鑄銭	配合割合 ^{*)}			分類
		Cu	Sn	Pb	
1	公鑄銭	適正範囲に調整			I
2	私鑄銭もしくは模鑄銭	中	少	多	I _{Pb}
3		多	少	少	I _{Cu}
4		中	少	中	I'
5	模鑄銭	中~多	無	多~中	II
6		多	無	無	III

*) 公鑄銭に比較した定性的表現で表した

参考図表 2 公鑄銭・模鑄銭の化学組成比



(5) 図表・写真

表 1 資料一覧

資料No	古銭名称	初鑄銭	径 mm	厚さ mm	重量 g	備考
601	宋通元宝	960 北宋	24.4	0.9	2.45	
602	永楽通寶	1408 明	24.7	1.1	2.37	
603	洪武通寶	1368 明	23.6	1.3	2.12	

化学成分分析結果

表 2 古銭資料の分析結果

資料	Cu	Sn	Pb	Sb	Fe	As	total
601 宋通元宝	65.33	19.72	14.60	0.04	0.20	<0.01	99.89
602 永楽通寶	78.82	8.59	12.23	0.17	0.07	<0.01	99.88
603 洪武通寶	74.94	12.29	12.33	0.16	0.15	<0.01	99.87

空欄は検出なし

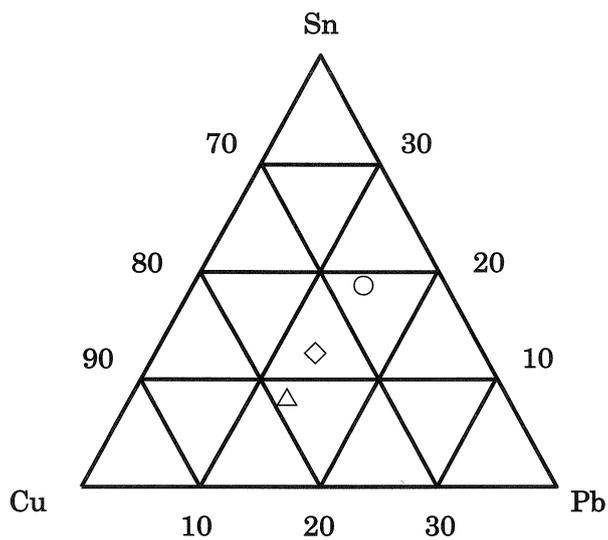


図1 Cu-Sn-Pbの成分比 (○：資料 601, △：資料 602, ◇：資料 603)

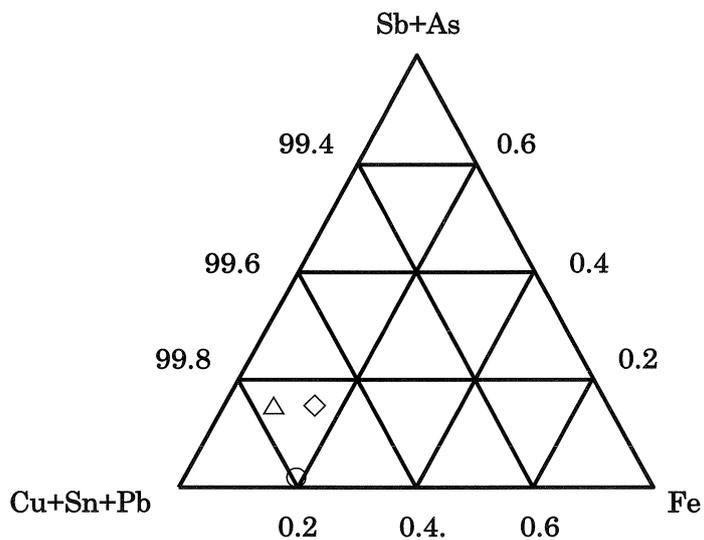


図2 (Cu+Sn+Pb)-(Sb+As)-Fe成分比 (○：資料 601, △：資料 602, ◇：資料 603)

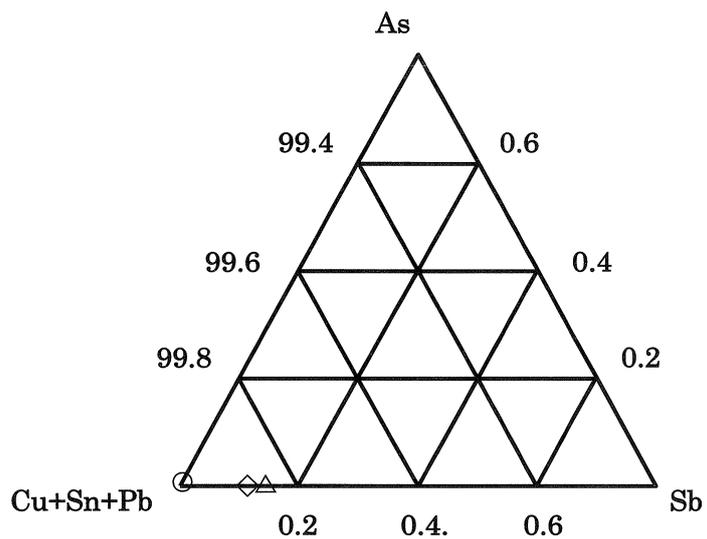


図 3 (Cu+Sn+Pb)-Sb-As 成分比 (○:資料 601, △:資料 602, ◇:資料 603)

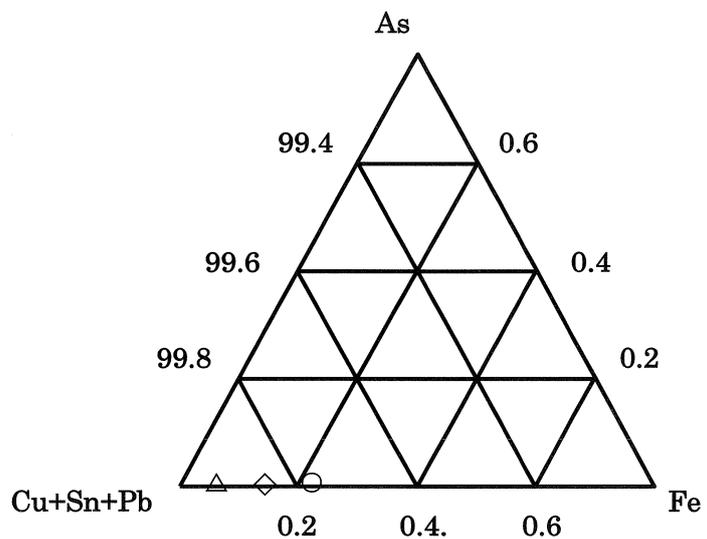
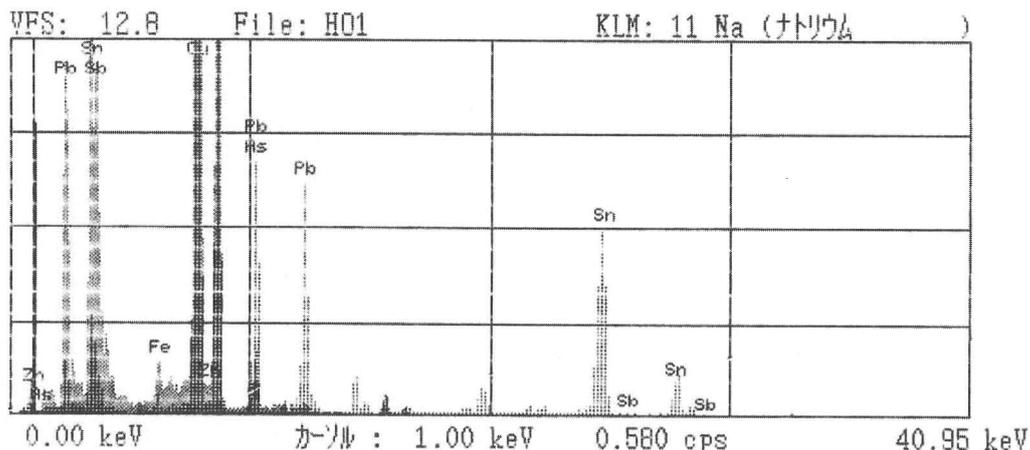


図 4 (Cu+Sn+Pb)-Sb-Fe 成分比 (○:資料 601, △:資料 602、◇:資料 603)

コメント： 銭 No. 1 (6 0 1)



測定条件

	# 1	# 2
日付	'07/12/10	'07/12/10
時刻	15:40:40	15:40:40
電圧	15 kV	50 kV
電流	102 μ A	6 μ A
時間	50 秒	50 秒
DT%	25 %	23 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
26	Fe 鉄	?			
29	Cu 銅	○			
30	Zn 亜鉛	○			
33	As ひ素	?			
50	Sn すず	?			
82	Pb 鉛	○			
51	Sb アンチモン				

HORIBA MESA-500 定量結果

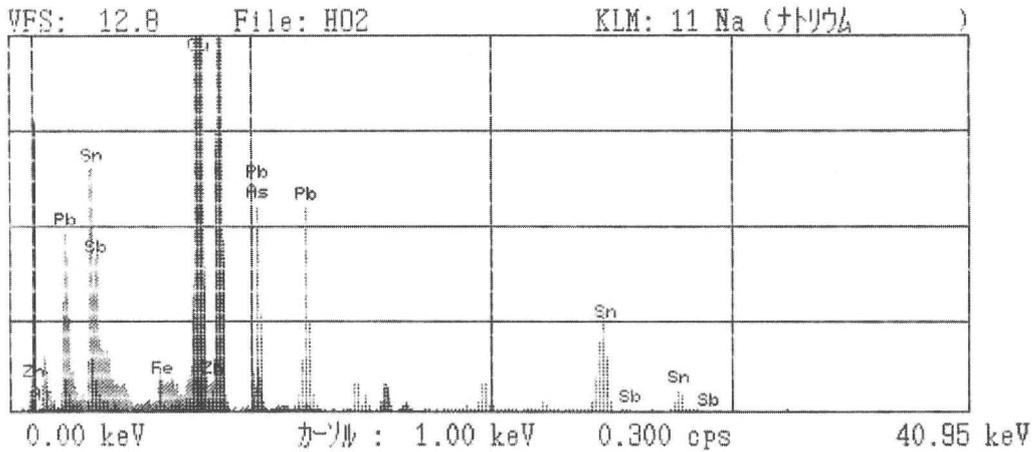
'08/01/24 09:39:03

コメント： 銭 No. 1 (6 0 1)

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
29 Cu 銅	65.33	0.38	434.773
50 Sn すず	19.72	0.36	41.295
82 Pb 鉛	14.60	0.28	30.613
26 Fe 鉄	0.20	0.05	1.135
30 Zn 亜鉛	0.11	0.05	0.839
51 Sb アンチモン	0.04	0.04	0.080
33 As ひ素	0.00	0.05	0.000

2 銅銭の成分分析

コメント： 銭 No. 2 (6 0 2)



測定条件

	# 1	# 2
日付	'07/12/10	'07/12/10
時刻	15:52:27	15:52:27
電圧	15 kV	50 kV
電流	88 μ A	6 μ A
時間	50 秒	50 秒
DT%	23 %	24 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
26	Fe 鉄	?			
29	Cu 銅	○			
30	Zn 亜鉛	○			
33	As 砒素	?			
50	Sn すず	?			
82	Pb 鉛	○			
51	Sb アンチモン				

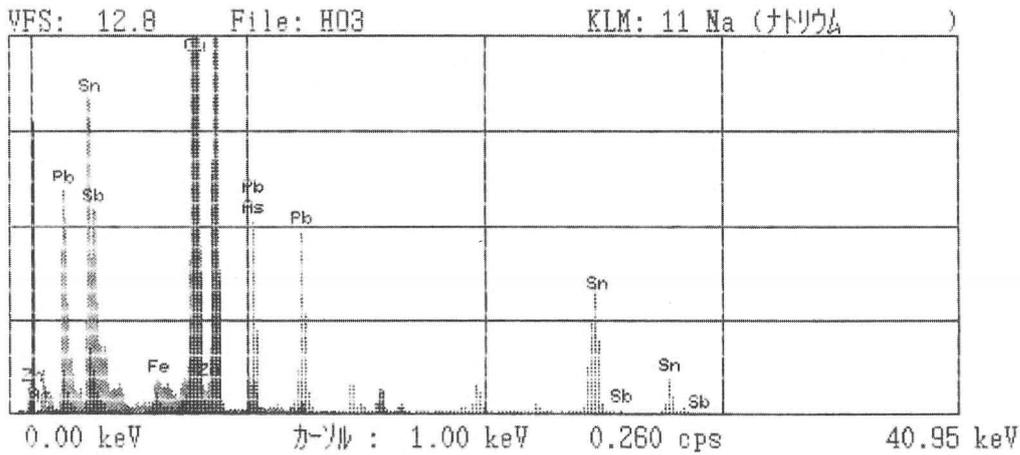
HORIBA MESA-500 定量結果

'08/01/24 09:34:42

コメント： 銭 No. 2 (6 0 2)

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
29 Cu 銅	78.82	0.32	597.522
82 Pb 鉛	12.23	0.24	25.677
50 Sn すず	8.59	0.25	21.140
51 Sb アンチモン	0.17	0.05	0.373
30 Zn 亜鉛	0.12	0.05	1.112
26 Fe 鉄	0.07	0.03	0.514
33 As 砒素	0.00	0.04	0.000

コメント： 銭 No. 3 (6 0 3)



測定条件

	# 1	# 2
日付	'07/12/10	'07/12/10
時刻	16:01:30	16:01:30
電圧	15 kV	50 kV
電流	122 μ A	8 μ A
時間	50 秒	50 秒
DT%	22 %	23 %
試料セル	なし	なし
試料室	真空	真空

定性結果

記号	元素名	判定	記号	元素名	判定
26	Fe 鉄	?			
29	Cu 銅	○			
30	Zn 亜鉛	○			
33	As 砒素	?			
50	Sn すず	?			
82	Pb 鉛	○			
51	Sb アンチモン				

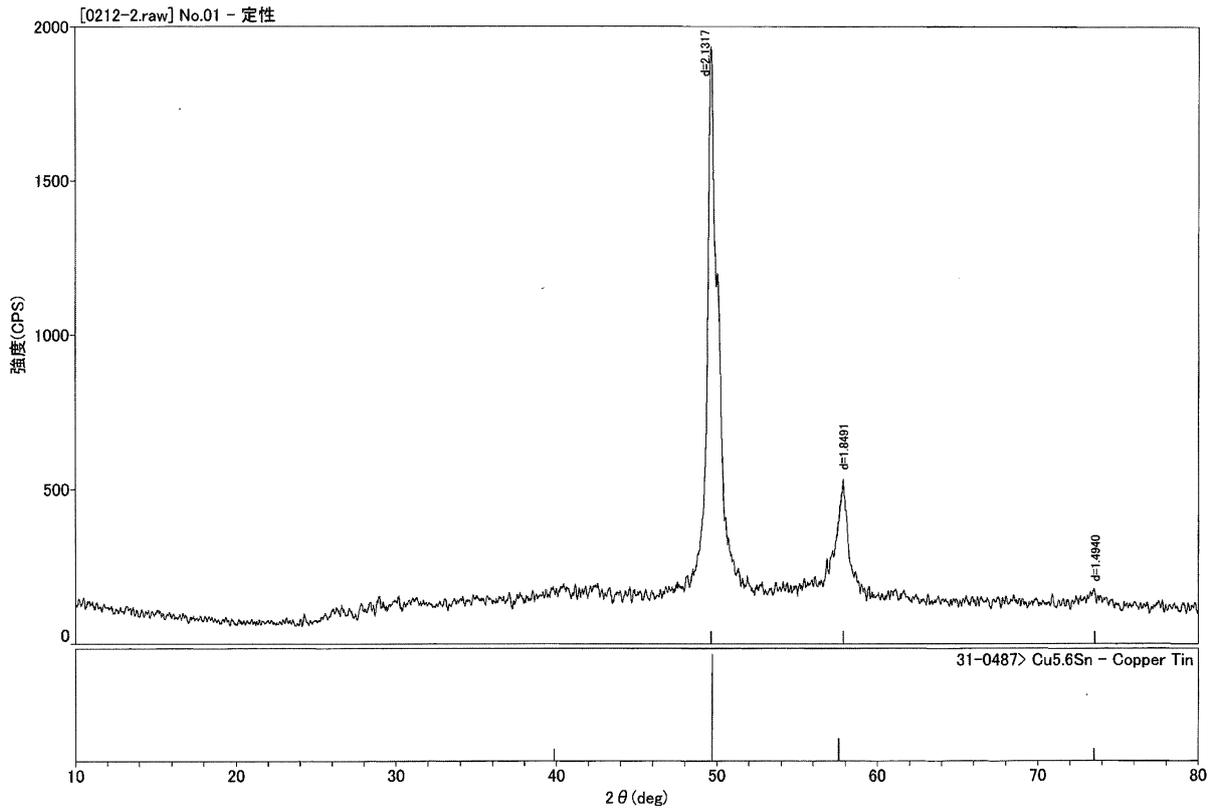
HORIBA MESA-500 定量結果

'08/01/24 09:36:53

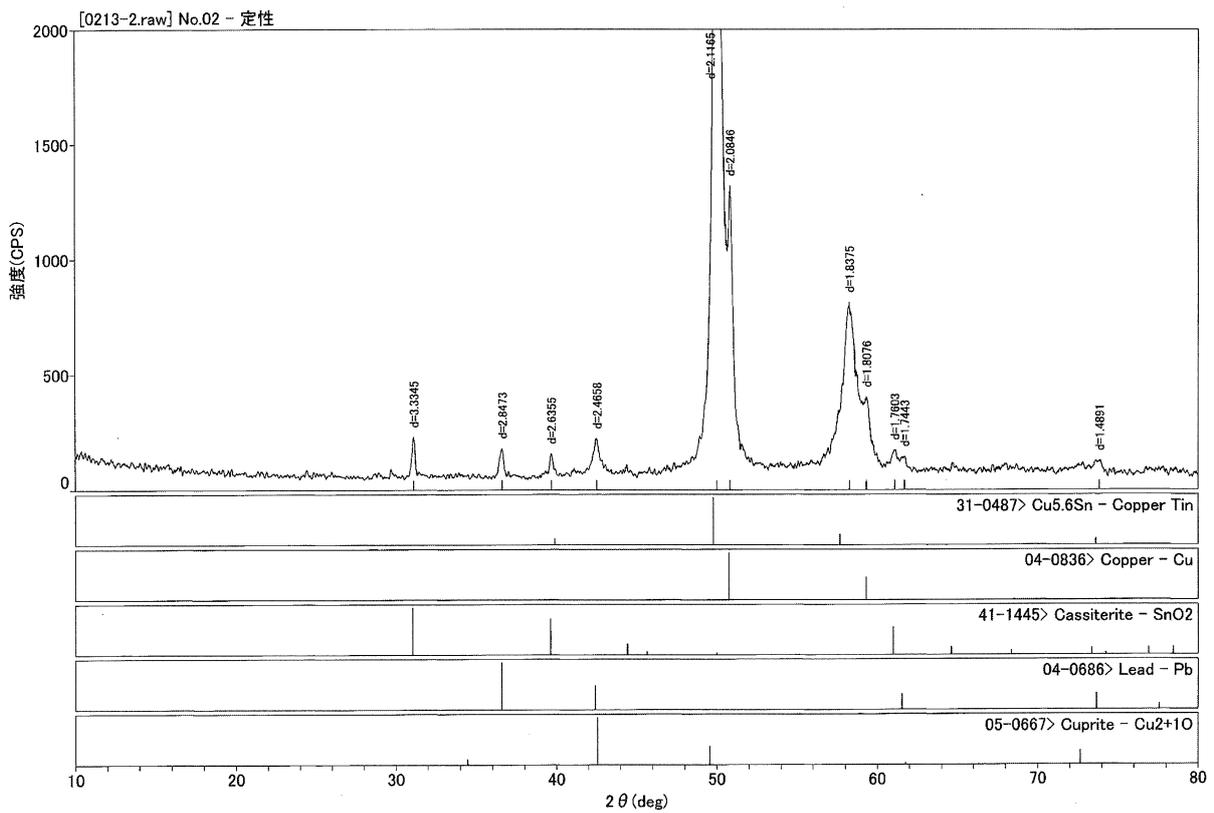
コメント： 銭 No. 3 (6 0 3)

成分	濃度 (wt%)	標準偏差	強度 (cps/ μ A)
29 Cu 銅	74.94	0.36	395.279
82 Pb 鉛	12.33	0.29	18.778
50 Sn すず	12.29	0.28	20.939
51 Sb アンチモン	0.16	0.04	0.239
26 Fe 鉄	0.15	0.04	0.744
30 Zn 亜鉛	0.13	0.05	0.800
33 As 砒素	0.00	0.07	0.000

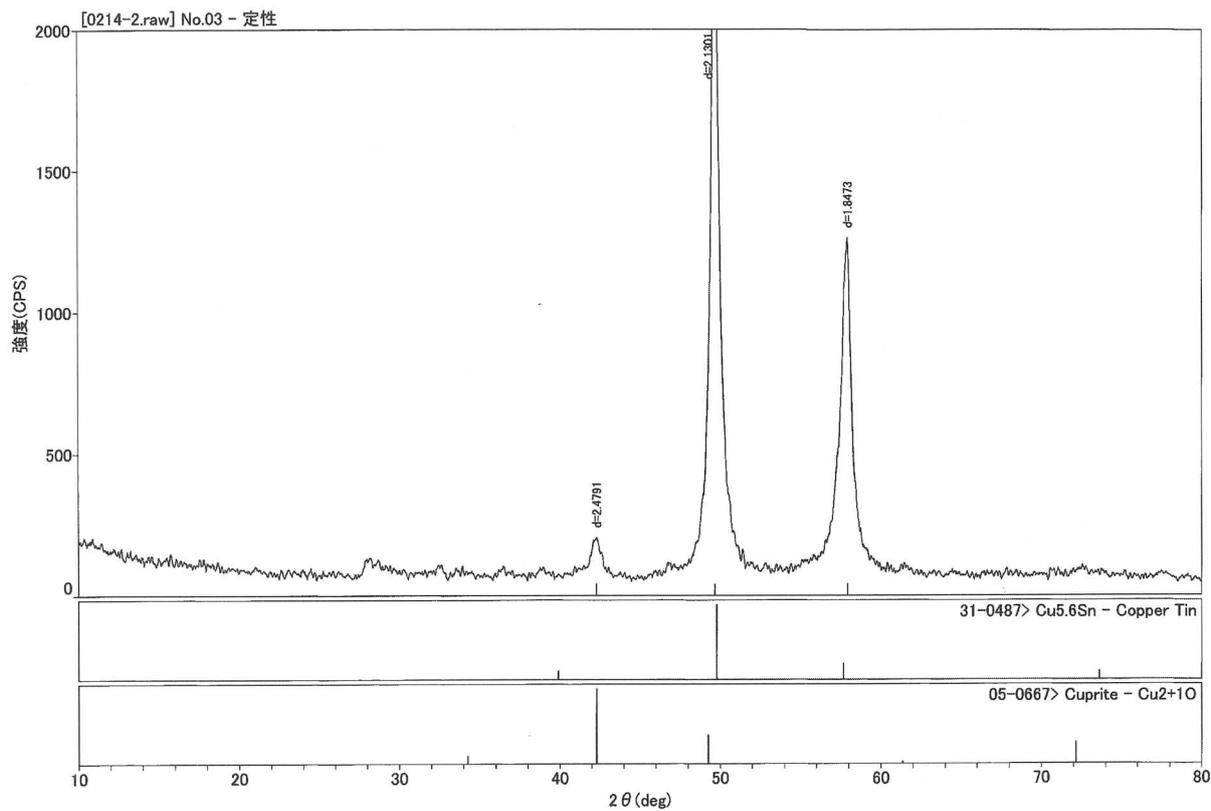
2 銅銭の成分分析



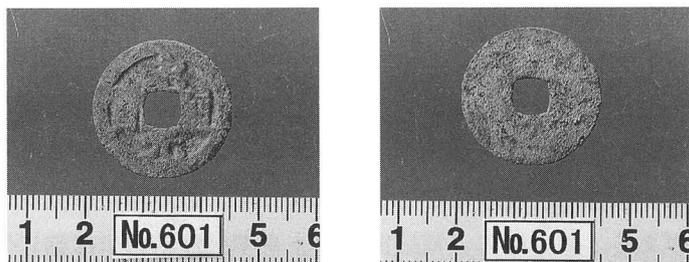
X線回折結果 1 資料No.601 宋通元宝



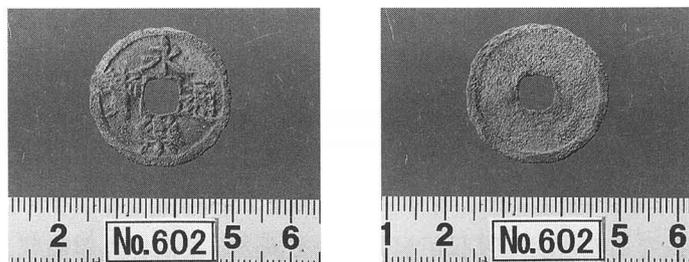
X線回折結果 2 資料No.602 永楽通宝



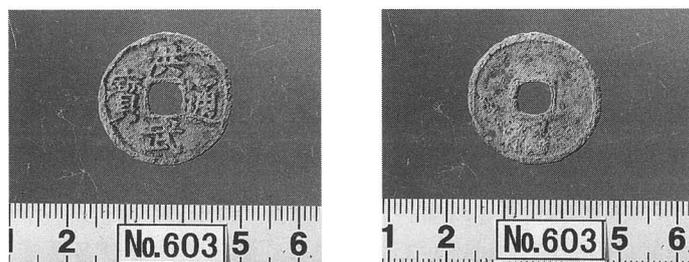
X線回折結果 3 資料No.603 洪武通宝



資料No.601 宋通元宝



資料No.602 永樂通宝



資料No.603 洪武通宝

3 漆の塗膜の成分分析（平成19年度調査）

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

SK06墓壙は、丘陵の中央付近に作られた中世後期（16世紀）の墓で、径は140cm×110cmの楕円形を呈する。墓壙内からは、人骨の他に古銭や塗膜片が出土している。この塗膜片は、片面が赤色、片面が茶褐色を呈しており、木製椀等に塗られた漆塗膜の可能性が指摘されている。

今回の分析調査では、この塗膜片について赤外分光分析による成分分析と、薄片作成による断面構造の観察を行う。

（1）試料

試料は、中世後期のSK06墓壙から出土した塗膜片（資料No401）である。

（2）分析方法

（1）薄片作成・観察

塗膜片を合成樹脂で包埋し、樹脂を固化させる。塗膜の断面が出るようにダイヤモンドカッターで切断し、切断面を研磨する。研磨面をスライドガラスに接着した後、反対側も切断し、厚さが0.03mm程度になるまで研磨してプレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡、落射蛍光顕微鏡、反射顕微鏡を用いて断面に見られる塗膜構造を観察する。

（2）赤外分光分析

a) 赤外線分光分析の原理

有機物を構成している分子は、炭素や酸素、水素などの原子が様々な形で結合している。この結合した原子間は絶えず振動しているが、電磁波のようなエネルギーを受けることにより、その振動の振幅は増大する。この振幅の増大は、その結合の種類によって、ある特定の波長の電磁波を受けたときに突然大きくなる性質がある。この時に、電磁波のエネルギーは結合の振動に使われて（すなわち吸収されて）、その物質を透過した後の電磁波の強度は弱くなる。

有機物を構成している分子における結合の場合は、電磁波の中でも赤外線の領域に入る波長を吸収する性質を有するものが多い。そこで、赤外線の波長領域において波長を連続的に変えながら物質を透過させた場合、さまざまな結合を有する分子では、様々な波長において、赤外線の吸収が発生し、いわゆる赤外線吸収スペクトルを得ることができる。通常、このスペクトルは、横軸に波数（波長の逆数 cm^{-1} で示す）、縦軸に吸光度（ABS）を取った曲線で表されることが多い。したがって、既知の物質において、どの波長でどの程度の吸収が起こるかを調べ、その赤外線吸収スペクトルのパターンを定性的に標本化し、これと未知物質の赤外線吸収スペクトルのパターンとを定性的に比較することにより、未知物質の同定をすることもできる（山田,1986）。

b) 赤外線吸収スペクトルの測定

FT-IR装置（サーモエレクトロン（株）製Nicolet Avatar 370）を利用し、測定を実施する。なお、赤外線吸収スペクトルの測定は、一回反射型水平状ATRアクセサリ（Smart Orbit）を用い、ATR法（Diamondクリスタル）で行う。また、得られたスペクトルはCO₂除去、ATR補正、正規化のデータ処理を施した後、吸光度（ABS）で表示する。測定条件及び各種補正処理の詳細について

は、FT-IRスペクトルと共に図中に併記しているので、そちらを参照されたい。

(3) 結 果

(1) 薄片作成・観察

塗膜片は、片面が赤色、片面が茶褐色を呈する。茶褐色の面は、鏡下でも透過光で茶褐色を呈する。落射蛍光で観察すると孔がいくつかあり、その間を通る筋状の組織が見られる。孔は道管、筋状の組織は放射組織と考えられ、木地に利用された広葉樹材の一部と考えられる。

木地の上には、透過光で黒色不透明、落射蛍光で黄褐色の層の中に黒色粒子が認められる層が約20-40 μm の厚さで塗布される。黒色粒子は所々に繊維状の様子がみられることから、木炭粉を利用した下地層と考えられる。

下地層の上には3層の漆層(下地層直上より1~3)が見られる。下地層の上に塗られる漆層1は、約25 μm の厚さがあり、透過光で赤褐色、落射蛍光で黄褐色となる漆層で、観察した範囲で混和物は認められない。下部の下地層の漆部分との境界が不明瞭である。漆層2は、漆層1とは明瞭な境界で区切られる。厚さは約15-20: μm あり、透過光で漆層1よりも濃い赤褐色、透過光で漆層1より明るい黄褐色を呈する。観察した範囲では混和物は認められない。漆層3は、表面に薄く約5-6 μm の厚さで塗られている層であり、肉眼で赤色にみえる部分である。透過光で黒色不透明、落射蛍光で黄褐色の層中に赤色粒子が高い密度で混和する様子が確認できる。赤色粒子は、反射顕微鏡観察による粒子の特徴や色調から赤鉄鉱であり、赤鉄鉱を原料とするベンガラを混和した赤漆と考えられる。

(2) 赤外分光分析

測定結果を図1に示す。なお、図中には比較試料として漆の実測スペクトルを併記した。漆膜片の赤外線吸収特性は3400 cm^{-1} 付近の幅広く強い吸収帯のほか、2930 cm^{-1} 、2860 cm^{-1} 、1710 cm^{-1} 、1620 cm^{-1} 、1450 cm^{-1} 、1370 cm^{-1} 、1270 cm^{-1} 、1210 cm^{-1} 、1090 cm^{-1} 付近の吸収帯によって特徴付けられる。なお、3400 cm^{-1} の吸収帯はO-H基の伸縮振動、2930 cm^{-1} 、2860 cm^{-1} の吸収帯はメチル基およびメチレン基のC-H伸縮振動、1710 cm^{-1} 付近の吸収帯はC=O伸縮振動、1620 cm^{-1} 付近の吸収帯はC=O伸縮振動またはC=C伸縮振動、1450 cm^{-1} 、1370 cm^{-1} 付近の吸収帯はメチル基の対称変角振動やC-O伸縮振動あるいはO-H変角振動と予想される。

(4) 考 察

今回試料とした塗膜片は、椀などに塗布された漆塗膜に由来すると考えられている。薄片観察では、下地の下に木地に由来すると考えられる木材組織が確認できる。道管と考えられる組織が認められることから、木地には広葉樹材が利用されたことが推定される。椀や皿の木地には、広葉樹のケヤキ、ブナ属、トチノキ等を利用するのが一般的である。岩手県内では、中世とされる椀・皿の調査例は少ないが、花巻城跡の15-16世紀とされる資料にブナ属(高橋,1998)、篠館跡の15-16世紀とされる資料にケヤキ(高橋,2000)が確認されており、他地域と同様の樹種が利用されていたことが推定される。こうした周辺地域の調査事例を考慮すれば、椀・皿の木地として広葉樹材が利用されていると考えることはなんら矛盾しない。

木地の上には炭粉を混和した層が見られ、いわゆる炭粉下地と考えられる。下地層の上には混和物のない漆層が2層あり、最上部にベンガラを混ぜた赤漆が塗布されており、これにより肉眼で赤色を呈する。

なお赤外分光分析結果では、3400 cm^{-1} 付近の幅広く強い吸収帯が見られるほか、2930 cm^{-1} 、2860

cm⁻¹、1710cm⁻¹、1620cm⁻¹、1450cm⁻¹、1370cm⁻¹、1270cm⁻¹、1210cm⁻¹、1090cm⁻¹付近に吸収帯が認められる。これらの特徴は比較資料とした漆とはほぼ同様であるが、吸収帯の強さや位置などで正確には一致しない。これは、炭粉やベンガラなど漆以外の物質が混和していることによってIRパターンが変化したためと考えられる。

今後、器種や産地が明らかな基準資料と、漆断面の構造を比較検討することがのぞまれる。

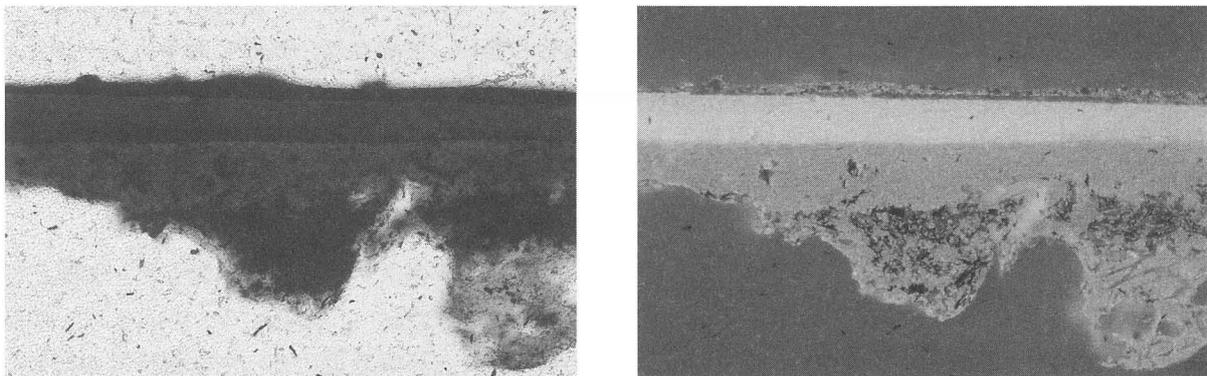
引用文献

高橋 利彦,1998,花巻城三之丸跡出土材の樹種。「花巻市埋蔵文化財調査報告書第18集 花巻城跡 一平成6年度三之丸発掘調査報告書一」,花巻市教育委員会,126-149.

高橋 利彦,2000,遠野市篠館跡出土炭化材の樹種。「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第353集篠館跡発掘調査報告書 一般国道283号仙人峠道路改築事業関連遺跡発掘調査」,(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター,176-178.

山田 富貴子,1986,赤外線吸収スペクトル法,「機器分析のてびき第1集」.化学同人,1-18.

図版1 漆被膜



1. 塗膜断面 (SK06墓墳;資料No.401)
a:透過光, b:落射蛍光

測定情報

サンプルスキャン回数: 40
バックグラウンドスキャン回数: 40
分解能: 4,000
サンプルゲイン: 8.0
ミラー速度: 0.6329

光学系の構成

検出器: DTGS KBr
ビームスプリッタ: KBr
光源: IR

備考

TR(Diamond) 法
CO₂除去(直線化)
アドバンストATR補正
オートベースライン補正
スムージング処理
Y軸正規化

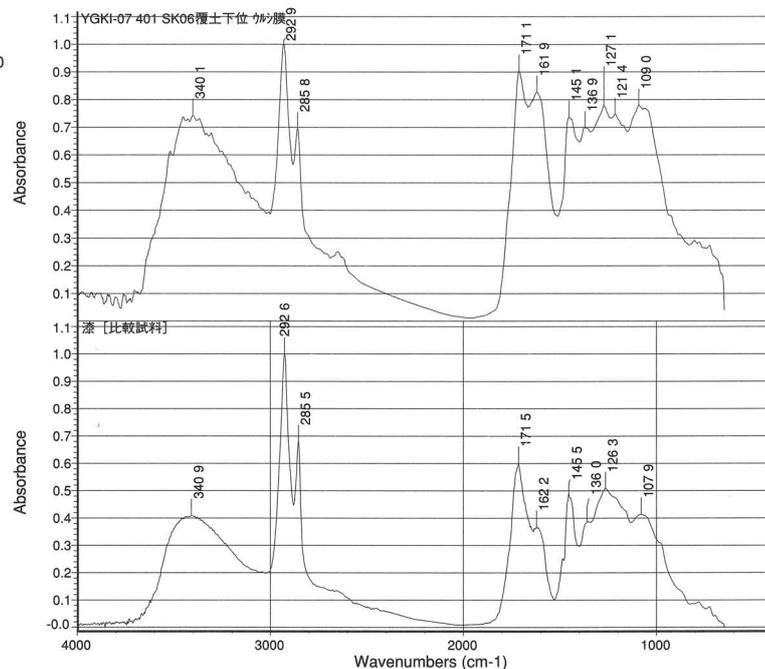


図1 FT-IRスペクトル

4 植物遺体の同定（平成19年度調査）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

宮古市八木沢駒込Ⅰ遺跡は八木沢川左岸の丘陵上に立地し、今回の発掘調査では縄文時代晩期の土坑、焼土跡、陥し穴状の遺構、及び中世の墓が検出されている。

今回の分析調査では、土坑内から出土した種実遺体について、種類を明らかにするために同定を実施する。

（1）試料

試料は、縄文時代晩期SK32の北西覆土下位から出土した種実1点（No843）である。

（2）分析方法

種実を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および石川（1994）、中山ほか（2000）等との対照から種類と部位を同定する。分析後は、種実を容器に戻して返却する。

（3）結果

結果を表1に示す。ブナ科コナラ属（*Quercus*）の子葉に同定された。炭化しており、黒色。完形ならば卵状楕円体。縦に1周する子葉の合わせ目の線に沿って割れた半分で、長さ1.6cm、径8mm程度。頂部は尖るが、これは堅果頂部の円錐状突出部の内部を埋めていた部分であることから、成熟個体と考えられる。基部はやや平ら。子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上は僅かに窪み、頂部には小さな孔（主根）がある。

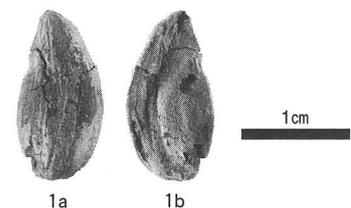
現在岩手県内に分布するコナラ属では、ミズナラ、コナラやこれらの種間雑種のいずれかに由来するものと思われるが、子葉の形態のみから種まで同定することは困難である。

（4）考察

コナラ属は高木になる広葉樹であり、常緑性のアカガシ亜属と落葉性を主とするコナラ亜属とがある。現在の宮古市付近では、落葉性のコナラ亜属に属するクヌギ、カシワ、ミズナラ、コナラ等が見られるが、常緑性のアカガシ亜属は分布していないことから、今回の試料もコナラ亜属の可能性が高い。検出された子葉の形状・大きさを考慮すると、ミズナラ、コナラやこれらの種間雑種のいずれかに由来する可能性がある。

コナラ亜属の堅果は、アク抜きすれば内部の子葉が食用可能で、収量も多く長期保存可能であるため、古くから採取・利用されており、遺跡からの出土例も多い（渡辺, 1975など）。今回の試料では、可食部である子葉が炭化した状態で出土しており、利用前に火を受けて炭化したことが推定される。なお本地域では、八木沢Ⅱ遺跡の縄文時代の遺構から出土した炭化種実が、コナラ属やコナラ亜属に同定されている例がある。

図版1 種実遺体



1. コナラ属子葉 (SK32; No. 843)

引用文献

- 石川 茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
 中山 至大・井之口 希秀・南谷 忠志, 2000, 日本植物種子図鑑. 東北大学出版会, 642p.
 渡辺 誠, 1975, 縄文時代の植物食. 雄山閣出版, 187p.

表1 種実同定結果

No	遺構名	層位	分類群	部位	状態
843	SK32	北西覆土下位	コナラ属	子葉	破片(半分) 炭化

5 放射性炭素年代測定（平成19年度調査）

（株）加速器分析研究所

（1）遺跡の位置

八木沢駒込Ⅰ遺跡は、岩手県宮古市大字八木沢第8地割字駒込7-2ほか（北緯39°36′、東経141°55′~56′）に所在する。

（2）測定の意義

遺構の年代を知る手掛かりとする。

（3）測定対象試料

測定対象試料は、SK01土坑のベルト2層から出土した木炭（802：IAAA-71934）とSK14土坑の北半覆土2層から出土した木炭（807：IAAA-71935）である。

（4）化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- 6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（5）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_xⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

（6）算出方法

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 2) BP年代値は、過去において大気中の¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準

年として遡る¹⁴C年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、 χ^2 検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもある。

$\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$\delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_S - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{A}_S - {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}) / {}^{13}\text{A}_{\text{PDB}}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{14}\text{A}_S$: 試料炭素の¹⁴C濃度: $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_S$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_S$

${}^{14}\text{A}_R$: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: $({}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C})_R$ または $({}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C})_R$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の¹³C濃度 (${}^{13}\text{A}_S = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のベレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に¹³C/¹²Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 $\Delta^{14}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの¹⁴C濃度 (${}^{14}\text{A}_N$) に換算した上で計算した値である。(1) 式の¹⁴C濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算する。

$${}^{14}\text{A}_N = {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^2 \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{を使用するとき})$$

または

$$= {}^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{14}\text{A}_S \text{として} {}^{14}\text{C}/{}^{13}\text{C} \text{を使用するとき})$$

$$\Delta^{14}\text{C} = [({}^{14}\text{A}_N - {}^{14}\text{A}_R) / {}^{14}\text{A}_R] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{14}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

¹⁴C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \quad (\text{‰})$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \quad (\%)$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。

6) 較正暦年代の計算では、IntCal04データベース (Reimer et al 2004) を使い、OxCalv3.10 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

(7) 測定結果

SK01の木炭 (802: IAAA-71934) の ^{14}C 年代が $4620 \pm 30 \text{ yrBP}$ 、SK14の木炭 (807: IAAA-71935) の ^{14}C 年代が $2850 \pm 30 \text{ yrBP}$ である。暦年較正年代 ($1\sigma = 68.2\%$) は、802が $3500 \sim 3450 \text{ BC}$ (46.0%)・ $3380 \sim 3350 \text{ BC}$ (22.2%)、807が $1050 \sim 970 \text{ BC}$ (53.8%)・ $960 \sim 930 \text{ BC}$ (14.4%)である。化学処理および測定内容に問題はなく、炭素量も十分であることから、妥当な年代と考えられる。

IAA Code No	試料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-71934	試料採取場所：(宮古市) 八木沢駒込 I 遺跡 SK01ベルト 2 層 試料形態：木炭 試料名(番号)：802	LibbyAge (yrBP) : $4,620 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -25.20 ± 0.66 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -437.3 ± 2.4 pMC (%) = 56.27 ± 0.24
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -437.6 ± 2.2 pMC (%) = 56.24 ± 0.22 Age (yrBP) : $4,620 \pm 30$
IAAA-71935	試料採取場所：(宮古市) 八木沢駒込 I 遺跡 SK14北半覆土 2 層 試料形態：木炭 試料名(番号)：807	LibbyAge (yrBP) : $2,850 \pm 30$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -28.63 ± 0.86 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -298.3 ± 2.8 pMC (%) = 70.17 ± 0.28
	(参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	$\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -303.5 ± 2.5 pMC (%) = 69.65 ± 0.25 Age (yrBP) : $2,910 \pm 30$

参考資料：暦年較正用年代

IAA Code No	試料番号	Libby Age (yrBP)
IAAA-71934	802	4619 ± 33
IAAA-71935	807	2845 ± 32

ここに記載する Libby Age (年代値) と誤差は下1桁を丸めない値です。

参考文献

- Stuiver M. and Polash H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363
- Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430
- Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363
- Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389
- Reimer, P. J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058

6 人骨鑑定 (平成20年度調査)

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八木沢駒込Ⅰ遺跡(岩手県宮古市八木沢第8地割字駒込に所在)は、宮古川の南側、宮古湾に向かって北流する矢木沢川沿いの山地(標高20~55m)に位置し、西側に尾根部の先端に当たる斜面部が、その北・東側に平坦な面が広がる地形となる。これまでの発掘調査により、丘陵部から小型の竪穴式住居跡、中世の竪穴建物跡、近世の建物跡と5基の墓坑が検出されている。今回の分析調査では、墓坑から出土した人骨について、個体情報に関する情報を得るために骨同定を実施した。

(1) 試料

調査対象遺構は、1~5号墓の内、人骨が出土した1号墓、2号墓、3号墓、5号墓である。人骨試料の取り上げ・記録化は、当社技師1名が現地の赴き作業を実施した。まず埋葬状況を確認した後、部位ごとに試料番号を付し、埋土中から出土した骨については、一括試料として取り扱った。なお、各墓坑における試料採取位置は、概念図として図1に示す。

(2) 分析方法

現地にて取り上げた骨試料は室内でクリーニングを実施した。植物根は根切り等で除去し、砂分については筆・ブラシ・竹串等で除去する。試料は肉眼で観察し、部位等を明らかにする。計測は馬場(1991)により、推定年齢は、成人が16歳程度以上、熟年が40~59歳程度、老年が60歳程度以上とした。

(3) 結果および考察

結果を表1に、また各墓坑から出土した人骨の出土部位については、概念図として図2~5に示す。また、各人骨の歯式を表2に、頭蓋形態小変異を表3に、計測結果を表4・5に示す。以下、各墓坑の結果を示す。

・1号墓

北西方向を向け、座位状態で埋葬される。検出された部位は、

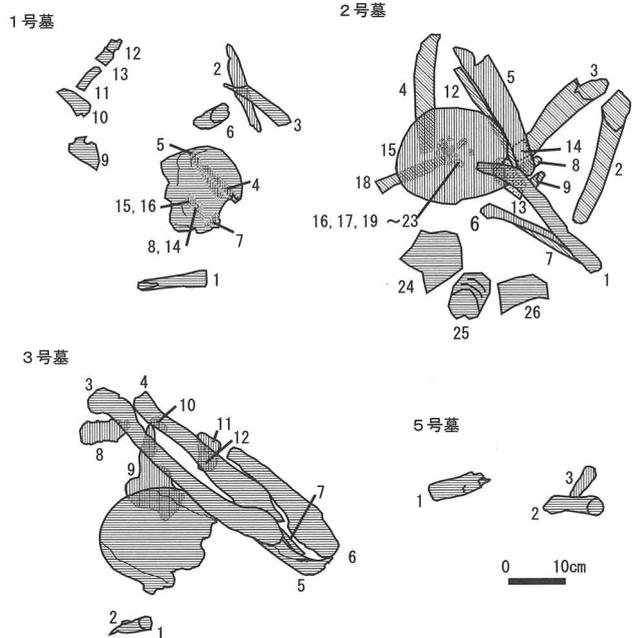


図1 1~3号・5号墓出土人骨採取試料概念図

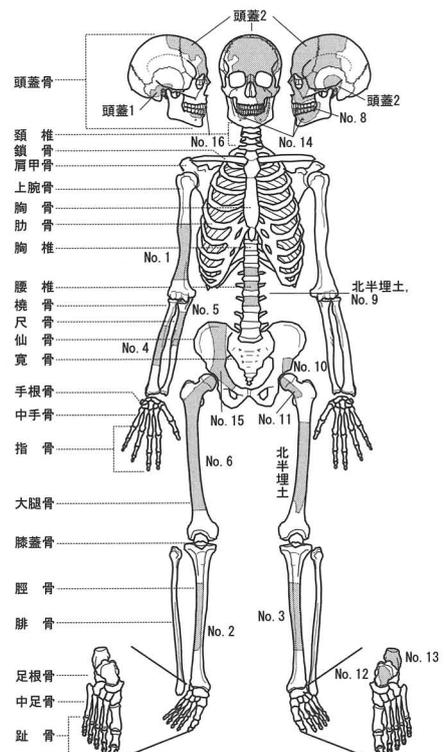


図2 1号墓の出土部位

網掛け部が出土部位を示す

表1 骨同定結果(1)

遺構	試料	部位	左右	部分	数量	備考		
1号墓	北半埋土 090522	頭蓋		破片	3			
		腰椎		破片	1			
		大腿骨	左	破片	1			
		不明		破片	6			
		木材		破片	1			
	一括	頭蓋			破片	3		
		不明			破片	1		
	頭蓋 1	側頭骨	右	破片	1			
	頭蓋 2	左上顎骨～頬骨～前頭骨～頭頂骨			破片	1	左P1 植立	
		側頭骨～蝶形骨	左		破片	1		
		歯牙			破片	1		
		不明			エナメル質片	5		
	1	上腕骨	右		破片	4		
	2	脛骨	右		両端欠	1		
	3	脛骨	左		破片	1		
	4	橈骨	右		破片	1		
	5	尺骨	右		破片	1		
	6	大腿骨	右		遠位端欠	1		
	7	肋骨			破片	1		
	8	下顎歯牙	左		第3大臼歯	1		
		中手骨/中足骨			破片	1		
	9	腰椎			破損	2		
					上間接突起	1		
	10	寛骨	左		破片	1		
	11	大腿骨	左		近位端	1		
	12	距骨	左		破片	1		
	13	踵骨	左		破片	1		
	14	上顎歯牙	左		犬歯	1		
		下顎骨	左		破片	1	C-M2 植立	
		肋骨	右		破片	1	C-P2 植立	
	15	寛骨	右		破片	2		
	16	上顎歯牙	右		中切歯	1		
		上顎歯牙	右		第1大臼歯	1		
	2号墓	北半埋土 090522	頸椎		破片	1		
			第1肋骨	左	破片	1		
			肋骨		破片	5		
肩甲骨			左		肩甲棘	1		
四肢骨					破片	1		
不明					破片	12		
一括			第4中手骨	右		遠位端欠	1	
			基節骨			近位端欠	1	
			不明			破片	8	
			上腕骨	右		破片	1	
2		大腿骨	右		両端欠	1		
3		脛骨	右		両端欠	1		
4		大腿骨	左		遠位端欠	1		
			左		両端欠	1		
5		脛骨	左		遠位端	1		
		橈骨	右		近位端欠	1		
7		尺骨	右		両端欠	1		
			右		遠位端	1		
8		橈骨	左		遠位端欠	1		
		尺骨	左		遠位端欠	1		
10		舟状骨	右		ほぼ完存	1		
		月状骨	右		ほぼ完存	1		
		有頭骨	右		ほぼ完存	1		
		不明			破片	1		
11		第1中手骨	右		近位端欠	1		
12		腓骨	左		近位端欠	1		
13		距骨	左		破損	1		
		踵骨	左		破損	1		
		足根骨	左		破片	2		
14		脛骨	右		遠位端	1		
		距骨	右		破損	1		
		踵骨	右		破片	1		
		舟状骨	右		破片	1		
		外側楔状骨	右		破片	1		
		中間楔状骨	右		破片	1		
		立方骨	右		破損	1		
	不明			破片	1			
	頭蓋骨			破損	1	他破片有		
15	下顎骨			破損	1			
	第1頸椎			ほぼ完存	1			
	第2頸椎			ほぼ完存	1			
	第3頸椎			ほぼ完存	1			
16	頸椎			破損	1			
17	第5中手骨	左		遠位端欠	1			
18	上腕骨	左		近位端欠	1			
19	小菱形骨	右		破損	1			
20	不明			破片	1			

凡例) I: 切歯 C: 犬歯 P: 小白歯 M: 大臼歯

表1 骨同定結果(2)

遺構	試料	部位	左右	部分	数量	備考	
2号墓	21	有鈎骨	右	ほぼ完存	1		
		第2中手骨	右	ほぼ完存	1		
		第3中手骨	右	ほぼ完存	1		
		第1指基節骨		ほぼ完存	1		
		基節骨		近位端欠	1		
		末節骨		ほぼ完存	1		
	22	三角骨	左	ほぼ完存	1		
		第1趾末節骨	右	ほぼ完存	1		
	23	基節骨		ほぼ完存	2		
				近位端欠	1		
		末節骨		ほぼ完存	2		
	24	第12胸椎			破損	1	
		第1腰椎			破損	1	
		第2腰椎			破損	1	
		第3腰椎			破損	1	
		第4腰椎			破損	1	
		第5腰椎			破損	1	
	25	椎骨			椎体片	1	
		寛骨	左		破片	1	
	26	寛骨	右		破片	1	
大腿骨		右		近位端	1		
3号墓	埋土090601	基節骨		近位端欠	1		
		不明		破片	11		
	一括	中手骨/中足骨			破片	1	
		前頭骨~左頭頂骨~後頭骨			破片	1	
		側頭骨	左		破片	1	
			右		破片	1	
		頬骨~上顎骨	左		破片	1	P1, P2, M2 植立
		下顎骨	左		破片	1	C, M2 植立
			右		破片	1	M2 植立
		歯牙			エナメル質片	9	
		鎖骨	右		破片	1	
		橈骨	右		近位端欠	1	
		尺骨	右		両端欠	1	
		第2中手骨	右		遠位端欠	1	
		第3中手骨	右		遠位端欠	1	
		基節骨			近位端欠	1	
		中節骨			ほぼ完存	1	
		末節骨			ほぼ完存	1	
					近位端欠	1	
		不明			破片	9	
	遺物			破片	1		
	1	上腕骨	左		両端欠	1	
	2	第1頸椎			破片	1	
	3	不明			破片	1	
	4	大腿骨	左		遠位端欠	1	
	5	大腿骨	左		破損	1	GL=31.0±cm
			右		遠位端欠	1	
6	脛骨	右		両端欠	1		
		右		遠位端	1		
7	腓骨	右		破片	1		
8	寛骨	左		破片	1		
9	寛骨	右		破片	1		
10	第1趾中足骨			遠位端	1		
11	距骨	右		破片	1		
12	踵骨	右		破片	1		
5号墓	埋土090601	不明		破片	24+		
		椎骨		破片	2		
	一括	肋骨			破片	1	
		モモ			核	1	
	1	大腿骨/脛骨			破片	1	他破片36+
	2	大腿骨		右	両端欠	2	
				破片	51		
3	上腕骨			破片	1		

凡例) I: 切歯 C: 犬歯 P: 小白歯 M: 大白歯

頭蓋、左右下顎骨、左上顎犬歯、右上顎中切歯、左下顎第3大白歯、腰椎、肋骨、右上腕骨、右橈骨、右尺骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左距骨、左踵骨である。頭蓋は、顔面部を下にし、上位に向いた後頭部がほとんど残存しない。四肢骨は、両端部が破損するものが多い。

歯牙は、左上顎犬歯・第1小白歯、右上顎中切歯、左下顎犬歯~第3大白歯、右下顎犬歯~第2小白歯が残存する。この内、左上顎犬歯、右上顎中切歯、左下顎第3大白歯以外は、遊離歯牙である。全体的に口腔環境が悪かったとみられ、齲蝕(いわゆる虫歯)が進行しており、左上顎犬歯近心側歯頸部、右上顎中切歯遠心側歯頸部、左下顎第2小白歯頬側歯冠部、左第1大白歯頬側歯頸部、左第2大白歯頰側・舌側歯頸および頰側歯冠部、左下顎第3大白歯歯冠部、右下顎犬歯近心側歯頸部にその

痕跡がみられる。特に、左下顎第3大臼歯は進行が激しく、火口状に齧蝕がみられる。

本人骨は、冠状縫合の内側が閉じかけており、外側が閉じていないことから、壮年後半程度であったと考えられる。性別は、四肢骨が華奢で眉上隆起が発達しないことから、女性と判断される。

・ 2号墓

北西方向を向け、座位状態で埋葬される。下肢は膝で屈曲させられ、右側を前にして、左足と交差する状態である。今回調査した墓坑の内、人骨の保存状態が最も良好で出土骨も多い。確認された部位は、頭蓋骨、右上顎第1大臼歯、下顎骨、第1～3頸椎、頸椎、第12胸椎、第1～5腰椎、左第1肋骨、肋骨、左肩甲骨、左上腕骨、左右橈骨、左右尺骨、右舟状骨、右有鉤骨、右小菱形骨、右月状骨、左三角骨、右有頭骨、右第1～4中手骨、左第5中手骨、第1指基節骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、左腓骨、左右距骨、左右踵骨、右舟状骨、右外側楔状骨、右中間楔状骨、右立方骨、右第1趾末節骨、基節骨、末節骨などが確認される。頭蓋は、左右頭頂骨～後頭部の一部が破損する程度である。四肢骨は、両端が残存するものが見られない。

歯牙は、左上顎中切歯・犬歯・第2小白歯、右上顎犬歯・第1小白歯・第1大臼歯、左下顎犬歯・第2小白歯、右下顎犬歯～第2小白歯までが残存する。この内、右上顎第1大臼歯のみ遊離歯牙である。その他の歯牙については、右上顎中切歯・第2小白歯および左下顎第1小白歯を除いて歯槽が吸収している。また植立した歯牙も、咬耗が顕著に進行し、また齧蝕により歯冠部が欠損する場合が多い。

本人骨は冠状縫合の内側が閉じており、外側が閉じていないことから、熟年程度と考えられる。性別は、乳様突起が顕著に発達しないが、眉上隆起が発達し、四肢骨が頑丈なこと、さらに大座骨切痕が鋭角であることから、男性と判断される。

・ 3号墓

北西方向に向け下肢を膝で屈曲させた、座位状態で埋葬される。出土した段階では、右下肢が下側、左下肢が上側に位置した状態であったことから、下肢を交差させていなかったと思われる。確認された部位は、前頭骨～左頭頂骨～後頭骨、左右側頭骨、左頬骨～上顎骨、下顎骨、第1頸椎、左上腕骨、右鎖骨、右橈骨、右尺骨、右第2中手骨、右第3中手骨、左右寛骨、左右大腿骨、左右脛骨、右腓骨、右距骨、右踵骨、第1趾中足骨片、基節骨、中節骨、末節骨である。頭蓋は、左側が良く残存

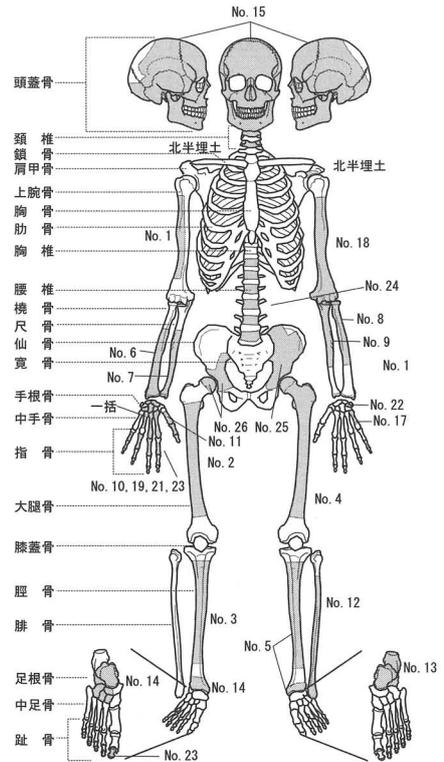


図3 2号墓の出土部位

網掛け部が出土部位を示す
(ただし、指骨の位置は任意)

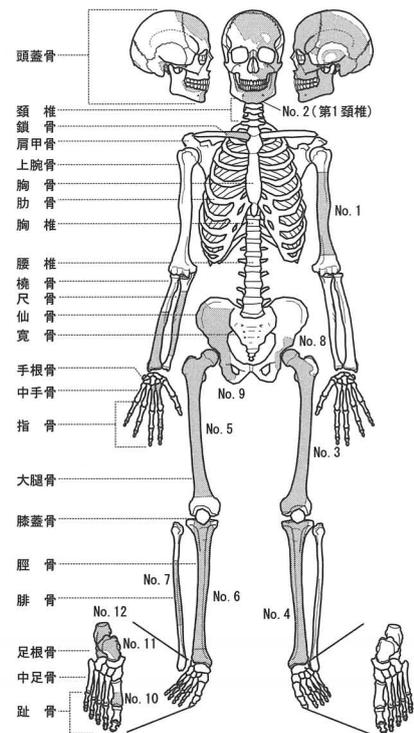


図4 3号墓の出土部位

網掛け部が出土部位を示す
(ただし、指骨の位置は任意)

する。四肢骨は比較的良好に保存され、特に脛骨はほぼ完存する状態である。

歯牙は、左上顎第1小白歯・第2小白歯・第2大白歯、左下顎犬歯・第2大白歯、右下顎第2大白歯が確認される程度である。また、左上顎第1小白歯、左下顎第2大白歯、右下顎第3大白歯は、齧蝕による歯冠の欠損がみられる。

本人骨では、頭蓋主要縫合の閉鎖状況について、保存が悪いため外側が観察できないが、冠状縫合において内側が閉じていることから、熟年以降と判断される。性別は、四肢骨がやや華奢であり、眉上隆起があまり発達せず、外後頭骨隆起も発達しないことから、女性と判断される。なお、本人骨の左脛骨の最大長は、310mm前後である。藤井(1960)の計算式に基づくと、本人骨の推定身長は約146cmとなる。なお、縄文時代～現代に至る関東地方で出土した人骨から求めた推定身長と比較すると(平本,1972)、江戸時代女性の推定身長が137～157cm(平均145.6cm)、近代初期女性の推定身長が135～152cm(平均144.7cm)であり、江戸時代の関東地方の女性と同程度の身長であったとみられる。

・5号墓

保存状態が極めて悪く、ほとんどの部位が分解・消失する。確認できた部位は、椎骨、肋骨、上腕骨、右大腿骨、大腿骨/脛骨などである。大きさからみて成人と判断され、椎骨に加齢に伴う骨増殖が若干みられることから、熟年後半以降ないし老年の可能性はある。性別は、不明である。本人骨も、おそらくは北西方向に向けた座位状態で埋葬されていた可能性がある。

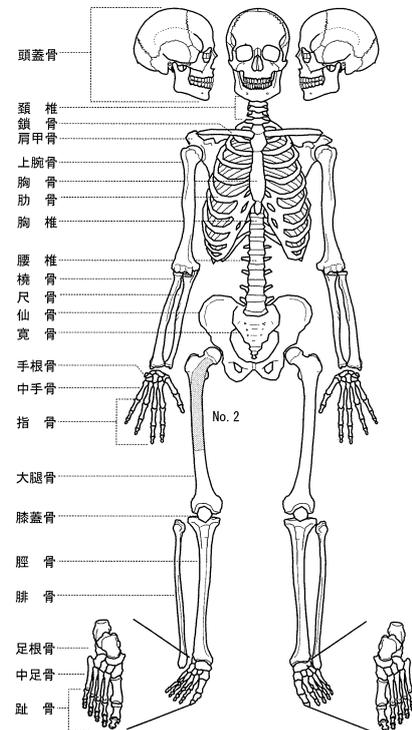


図5 5号墓の出土部位
網掛け部が出土部位を示す

表2 出土人骨の歯式

1号墓	右								左								備考
上顎	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	右下顎P2は歯根のみ
下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
2号墓	右								左								備考
上顎	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	歯牙は、右上顎M1、左上顎I1、下顎左右Cを除き歯根のみ
下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
3号墓	右								左								備考
上顎	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	左上顎P1は歯根のみ
下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	
5号墓	右								左								備考
上顎	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³	
下顎	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃	

凡例) ○：歯牙植立 □：遊離歯牙 △：歯槽開放 ◆：歯牙未萌出 ■：未萌出遊離歯牙 -：歯槽吸収

表3 頭骨形態小変異

項目	1号墓		2号墓		3号墓		5号墓	
	右	左	右	左	右	左	右	左
前頭縫合	×		×		×		-	-
眼窩上神経溝	-	×	×	×	-	-	-	-
眼窩上孔	×	×	○	×	-	×	-	-
ラムダ小骨	-		-		-		-	-
横後頭縫合痕跡	-	-	-	×	-	-	-	-
アステリオン骨	-	-	-	×	-	-	-	-
後頭乳突縫合間骨	-	-	×	×	-	-	-	-
頭頂切痕骨	-	-	×	×	-	-	-	-
顎管開存	-	-	○	○	-	-	-	-
顎前結節	-	-	×	×	-	-	-	-
傍顎突起	-	-	-	-	-	-	-	-
舌下神経管二分	-	-	×	×	-	-	-	-
卵円孔形成不全	-	-	-	×	-	-	-	-
翼棘孔	-	-	-	-	-	-	-	-
内側口蓋管	-	-	×	○	-	×	-	-
頬骨横縫合残存	-	-	-	×	-	×	-	-
床状突起間骨橋	-	-	-	-	-	-	-	-
顎舌骨筋神経溝骨橋	-	-	×	×	-	-	-	-
頸静脈孔二分	-	-	×	×	-	-	-	-

凡例) ○:有 ×:無 -:不明

表4 歯牙齲蝕状況および計測値

1号墓		右									左									備考
上顎	齲蝕	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³			
	齲蝕								●				●	○	△					
	歯冠幅								7.96				8.58	×						
	歯冠厚								7.55				8.29	×						
下顎	齲蝕	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃			
	齲蝕				○	○	●					○	○	●	●	●	●			
	歯冠幅				×	6.91	6.69					6.87	6.55	6.16	10.74	11.03	×			
	歯冠厚				×	8.22	8.08					7.94	8.25	×	11.15	10.89	9.66			
2号墓		右									左									備考
上顎	齲蝕	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³			
	齲蝕	-	-	□	△	●	●	-	△	○		●	-	●	-	-	-			
	歯冠幅			×		×	×			8.37		×		×						
	歯冠厚			×		×	×			×		×		×						
下顎	齲蝕	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃			
	齲蝕	-	-	-	●	●	○	-	-	-	-	○	△	●	-	-	-			
	歯冠幅				×	×	×					×		×						
	歯冠厚				×	×	6.89					×		×						
3号墓		右									左									備考
上顎	齲蝕	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³			
	齲蝕									-	-	△	●	○			○			
	歯冠幅												×	6.48			×			
	歯冠厚												×	7.95			×			
下顎	齲蝕	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃			
	齲蝕	●	-	-	-			△	△	-	-	○	-	-	-	●	-			
	歯冠幅	×										×				×				
	歯冠厚	×										×				×				
5号墓		右									左									備考
上顎	齲蝕	M ³	M ²	M ¹	P ²	P ¹	C	I ²	I ¹	I ¹	I ²	C	P ¹	P ²	M ¹	M ²	M ³			
	齲蝕																			
	歯冠幅																			
	歯冠厚																			
下顎	齲蝕	M ₃	M ₂	M ₁	P ₂	P ₁	C	I ₂	I ₁	I ₁	I ₂	C	P ₁	P ₂	M ₁	M ₂	M ₃			
	齲蝕																			
	歯冠幅																			
	歯冠厚																			

凡例) ×:計測不可(齲蝕による欠落ないし破損による)

表5 頭蓋および四肢骨計測結果

単位：mm

部位	Martin No	計測項目	1号蓋 L/R 計測値	2号蓋 L/R 計測値	3号蓋 L/R 計測値	5号蓋 L/R 計測値
頭蓋	1	脳頭蓋最大長 (g-op)		188		
	5	頭蓋底長 (n-ba)		98.7		
	8	脳頭蓋最大幅 (eu-eu)		131.8		
	9	最小前頭幅 (ft-ft)		89.3		
	17	バジオン・プレグマ高 (ba-b)		132.8		
	40	顔長 (ba-pr)		104.4		
	45	頬骨弓幅 (zy-zy)		121.6		
	46	中顔幅 (zm-zm)		95.1		
	47	顔高 (n-gn)		104.5		
	48	上顔高 (n-pr)		69.2		
	50	前眼窩間幅 (mf-mf)	21.0	17.7		
	51	眼窩幅 (mf-ek)	L 40.3	L 37.6		
	52	眼窩高	L 33.9	L 33.7		
	54	鼻幅		26.1		
	55	鼻高 (n-ns)		37.3		
	57	鼻骨最小幅	10.4	6.7		
		(1) 鼻骨最大幅	16.1	9.1		
		(2) 鼻骨上幅	11.5	11.1		
	59	後鼻孔高		28.3		
		(1) 後鼻孔幅		24.4		
	60	上顎歯槽突起長 (pr-alv)		54.2		
	61	上顎歯槽突起幅		51.4		
		(1) 後上顎歯槽突起幅		40.5		
		(2) 前上顎歯槽突起幅		49.8		
	65	下顎関節突起幅 (kdl-kdl)		125 ±		
		(1) 下顎金突起幅 (kr-kr)		101.0		
	66	下顎角幅 (go-to)		103.2		
	68	下顎骨長		70.8		
	69	オトガイ高 (id-gn)		29.5		
		(1) 下顎体高		L 31.1		
		(2) 下顎体高 (M2)		L 24.3		
		(3) 下顎体厚		L 17.6		
	70	下顎枝高		L 65 ±		
	71	下顎枝幅		L 33.1		
	8/1	頭蓋長幅示数		70.1		
	17/1	頭蓋長高示数		70.6		
	17/8	頭蓋幅高示数		100.8		
	47/45	コルマン顔示数		85.9		
	47/46	ウィルヒョウ顔示数		109.9		
	48/45	コルマン上顔示数		72.8		
	48/46	ウィルヒョウ上顔示数		72.8		
	52/51	眼窩示数	L 84.1	89.6		
	54/55	鼻示数		70.0		
	71/70	下顎枝示数		50.9		
	上腕骨	4	下端幅		L 58.1	
5		中央最大径		L 23.3 ±		
6		中央最小径		L 19.6 ±		
7		骨体最小周		L 6.8		
7 a		中央周		L 7.1 ±		
橈骨	6/5	骨体断面示数		84.1		
	3	骨体最小周		L 4.0 ±		
	4	骨体横径		L 16.6		
	5	骨体矢状径		L 13.9		
尺骨	5/4	体断面示数		83.7		
	3	骨体最小周		L 4.4 ±		
	11	骨体矢状径		L 15.7		
	12	骨体横径		L 16.3		
	13	骨体上横径		L 26.5		
	14	骨体上矢状径		L 24.3		
	11/12	体断面示数		96.3		
大腿骨	13/14	尺骨扁平示数		109.1		
	6	骨体中央矢状径		L 31.6 ±	R 29.1 ±	
	7	骨体中央横径		L 27.4 ±	R 27.8 ±	
	8	骨体中央周		L 9.1 ±	R 9.0 ±	
	9	骨体上横径		L 34.7	R 32.6 ±	
	10	骨体上矢状径		L 25.2	R 24.2 ±	
	13	上端長		L 90.3	R 80.9 ±	
		a上投影幅		L 89.2	R 75.9 ±	
	6/7	骨体中央断面示数		115.3	104.7	
	10/9	骨体上断面示数		72.6	74.2	
脛骨	1	全長			L 308 ±	
	1 a	最大長			L 310 ±	
	6	最大下端幅			L 37.0 ±	
	7	下端矢状径			L 29.5 ±	
	8	骨体中央矢状径		L 35.6 ±	L 25.2 ±	
	8 a	栄養孔位最大径		L 37.3	L 32.5 ±	
	9	中央横径		L 24.7 ±	L 16.9 ±	
	9 a	栄養孔位横径		L 27.1		
	10	骨体中央周		L 10.0 ±	L 71 ±	
	10 a	栄養孔位周		L 10.2		
	10 b	骨体最小周		L 8.6	L 66 ±	
	9/8	中央断面示数		69.4	67.1	
	9 a/8a	脛骨扁平示数		72.7		
	腓骨	4 a	最小周		L 3.8	

注) 四肢骨中央計測値は、骨端が破損しているため推定値である。

ま と め

今回の調査区では、5基の墓坑のうち4号墓を除く4基から人骨が出土しており、1～3号墓が座位状態で埋葬され、5号墓も座位状態で埋葬されていた可能性がある。被葬者は、1号墓が壮年後半程度の女性、2号墓が熟年程度の男性、3号墓が熟年以降の女性、5号墓が熟年後半以降ないし老年の可能性のある成人と考えられる。いずれの被葬者も、咬耗の進行、齶蝕の進行、あるいは歯牙脱落など、口腔内の環境が悪かったと思われる。なお3号墓の被葬者は、推定身長約146cmで、関東地方の江戸時代女性や近代女性に近い身長であった。

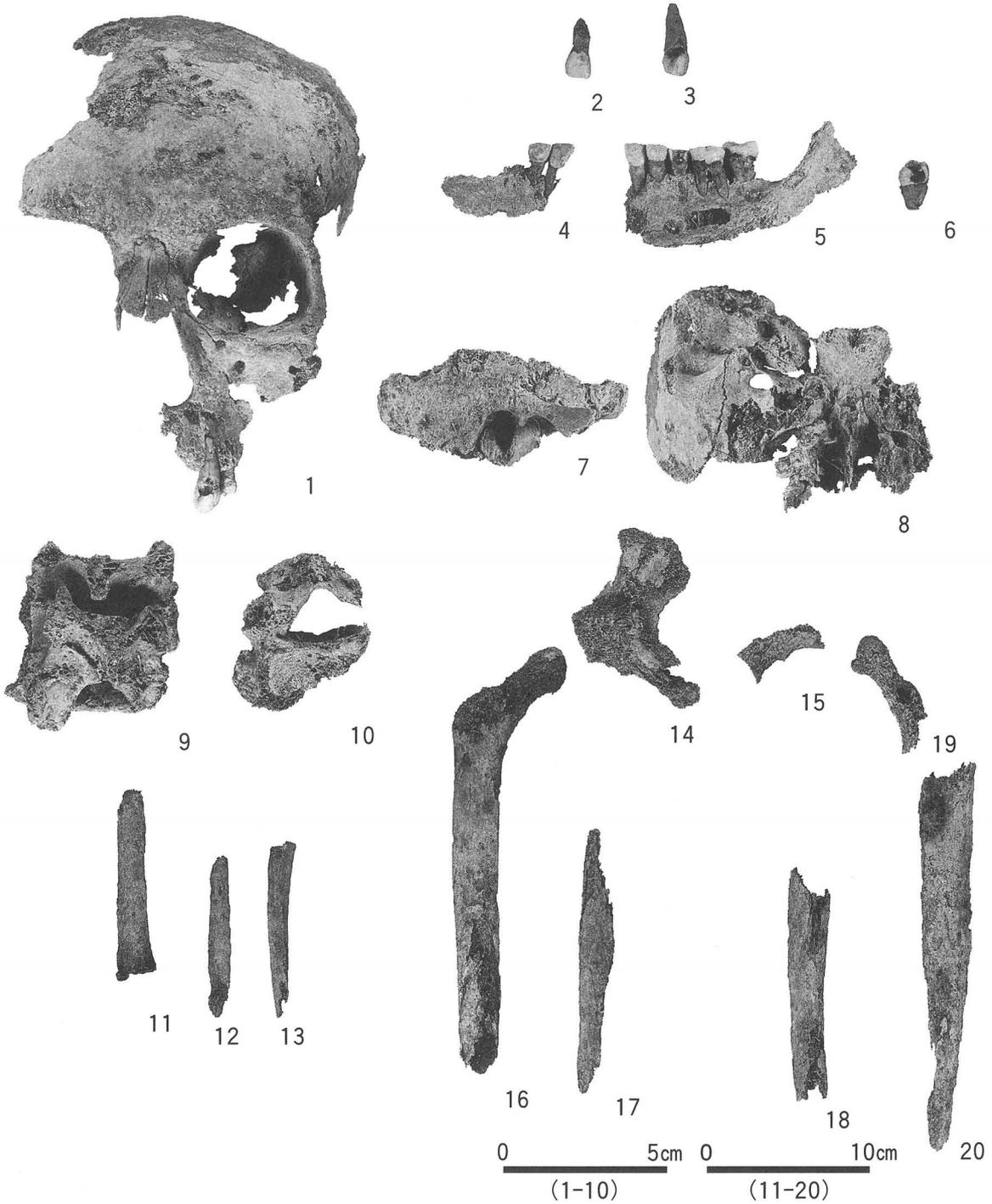
本遺跡では、別地点の中世墓坑で、老年女性の人骨が南西側を向けて座位状態で埋葬された事例が得られている。阿部（2004）によると、中世では埋葬方法が単独墓で横臥姿勢であるのに対し、近世になると墓域に包括され座棺となる傾向があるとされる。これまでに本遺跡で実施した人骨調査を通して、以前中世の墓坑から出土した人骨は横臥でないが単独墓であったのに対し、今回調査対象とした近世の事例では墓域に包括され座位であったことが明らかにされたことになり、上記の傾向にほぼ調和する結果が得られたといえよう。

引用文献

- 阿部 勝則, 2004, 発掘された鍋被り墓坑—岩手県内出土事例の検討—. 館研究第3号—墓特集—, 岩手の館研究会, 11—28.
- 馬場悠男, 1991, 人骨計測法. 人類学講座別巻1 人体計測法, 雄山閣, 359p.
- 藤井 明, 1960, 四肢長骨の長さと言身長との関係に就いて. 順天堂大学体育学部紀要, 3, 49—61.
- 平本 嘉助, 1972, 縄文時代から現代に至る関東地方人身長の時代的变化. 人類学雑誌, 80, 221—236.

図版1 出土人骨(1)

1号墓

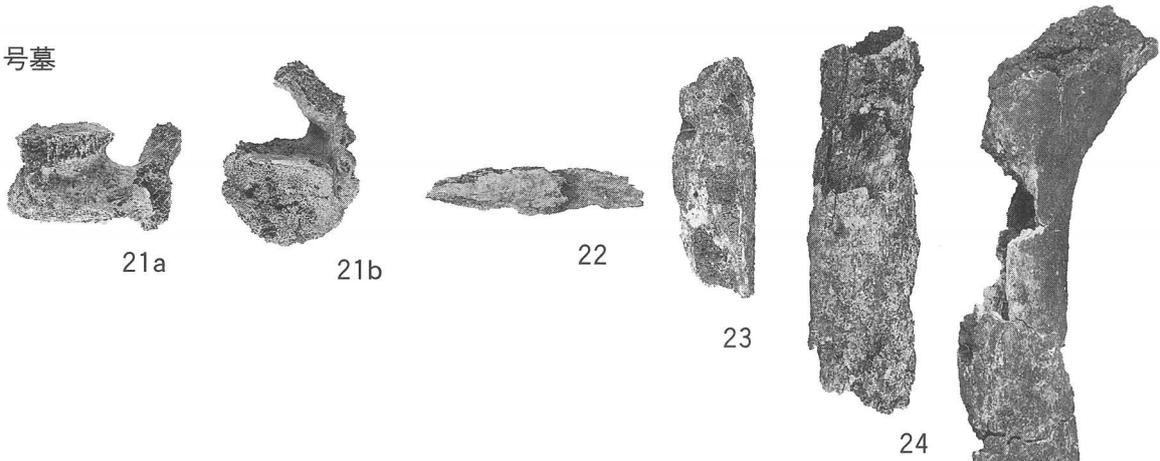


- 1. 頭蓋骨(1号墓;頭蓋2)
- 3. 左上顎犬齒(1号墓;No.14)
- 5. 左下顎骨(1号墓;No.14)
- 7. 右側頭骨(1号墓;頭蓋1)
- 9. 腰椎(1号墓;No.9)
- 11. 右上腕骨(1号墓;No.1)
- 13. 右尺骨(1号墓;No.5)
- 15. 左寬骨(1号墓;No.10)
- 17. 右脛骨(1号墓;No.2)
- 19. 左大腿骨近位端(1号墓;No.11)

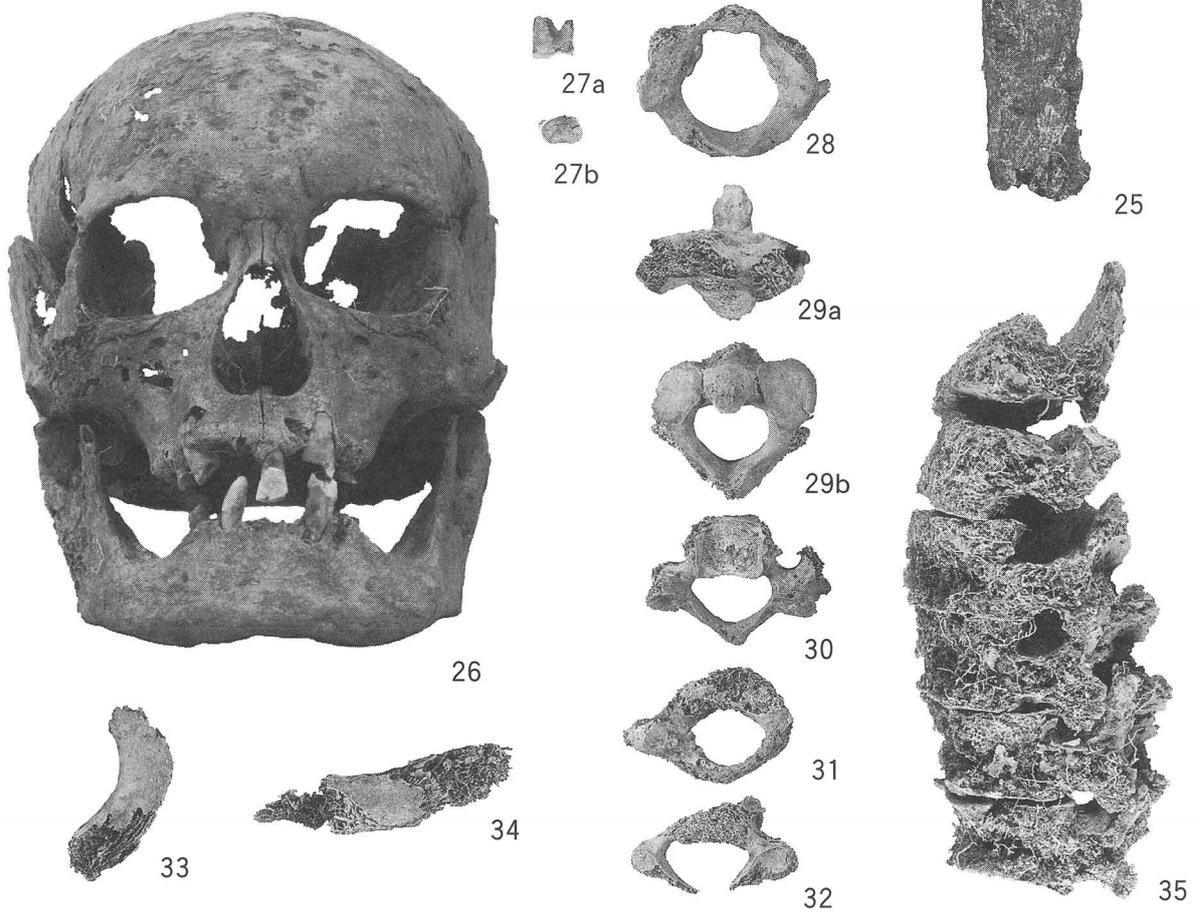
- 2. 右上顎中切齒(1号墓;No.16)
- 4. 右下顎骨(1号墓;No.14)
- 6. 左下顎第3大臼齒(1号墓;No.8)
- 8. 左側頭骨~蝶形骨(1号墓;頭蓋2)
- 10. 腰椎(1号墓;北半埋土)
- 12. 右橈骨(1号墓;No.4)
- 14. 右寬骨(1号墓;No.15)
- 16. 右大腿骨(1号墓;No.6)
- 18. 左脛骨(1号墓;No.3)
- 20. 左大腿骨(1号墓;北半埋土)

図版2 出土人骨(2)

5号墓



2号墓



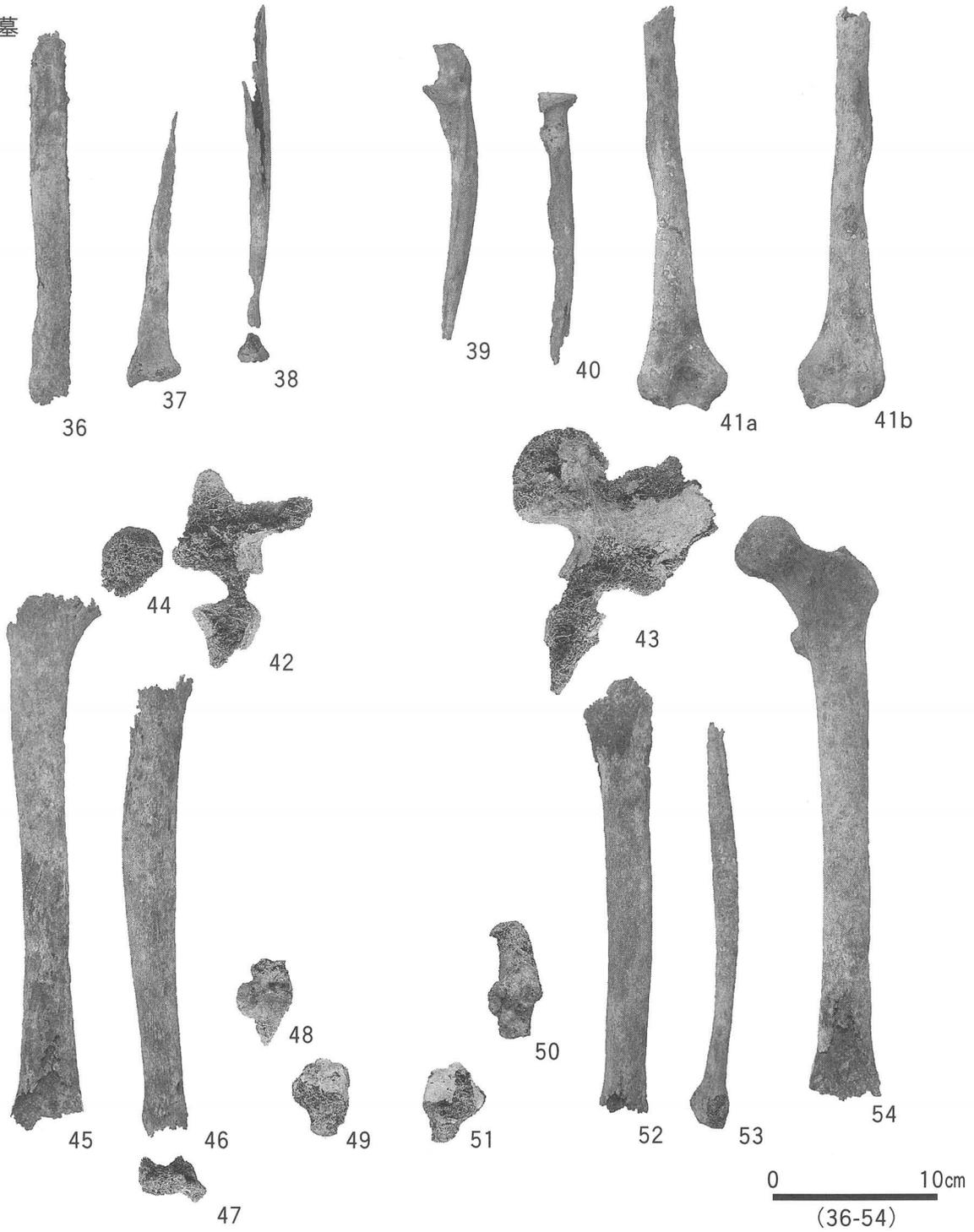
0 5cm
(21-35)

- 21. 椎骨(5号墓;一括)
- 23. 上腕骨(5号墓;No.3)
- 25. 右大腿骨(5号墓;No.2)
- 27. 右上顎第1大臼歯(2号墓;北半埋土)
- 29. 第2頸椎(2号墓;No.15)
- 31. 頸椎(2号墓;北半埋土)
- 33. 右第1肋骨(2号墓;北半埋土)
- 35. 第12胸椎~第5腰椎(2号墓;No.24)

- 22. 肋骨(5号墓;一括)
- 24. 大腿骨/脛骨(5号墓;No.1)
- 26. 頭蓋骨(2号墓;No.15)
- 28. 第1頸椎(2号墓;No.15)
- 30. 第3頸椎(2号墓;No.15)
- 32. 頸椎(2号墓;No.16)
- 34. 肋骨(2号墓;北半埋土)

图版3 出土人骨(3)

2号墓

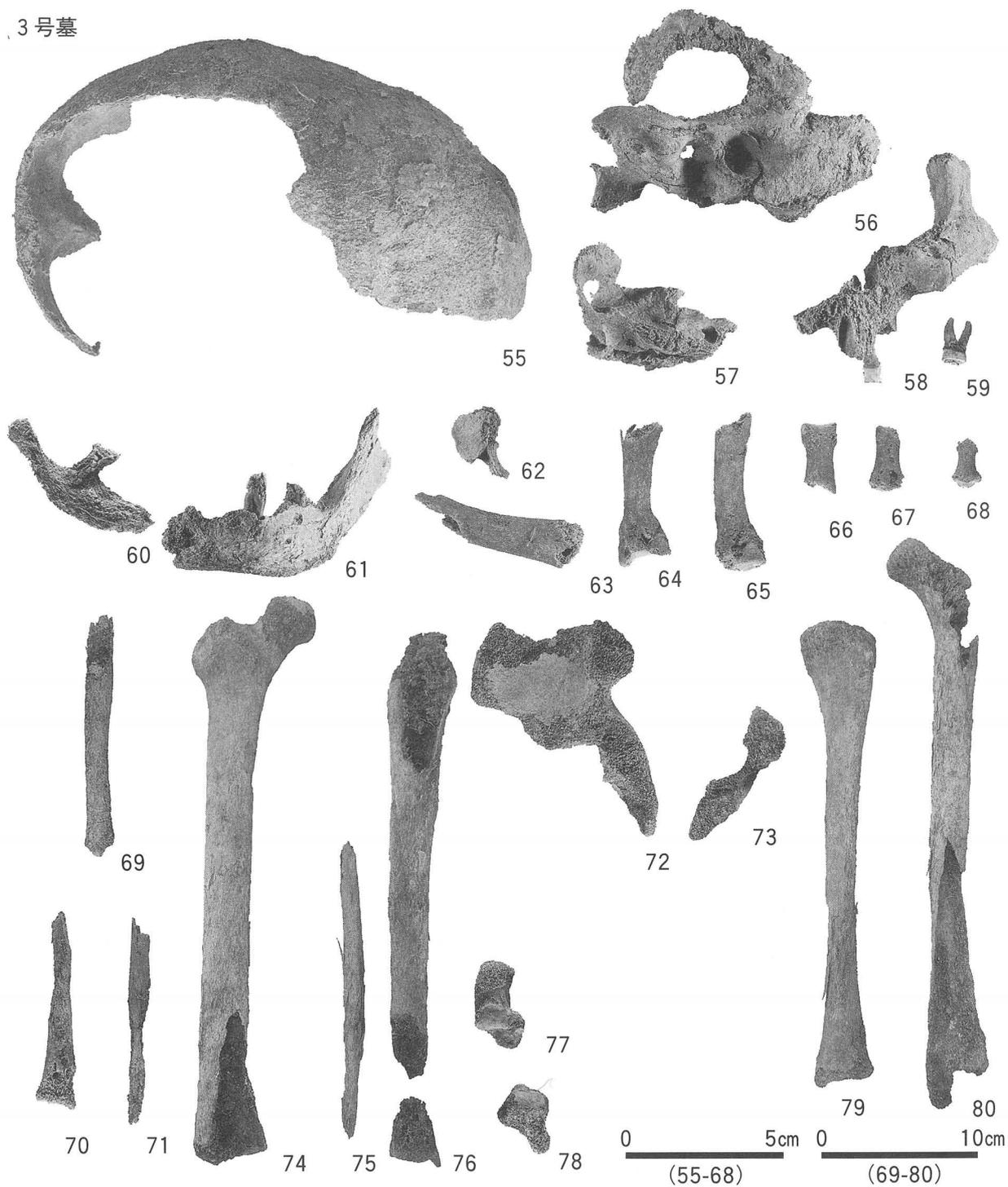


- 36. 右上腕骨(2号墓;No.1)
- 37. 右尺骨(2号墓;No.7)
- 38. 右尺骨(2号墓;No.7)
- 40. 左桡骨(2号墓;No.8)
- 42. 右寬骨(2号墓;No.26)
- 44. 右大腿骨近位端(2号墓;No.26)
- 45. 右大腿骨(2号墓;No.2)
- 46. 右脛骨(2号墓;No.3)
- 47. 右脛骨遠位端(2号墓;No.14)
- 48. 右踵骨(2号墓;No.14)
- 49. 右距骨(2号墓;No.14)
- 50. 左踵骨(2号墓;No.13)
- 51. 左距骨(2号墓;No.13)
- 52. 左脛骨(2号墓;No.5)
- 54. 左大腿骨(2号墓;No.4)

- 37. 右桡骨(2号墓;No.6)
- 39. 左尺骨(2号墓;No.9)
- 41. 左上腕骨(2号墓;No.18)
- 43. 左寬骨(2号墓;No.25)
- 45. 右大腿骨(2号墓;No.2)
- 47. 右脛骨遠位端(2号墓;No.14)
- 49. 右距骨(2号墓;No.14)
- 50. 左踵骨(2号墓;No.13)
- 51. 左距骨(2号墓;No.13)
- 53. 左腓骨(2号墓;No.12)

図版4 出土人骨(4)

3号墓



- | | | |
|----------------------|---------------------|--------------------|
| 55. 頭蓋骨(3号墓;頭蓋等) | 56. 右側頭骨(3号墓;頭蓋等) | 57. 左側頭骨(3号墓;頭蓋等) |
| 58. 左上顎骨~頬骨(3号墓;頭蓋等) | 59. 左第3大臼齒(3号墓;頭蓋等) | 60. 右下顎骨(3号墓;頭蓋等) |
| 61. 左下顎骨(3号墓;頭蓋等) | 62. 第1頸椎(3号墓;No.2) | 63. 右鎖骨(3号墓;頭蓋等) |
| 64. 第2中手骨(3号墓;頭蓋等) | 65. 第3中手骨(3号墓;頭蓋等) | 66. 基節骨(3号墓;頭蓋等) |
| 67. 中節骨(3号墓;頭蓋等) | 68. 末節骨(3号墓;頭蓋等) | 69. 左上腕骨(3号墓;No.1) |
| 70. 右橈骨(3号墓;頭蓋等) | 71. 右尺骨(3号墓;頭蓋等) | 72. 右寛骨(3号墓;No.9) |
| 73. 左寛骨(3号墓;No.8) | 74. 右大腿骨(3号墓;No.5) | 75. 右腓骨(3号墓;No.7) |
| 76. 右脛骨(3号墓;No.6) | 77. 右踵骨(3号墓;No.12) | 78. 右距骨(3号墓;No.11) |
| 79. 左脛骨(3号墓;No.4) | 80. 左大腿骨(3号墓;No.3) | |

7 花粉分析 (平成21年度調査)

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

八木沢駒込I遺跡は、岩手県宮古市八木沢第8地割字駒込に所在し、八木沢川左岸の山地斜面部に立地する。遺跡の標高は20～50mで、西側に尾根部の先端に当たる斜面部が、その北側・東側に平坦な面が広がる地形となっている。本遺跡からは、縄文時代の住居跡、落とし穴、焼土、中世の竪穴建物跡、古代と想定される炭窯、中世末から近世と想定される掘立柱建物跡、土坑、墓坑等の遺構が検出されている。

本報告では、調査区北東に認められた沢跡付近の堆積物を対象として、古植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。

(1) 試料

土壌試料は、調査区北東の沢跡付近に設定された調査断面から採取されている。沢部では、詳細な年代観が得られていないが、縄文時代前期以降の遺物が出土している。土層断面は約120cmで、黒色～黒褐色の砂質シルトと砂層が互層状を呈している。

試料は下位よりサンプルA～サンプルCの計3点が採取されており、最下層のサンプルAは礫混じり黒褐色シルトからなる。なお、本層準は発掘調査所見から縄文時代の可能性が指摘されている。サンプルBは中粒砂混じり黒褐色シルトからなり、最上位のサンプルCは黒色中粒砂シルトからなる。これら3点について、花粉分析を実施する。

(2) 分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 結果

結果を表1、図1に示す。図表中で複数の種類をハイフンで

表1 花粉分析結果

種類	サンプル	A	B	C
木本花粉				
トウヒ属		1	—	—
マツ属複雑管束亜属		34	2	—
マツ属(不明)		7	1	—
スギ属		3	—	—
サワグルミ属		—	—	1
ハシバミ属		1	—	—
ハンノキ属		70	5	2
ブナ属		2	—	—
ニレ属-ケヤキ属		1	2	2
シナノキ属		1	4	—
草本花粉				
オモダカ属		2	—	—
イネ科		6	2	—
カヤツリグサ科		—	1	—
ミズアオイ属		1	—	—
クワ科		—	—	1
ナデシコ科		1	—	—
キンボウゲ科		—	1	—
ヨモギ属		—	—	5
キク亜科		1	6	13
タンポポ亜科		1	—	1
不明花粉		—	1	2
シダ類胞子				
シダ類胞子		35	25	16
合計				
木本花粉		120	14	5
草本花粉		12	10	20
不明花粉		0	1	2
シダ類胞子		35	25	16
総計(不明を除く)		167	49	41

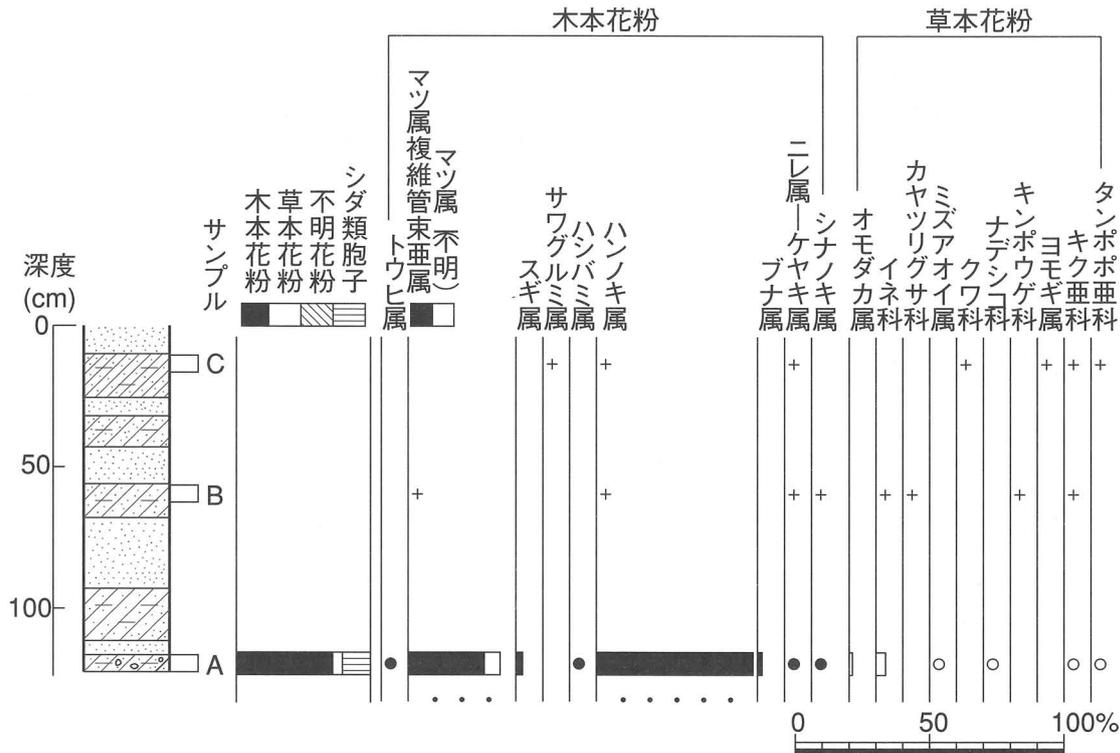


図1. 花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。全体的に花粉化石の産状が悪く、保存状態もほとんどの花粉外膜が破損・溶解の影響を受けている。

サンプルB及びCでは定量解析が出来るだけの個体数を得ることが出来なかった。検出された花粉化石をみると、木本花粉ではサンプルBでマツ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属が、サンプルCでサワグルミ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属が、草本花粉ではサンプルBでイネ科、カヤツリグサ科、キンポウゲ科、キク亜科が、サンプルCでクワ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が産出している。なお、サンプルB及びCの分析残渣中には、微細な植物片が多量に含まれていた。

サンプルAも、産出状況・保存状態とも良好とは言えないが、かろうじて定量解析が行える程度の産出が認められた。群集組成をみると木本花粉の割合が高く、マツ属、ハンノキ属が多産する。特にハンノキ属は、花粉分離せず、集まって塊を形成した状態で検出される「花粉塊」も多く認められた。その他ではトウヒ属、スギ属、ハシバミ属、ブナ属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属を伴う。草本花粉の産出は少なく、オモダカ属、イネ科、ミズアオイ属、ナデシコ科、キク亜科、タンポポ亜科が、わずかに検出されるのみである。

(4) 考 察

分析したいずれの試料も、花粉化石の産状が良好とは言えず、保存状態も花粉外膜が破損・溶解しているものが多く認められた。一般的に、花粉やシダ類胞子の堆積した場所が常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている(中村, 1967; 徳永・山内,

1971；三宅・中越,1998など)。また、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされる。今回、花粉化石の産状や保存状態の悪さを考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉が、その後の経年変化により分解・消失し、分解に強い花粉が選択的に残された可能性がある。また、サンプルB及びCの分析残渣には、分解の影響を受けた微細な植物片が多量に検出された。よって、堆積速度が速く花粉が取り込まれにくかったことも、花粉化石が少なかった理由の一つに挙げられる。以上の点を考慮した上で、古植生の検討を行う。

最下層のサンプルAでは、分解の影響を考慮してもマツ属とハンノキ属が多産する。ハンノキ属は溪谷沿いや河畔、低湿地等の適湿地に林分を形成する種類であり、同時に検出されるニレ属-ケヤキ属やシナノキ属も同様である。また、多産するハンノキ属には、花粉塊の状態を検出されるものも多く認められた。花粉塊は、蕾や花などの植物体を取り込まれた時などに多く認められることから、調査地点の極近傍にハンノキ属の個体が生育していた可能性がある。マツ属は、伐採された土地や崩落地などに一番最初に進入する先駆植物の一つであり、不安定な斜面地に生育していたと考えられる。

また、草本類でもオモダカ属、ミズアオイ属等の水生植物が検出される他、イネ科にも水湿地に生育する種類が含まれる。調査地点が沢跡付近であることを考慮すると、縄文時代頃、沢の内部には、オモダカ属、ミズアオイ属等の水生植物が生育しており、沢沿いや上流の集水域にはハンノキ属を主体とした溪谷林が存在していた可能性がある。ナデシコ科、キク亜科、タンポポ科等は、開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であることから、調査区周囲の草地に生育していたものに由来すると考えられる。ただし、草本花粉の出現率が高率でないことから、開けた草地のような環境でなく、沢近辺は木本類が迫っていたと考えられる。また、後背の山地・丘陵部には、スギ属等の針葉樹や、ブナ属等の落葉広葉樹も存在したと推測される。

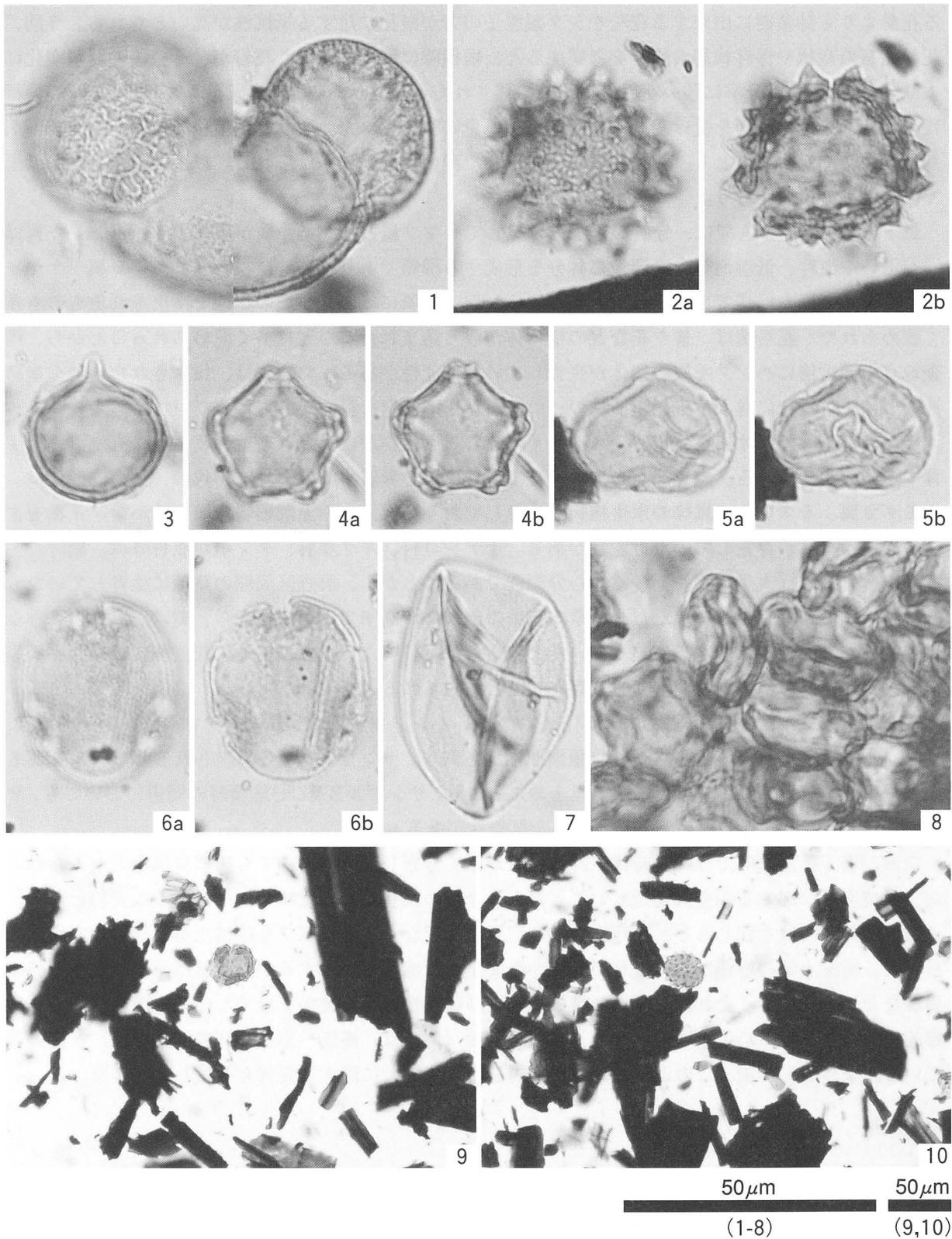
一方、サンプルBからは、少ないながらもマツ属、ハンノキ属、ニレ属-ケヤキ属、シナノキ属等、サンプルAで多産あるいは認められた種類が検出される。サンプルCから検出されるサワグルミ属も溪谷沿い等に認められる種類である。以上のことより、サンプルB及びC堆積時の周辺においても、サンプルA堆積時と同様の植生が広がっていた可能性がある。

なお、岩手県沿岸部では縄文時代以降の貝塚が多く分布し、宮古市内でも綱取貝塚などがみられるが、環境変遷に関する調査例が乏しいことから、今回の調査はその意味でも今後貴重な資料となる。一方、遺跡内に目を転じると、今回調査した沢部だけでなく、低地部でも腐植土層と砂層の互層がみられた。腐植土層の堆積は水の流れが穏やかな安定した環境で堆積するが、砂層は河川の氾濫や斜面崩壊などに由来する。それ故に低地の堆積物および環境変遷は遺跡が立地する山地斜面部の環境を間接的に反映し、さらには全国規模で生じる環境変動（例えば、海進・海退、気候変動など）と連動している。よって、今後、このような観点から周辺の環境解析に関する資料を蓄積していきたい。

引用文献

- 三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壤に堆積した花粉・胞子の保存状態. 植生史研究,6,15-30.
 中村 純,1967,花粉分析. 古今書院,232p.
 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・胞子. 化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.

図版1 花粉化石



- | | |
|---------------------------|-----------------------------|
| 1. マツ属 (サンプルA; 最下層) | 2. キク亜科 (サンプルB; 中層) |
| 3. スギ属 (サンプルA; 最下層) | 4. ハンノキ属 (サンプルA; 最下層) |
| 5. ニレ属-ケヤキ属 (サンプルB; 中層) | 6. シナノキ属 (サンプルB; 中層) |
| 7. イネ科 (サンプルA; 最下層) | 8. ハンノキ属 (花粉塊) (サンプルA; 最下層) |
| 9. プレパラート内の状況 (サンプルB; 中層) | 10. プレパラート内の状況 (サンプルC; 上層) |

写真図版



調査区遠景（南から）



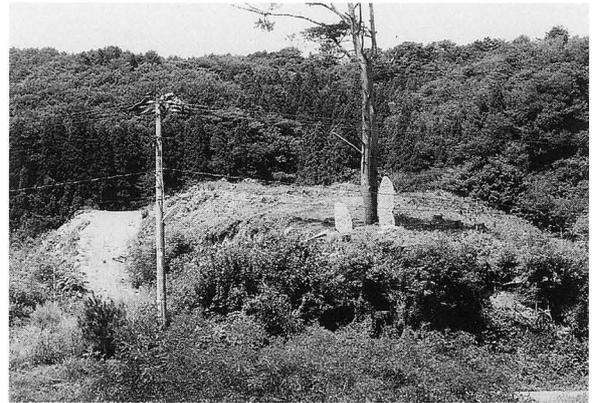
調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



石碑現況（東から）



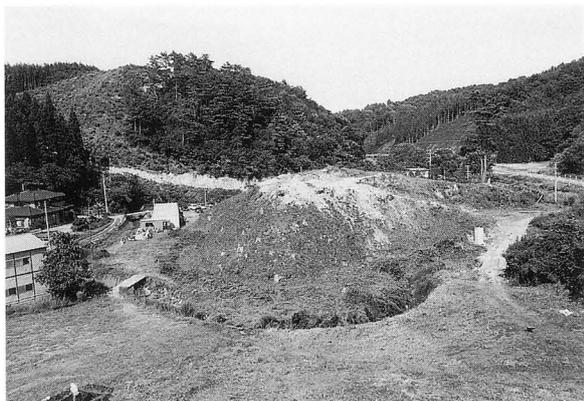
石碑現況（東から）



石碑現況（東から）



ふみ切り現況（東から）



1区雑物撤去後（南から）



1区遠景（南から）



1区遠景（北から）



1区作業風景



2区東側雑物撤去後（北から）



2区西側雑物撤去後（北から）



2区斜面トレンチ21~28 平面（北から）



2区全景（北から）



3区全景（西から）



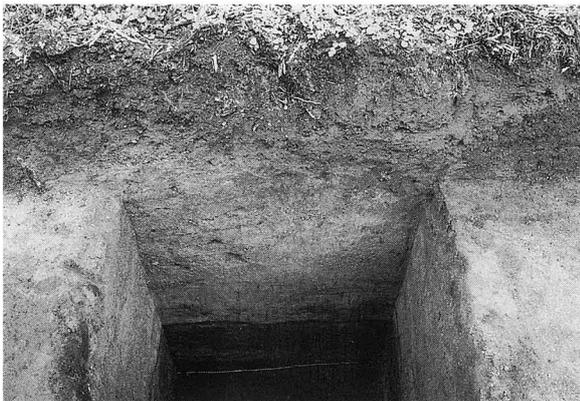
3区雑物撤去後（西から）



3区遠景（北から）



1区基本土層①東端断面（西から）



2区基本土層②断面（西から）



2区基本土層②T25断面（西から）



3区基本土層⑤TP1断面（東から）



3区基本土層④TP2断面（南から）

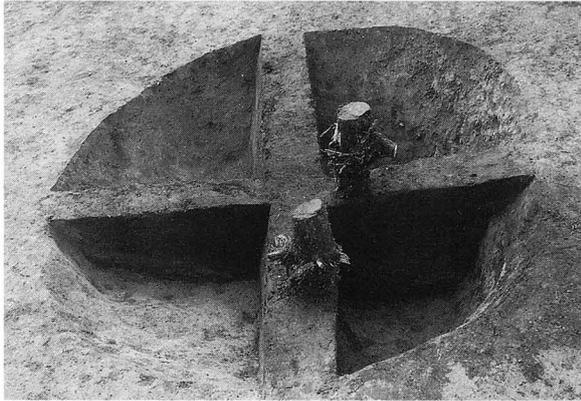
写真図版4 調査区の様子3区、基本土層



SKI01平面 (南から)



SKI01・SK17平面 (南から)



SKI01断面 (東から)



SKI01断面 (南から)



SKI02平面 (西から)



SKI02断面 (南から)



SX01断面 (南から)



SX01断面 (西から)



SK03平面 (南から)



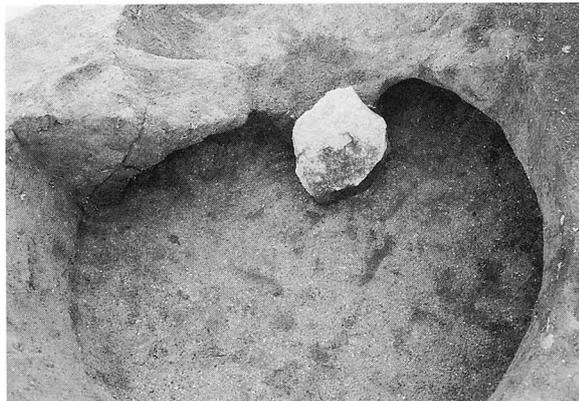
SK03断面 (南から)



SK04平面 (北から)



SK04断面 (北から)



SK04礫出土状況 (北から)



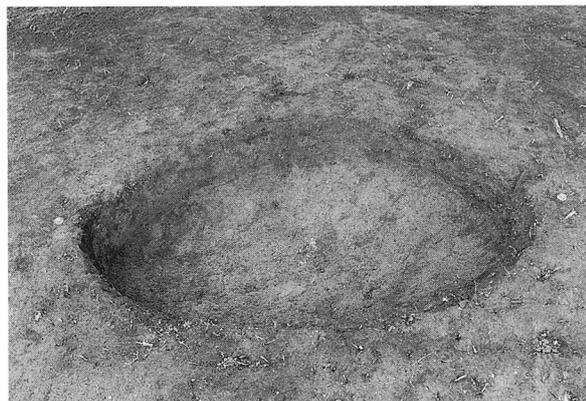
SK05平面 (南から)



SK07平面 (南から)



SK07断面 (南から)



SK08平面 (南から)



SK08断面 (南から)



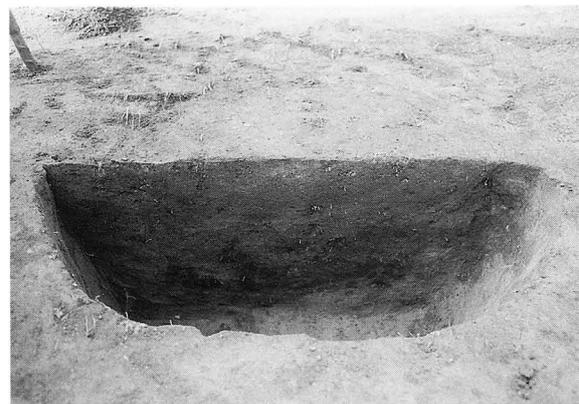
SK09平面 (南から)



SK09断面 (南から)



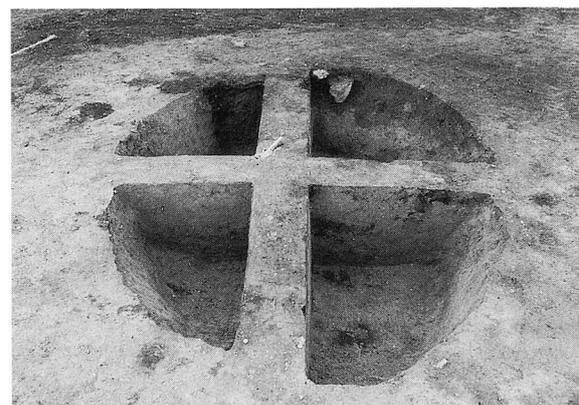
SK10平面 (南から)



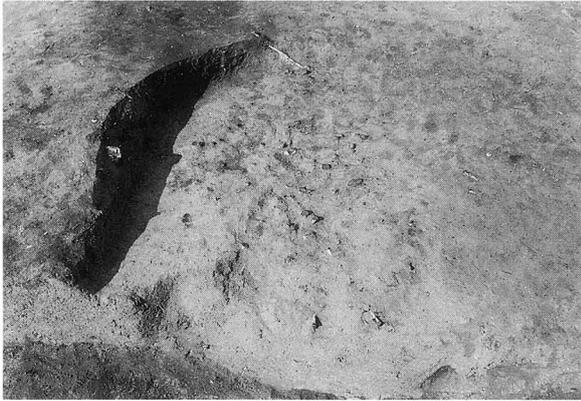
SK10断面 (南から)



SK11平面 (東から)



SK11断面 (南から)



SK12平面 (南から)



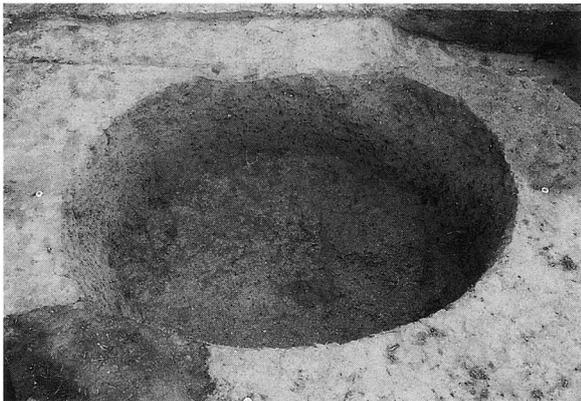
SK12断面 (南から)



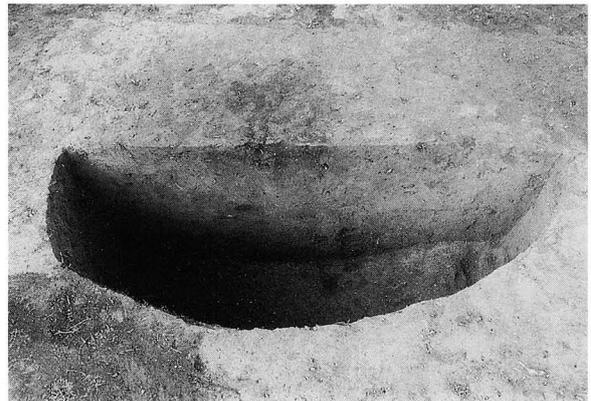
SK13平面 (南から)



SK13断面 (南から)



SK14平面 (南から)



SK14断面 (南から)



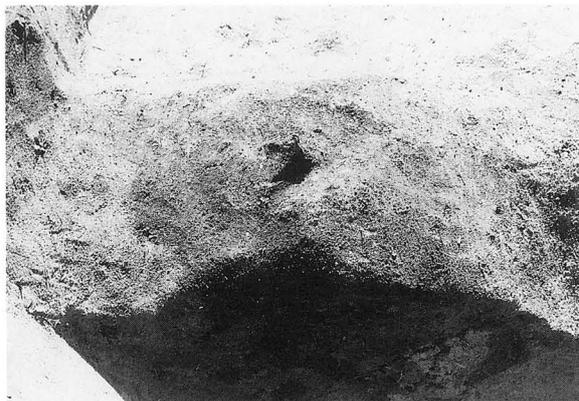
SK15平面 (西から)



SK15断面 (西から)



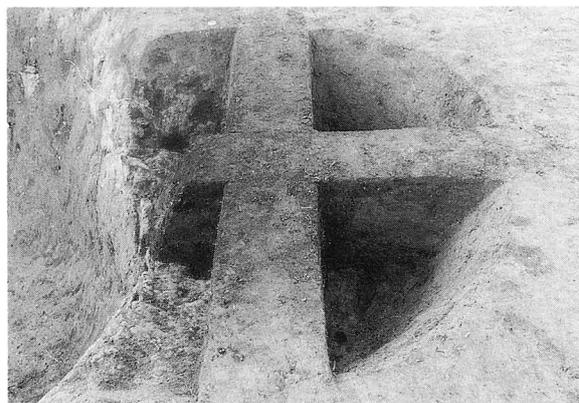
SK14平面礫出土状況（南から）



SK15焼土出土状況（西から）



SK17断面（南から）



SK17断面（東から）



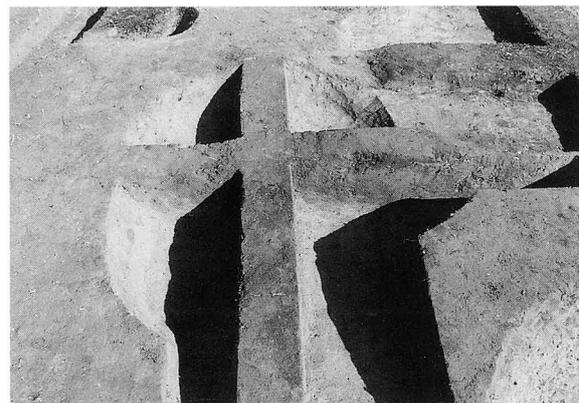
SK17平面（南から）



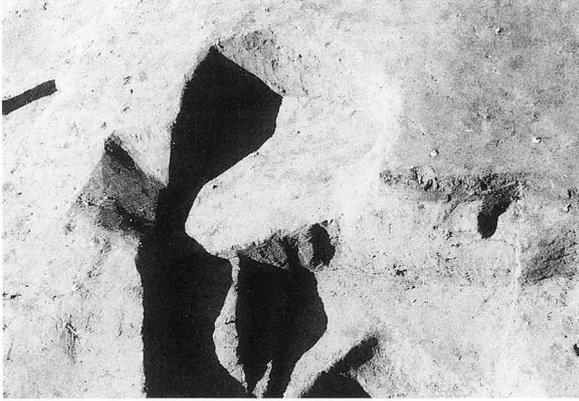
SK18平面（南から）



SK18断面（南から）



SK18断面（西から）



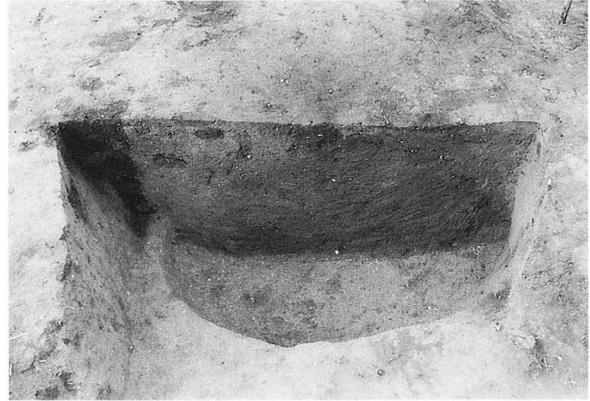
SK19平面 (東から)



SK19断面 (北から)



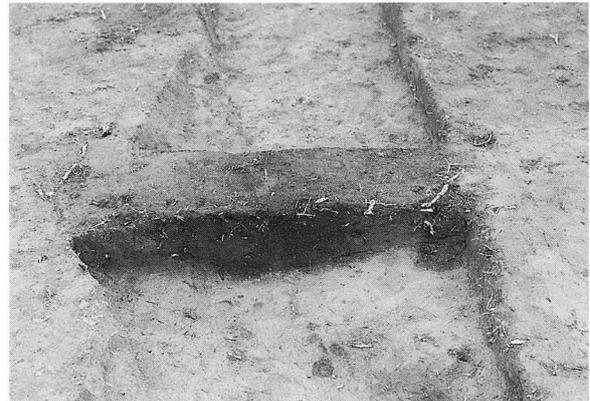
SK20平面 (東から)



SK20断面 (南から)



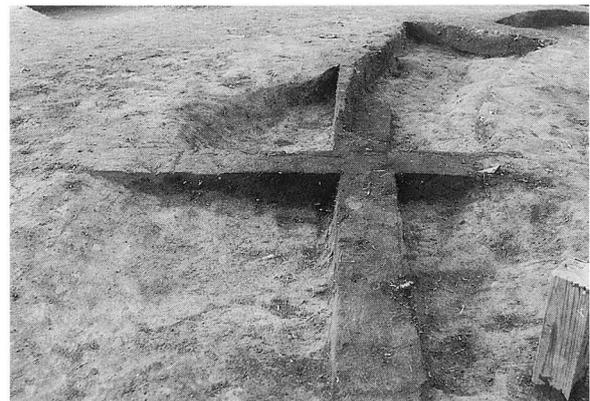
SK21・35平面 (東から)



SK35断面 (東から)



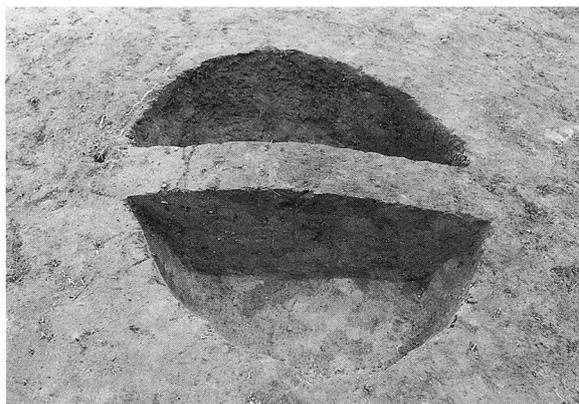
SK21断面 (西から)



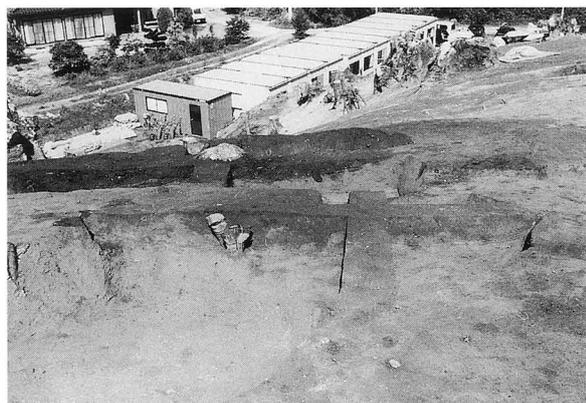
SK21断面 (南から)



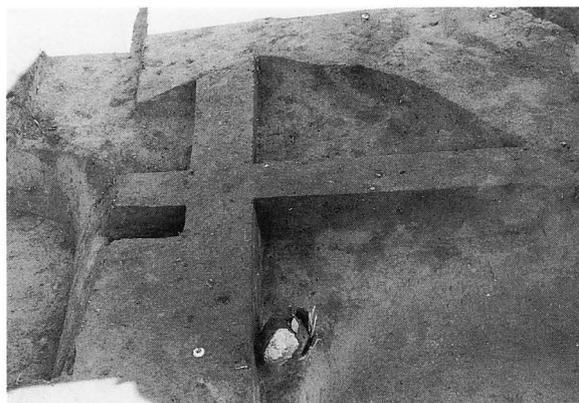
SK22平面 (北東から)



SK22断面 (東から)



SK23断面 (南から)



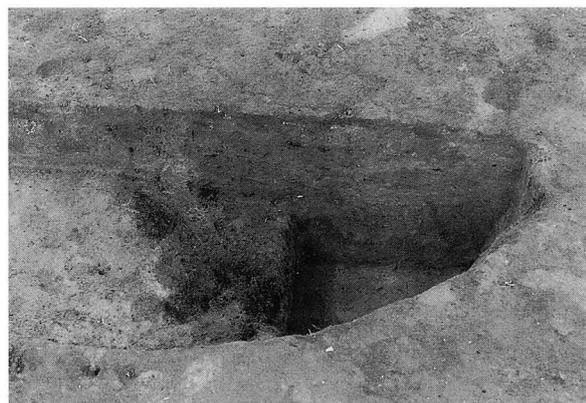
SK23断面 (南から)



SK23平面 (南から)



SK24平面 (南から)



SK24炭化材出土状況 (南から)



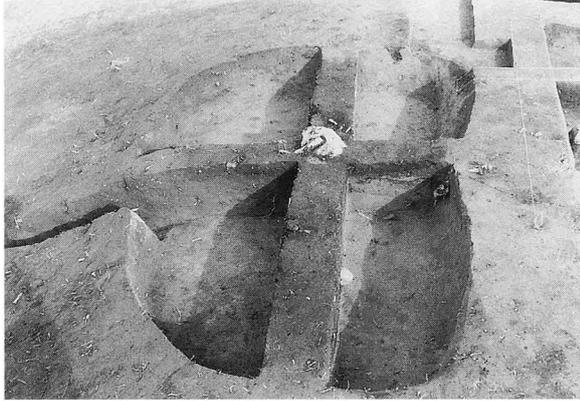
SK24断面 (南から)



SK27平面 (東から)



SK27断面 (東から)



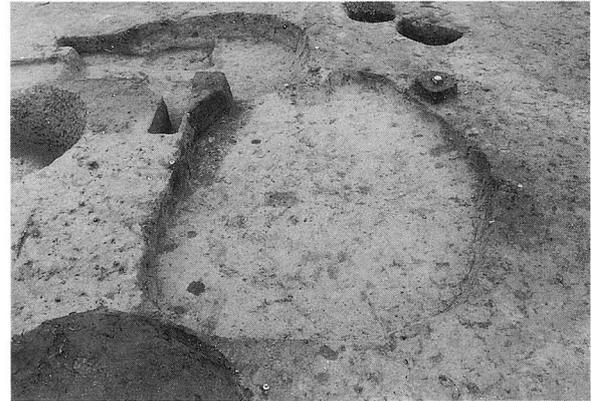
SK26断面 (西から)



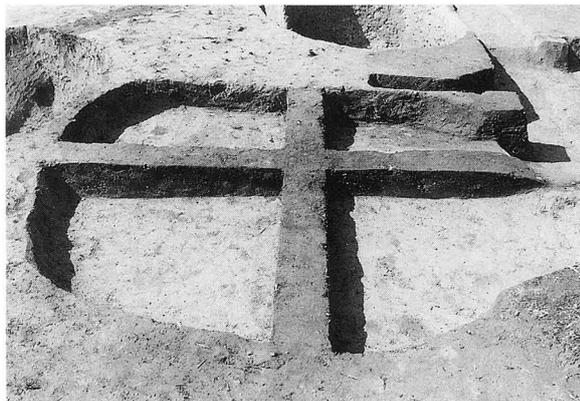
SK26断面 (南から)



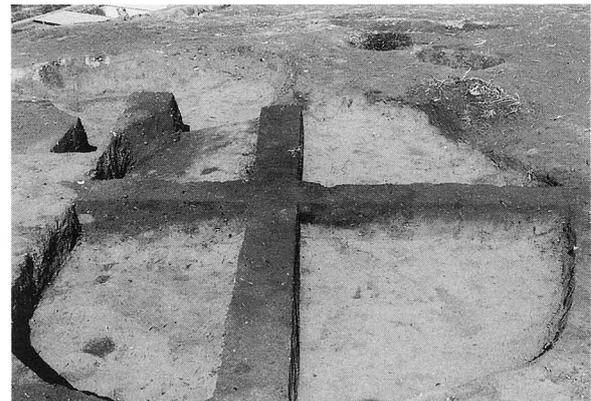
SK26平面 (南から)



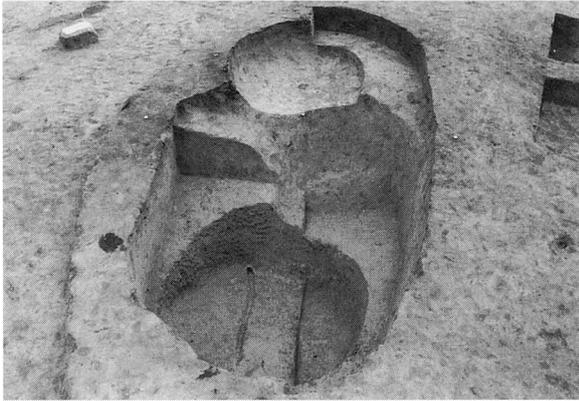
SK28平面 (南から)



SK28断面 (東から)



SK28断面 (南から)



SK29・30平面（西から）



SK29断面（西から）



SK30平面（南から）



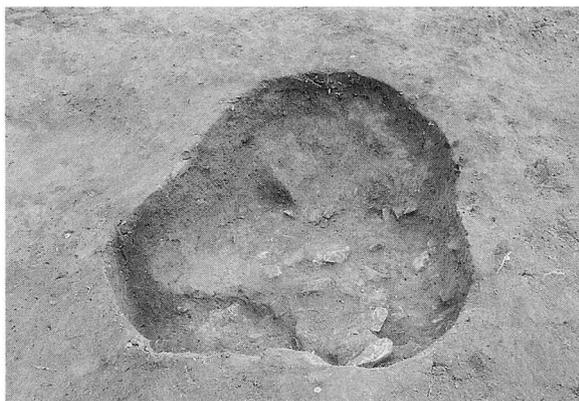
SK30断面（南から）



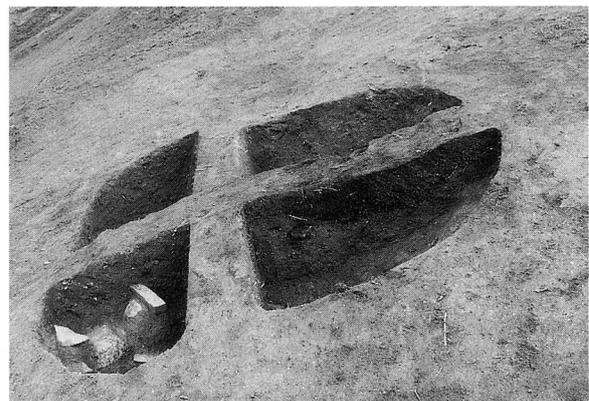
SK32平面（西から）



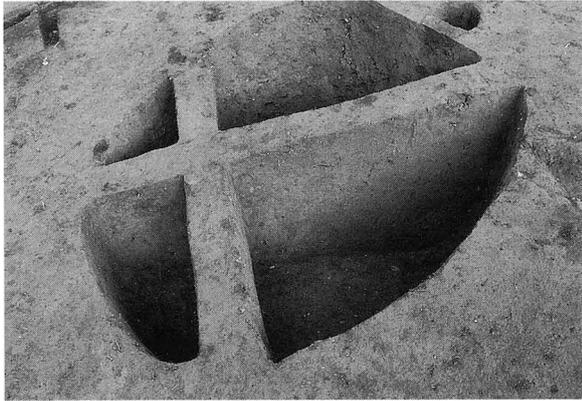
SK32断面（西から）



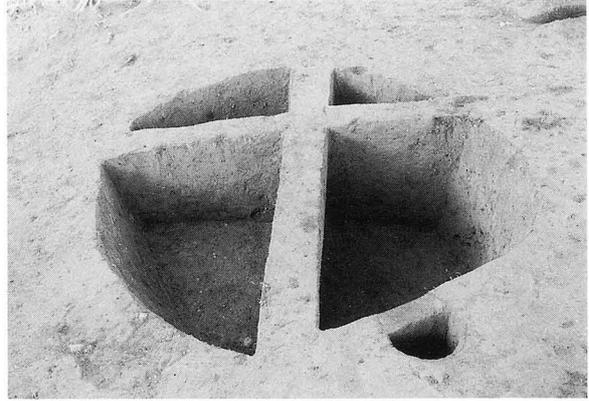
SK33平面（西から）



SK33断面（南から）



SK34断面（西から）



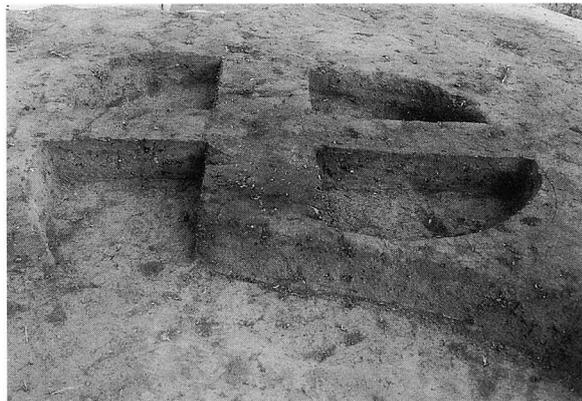
SK34断面（南から）



SK34平面（南から）



SK36平面（南から）



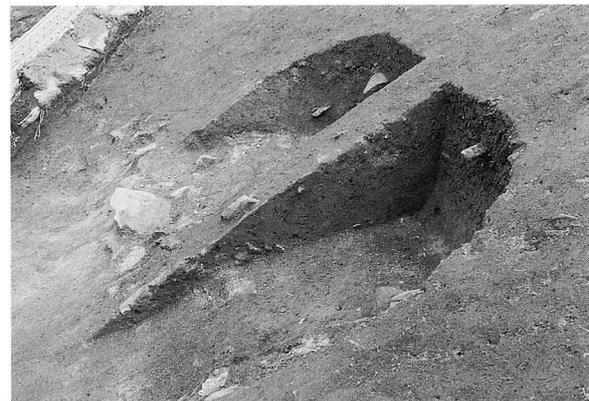
SK36断面（西から）



SK36断面（南から）



SK37平面（南から）



SK37断面（南から）



SK01平面 (東から)



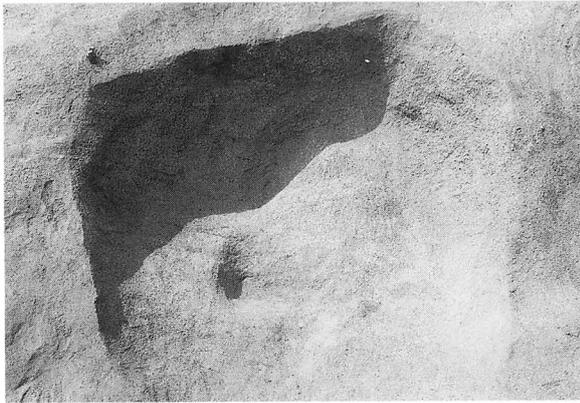
SK01断面 (東から)



SK01副穴平面 (東から)



SK01副穴断面 (南から)



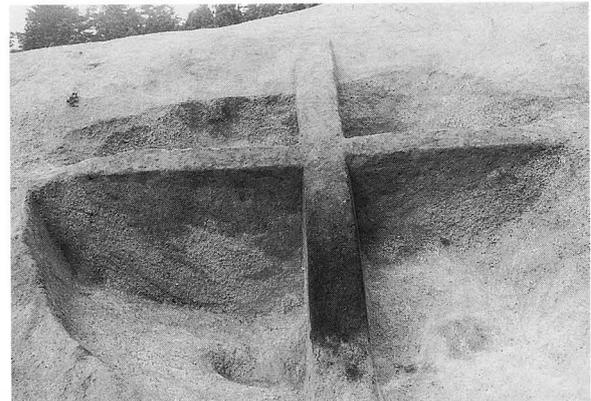
SK02平面 (北から)



3区作業風景



SK02断面 (西から)



SK02断面 (北から)



SK16平面 (南から)



SK16断面 (南から)



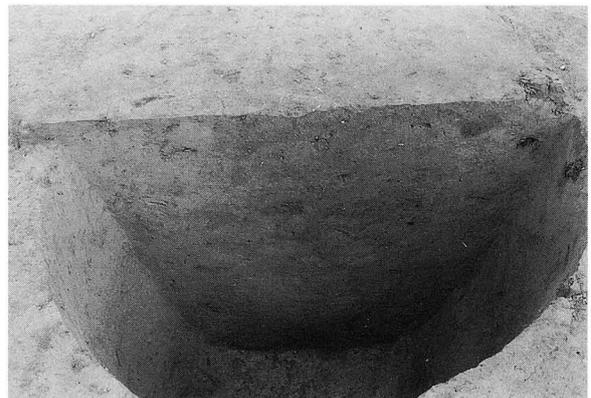
SK25平面 (南から)



SK25断面 (南から)



SK31平面 (南から)



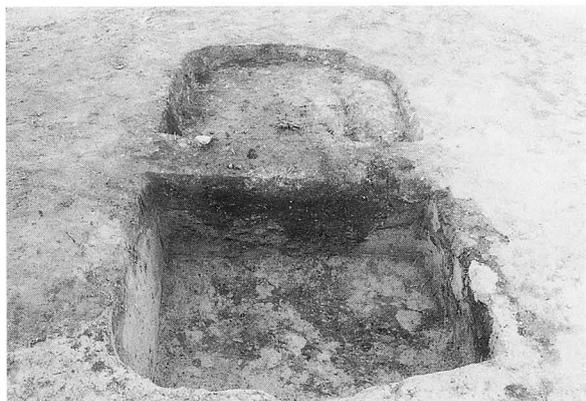
SK31断面 (南から)



現地公開の様子



現地公開の様子



SK06検出状況（南から）



SK06・19平面（東から）



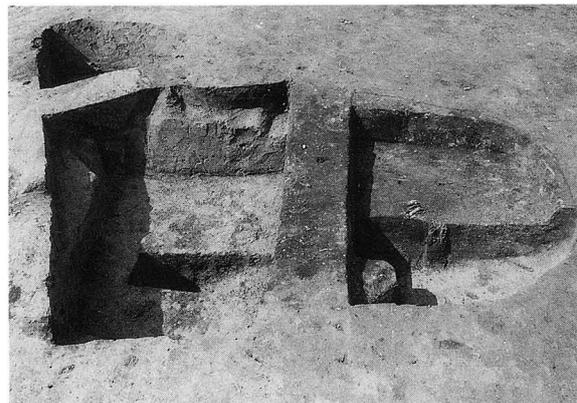
SK06人骨出土状況①（東から）



SK06人骨出土状況②（東から）



SK06断面（南から）



SK06断面（東から）



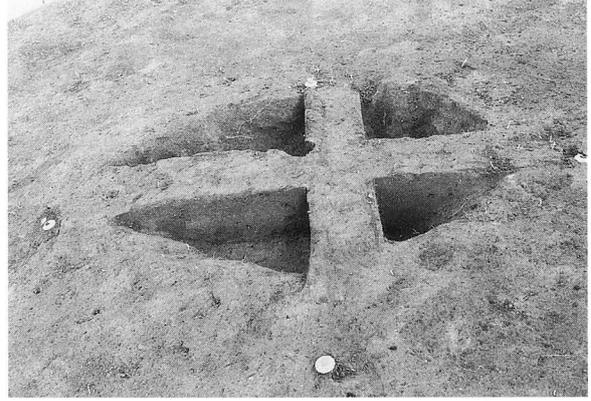
供養の様子



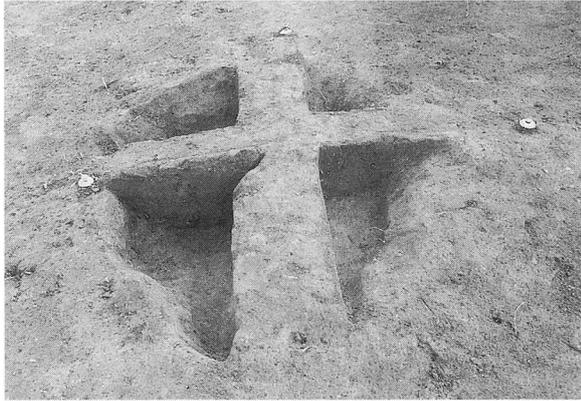
骨のとりあげ



SN01平面（南から）



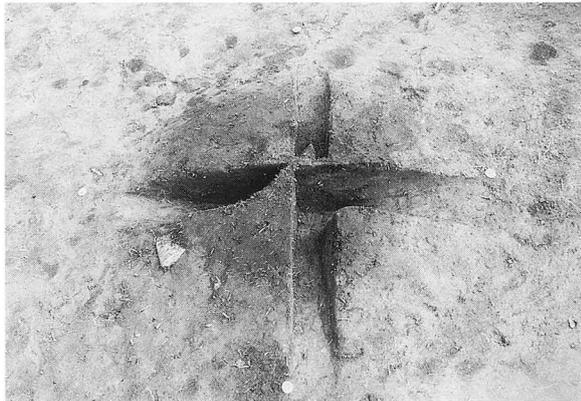
SN01断面（西から）



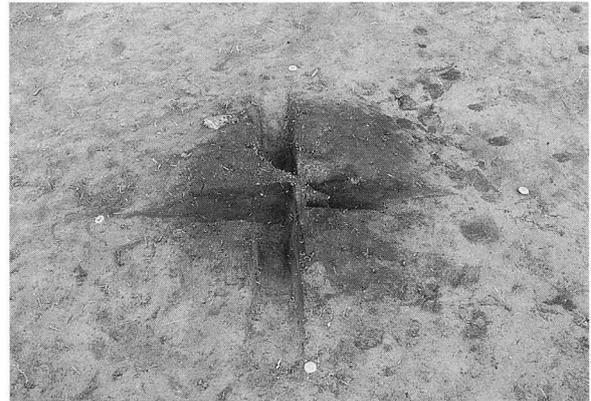
SN01断面（北から）



SN02平面検出状況（西から）



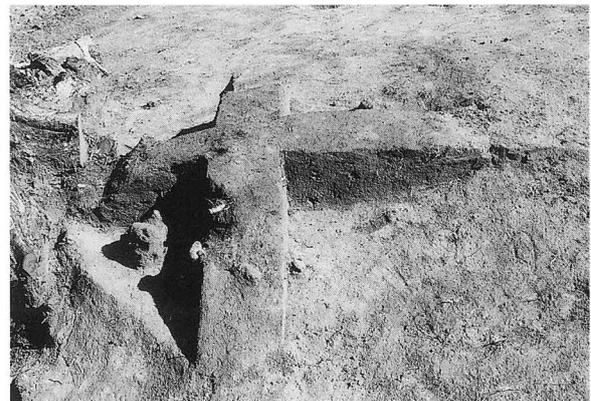
SN02断面（西から）



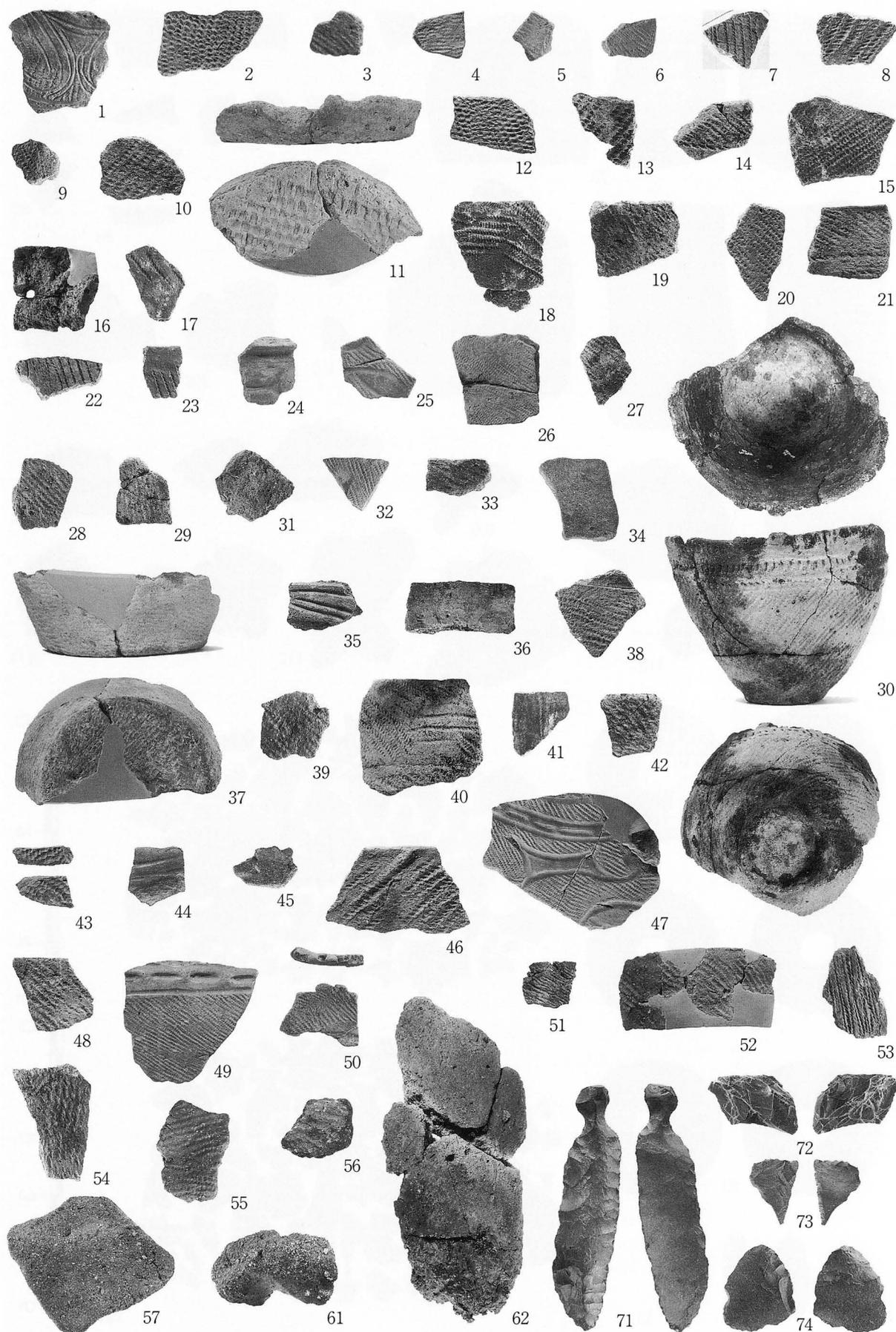
SN02断面（南から）



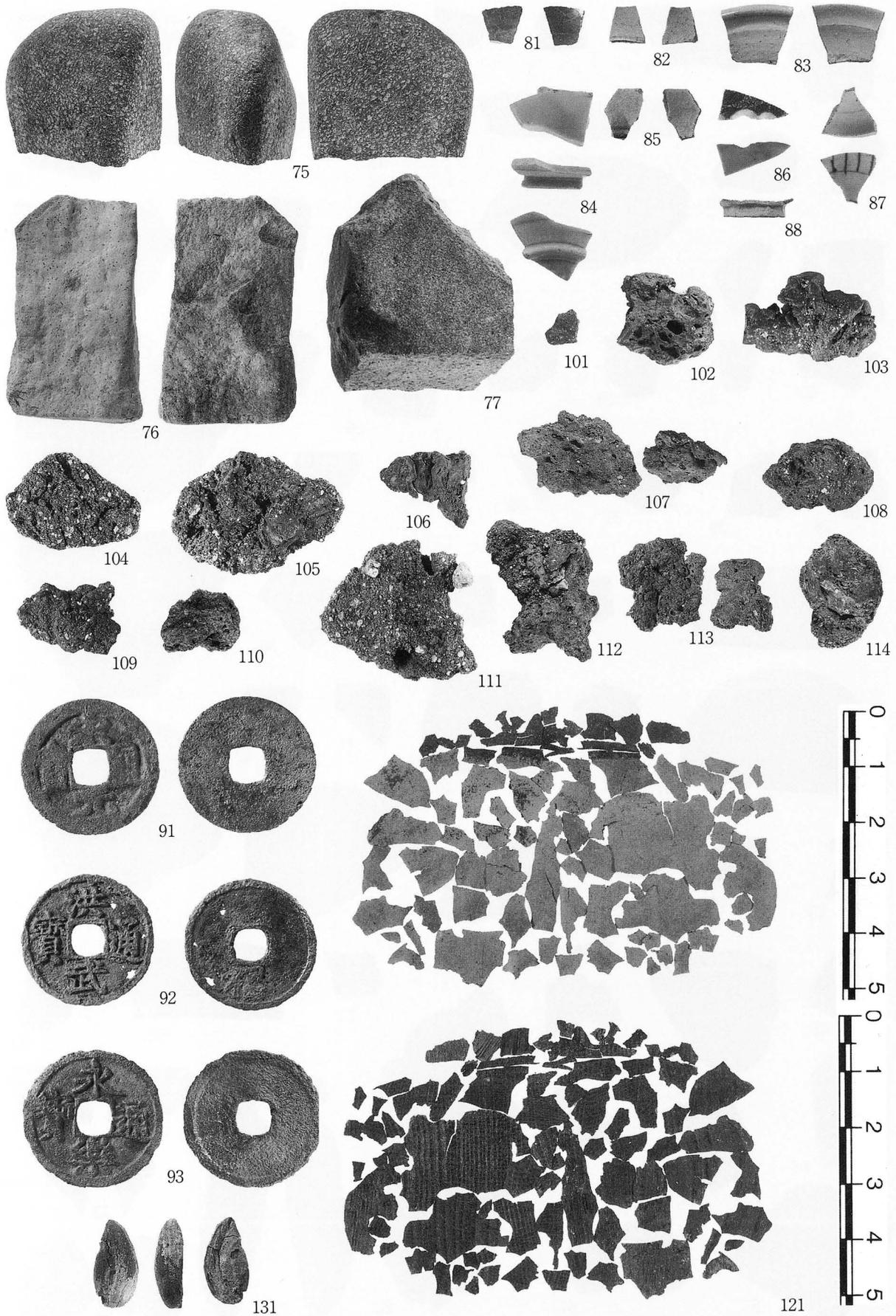
SN03平面（西から）



SN03断面（南から）



写真図版19 土器、土製品、石器(1)



写真図版20 石器(2)、陶磁器、鉄滓類、銭貨、漆の塗膜、植物遺体



調査前現況（北から）



試掘風景（北西から）



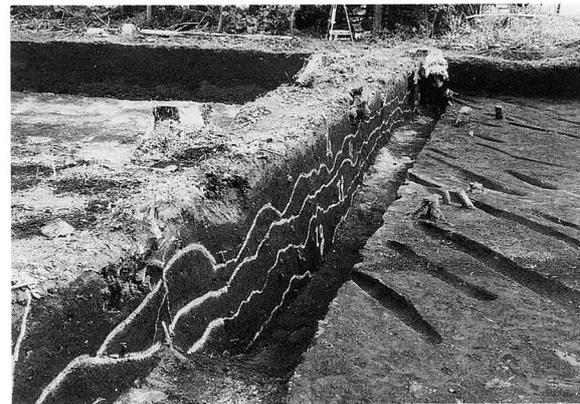
西側調査区際断面①（東から）



西側調査区際断面②（南から）



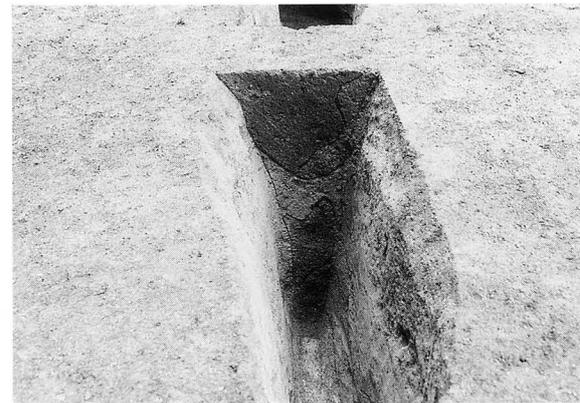
西側メインベルト断面（南から）



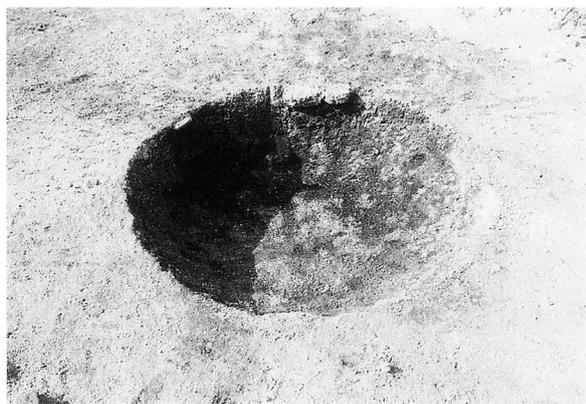
東側メインベルト断面（南西から）



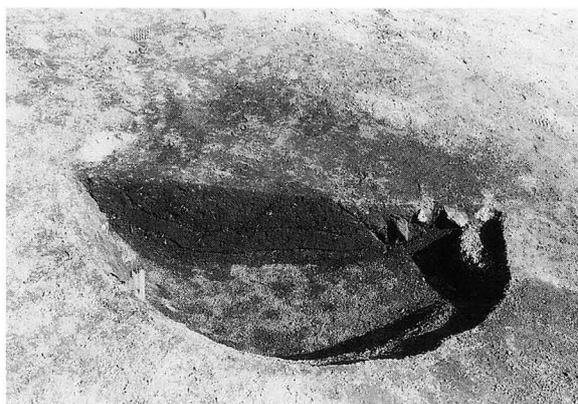
1号陥し穴状遺構完掘（南西から）



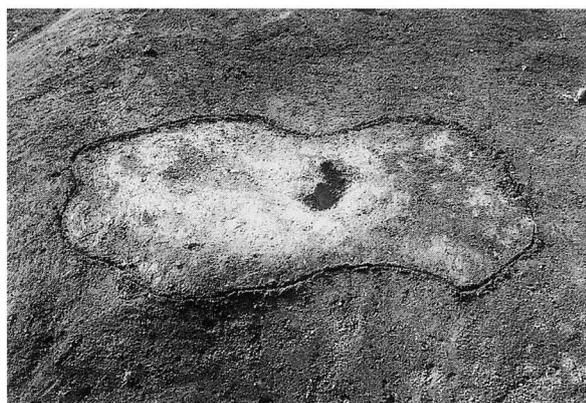
1号陥し穴状遺構断面（南西から）



1号土坑平面（南から）



1号土坑断面（南から）



1号焼土遺構平面（東から）



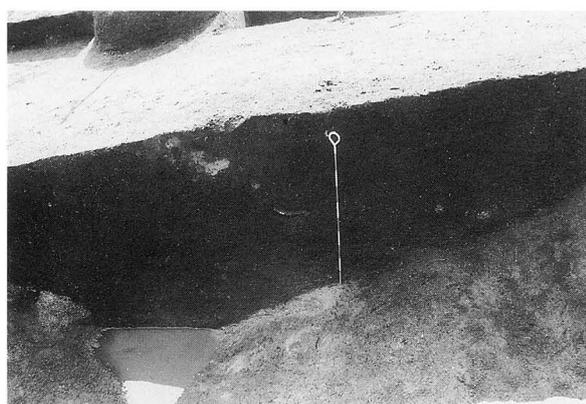
1号焼土遺構断面（東から）



1号道路状遺構完掘（東から）



1号道路状遺構断面（東から）



4区トレンチ内遺物出土状況



1号畑跡断面（南東から）



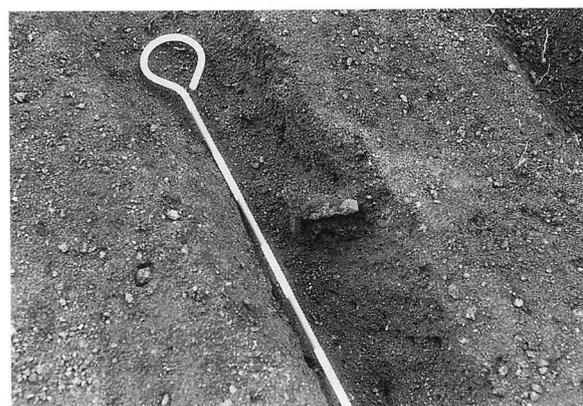
1区2号畑跡検出①（南東から）



1区2号畑跡検出②（東から）



1区2号畑跡完掘（東から）



1区2号畑跡船釘出土状況（南東から）



2区2号畑跡検出（西から）



2区2号畑跡完掘（西から）



1区1号粗起痕断面①（東から）



1区1号粗起痕断面②（西から）



1号粗起痕全景検出（北西から）



1号粗起痕全景完掘（北西から）



東側調査区際断面①（北西から）



東側調査区際断面②（北西から）



東側調査区際断面③（西から）



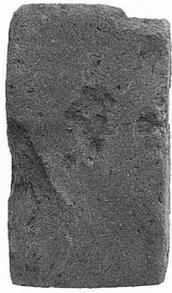
東側調査区際断面④（北西から）



調査区全景（北西から）



6



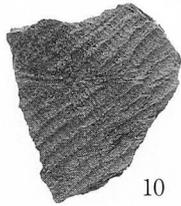
7



8



9



10



11



12



13



14



15



19



20



遺跡遠景（北から）



遺跡真上から（右が北）



北側平坦面現況（南から）



南側斜面部現況（南から）



粗掘り終了段階（北から）



平面（南から）



断面（南から）



張出し部分（南から）



調査中（東から）



平面（北西から）

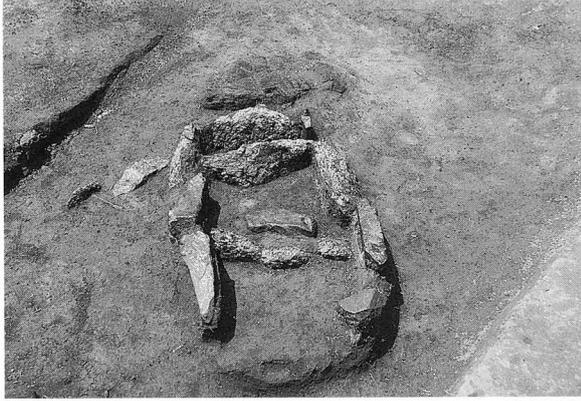


断面（東から）



断面（南から）

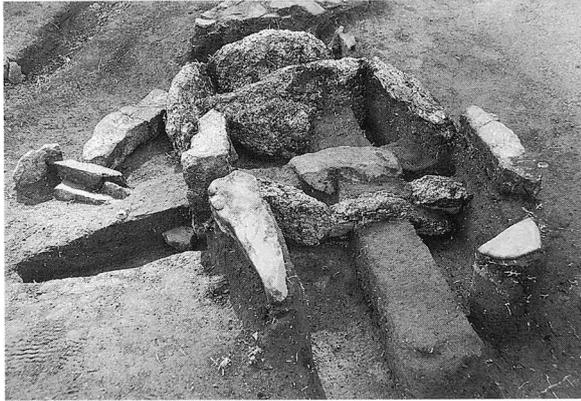
写真図版30 2号竪穴住居跡(1)



炉跡平面（東から）



炉跡平面（南から）



炉跡断面（東から）



炉跡断面（南から）



3号竪穴建物跡平面（北西から）



2号竪穴住居跡、3号竪穴建物跡



3号竪穴建物跡壁 (南から)



4号竪穴住居跡 (南から)



4号竪穴住居跡断面 (東から)



4号竪穴住居跡平面 (南東から)



1号掘立柱建物跡（西から）



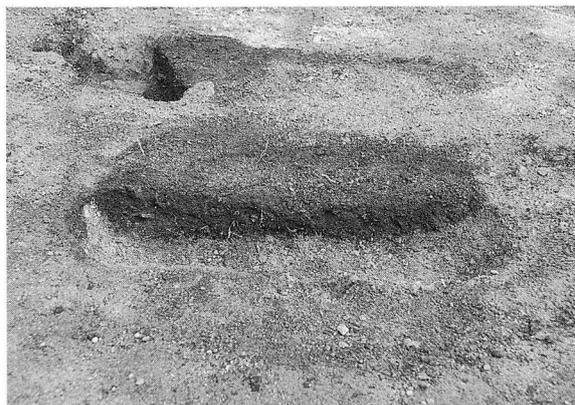
2号掘立柱建物跡（西から）



3・4号掘立柱建物跡（西から）



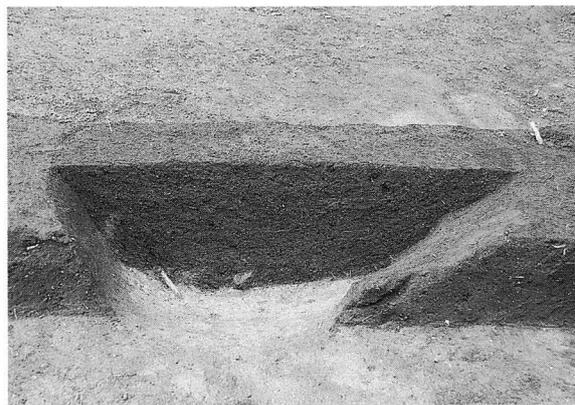
1号土坑平面（北から）



1号土坑断面（東から）



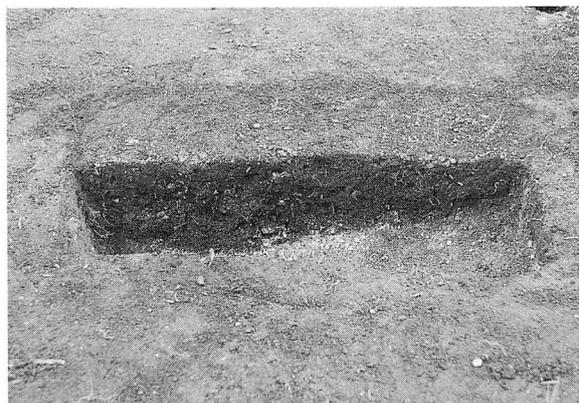
2号土坑平面（東から）



2号土坑断面（東から）



3号土坑平面（南から）



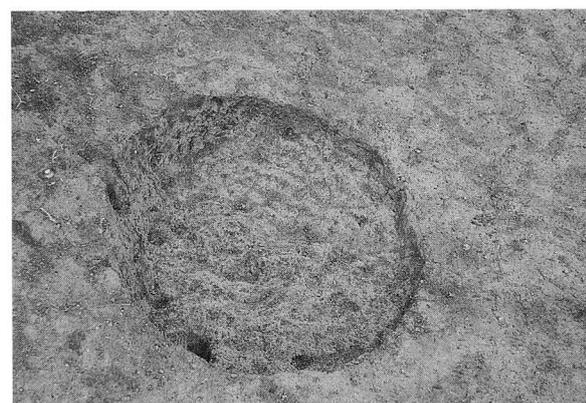
3号土坑断面（南から）



4号土坑平面（西から）



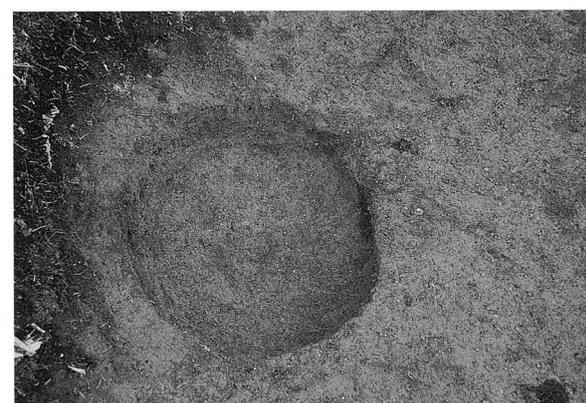
4号土坑断面（南から）



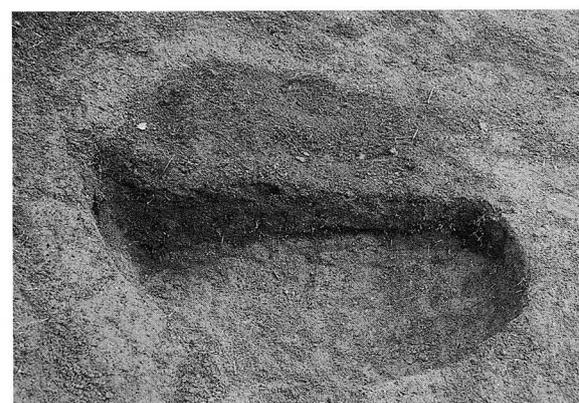
5号土坑平面（南から）



5号土坑断面（南から）



6号土坑平面（南から）



6号土坑断面（南から）



7号土坑平面（南から）



7号土坑断面（南から）



8号土坑平面（東から）



8号土坑断面（東から）



9号土坑平面（南から）



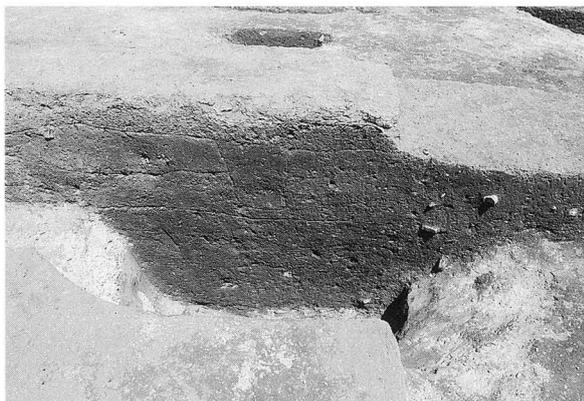
9号土坑断面（南から）



10号土坑平面（南から）



10号土坑断面（南から）



11号土坑断面（南から）



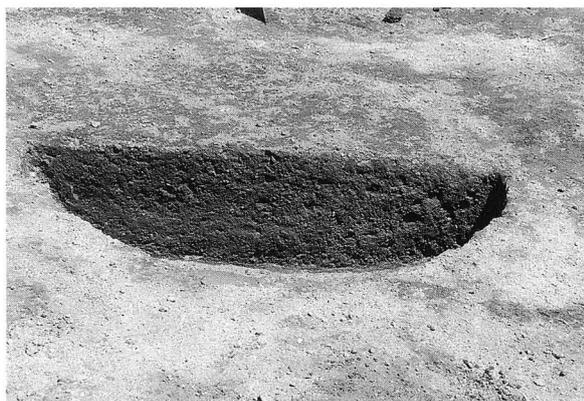
12号土坑平面（南から）



12号土坑断面（南から）



13号土坑平面（南から）



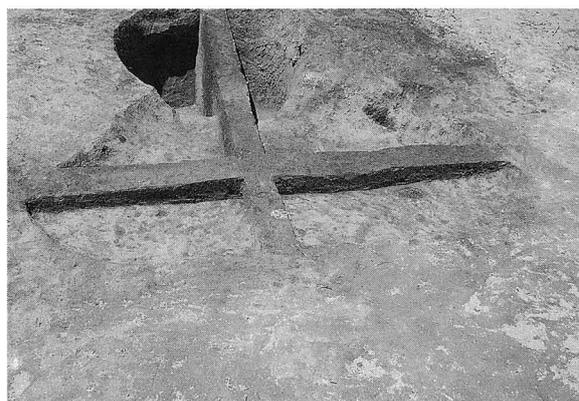
13号土坑断面（南から）



14・15号土坑平面（東から）



14号土坑断面（南から）



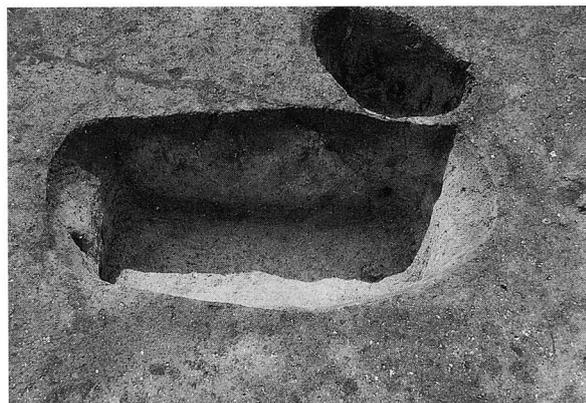
15号土坑断面（東から）



16号土坑平面（南から）



16号土坑断面（南から）



18号土坑平面（東から）



18号土坑断面（西から）



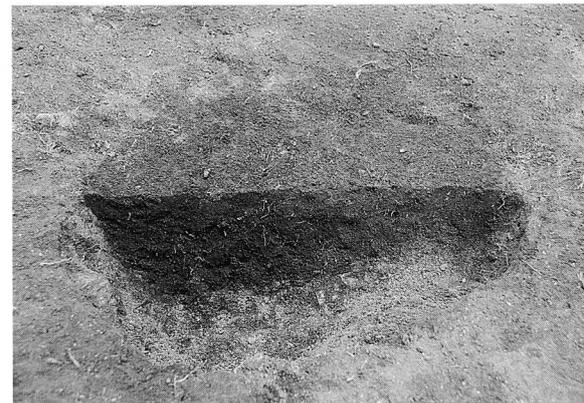
19号土坑平面（南西から）



19号土坑断面（南西から）



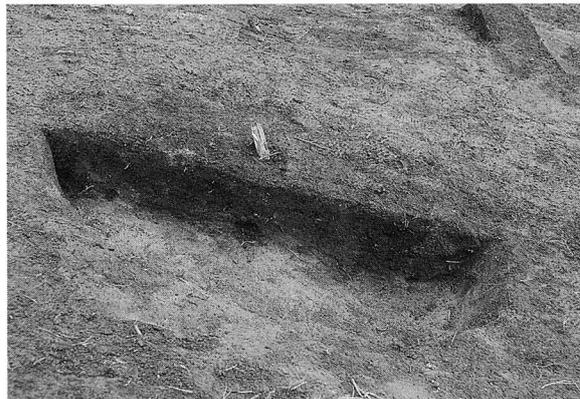
20号土坑平面（南から）



20号土坑断面（南から）



22号土坑平面（南から）



22号土坑断面（南から）



23号土坑平面（南から）



23号土坑断面（南から）



25号土坑平面（南西から）



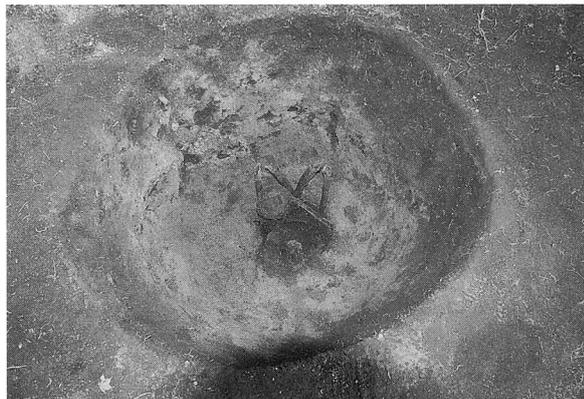
25号土坑断面（南東から）



1号墓坑平面（南から）



1号墓坑人骨（南から）



2号墓墳平面（南から）



2号墓墳人骨（南から）



3号墓墳平面（南から）



3号墓墳断面（南から）



4号墓墳平面（南から）



6号墓墳平面（南西から）



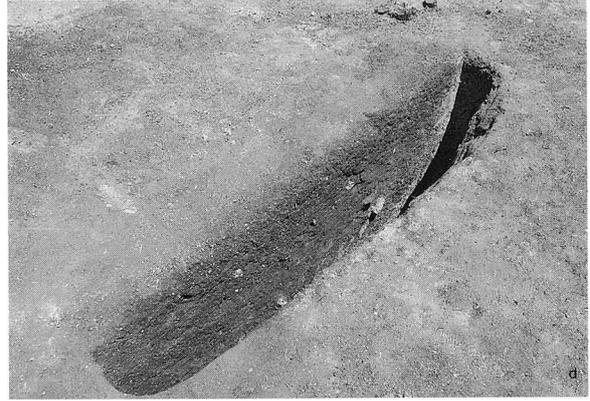
5号墓墳平面（南から）



5号墓墳断面（南から）



1号陥し穴状遺構断面（東から）(ab)



2号陥し穴状遺構断面（南東から）(cd)

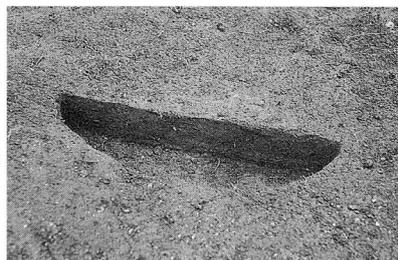


3・4号陥し穴状遺構平面（南から）(ef)



5号陥し穴状遺構平面・断面（南から）

5号陥し穴状遺構平面・断面（南から）



1・2号焼土平面・断面（南東から）

3号焼土平面・断面（南東から）

4号焼土平面・断面（南から）

写真図版42 陥し穴状遺構(2)、焼土遺構(1)



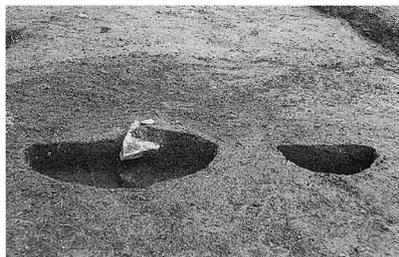
5号焼土平面・断面（南東から）



6号焼土平面・断面（南から）



7・8号焼土平面・断面（南西から）



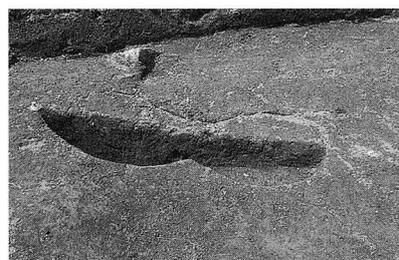
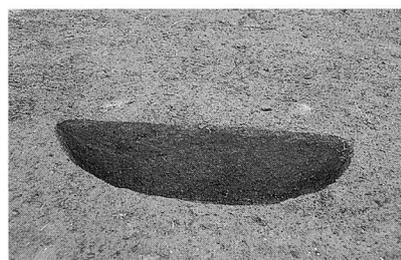
9号焼土平面・断面（南東から）



10号焼土平面・断面（東から）



11号焼土平面・断面（東から）



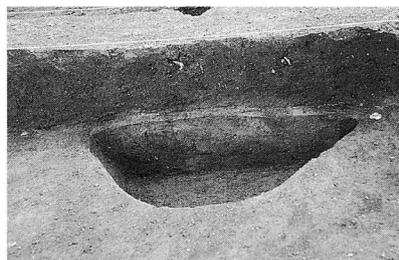
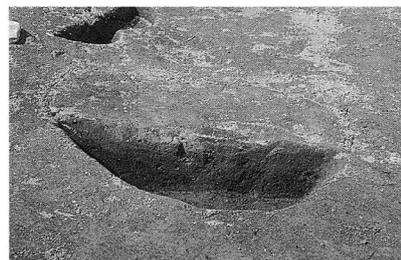
12号焼土平面・断面（南から）

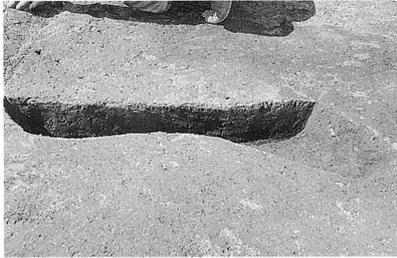


13号焼土平面・断面（北から）

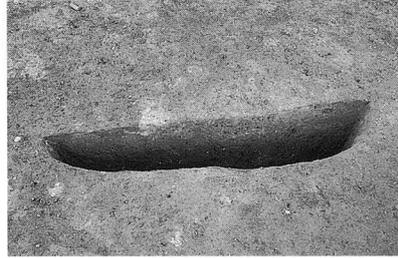


14号焼土平面・断面（南から）





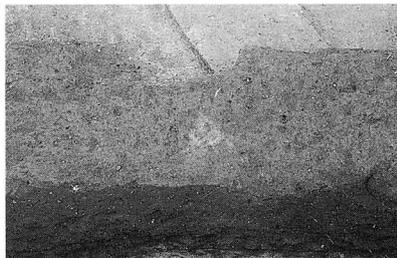
15号焼土平面・断面（南から）



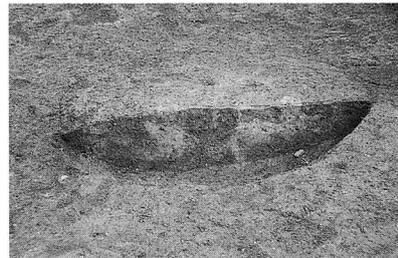
16号焼土平面・断面（東から）



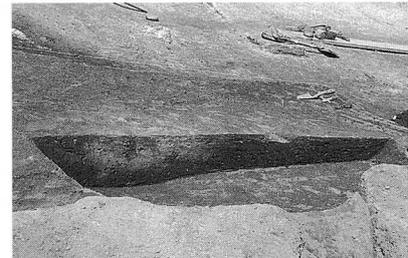
17号焼土平面・断面（東から）



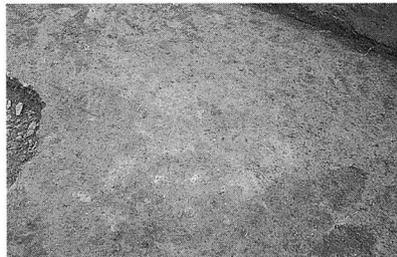
18号焼土平面・断面（南から）



19号焼土平面・断面（南西から）



20号焼土平面・断面（東から）



21号焼土平面・断面（南東から）



22号焼土（西から）と焼土検出面



23号焼土平面・断面（西から）



1号溝跡平面（北から）



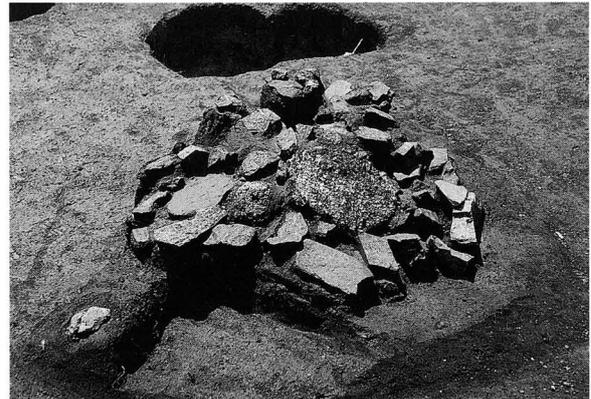
2号溝跡断面（南から）



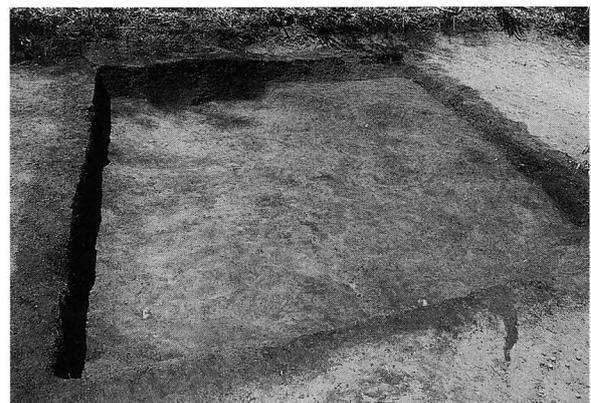
2号溝跡断面（南から）



2号溝跡平面（北から）



1号集石平面（東から）



斜面部検出状況（東から）



1号炭窯跡平面（南から）



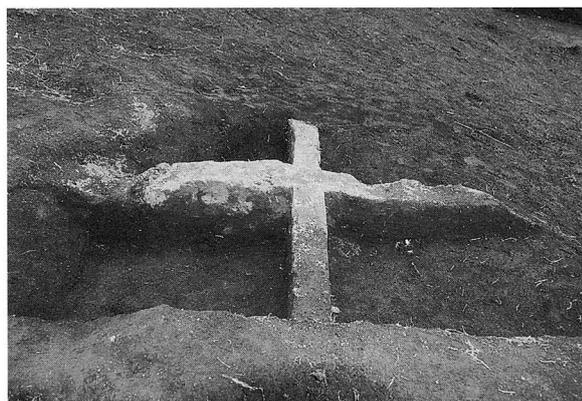
1号炭窯跡断面（南から）



沢跡平面（東から）



沢跡断面（西から）



中掘火山灰検出（南から）



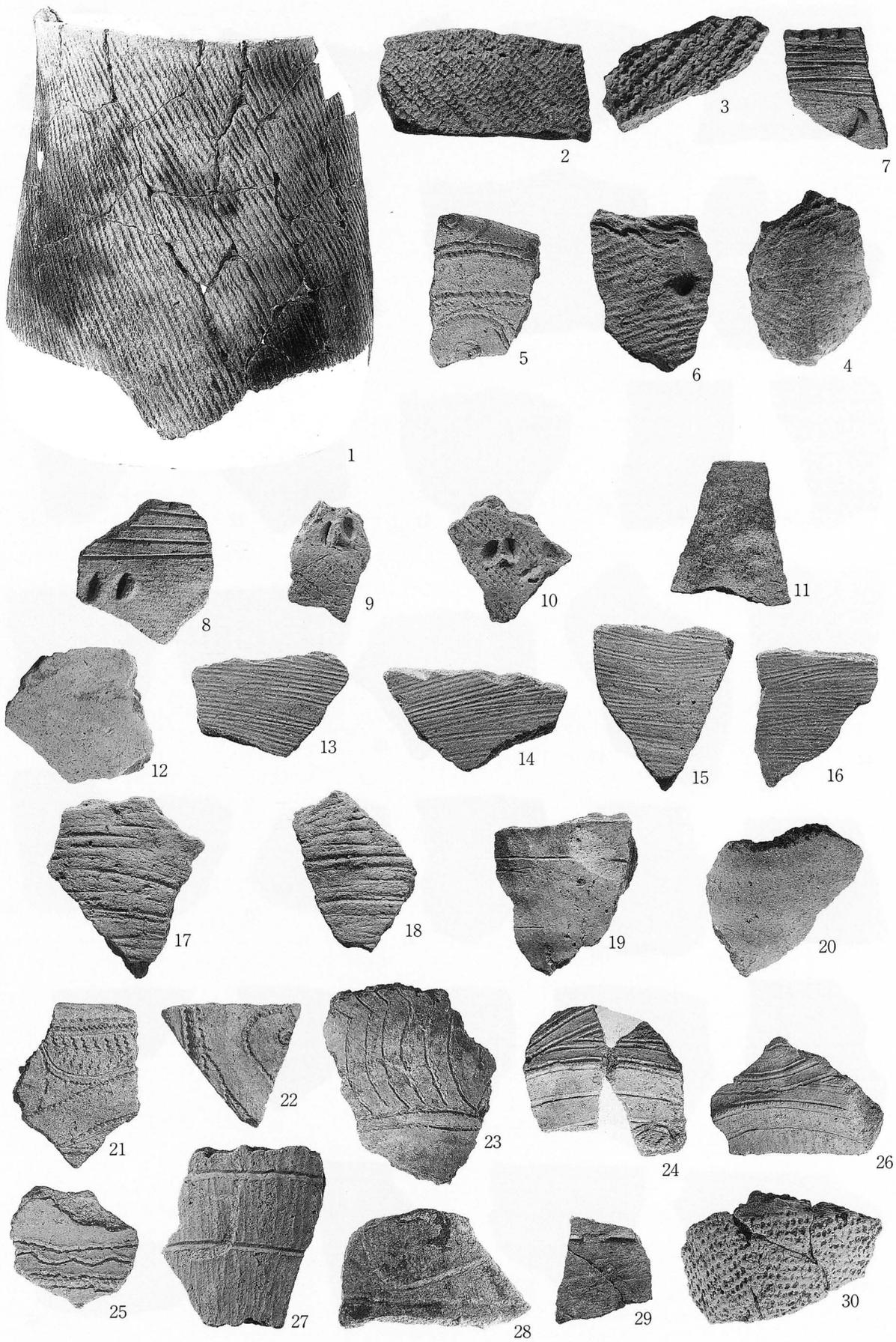
北側平坦面調査中（南から）



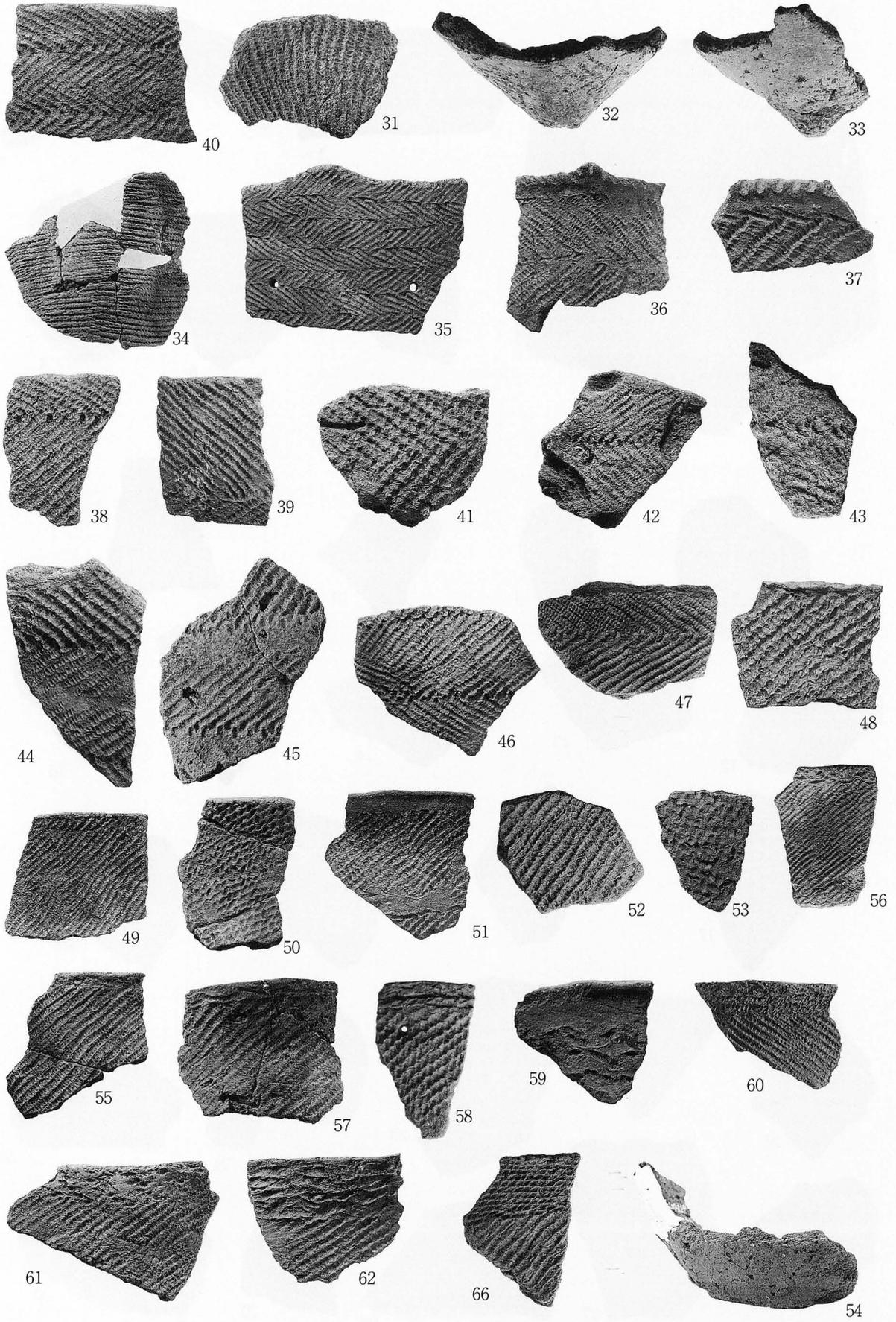
石囲炉調査中（西から）



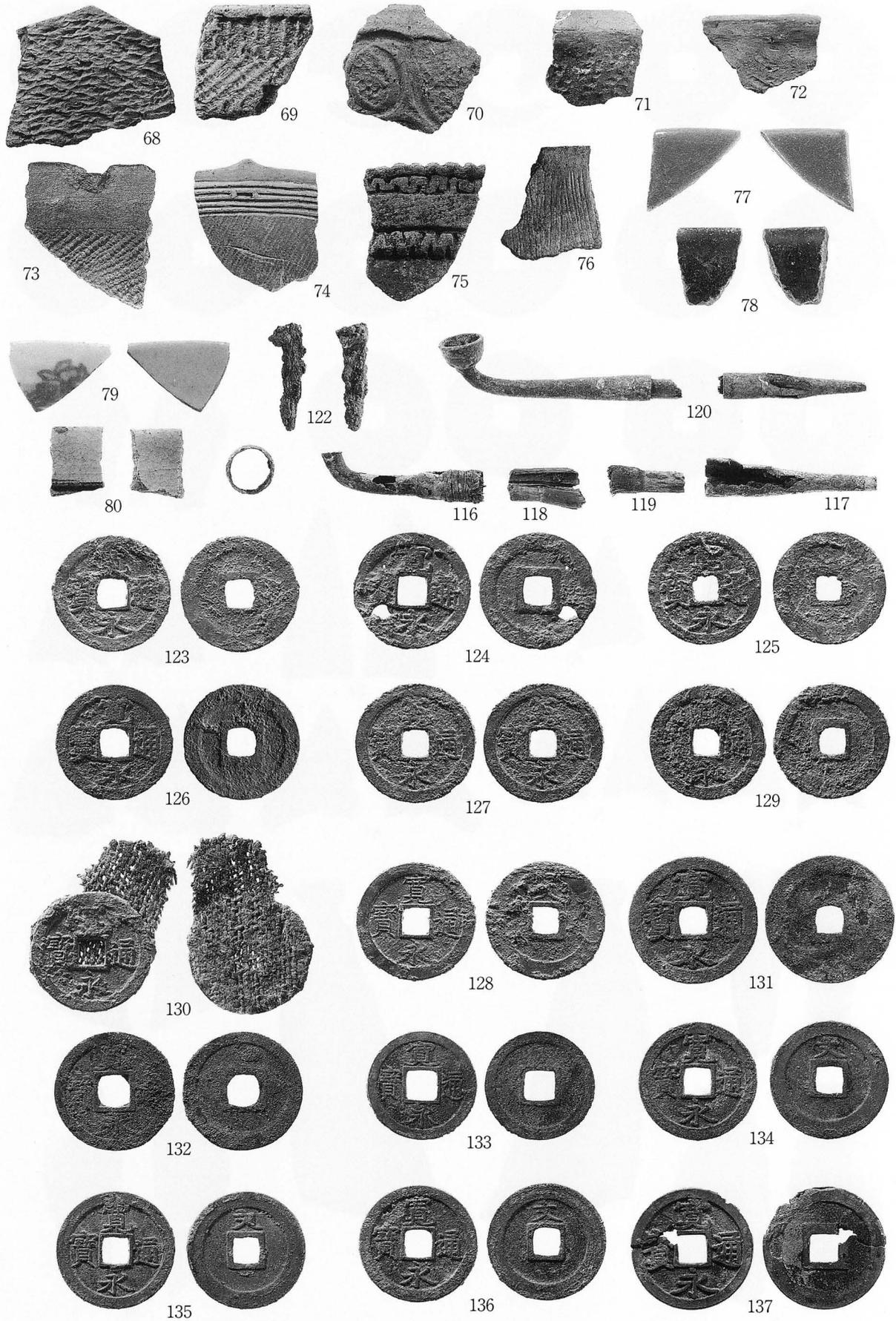
現地公開



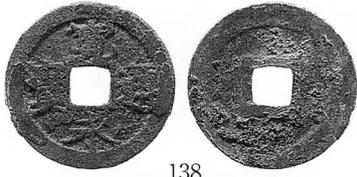
写真図版47 土器(1)



写真図版48 土器(2)



写真図版49 土器(3)、陶磁器、金属製品、銭貨(1)



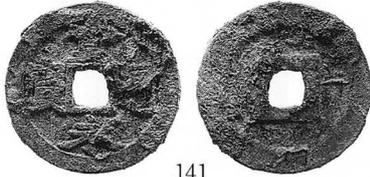
138



139



140



141



142



143



144



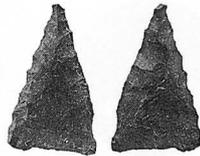
145



81



82



83



84



85



86



87



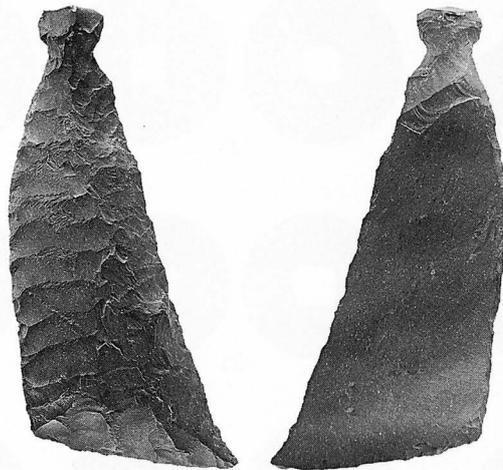
88



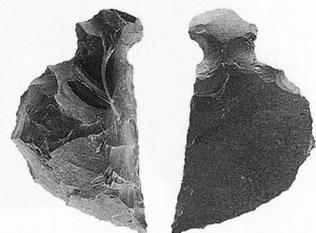
89



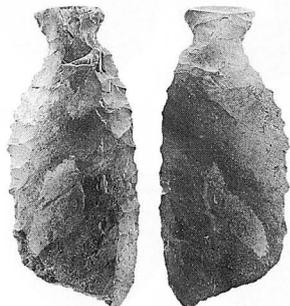
90



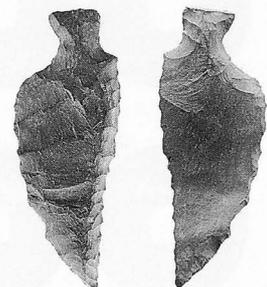
92



93

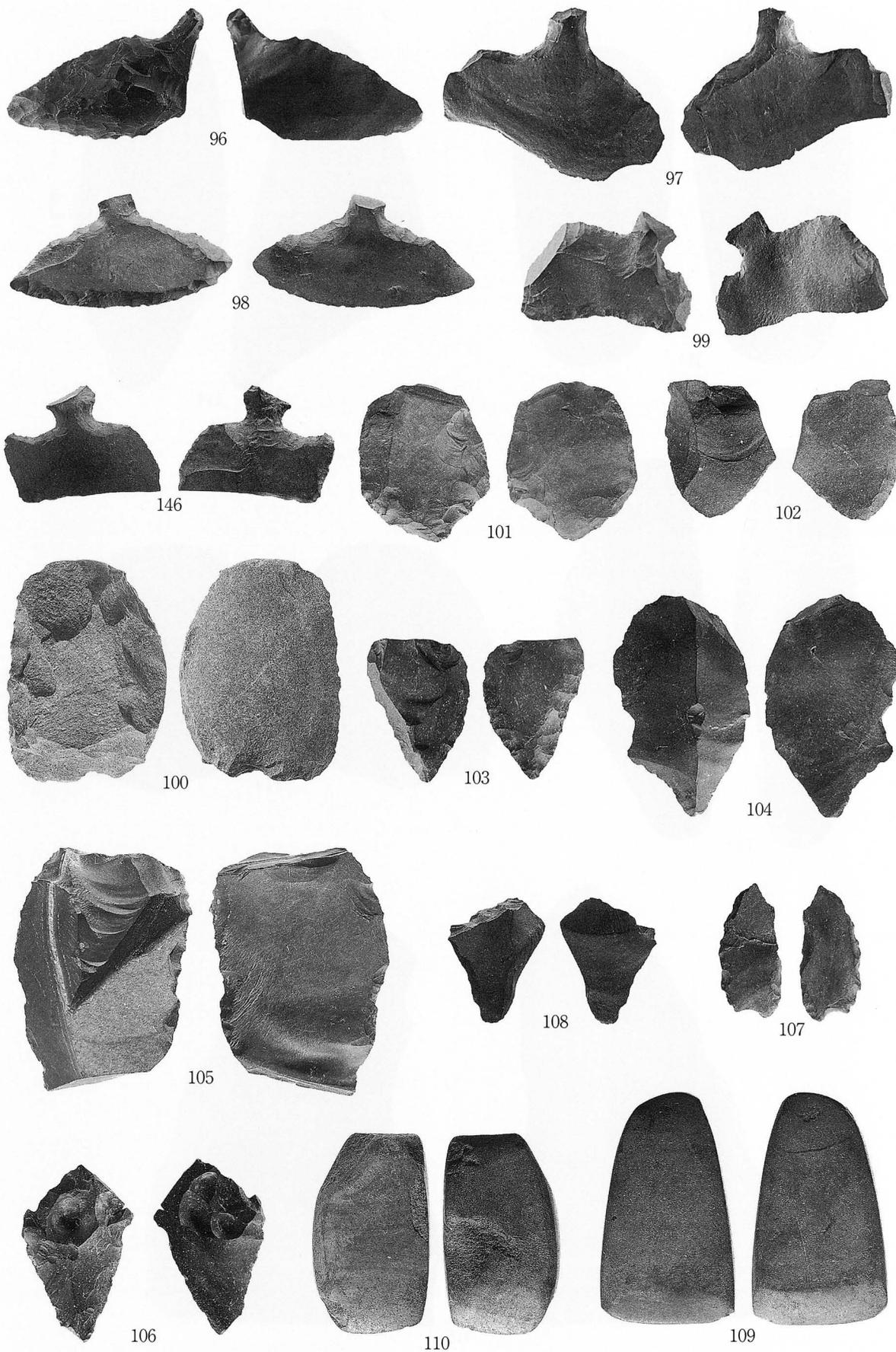


91

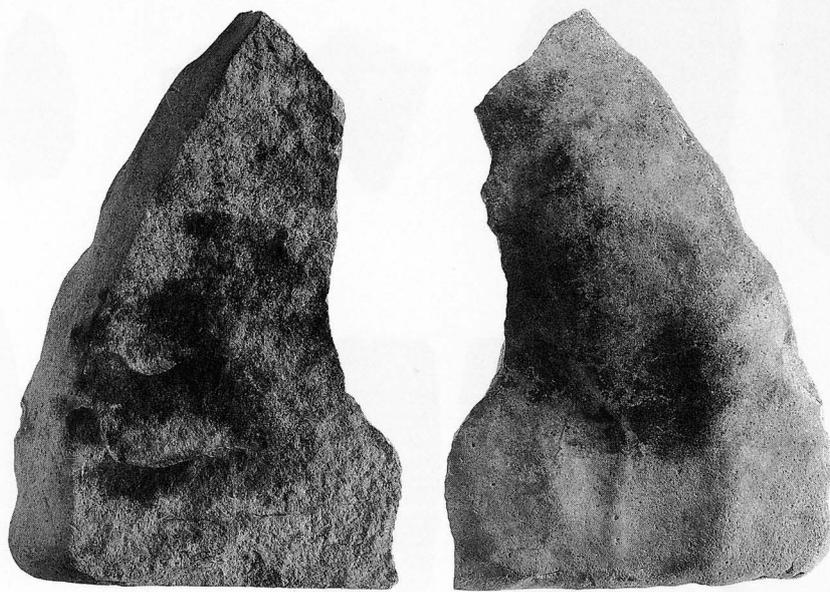
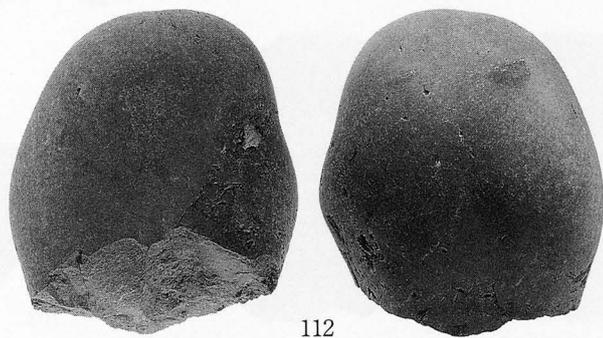
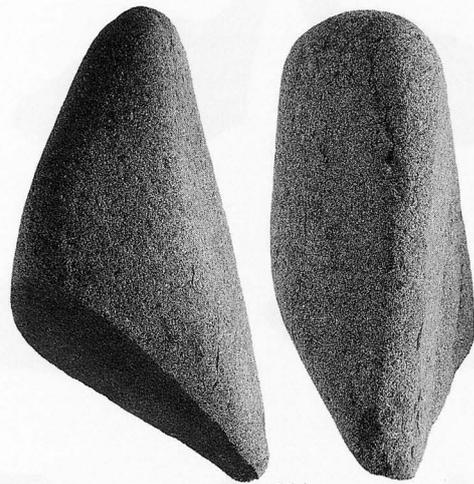
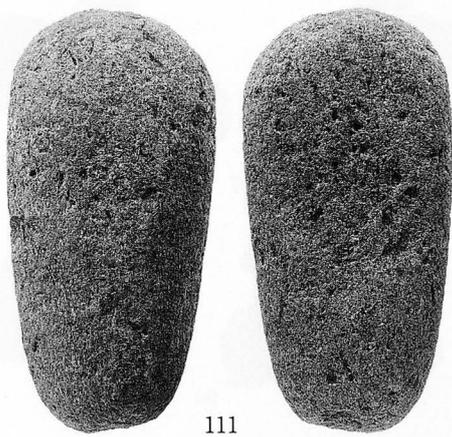


94

写真図版50 銭貨(2)、石器(1)



写真図版51 石器(2)



報告書抄録

ふりがな	やぎさわこまごめ1いせきはつかつちょうさほうこくしょ							
書名	八木沢駒込Ⅰ遺跡発掘調査報告書							
副書名	三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第574集							
編著者名	阿部勝則・杉沢昭太郎・丸山直美・八重畑ちか子・菅野 梢・鈴木博之							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2011年2月23日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 。、”	東 経 。、”	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
やぎさわこまごめ1いせきはつ 八木沢駒込Ⅰ遺跡	みやこしのおおぎや 宮古市大字八 木沢第8地割 あさこまごめ 字駒込7-2 ほか	03202	LG43-1206	39度 36分 31秒	141度 55分 55秒	(平成19年度) 2007.08.20 ～ 2007.10.31	5,900㎡	三陸縦貫自動車 道宮古道路建設 事業
						(平成20年度) 2008.09.16 ～ 2008.10.29		
						(平成21年度) 2009.04.08 ～ 2009.06.30 2009.08.03 ～ 2009.08.12	2,300㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
八木沢駒込Ⅰ遺跡 (平成19年度)	集落	縄文時代晩 期ほか	土坑 32基 焼土遺構 3基 陥し穴状遺構 1基	縄文土器				
		中世	墓壙 1基	銭貨				
八木沢駒込Ⅰ遺跡 (平成20年度)	狩場	縄文	陥し穴状遺構 1基	縄文土器・石器				
		近世以降	畑関連遺構 3箇所 土坑 1基 焼土遺構 1基 道路状遺構 1条	鉄製品 キセル				
八木沢駒込Ⅰ遺跡 (平成21年度)	集落 狩場	縄文時代中 期ほか	竪穴住居跡 2棟 焼土遺構 23基 陥し穴状遺構 6基	縄文土器・石器				
		集落	中世	竪穴建物跡 2棟 掘立柱建物跡 1棟				
	集落 墓	近世	掘立柱建物跡 3棟 墓壙 6基	銭貨				
要 約	<p>本遺跡は複数の沢や尾根によって隔てられており、調査結果からも小規模な遺跡が複合していることが明らかとなっている。つまり第1～3次調査区はそれぞれ独立した遺跡として捉えることが可能である。</p> <p>平成19年度調査区は独立した丘陵上に縄文時代晩期の集落が形成され、尾根部は狩場となっていたことが判明した。中世には墓壙が設けられており、隣接地には近世の万霊塔や巡拝塔が築かれている。</p> <p>平成20年度調査区は西から東方向へ延びる丘陵の谷部分と、八木沢川によって形成された低地面からなる。調査の結果、西半部は縄文時代の狩場として、東半部の旧河道および自然堤防上は主に近世以降の畑作耕地として利用されていることが判明した。</p> <p>平成21年度調査区は本遺跡の南端にあり、平坦部には中世から近世にかけての集落が、緩斜面部には縄文時代中期頃の集落及び狩場があった。また斜面部からは近世墓も複数確認されている。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第574集

八木沢駒込 I 遺跡発掘調査報告書

三陸縦貫自動車道宮古道路建設事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成23年 2月18日

発 行 平成23年 2月23日

編 集 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地
電話 (019) 638-9001

発 行 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所
〒027-0029 岩手県宮古市藤の川4番1号
電話 (0193) 71-1716

(財)岩手県文化振興事業団
〒020-0023 岩手県盛岡市内丸13番1号
電話 (019) 654-2235

印 刷 小松総合印刷株式会社
〒020-0827 岩手県盛岡市鉾屋町15-4
電話 (019) 624-1374

